

一般国道18号(野尻バイパス)
埋蔵文化財発掘調査報告書 2

—信濃町内その2—

かん の き 遺 跡
貫 ノ 木 遺 跡
しょう げつ だい 遺 跡
照 月 台 遺 跡

2004. 3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター

一般国道18号(野尻バイパス)
埋蔵文化財発掘調査報告書 2

—信濃町内その2—

かん の き 遺 跡
貫 ノ 木 遺 跡
しょう げつ だい 遺 跡
照 月 台 遺 跡

2004. 3

国土交通省関東地方整備局
長野県埋蔵文化財センター



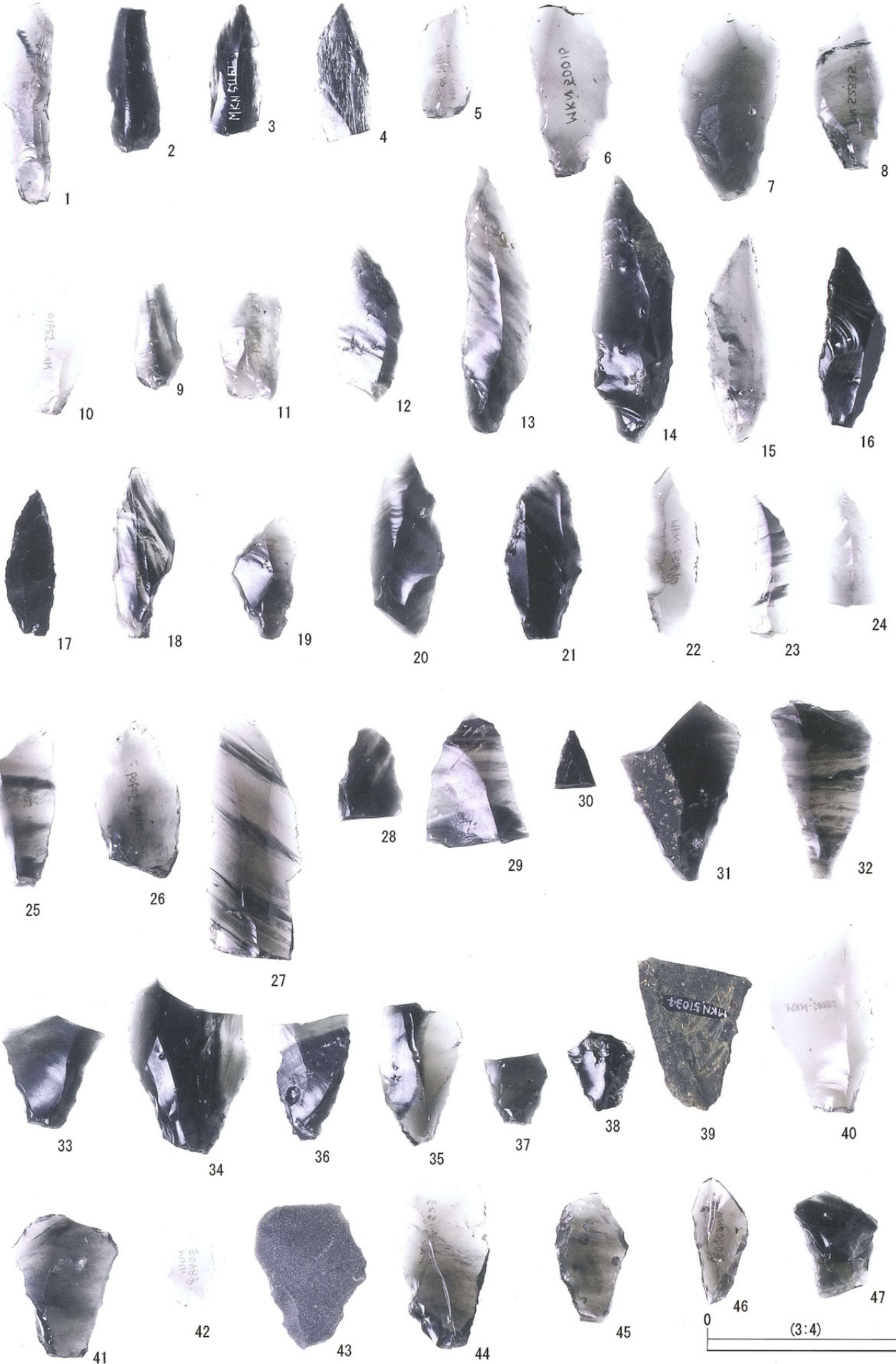
貫ノ木・照月台遺跡航空写真（南西より）
写真提供：国土交通省関東地方整備局長野国道事務所
2001年4月18日撮影



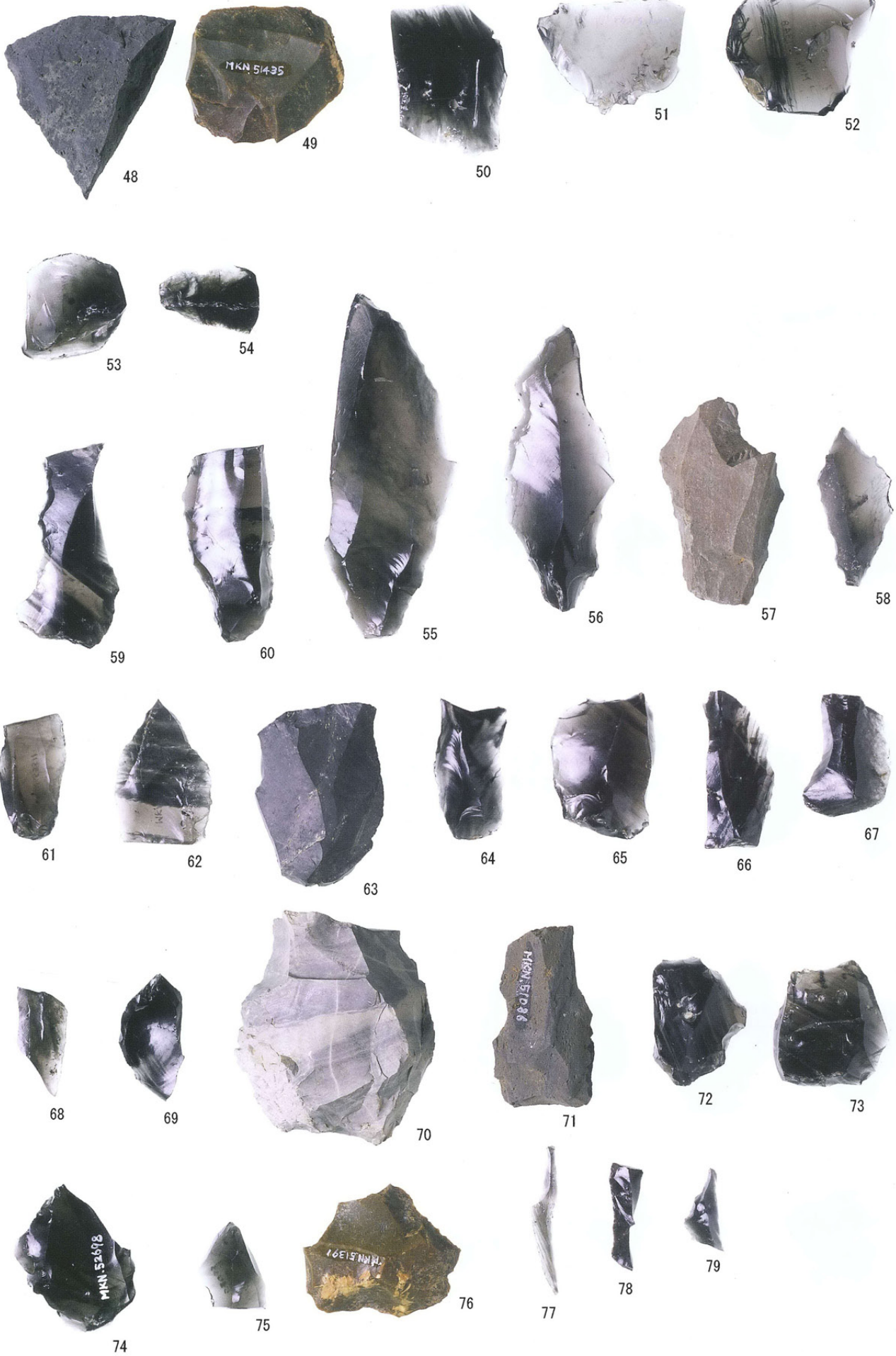
貫ノ木遺跡遠景（南西より）



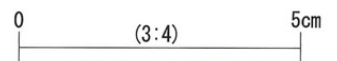
貫ノ木遺跡の石器

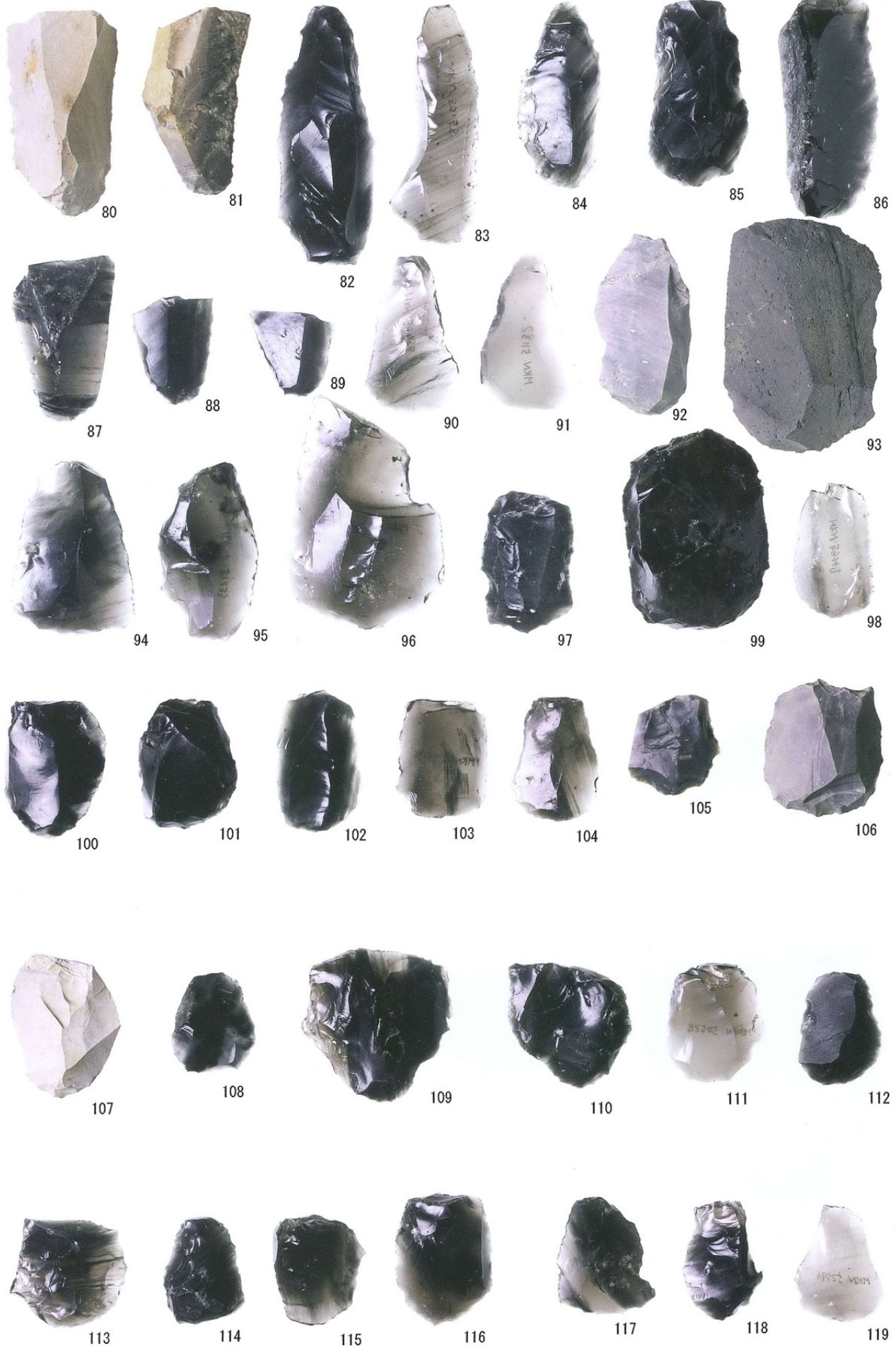


貫ノ木遺跡のナイフ形石器・台形石器

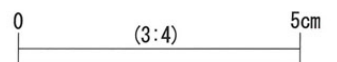


貫ノ木遺跡の貝殻状刃器・彫器・削片





貫ノ木遺跡の搔器





120



121



122



123



124



125



126



127



128



129



130



131



132



202



201



203



204



213



214

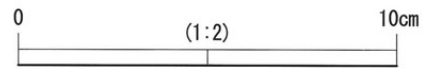


215

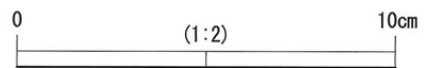




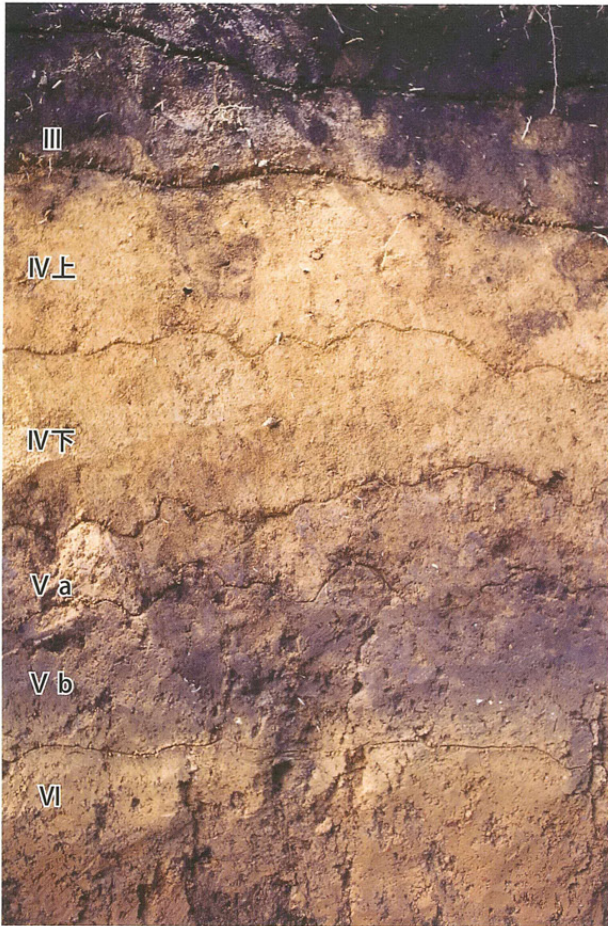
表



裏



貫ノ木遺跡の隆起線文土器



照月台遺跡上段調査区の層序



上：SK25 検出状況（北東より） 下：同断面（西より）



SK25 完掘（西より）



照月台遺跡上段調査区調査終了面（北東より）



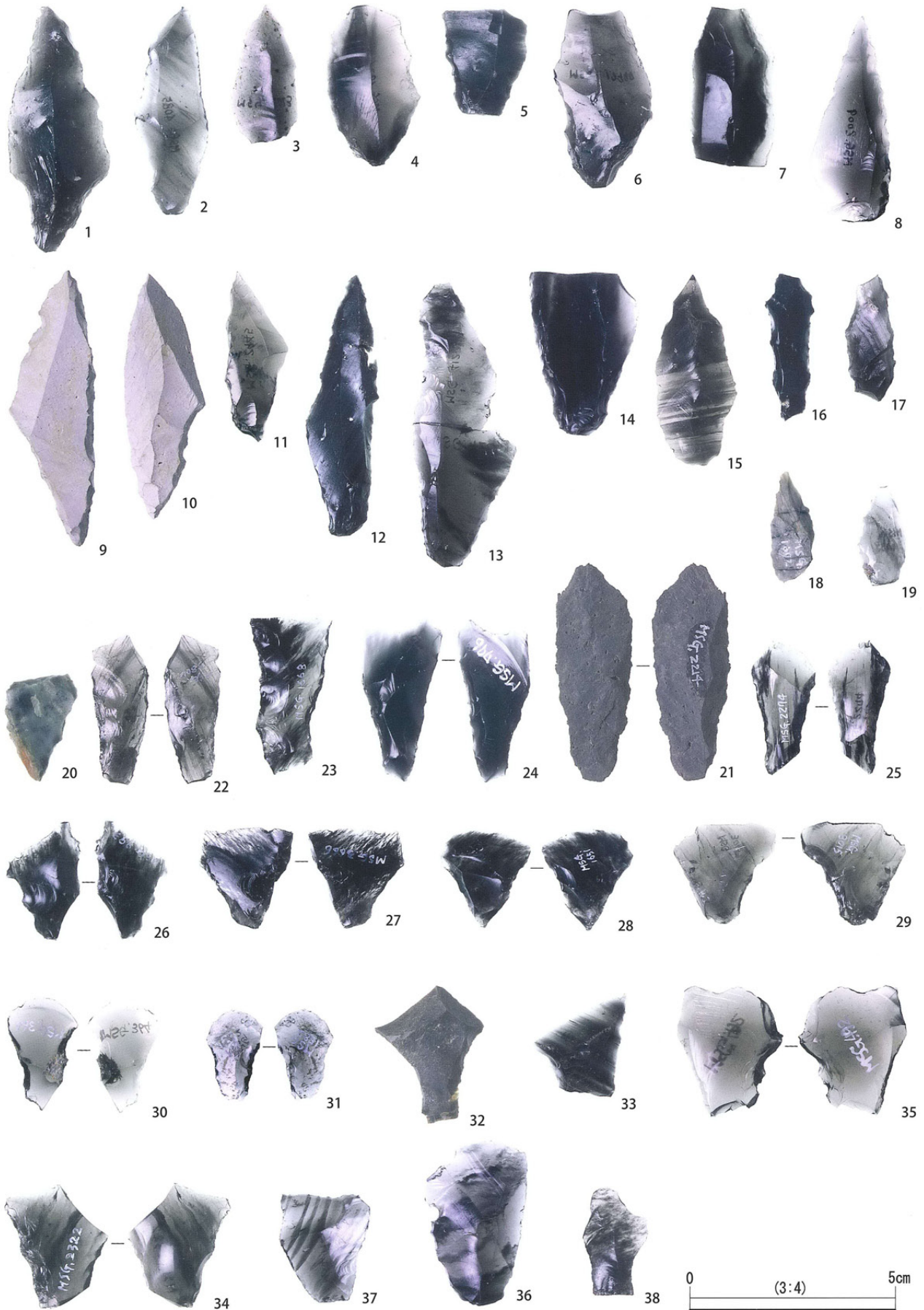
照月台 SC1 ~ 3 検出状況（北より）



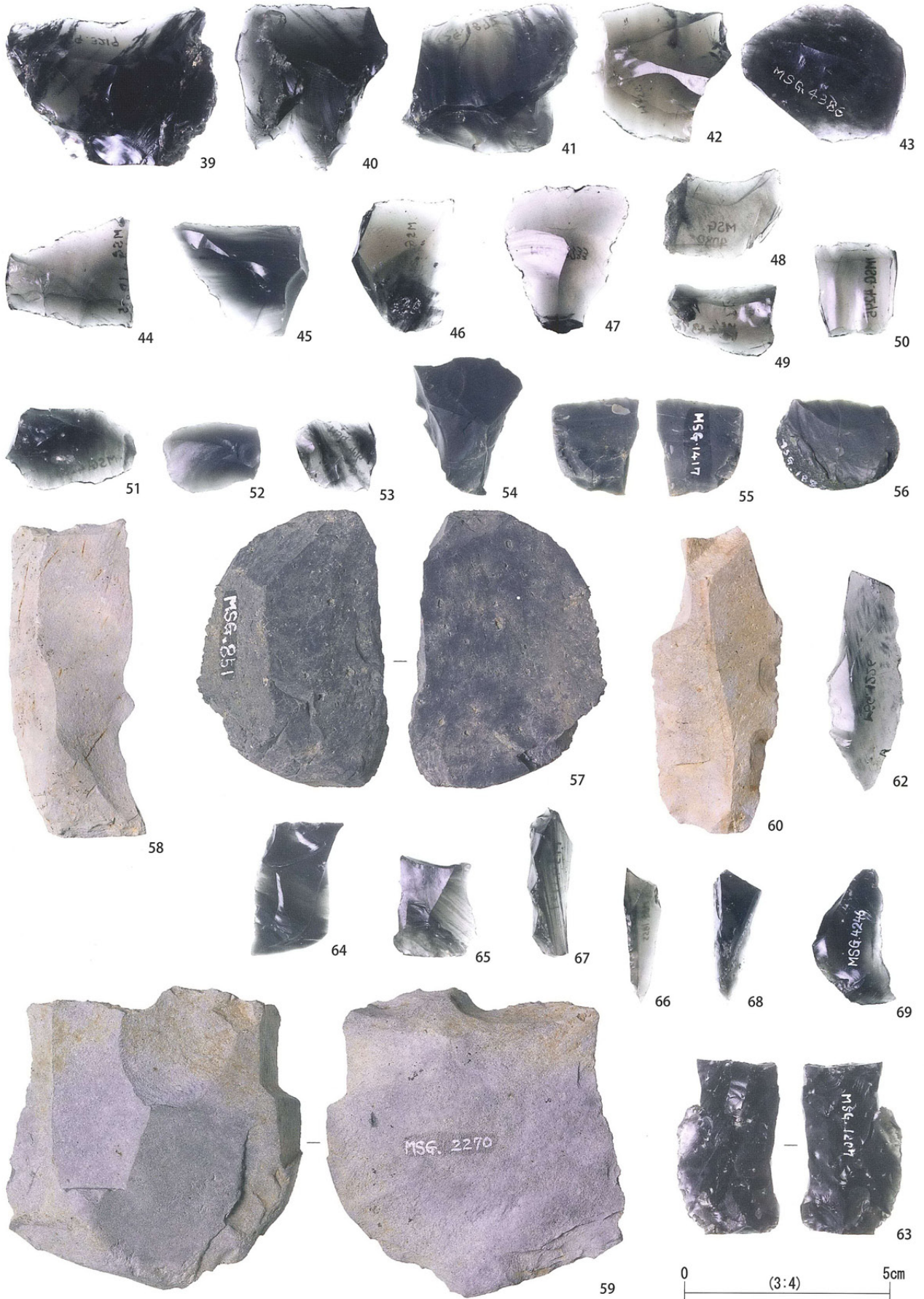
照月台遺跡 SK4 完掘状況（北より）



照月台遺跡の石器



照月台遺跡のナイフ形石器・台形石器



照月台遺跡の貝殻状刃器・彫器・削片



照月台遺跡の搔器・厚刃搔器・削器



111



113



115



121



112



114



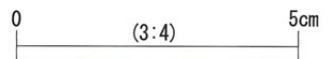
116



212



123



照月台遺跡の削器・斧形石器



117



118



119



120



122



213



214



215



217



216



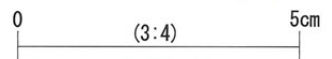
M.S.G. 4030



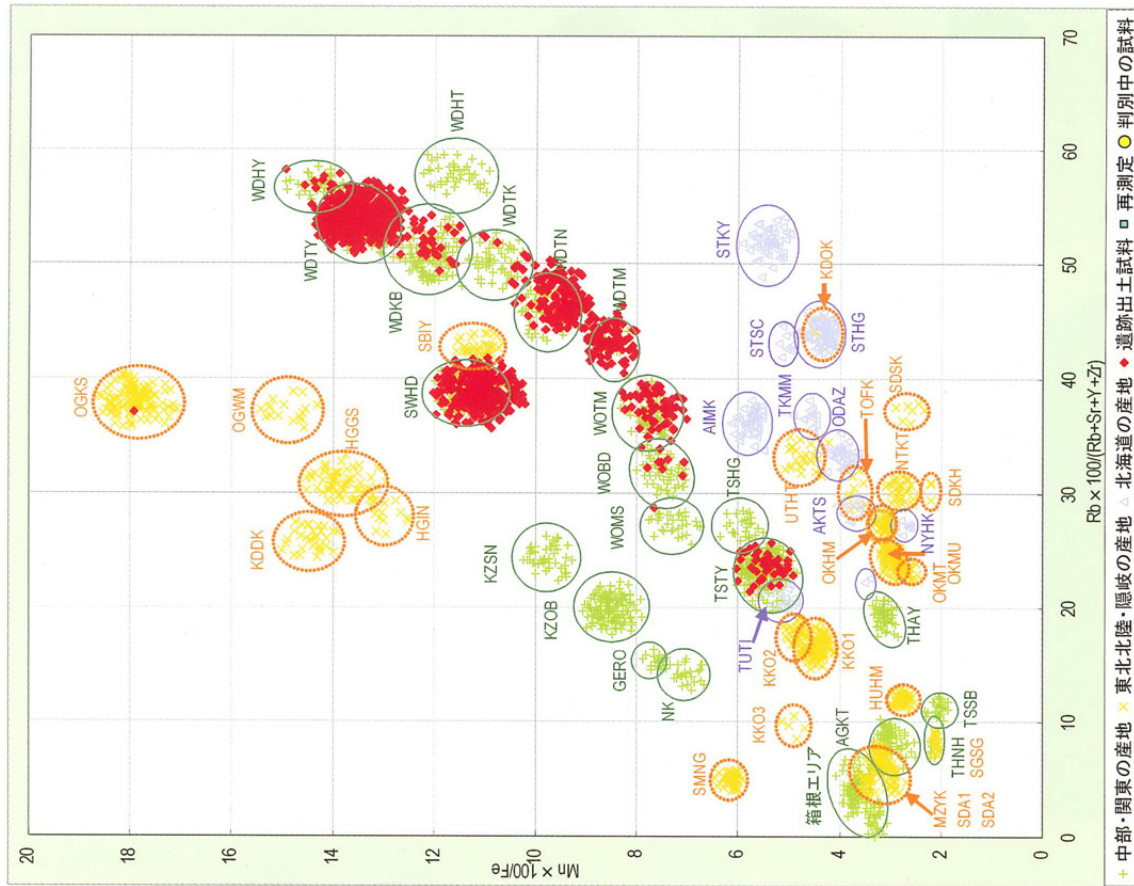
218



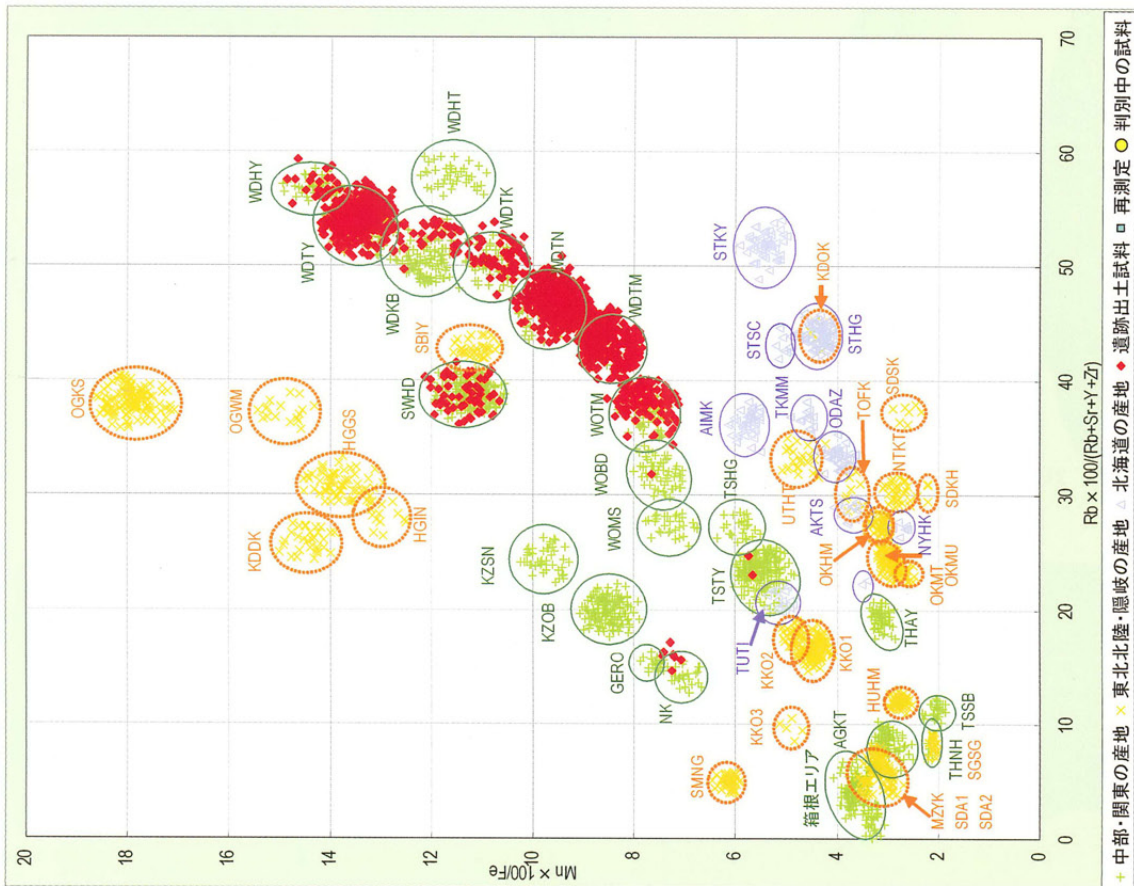
219



照月台遺跡の削器・斧形石器



照月台遺跡の蛍光X線分析装置を用いた産地推定による判別図



貫ノ木遺跡の蛍光X線分析装置を用いた産地推定による判別図

貫ノ木・照月台遺跡出土黒曜石産地推定判別図

序

信濃町は黒姫、妙高、飯綱、斑尾の山々に囲まれ、野尻湖という美しい湖を有する高原にあり、多くの人々が訪れる観光地として知られています。また、野尻湖は全国から参加者が集まる野尻湖発掘調査団によって継続されている発掘調査でも知られています。1962年から3年に一度行われているこの発掘調査は今年の3月で15回目を迎えました。ナウマンゾウやオオツノシカなどを狩った人々の生活の様子や当時の自然環境の復元に大きな成果をあげています。また、立が鼻遺跡だけではなく、湖の南西岸一帯の丘陵地帯には多くの旧石器時代から縄文時代草創期までの遺跡が密集しており、野尻湖遺跡群として知られているところです。

当センターにおきましても信濃町を縦断して建設された上信越自動車道の建設工事に先立って、1993年から1995年にかけて日向林B遺跡、貫ノ木遺跡ほか12遺跡の調査を実施しました。また、2001年の県道古間停車場線拡幅工事に伴い吹野原A遺跡の調査を行いました。これらの調査では重層するいくつものブロック群や礫群、圧倒的な数量を誇る石斧や砥石などの大きな発見がありました。上信越自動車道関連の報告書は平成11年度、県道事業の報告書は平成13年度に刊行されております。

本書では、1999年から2002年にかけて実施された国道18号野尻バイパス建設に伴う緊急発掘調査のうち1999年に行われた貫ノ木遺跡と照月台遺跡の調査成果を掲載しております。今回の調査では、上信越自動車関連の遺跡ではっきりとわからなかった、約2万5千年前の始良丹沢火山灰降下に前後する良好な石器群が出土しております。緊急調査ゆえに資料を十分に生かしたとはいえないかもしれませんが、基本的な資料の提示といった点では責務を果たしたものと思います。信濃町内で当センターの調査が始まって10年となります。上信越自動車道関連事業の報告書ほかとあわせて御活用ください。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行にいたるまで、深い御理解と御協力をいただいた国土交通省、信濃町、信濃町教育委員会など関係機関、地元の地権者・関係者の方々、発掘・整理作業に御協力いただいた多くの方々に対し感謝申し上げます。

平成16年3月19日

財団法人 長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター
所長 深瀬弘夫

例 言

1. 本書は長野県上水内郡信濃町に所在する貫ノ木遺跡と照月台遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は一般国道 18 号野尻バイパス改築工事に伴う事前調査として実施し、建設省関東地方建設局からの委託事業として、財団法人長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターが実施した。委託者である建設省関東地方建設局は国の中央省庁再編に伴ない平成 13 年 1 月 6 日に国土交通省関東地方整備局と名を変えている。発掘調査および整理事業の契約は、建設省関東地方建設局長野国道工事事務所と国土交通省関東地方整備局長野国道事務所の両者があるが、紙面の都合上現行の名称に統一して記述する。
3. 上記遺跡の概要は、長野県埋蔵文化財センター発行の『長野県埋蔵文化財センター年報』16・19 ほかで紹介している。内容において本書と相違がある場合は、本書の記述の方が優先する。
4. 本書に掲載した地図は、長野国道事務所作成の国道 18 号野尻バイパス平面図 (1:500)、信濃町建設課作成の計画図 (1:2500)・地形図 (1:10000)、国土地理院発行の数値地図 25000 を使用した。
5. 本書で扱っている国家座標は、国土地理院の定める平面直角座標系の原点 (長野県第Ⅷ系、 $X=0.000, Y=0.000$) を基準点としている。なお、この測地系は 2002 年以前の日本測地系 (旧測地系) である。
6. 出土遺物等の理化学分析および写真撮影は以下の機関に委託した。
 - (1) 土壌自然科学分析 (放射性炭素年代測定・炭化材同定・土壌理化学分析・植物珪酸体分析): パリノ・サーヴェイ
 - (2) 残存脂肪分析: (株) ズコーシャ
 - (3) 放射性炭素年代測定: (株) パレオ・ラボ
 - (4) 放射性炭素年代測定: (株) 古環境研究所 (名古屋大学 中村俊夫)
 - (5) 黒曜石産地推定: 沼津工業高等専門学校 望月明彦
 - (6) 遺物写真撮影: (株) 長野フジカラー
 - (7) 遺物写真撮影: 独立行政法人奈良文化財研究所 牛島 茂
7. 本書の執筆・編集は谷 和隆が行い、校正は平林 彰と谷 和隆、全体を市澤英利が校閲した。
8. 発掘調査から本書の刊行に至るまで多くの方々の御指導・御協力を得た。本文中にお名前を掲げさせていただいたが、厚く感謝申し上げたい。
9. 本書で報告した各遺跡の記録および出土遺物は、信濃町教育委員会が保管する。

凡 例

1. 遺物実測図についている番号を報告番号とする。報告番号は本文・挿表・実測図・写真のすべてに共通する。
2. 挿表の各種組成表内の礫の取り扱いには以下のとおりである。
 - (1) 第 2 章貫ノ木遺跡の第 3～8 表は礫を含まない。
 - (2) 第 3 章照月台遺跡第 9 表は石器と礫を別に扱っている。
 - (3) 第 3 章照月台遺跡の第 10～13 表は礫を含まない。
 - (4) 第 3 章照月台遺跡の第 14 表は礫のみの組成である。
3. 挿表中の重量の単位はすべて g となっている。
4. 本文中で用いた石器の呼称については第 1 章第 4 節に記した。

5. 本文および表中で、石器石材となる黒色で緻密な安山岩は、信濃町教育委員会の中村由克氏にならい「無斑晶質安山岩」を用いた。この石材は佐久市八風山周辺で採集されるガラス質黒色安山岩とほぼ同質である。
6. 本文中の加工の表現は次のとおりである。
- (1) 正方向の剥離（加工）：石器の腹面を打面とした背面側への剥離（加工）。
 - (2) 反方向の剥離（加工）：石器の背面を打面とした腹面側への剥離（加工）。
 - (3) 強剥離（加工）・強い剥離（加工）：縁辺が鋸歯縁状になるような素材を強く断ち切る剥離（加工）。
 - (4) 中剥離（加工）：強剥離と弱剥離の中間的な剥離（加工）。ブランディング。
 - (5) 弱剥離（加工）・弱い剥離（加工）：素材の形状をほとんど変えない弱い剥離（加工）。
 - (6) 平坦剥離（加工）・平坦な剥離（加工）：器面内部まで入り込む剥離（加工）。
 - (7) 折れ：偶発的な折れと意図的な折れの両者を含む。
7. 本書に掲載した実測図は原則として次のとおりである。また、それぞれの図版右下隅にスケールを付した。
- (1) おもな遺構実測図：全体図 1：800・1：200、ブロック 1：80、集石 1：20、土坑・竪穴住居跡 1：40
 - (2) おもな遺物実測図：中・小形石器 3：4、大形石器 1：2・1：3
8. 本書に掲載した遺物写真の縮尺は3：4または1：2で、それぞれ図版右下隅に示した。また、写真図版および石器接合資料中に用いた写真の縮尺は絶対的なものではない。展開についても正確な90°単位の展開ではなく、おおよそとなっている。
9. ブロック別の遺物分布図に付した石器実測図の縮尺はすべて1：2である。
10. ブロック別の遺物分布図・石器実測図・挿表・挿図の器種・石材の記号・略称は次のとおりである。それぞれの器種の破片については、記号は同一のものを、略称は通常の略称に「破」の文字を付した。また、表中にない器種・石材については、略称を用いずに、そのままの日本語名で表記した。ブロック別分布図中の遺物に付された番号は遺物実測図に付した報告番号と対応する。

記号	略称	器種	記号	略称	器種	記号	略称	器種	記号	略称	器種
◇	Kn	ナイフ形石器	☆	Sc	削器	●	UF	微細剥離のある剥片	▲	Ax	斧形石器
▽	Tr	台形石器	■	Pe	楔形石器	□	Co	石核	◎	GS	磨石
◎	CF	折断剥片	⓪	Bl	石刃	●	Fl	剥片	Ⓧ	PS	凹石
★	ES ESS	搔器・搔器状石器	○	RF	2次加工のある剥片	●	Ch	砕片	Ⓜ	原石	原石
Ⓝ	NS	扶入削器	Ⓣ	Dr	採錐器	●	SB	貝殻状刃器	▲	Ax破 AF	斧形石器破片 斧形石器調整剥片
◆	礫	礫	◆	Po	槍先形尖頭器	Ⓛ	DS	鋸歯縁状削器	◆	AS	厚刃搔器
Ⓟ	Gr	彫器	Ⓢ	Sp	削片	ⓐ	An	台石	*	Ha	敲石
Ⓜ	MC	細石核	Ⓡ	MB	細石刃	ⓑ	PT	礫器			

略称	石材	略称	石材	略称	石材	略称	石材
Ob	黒曜石	An	無斑晶質安山岩	SS	珪質頁岩	Sh	頁岩
ST	珪質凝灰岩	TS	凝灰質頁岩	Tu	凝灰岩	GT	緑色凝灰岩
Ch	チャート	Ag	玉髓	Ja	鉄石英	Se	蛇紋岩
Rh	流紋岩	Ge	下呂石	玄武岩	玄武岩	安山岩	安山岩
Sa	砂岩	Sl	粘板岩				

11. ブロック別の遺物分布図中の垂直分布図の記号は次の出土層位を示す。

記号	層位	記号	層位	記号	層位	記号	層位	記号	層位
●	Ⅲ層	○	Ⅳ層	◇	Va層	◆	Vb層	・	その他

12. 接合資料分布図で描かれている線は、石器および礫の接合関係を示し、石器は剥離された順番で、礫は遺物番号順に結ばれている。

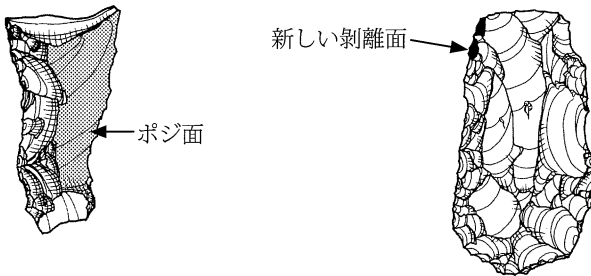
13. 石器実測図に付したキャプションの見方は次のとおりである。また、写真図版中の黒曜石産地推定判別図中の産地記号も共通する。

報告番号 → 1
 器種 → Kn Ob
 出土遺構 → BL9 2.86g
 出土層位 → IV~VI
 石材 → 黒曜石産地群
 重量 → 521.29g
 注記番号 →

エリア	判別群	記号	エリア	判別群	記号	エリア	判別群	記号
和田 (WO)	ブドウ沢	WOB	神津島	恩馳島	KZOB	小泊	折腰内	KDOK
	牧ヶ沢	WOMS		砂糠崎	KZSN		魚津	草月上野
	高松沢	WOTM	高原山	甘湯沢	THAY	高岡	二上山	TOFK
和田 (WD)	芙蓉ライト	WDHY	新津	七尋沢	THNH	佐渡	真光寺	SDSK
	鷹山	WDTY		金津	NTKT		金井二ツ坂	SDKH
	小深沢	WDKB	新発田	板山	SBIY	隠岐	久見	OKHM
	土屋橋北	WDTK	深浦	八森山	HUHM		岬地区	OKMT
	土屋橋西	WDTN	木造	出来島	KDDK		箕浦	OKMU
	土屋橋南	WDTM	男鹿	金ヶ崎	OGKS	白滝	8号沢	STHG
	古峠	WDHT		脇本	OGWM		黒曜の沢	STKY
諏訪	星ヶ台	SWHD	羽黒	月山	HGGS	赤石山頂	STSC	
蓼科	冷山	TSTY		今野川	HGIN	赤井川	曲川	AIMK
	双子山	TSHG	北上川	折居1群	KKO1	豊浦	豊泉	TUTI
	権鉢山	TSSB		折居2群	KKO2	置戸	安住	ODAZ
天城	柏峠1	AGKT		折居3群	KKO3	十勝	三股	TKMM
箱根	畑宿	HNHJ	宮崎	湯ノ倉	MZYK	名寄	布川	NYHA
	鍛冶屋	HNKJ		秋保1群	SDA1		旭川	高砂台
	黒岩橋	HNKI	秋保2群	SDA2	春光台	AKSK		
	上多賀	HNKT	色麻	根岸	SMNG	不明産地1		NK
	芦ノ湯	HNAY	塩竈	塩竈港群	SGSG	下呂石		GERO

黒曜石の産地群と産地記号

14. 石器実測図中のスクリーン・トーンは主要剥離面以外のポジ面および、石核にみられるポジ面を表す。発掘調査時と思われる新しい剥離面は黒く塗りつぶしてある。



15. 石器の長さ・幅・厚さの計測方法は以下のとおりである。

- (1) 長さ・幅：石器の主軸方向を上下の基準として方眼紙に置き、長方形を想定し、上下（縦方向）を長さ、左右（横方向）を幅とした。
- (2) 厚さ：最も厚い箇所を、主要剥離面から垂直方向で計測した。

目次

写真図版		
序 i	
例言 ii	
凡例 ii	
目次 v	
挿図目次 vi	
挿表目次 viii	
第1章 調査の概要 1	
第1節 調査の経過 1	
第2節 遺跡周辺の環境 3	
第3節 調査・整理の方法 12	
第4節 石器の器種分類 15	
第2章 貫ノ木遺跡 18	
第1節 遺跡と調査の概要 18	
第2節 旧石器時代 31	
第3節 縄文時代 101	
第4節 古代以降 113	
第3章 照月台遺跡 116	
第1節 遺跡と調査の概要 116	
第2節 旧石器時代 127	
第3節 縄文時代 219	
第4節 古代以降 228	
第4章 分析と観察 231	
第1節 自然科学分析 231	
第2節 石器の微細剥離痕および線状痕の観察	239	
第5章 成果と課題 256	
第1節 旧石器時代石器群の位置付け 256	
第2節 黒曜石の産地推定結果から 270	
第3節 石器の微細剥離痕および線状痕の観察から 273	
第4節 照月台遺跡の土坑 SK25 の評価 274	
第5節 貫ノ木遺跡の隆起線文土器 277	
第6章 結語 282	
引用参考文献 284	
報告書抄録		

挿図目次

第1図 野尻湖周辺の地形 5	
第2図 信濃町の遺跡分布図 7	
第3図 中部地方北部の石器石材産地 11	
第4図 貫ノ木・照月台遺跡周辺の発掘調査地点と年度 20	
第5図 貫ノ木遺跡の地形とトレンチの位置 21	
第6図 貫ノ木の基本層序 23	
第7～8図 貫ノ木遺跡の層序 25	
第9～11図 貫ノ木遺跡層位別遺物分布図 27	
第12図 旧石器時代の遺物とブロックの分布 33	
第13～16図 貫ノ木遺跡石材別石器分布図 37	
第17～31図 貫ノ木遺跡ブロック別遺物分布図 41	
第32～60図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 61	
第61図 貫ノ木遺跡接合資料分布図 97	
第62～63図 貫ノ木遺跡の石器接合資料 99	
第64図 貫ノ木遺跡文様別土器分布図 102	
第65図 貫ノ木遺跡土器接合資料分布図 103	
第66図 貫ノ木遺跡 SH201 104	
第67～69図 貫ノ木遺跡縄文時代土器 105	
第70図 貫ノ木遺跡縄文時代石器 112	
第71図 貫ノ木遺跡 SB201 114	
第72図 古代以降の遺物 115	
第73図 照月台遺跡の地形とV層上面のコンタ 117	
第74図 照月台遺跡上段調査区の層序 119	
第75図 照月台遺跡下段調査区の層序 120	
第76～81図 照月台遺跡出土層位別遺物分布図 121	
第82図 旧石器時代の遺物分布 128	
第83図 旧石器時代の遺物分布とブロックの分布 129	
第84～87図 照月台遺跡石材別石器分布 133	
第88～101図 照月台遺跡ブロック別遺物分布図 140	
第102図 照月台遺跡礫群遺物分布図 157	
第103図 照月台遺跡 SK25 159	
第104～146図 照月台遺跡旧石器時代石器実測図 161	
第147図 照月台遺跡接合資料分布図 213	
第148～151図 照月台遺跡の石器接合資料 214	
第152図 照月台遺跡縄文時代遺構・遺物分布図 220	
第153図 照月台遺跡縄文時代の土坑 222	
第154図 照月台遺跡縄文時代の集石 223	
第155～156図 照月台遺跡縄文時代土器 225	
第157図 照月台遺跡縄文時代石器 227	
第158図 照月台遺跡 SC 分布図 229	
第159図 照月台遺跡古代以降の遺物 230	
第160図 放射性炭素年代測定土器片 231	
第161図 男鹿金ヶ崎群の黒曜石製石器 237	
第162図 科学分析サンプリング位置 237	
第163図 照月台遺跡科学分析炭化材分布図 237	
第164～173図 貫ノ木遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕 240	
第174～176図 照月台遺跡の石器の微細剥離痕と線状痕 253	
第177図 貫ノ木遺跡 H5 II 石器文化のおもな石器 259	
第178図 照月台 I 石器文化のおもな石器 261	
第179～181図 貫ノ木遺跡 H1～4 地点で確認された石器文化 264		

第 182 図 旧石器時代の土坑の比較.....	275	第 184 図 星光山荘 B 遺跡の遺物.....	281
第 183 図 久保寺南遺跡の遺物.....	280		

挿表目次

第 1 表 信濃町の遺跡一覧.....	6	第 12 表 照月台遺跡遺構別石器石材組成.....	131
第 2 表 信濃町における遺跡調査の歴史.....	8	第 13 表 照月台遺跡遺構別黒曜石産地数量組成.....	132
第 3 表 貫ノ木遺跡遺構別出土層位分布.....	32	第 14 表 照月台遺跡遺構別礫石材組成.....	132
第 4 表 貫ノ木遺跡遺構別器種組成.....	34	第 15 表 放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果.....	232
第 5 表 貫ノ木遺跡遺構別石材数量組成.....	34	第 16 表 放射性炭素年代測定結果.....	233
第 6 表 貫ノ木遺跡遺構別石材重量組成.....	35	第 17 表 放射性炭素年代測定の較正年代.....	233
第 7 表 貫ノ木遺跡遺構別黒曜石産地組成.....	35	第 18 表 基本土層出土炭化材の放射性炭素年代測定（AMS法）結果.....	238
第 8 表 貫ノ木遺跡器種別石材組成.....	36	第 19 表 基本土層などの出土炭化材の樹種同定結果.....	238
第 9 表 照月台遺跡遺構別出土層位分布.....	127	第 20 表 野尻湖遺跡群の旧石器時代石器群の変遷.....	262
第 10 表 照月台遺跡遺構別石器器種組成.....	130	第 21 表 野尻湖遺跡群における時期別黒曜石産地組成.....	272
第 11 表 照月台遺跡石材別石器器種組成.....	131		

写真図版目次

PL1 貫ノ木・照月台遺跡航空写真・貫ノ木遺跡遠景	PL9 照月台遺跡発掘調査写真
PL2 貫ノ木遺跡の石器	PL10 照月台遺跡の石器
PL3 貫ノ木遺跡のナイフ形石器・台形石器	PL11 照月台遺跡のナイフ形石器・台形石器
PL4 貫ノ木遺跡の貝殻状刃器・彫器・削片	PL12 照月台遺跡の貝殻状刃器・彫器・削片
PL5 貫ノ木遺跡の搔器	PL13 照月台遺跡の搔器・厚刃搔器・削器
PL6 貫ノ木遺跡の削器・斧形石器・槍先形尖頭器・細石核・細石刃	PL14 照月台遺跡の削器・斧形石器
PL7 貫ノ木遺跡の隆起線文土器	PL15 照月台遺跡の削器・斧形石器
PL8 照月台遺跡発掘調査写真	PL16 貫ノ木・照月台遺跡出土黒曜石産地推定判別図

第1章 調査の概要

第1節 調査の経過

1 調査に至る経緯

本遺跡で扱う貫ノ木遺跡および照月台遺跡の発掘調査および整理作業は、国土交通省関東地方整備局から委託を受けて、財団法人長野県文化振興事業団長野県埋蔵文化財センター（以下「センター」という。）により実施された。

発掘調査の契約面積は貫ノ木遺跡が2,940㎡、照月台遺跡が4,780㎡である。

発掘調査は国土交通省関東地方整備局による国道18号野尻バイパス改築工事の第2期工事に関連して行われた緊急調査で、遺跡の記録保存を目的とする。同事業第1期工事に伴う発掘調査は、1994年～1996年に上信越自動車道建設事業に伴う発掘調査と並行して行い、1998年に報告書を刊行している（建設省関東地方建設局・長野県埋蔵文化財センター1998）。

貫ノ木および照月台遺跡の発掘調査は野尻湖発掘調査団（以下「調査団」という。）、信濃町教育委員会（以下「町教委」という。）により、時期・地点を変えて行われている。これらの詳細については、第2章1節および第3章第1節に示す。

従来、長野県においては、高速道等の広域かつ大規模な発掘調査は統一的な保護措置が求められることから、長野県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し、センターが再受託して実施してきた。一方、単独市町村内での事業については、当該市町村教育委員会が対応してきた。野尻バイパス改築工事は信濃町域のみで完結するため、町教委が発掘調査を実施するのが通例だが、第1期工事の貫ノ木遺跡および西岡A遺跡に関しては、県教委・町教委・国土交通省・センター間の協議の結果、事業規模、遺跡の重要性および隣接する高速道事業との一体性を考慮して、センターが受託することとなった。

続く第2期工事では南から貫ノ木遺跡、照月台遺跡、仲町遺跡、川久保遺跡の4遺跡が調査の対象となった。第1期工事と同様に4者による協議が行われ、仲町遺跡の一部については町教委が、それ以外については当センターで受託することとなった。受託範囲には取付け道や、一体施工の県道・町道、国道除雪施設部分も含まれる。発掘および整理は、当初に5年間の調査計画の概要を協議のうえ、年度ごとに国土交通省とセンターとの間で委託契約が結ばれて実施された。

調査範囲は、国道新設部分・現国道拡幅部分・取り付けの県道・町道改良部分など、工事内容・時期・現況などがさまざまであった。そのため、調査区設定・調査方法・調査時期などが、埋蔵文化財調査の観点からふさわしくない点もあるが、最善を尽くした結果であり、当初の目的は達成できたといえよう。周辺も含めての調査区域・調査年度等は別項に記した。

2 調査体制と調査期間

調査・整理体制および調査期間は以下のとおりである。

第1章 調査の概要

平成11年度

調査体制

所長 佐久間鉄四郎
副所長 山崎悦雄(兼管理部長)
調査部長 小林秀夫
管理部長補佐 宮島孝明
調査第2課長 土屋 積
調査研究員 田中正治郎 伊藤友久
調査員 山崎まゆみ

調査期間 貫ノ木遺跡 平成11年7月7日～同年10月29日

照月台遺跡 平成11年5月10日～同年9月15日

平成14年度

整理体制

所長 深瀬弘夫
副所長 原 聖(兼管理部長)
調査部長 小林秀夫
管理部長補佐 田中照幸
調査第2課長 土屋 積
調査研究員 谷 和隆 鶴田典昭
調査員 中島英子 山崎まゆみ

整理作業内容 遺物実測、遺物・遺構図のトレース、遺物の接合、遺物の計測

平成15年度

整理体制

所長 深瀬弘夫
副所長 原 聖(兼管理部長)
調査部長 市沢英利
管理部長補佐 上原 貞
調査第2課長 平林 彰
調査研究員 谷 和隆 鶴田典昭 山崎まゆみ
調査員 中島英子(12月1日より調査研究員)

整理作業内容 遺物実測、写真撮影、遺物・遺構図のトレース・図版組み、原稿執筆、編集・校正

3 調査の経過

(1) 貫ノ木遺跡

平成11年7月7日テストピット20ヶ所を設定し調査が始まる。7月13日にはテストピット内から遺物密集部分が検出された。7月21日にすべてのテストピットの掘り下げが終了し、遺物分布域が把握された。

8月9日に照月台遺跡から作業員が合流し、本格的な面的調査が始まった。用地のほぼ全域が面的調査の対象となった。以後順調に調査が進み多くの石器が出土した。10月29日に作業は終了した。

(2) 照月台遺跡

平成11年5月10日の作業開始式により調査が始まる。

5月12日には下段調査区のトレンチより土器集中が検出された。

5月17日より上段調査区の面的調査を始め、6月8日には古代以降の道跡らしき遺構が検出されている。Ⅲ層面では縄文時代の陥し穴が多数検出された。

旧石器時代面からは多くの石器が出土し、7月8日には旧石器時代の土坑SK25が検出された。

7月19日に明治大学の安藤政雄氏にSK25についての調査指導を受け、7月30日に同遺構の土層転写が実施された。

8月9日には多くの作業員が貫ノ木遺跡に移動し、9月15日調査終了となった。

4 指導者・協力者

発掘調査と整理作業にあたり、下記の方々や機関に御指導、御協力を得た。お名前を記して感謝したい(敬称略・五十音順)。

赤羽貞幸	安藤政雄	内田陽一郎	大竹幸恵	大橋里奈	小畑弘己	及川 穰	織笠明子
織笠 昭	角張淳一	笠井洋祐	加藤勝仁	加藤 学	川道 寛	木崎康弘	北村忠昭
小菅将夫	近藤洋一	佐藤宏之	佐藤雅一	白石浩之	鈴木次郎	鈴木忠司	須田良平
須藤隆司	砂田佳弘	諏訪間順	谷口康浩	堤 隆	土橋由理子	鳥居 亮	中村俊夫
中村由克	野口 淳	平井義敏	藤沢高広	藤波啓容	松藤和人	三瓶裕司	三木陽平
道澤 明	光石鳴巳	望月明彦	矢島國雄	山中一郎	柳田俊雄	山田晃弘	山本 克
米田 寛	李 超栄	和田好史	渡辺哲也	Gi-Kil Lee	Ki-Dong Bae		

第2節 遺跡周辺の環境

1 地理的環境

貫ノ木・照月台遺跡は長野県の北端、新潟県妙高高原町との境に位置する上水内郡信濃町にある。遺跡の東約1kmに位置する野尻湖の西側から南部の丘陵地帯には旧石器時代から縄文時代草創期の遺跡が約40ヶ所集中している。その範囲は北西-南東方向に約6km、北東-南西方向に約4kmにおよび、野尻湖遺跡群と呼ばれている。

野尻湖は水面標高654m、面積3.96k㎡である。西側には北から妙高、黒姫、飯綱の火山が並び、東側には斑尾山が存在する。

野尻湖西岸から流れ出る池尻川は北へ向かって流れ、黒姫山と妙高山の間を流れる関川に合流してさらに北へと流れ、高田平野を経て日本海へと注ぐ。

一方、黒姫山と飯綱山の間から東へ流れる鳥居川は、南西から南へと向きを変え、約14km下流で千曲川と合流する。千曲川は北西に向かって流れ、新潟県境で信濃川と名を変えて新潟平野を経て日本海へ注いでいる。

関川と信濃川の分水嶺は貫ノ木遺跡付近にあるが、現地での確認が難しいほどなだらかな地形である。なお、本書で報告する地点の雨水は貫ノ木遺跡が鳥居川、照月台遺跡が池尻川へと流れる。

野尻湖周辺には火山の影響によりローム層が堆積している。主たる火山灰の給源とそれぞれの火山の活動期は次のとおりである（赤羽 1996・地学団体研究会 1996）。飯綱火山の活動期は約 34 万年前と約 20 万年～ 15 万年前で、約 6 万年前に水蒸気爆発を 2 回起こしている。黒姫火山の活動開始年代は約 25 万年前で最新のマグマ噴火は約 4.3 万年前である。妙高火山の活動開始年代は約 30 万年前で、最新のマグマ噴火は約 4200 年前である。焼山火山の活動開始年代は約 3000 年前で現在も活動中である。斑尾火山は約 70 万年前と 55 万年頃前に活動をしていた。したがって、遺跡が形成された頃には飯綱、黒姫、斑尾火山はすでに休止しており、活動していた火山は妙高火山ということになる。また、焼山の活動は縄文時代以降となる。

野尻湖は約 7～6 万年前に起こったと思われる黒姫山からの池尻川泥流が、斑尾山西麓からの川を堰き止めたことによって誕生した。その後湖西側の仲町丘陵の隆起と湖東側の沈降により、形を変化させながら現在の野尻湖へと変化していく。貫ノ木遺跡の北西部にある池尻川低地は遺跡が形成された約 3 万～1 万年前頃には野尻湖の一部であったことが確認されている（赤羽 1996）。

野尻湖周辺は丘陵地帯となっている。旧石器時代の遺跡は丘陵の様々な場所に立地している。丘陵頂部、中腹の緩斜面やテラス状の場所、丘陵の裾部など比較的平坦な地形に遺跡が形成される場合が多い。また、現在水田域となっている部分の多くが、かつては池や湖、湿地であったことが確認されており、野尻湖以外にも多くの水場が存在していたことになる。これらの丘陵地形と水場環境の良さから、多くの狩猟対象動物が生息していたと考えられる。これら丘陵地帯は隆起・沈降が激しく、旧石器時代には現在の地形とはかなり異なった様相を示していたと思われる。約 7～6 万年前の野尻湖底堆積物である貫ノ木層が貫ノ木遺跡の丘陵頂部と、低地部において約 50m の高低差がみられることから、単純に割ると 1 万年で 10m 近く隆起していたことになる。したがって、旧石器時代の人々が活動していた当時は、現在の地形よりも起伏が緩やかであったと考えられる。

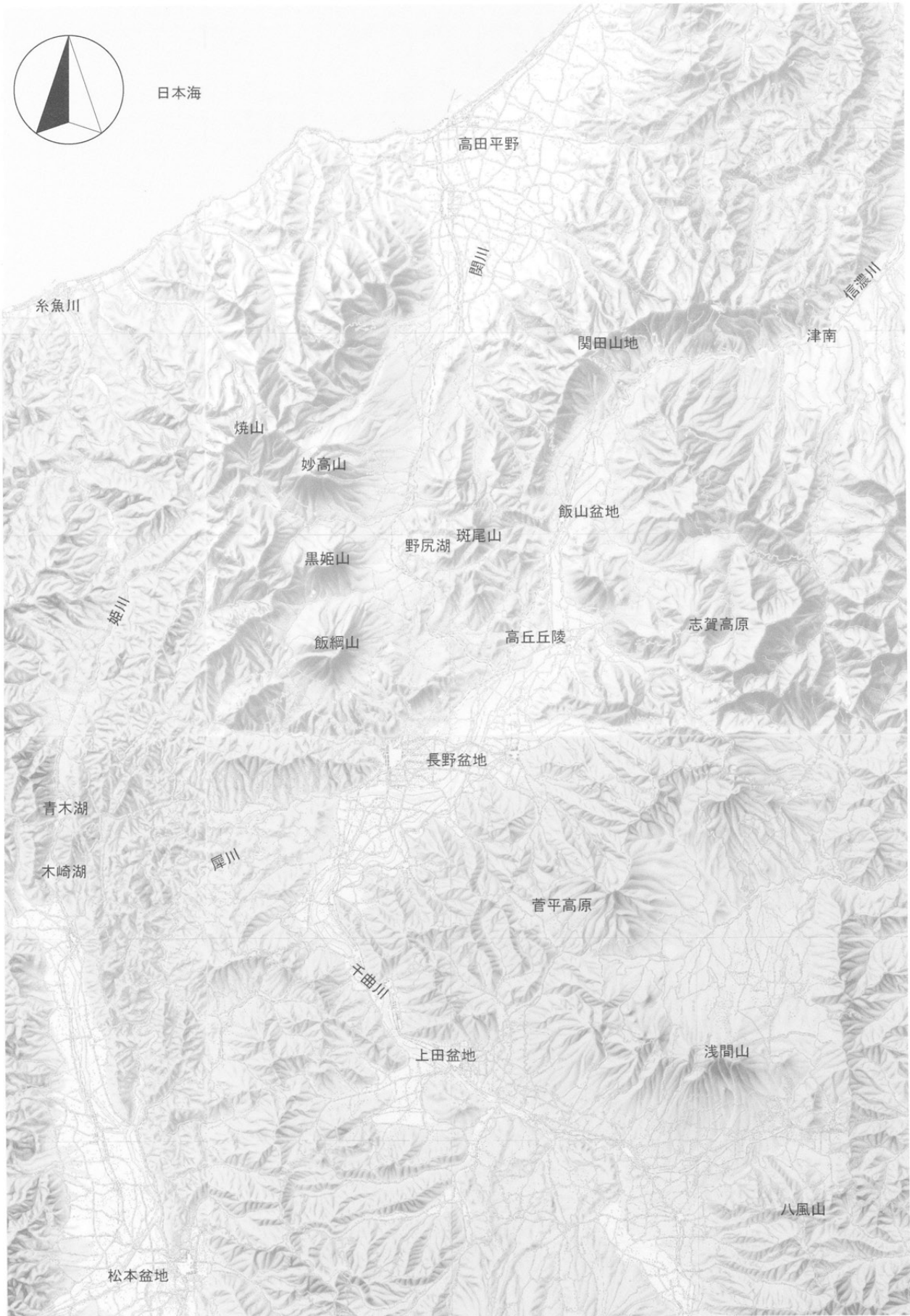
2 歴史的環境

1948 年に野尻湖岸でナウマンゾウの化石が発見されたことがきっかけとなり、1962 年から野尻湖発掘調査団による 14 回の湖底発掘（立が鼻遺跡）が行われている。立が鼻遺跡の調査では、ナウマンゾウやオオツノシカの化石が出土している（野尻湖発掘調査団 1975 他）。

1953 年には芹沢長介、麻生優により杉久保遺跡採集の石器が旧石器時代の遺物と確認され、杉久保型ナイフ形石器の標識遺跡として知られることになる（芹沢・麻生 1953）。杉久保遺跡は 1966 年に町営駐車場の建設に伴う緊急発掘調査が実施され、森嶋稔らにより礫器を主体とする pre I 群、大形のナイフ形石器を組成する I 群、小形のナイフ形石器を組成する II 群、幾何学形のナイフ形石器を組成する III 群の 4 つの石器群が設定されている（森嶋他 1970）。1976 年からは野尻湖発掘調査団による陸上発掘が始まり、仲町遺跡、貫ノ木遺跡、仲町向新田遺跡、照月台遺跡が調査された。ナイフ形石器文化期～細石器文化期の遺跡が確認されている（野尻湖人類考古グループ 1987・1990）。その他、伊勢見山遺跡（樋口他 1964）の調査などもあり、野尻湖周辺に多くのナイフ形石器文化以降の旧石器時代遺跡が確認され、野尻湖遺跡群として評価されている（織笠他 1986）。

1989 年からいわゆる「行政発掘」が始まる。これらは破壊を前提とする記録保存であるが、それまでの調査がトレンチ中心であったのに対し、平面的に広い調査が行われるようになり、野尻湖遺跡群の性格がより明らかになる。平成 5 年～7 年に行われた上信越自動車道建設に伴う発掘調査面積は 16 万㎡を上まわる。

現在整理作業が進められている遺跡も多いため、野尻湖遺跡群の内容は修正される点もあろうが、現時



第1図 野尻湖周辺の地形



第1章 調査の概要

番号	遺跡名	所在地	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良平安	中近世
1	慶沢 A	古海・慶沢		○				○
2	慶沢 B	古海・慶沢		○				○
3	滝屋 A	古海・滝屋						○
4	滝屋 B	古海・滝屋						○
5	滝屋 C	古海・滝屋		○				○
6	滝屋 D	古海・滝屋						○
7	林畔	古海・林畔		○				○
8	花ヶ入	古海・花ヶ入		○				○
9	古海城跡	古海・城ノ腰						○
10	鴉倉城跡	古海・菅川						○
11	菅川 A	古海・菅川		○				○
12	菅川 B	古海・菅川		○				○
13	寺窪	古海・菅川		○				○
14	舟瀬	野尻・舟瀬		○				○
15	桐久保	古海・市河の内桐久保		○	○			○
16	丸木舟出土地	古海・市河の内桐久保		○				○
17	山手	熊坂・山手		○				○
18	赤川・赤川城跡	野尻・赤川		○				○
19	大本道 A	野尻・大本道		○				○
20	大本道 B	野尻・大本道		○				○
21	大本道 C	野尻・大本道		○				○
22	小本道	野尻・小本道		○				○
23	野尻湖城跡	野尻・城ヶ入						○
24	家老路城跡	野尻・家老路						○
25	城跡 A	野尻・舟場		○	○			○
26	城跡 B	野尻・城ヶ入		○	○			○
27	権ヶ崎	野尻・家老路		○	○			○
28	旧野尻湖中学校	野尻・舟場		○	○			○
29	杉久保	野尻・舟場		○				○
30	琵琶島	野尻・琵琶島		○	○			○
31	立ヶ鼻	野尻・海端		○				○
32	海端	野尻・海端		○	○			○
33	川久保	野尻・川久保		○				○
34	土橋稲荷	野尻・土橋		○				○
35	小丸山・土橋城跡	野尻・川久保		○				○
36	向新田 A	野尻・高山		○				○
37	向新田 B	野尻・土橋		○	○			○
38	南池	野尻・高山		○				○
39	清明台	野尻・高山		○				○
40	仲町	野尻・一杯清水		○	○	○		○
41	神山北	野尻・上ノ原		○				○
42	狐久保	野尻・狐久保		○	○			○
43	神山 A	野尻・神山		○				○
44	神山 B	野尻・神山		○				○
45	神山 C	野尻・神山		○				○
46	照月台	野尻・滝沢		○				○
47	貫ノ木	野尻・貫ノ木		○				○
48	星光山荘 A	野尻・下山桑		○				○
49	下山桑 A	野尻・下山桑		○				○
50	下山桑 B	野尻・下山桑		○				○
51	下山桑 C	野尻・下山桑		○				○
52	下山桑 D	野尻・下山桑		○				○
53	胸爪	野尻・高沢		○				○
54	上山桑 A	野尻・上山桑		○				○
55	上山桑 B	野尻・上山桑		○				○
56	瑞穂 A	野尻・瑞穂		○				○
57	瑞穂 B	野尻・瑞穂		○				○
58	大久保 A	柏原・日向		○	○			○
59	大久保 B	柏原・日向		○				○
60	大久保 C	柏原・中山		○				○
61	大久保南	柏原・向山		○				○
62	西岡 A	柏原・西岡		○				○
63	西岡 B	柏原・西岡		○				○
64	毛無	柏原・毛無		○				○
65	上ノ原	柏原・上ノ原		○				○
66	緑ヶ丘	柏原・毛無		○				○
67	野尻湖団地	柏原・小丸山		○				○
68	小丸山公園	柏原・小丸山		○				○
69	役屋敷	柏原・役屋敷		○				○
70	東裏	柏原・東裏		○				○
71	裏ノ山	柏原・裏ノ山		○				○
72	伊勢見山	柏原・裏ノ山		○				○
73	東裏城跡	柏原・東裏		○				○
74	柴山	柏原・柴山		○				○
75	熊倉	柏原・堰下		○				○
76	新田川	柏原・新田川		○				○
77	五輪堂	柏原・五輪堂		○				○
78	仁之倉 A	柏原・仁之倉		○	○			○
79	仁之倉 B	柏原・仁之倉		○				○
80	仁之倉南	柏原・黒坂山		○				○
81	長水 A	柏原・長水		○				○
82	長水 B	柏原・長水		○				○
83	鳥居川第二発電所	柏原・西原		○				○
84	上島	古間・上島		○				○
85	柳原	古間・柳原		○				○
86	一里塚	古間・一里塚		○				○
87	陣場 A	古間・陣場		○				○
88	陣場 B	古間・陣場		○				○
89	小古間	古間・久根添		○				○
90	清水東	古間・清水東	○	○				○
91	清水尻	古間・清水尻		○				○
92	吹野原 A	古間・吹野原		○				○
93	吹野原 B	古間・吹野原		○				○
94	山根	富濃・山根		○				○
95	古間支館裏	古間・下島		○				○
96	大平 A	富濃・大平		○	○			○
97	大平 B	富濃・大平		○	○			○
98	針ノ木	富濃・針ノ木		○	○			○
99	砂間	富濃・西原		○	○			○
100	琵琶ヶ崎	富濃・西原		○	○			○
101	宮沢	富濃・宮沢		○	○			○
102	諏訪ノ原	富濃・諏訪ノ原		○	○			○
103	栗野里	富濃・諏訪ノ原		○				○
104	日向林 A	富濃・日向林		○				○
105	日向林 B	富濃・日向林		○				○
106	七ツ栗	富濃・七ツ栗		○				○
107	普光田	富濃・普光田		○				○
108	庚申堂	富濃・庚申堂		○				○
109	西久保	富濃・水穴		○				○
110	水穴	富濃・水穴		○				○
111	大日方 A	富濃・大日方		○				○
112	大日方 B	富濃・大日方		○				○
113	富濃原	富濃・原		○				○
114	割方岳	富濃・城山		○				○
115	滝沢	富濃・滝沢		○				○
116	東原	富濃・東原		○				○
117	鳴沢	富濃・鳴沢		○				○
118	南原 A	富濃・南原		○				○
119	南原 B	富濃・南原		○				○
120	乙原	富濃・南原		○				○
121	中村	富濃・中村		○				○
122	目細 A	富濃・目細		○				○
123	目細 B	富濃・目細		○				○
124	薬師岳城跡	富濃・舟岳山髮櫛		○				○
125	舟岳	富濃・成仏		○				○
126	向ノ原	富濃・向ノ原		○				○
127	寒ノ神	富濃・寒ノ神勘蔵		○				○
128	勘蔵	富濃・勘蔵		○				○
129	戸草城跡	富濃・福沢		○				○
130	戸草	富濃・清水		○	○			○
131	正徳寺	荒瀬原・正徳寺		○				○
132	荒瀬原	荒瀬原・原		○				○
133	大原	荒瀬原・大原		○				○
134	則心院裏	荒瀬原・山神		○				○
135	石原	荒瀬原・石原		○				○
136	幣塚	富濃・荒瀬原・幣塚		○				○
137	月影	荒瀬原・月影		○				○
138	北ノ原 A	平岡・北ノ原		○				○
139	北ノ原 B	平岡・北ノ原		○				○
140	宮原	平岡・宮原		○				○
141	丸山	平岡・丸山		○				○
142	北山道	平岡・北山道		○				○
143	御料	平岡・裏屋敷添		○				○
144	向原	平岡・向原		○				○
145	丸谷地	穂波・丸谷地		○				○
146	大道下	穂波・原・大道上・大道下		○				○
147	蔭影(五厘山)	穂波・五厘山・峰・古道畑		○				○
148	上の山	穂波・上の山		○				○
149	北中島	穂波・北谷地		○				○
150	中島	穂波・嶋崎・中畦		○				○
151	辻屋	穂波・南平・道下		○				○
152	宮ノ腰	穂波・腰巻・南原		○				○
153	富ヶ原 I	大井・富ヶ原		○				○
154	富ヶ原 II	大井・富ヶ原		○				○
155	富ヶ原 III	大井・富ヶ原		○				○
156	富ヶ原 IV	大井・富ヶ原		○				○
157	富ヶ原 V	大井・富ヶ原		○				○
158	富ヶ原 VI	大井・富ヶ原		○				○
159	富ヶ原 VII	大井・富ヶ原		○				○
160	北信	大井・雲仙寺		○				○
161	繕場	大井・繕場		○				○
162	七滝	大井・雲仙寺		○				○
163	カジカガフ	大井・カジカガフ		○				○
164	雲仙寺跡	大井・家添		○				○
165	石橋	大井・西谷地		○				○
166	市道	大井・市道		○				○
167	高山	大井・高山		○				○
168	清水久保	大井・向原		○				○
169	長山	大井・長山		○				○
170	宮浦 B	大井・長山		○				○
171	種池	柏原		○				○
172	星光山荘 B	野尻・下山桑		○				○
173	大平 C	富濃・諏訪原		○				○

第1表 信濃町の遺跡一覧



第2図 信濃町の遺跡分布図

第1章 調査の概要

年度	野尻湖の発掘	信濃町内の発掘	県埋文センターの発掘	おもなできごと
1948(昭23)	ナウマンゾウの化石発見			
1953(昭28)		杉久保遺跡の石器、旧石器と判明		
1958(昭33)		仁之倉遺跡(開墾)		
1962(昭37)	☆野尻湖発掘始まる			ナウマンゾウ、オオツノシカ化石を発見
	第1次野尻湖発掘	杉久保遺跡		
1963(昭38)	第2次野尻湖発掘	伊勢見山遺跡(国学院大学)		野尻湖発掘、C14年代測定と花粉分析によるウルム氷期の確認
		杉久保遺跡		
1964(昭39)	第3次野尻湖発掘	杉久保遺跡		はじめて石器(剥片)を発見
1965(昭40)	第4次野尻湖発掘	杉久保遺跡 琵琶島遺跡		ナウマンゾウの頭骨の一部を発見
1966(昭41)		杉久保遺跡(駐車場)		
1967(昭42)		狐久保遺跡(町道)		
1973(昭48)	第5次野尻湖発掘			「月と星」の発見
1974(昭49)	74年3月湖底調査 74年10月仲町調査			
1975(昭50)	第6次野尻湖発掘			ビーナス像(?)の発見
1976(昭51)	第1回陸上発掘(仲町)			
1977(昭52)		仲町(水道工事)		
1978(昭53)	第7次野尻湖発掘			ナウマンゾウの頭骨を発見
1979(昭54)	第2回陸上発掘(仲町)			黒姫駅でナウマンゾウの牙を発見 仲町遺跡で縄文草創期の土坑墓発掘 台形状のナイフ形石器発見
1981(昭56)	第8次野尻湖発掘			「ヤリ状木器」、骨製スクレイパーの発見 2.4mのナウマンゾウの牙発見
1982(昭57)	第3回陸上発掘(仲町、向新田)			隆線文土器の発見
1984(昭59)	第9次野尻湖発掘			キルサイトの確認
1985(昭60)	第4回陸上発掘(仲町、向新田、照月台、貫ノ木)	大久保南遺跡(土取り)		向新田遺跡で細石器文化確認
1987(昭62)	第10次野尻湖発掘			骨製クリーパー発見
1988(昭63)	第5回陸上発掘(貫ノ木)			礫群と配石を伴う生活面を確認
1989(平1)		☆町教育委員会の調査始まる 丸谷地遺跡(町道) 大道下遺跡(町道)		丸谷地遺跡で平安時代の住居跡を発掘 灰釉陶器、鎌などが出土
1990(平2)	第11次野尻湖発掘	大道下遺跡(会社事務所) 上ノ原遺跡(開拓) 杉久保遺跡(町営トイレ) 一里塚遺跡(町道) 丸谷地遺跡(町道)		第11次発掘でナウマンゾウの足跡化石を確認 上ノ原遺跡で5基が並んだ石囲炉を発見
1991(平3)	第6回陸上発掘	貫ノ木遺跡(保養所) 大道下遺跡(土取り) 丸谷地遺跡(資材置場) 赤川遺跡(国道18号)		陸上発掘でナウマンゾウの化石発見
1992(平4)		貫ノ木遺跡(保養所) 東裏遺跡(町道) 役屋敷遺跡(店舗) 赤川遺跡(国道18号) 辻屋遺跡(工場)		貫ノ木遺跡で局部磨製石斧4点や特殊な尖頭器を発見
1993(平5)	第12次野尻湖発掘	東裏遺跡(特別養護老人ホーム) 東裏遺跡(宅地造成) 上ノ原遺跡(町道) 毛無遺跡(町道) 西岡B遺跡(宅地造成) 七ツ栗遺跡(県道)	☆高速道路建設に伴う発掘調査始まる 日向林B遺跡 七ツ栗遺跡 東裏遺跡 貫ノ木遺跡 普光田遺跡	日向林B遺跡で石斧41点出土 上ノ原遺跡で杉久保型ナイフ形石器多数出土 東裏遺跡(町)瀬戸内系の石器群が出土 東裏遺跡(県)で「剥片尖頭器」出土
1994(平6)	第7回陸上発掘(仲町)	東裏遺跡(町道) 七ツ栗遺跡(県道) 日向林B遺跡(宅地) 貫ノ木遺跡(宅地) 北ノ原B遺跡(町道) 山根遺跡(広域農道) 高山遺跡(ゴルフ場) 市道遺跡(ゴルフ場)	七ツ栗遺跡 日向林B遺跡 大平B遺跡 裏ノ山遺跡 東裏遺跡 上ノ原遺跡 貫ノ木遺跡 西岡A遺跡	陸上発掘で野尻湖文化の石器多数発見 貫ノ木遺跡(県)で砥石8点出土 山根遺跡で弥生土器が多数出土
1995(平7)		大久保南遺跡(県道) 上ノ原遺跡(ガソリンスタンド) 上ノ原遺跡(消防署) 役屋敷遺跡(急傾斜対策) 山根遺跡(広域農道) 市道遺跡(ゴルフ場) 清水久保遺跡(ゴルフ場) 上ノ原遺跡(県道) 上ノ原遺跡(宅地)	七ツ栗遺跡 日向林B遺跡 東裏遺跡 大久保南遺跡 上ノ原遺跡 貫ノ木遺跡 西岡A遺跡 星光山荘B遺跡	大久保南遺跡(県)で黒曜石の石核がまとまって出土 市道遺跡で縄文土器など24,000点以上出土 星光山荘遺跡で種子柴型石斧など出土 上ノ原遺跡(町)で、瀬戸内系の石器群が多数出土
1996(平8)	仲町遺跡、立が鼻遺跡で地質調査	上ノ原遺跡(県道) 吹野原A遺跡(広域農道) 山根遺跡(広域農道) 大久保南遺跡(県道) 七ツ栗遺跡(町道) 大道下遺跡(埋立て)	貫ノ木遺跡	上ノ原遺跡で瀬戸内系石器群が2つの地層から出土 吹野原A遺跡で敲石群が出土 山根遺跡で弥生中期の住居址が出土 大道下遺跡で縄文早期の土器が多数出土

第2表 信濃町における遺跡調査の歴史1

1996(平8)		東裏遺跡(町道)		
1997(平9)	第13次野尻湖発掘 仲町遺跡、立が鼻遺跡で地質調査	吹野原A遺跡(広域農道) 上ノ原遺跡(県道) 貫ノ木遺跡(ガスパイプ) 東裏遺跡(町道) 上ノ原遺跡(町道) 照月台遺跡(店舗) 役屋敷遺跡(駐車場)		上ノ原遺跡で砥石と石斧素材が置かれた状態で出土 東裏遺跡で瀬戸内系の石器群が出土 照月台遺跡で古手の杉久保型ナイフと小形の石器群が出土 吹野原A遺跡で大形の石核が出土
1998(平10)	第8回陸上発掘	大久保南遺跡(個人住宅) 上山桑A遺跡(町道) 針ノ木遺跡(町道) 丸谷地遺跡(工場)		大久保南遺跡で基部加工のナイフ形石器が出土 丸谷地遺跡で平安時代の集落を確認、縄文時代早期の土器が多数出土
1999(平11)		仲町遺跡(個人住宅) 吹野原A遺跡(広域農道) 仲町遺跡(国道18号) 東裏遺跡(町道)	☆国道18号バイパスに伴う発掘調査始まる 貫ノ木遺跡 照月台遺跡 川久保遺跡	照月台遺跡で旧石器時代の土壌を確認 吹野原A遺跡と仲町遺跡で石刃石器群が出土 川久保遺跡で弥生土器が多数出土
2000(平12)	第14次野尻湖発掘	吹野原A遺跡(広域農道) 仲町遺跡(国道18号) 仲町遺跡(店舗)	仲町遺跡	仲町遺跡で細石刃文化の生活面、オオツノシカの足跡化石を確認、縄文草創期の土器が多数出土
2001(平13)		仲町遺跡(国道18号) 役屋敷遺跡(史跡整備)	仲町遺跡 吹野原A遺跡(県道)	仲町遺跡でナウマンゾウの足跡を多数確認、石器出土 オオツノシカの白歯化石とナイフ形石器が出土
2002(平14)		東裏遺跡(個人住宅) 役屋敷遺跡(史跡整備)	仲町遺跡(除雪ステーション)	仲町遺跡で台形石器と石斧の石器群が出土 東裏遺跡で石刃石器群が出土
2003(平15)	第15次野尻湖発掘			ナウマンゾウ化石の詳細な産状を調査

(野尻湖ナウマンゾウ博物館原図 2003)

第2表 信濃町における遺跡調査の歴史2

点では以下のようにまとめられる。

現在確認されている野尻湖遺跡群中最古の遺跡は立が鼻遺跡とされている。立が鼻遺跡からは、ナウマンゾウなどの動物化石が多く発見されている。これらは全身骨格ではなく、ばらばらになった状態で大量に出土するために、人為的に破砕されたキルサイトに関するものと予想されている。これらは湖底堆積の水成層から検出される。しかし、水底に遺跡があったとは考えにくいいため、化石は2次的に動いているものと考えられている。また、動物化石と共に石器や骨角器らしきものが出土しているが、これらは人工ではないとする意見もある。出土層準が約3.8万年～5万年前であり、湖底以外でこの時期の遺跡がみつからないことも遺跡の評価を難しくしている(野尻湖人類考古グループ1987)。

ナイフ形石器文化期に入ると遺跡が激増する。全国的にみても遺跡数、遺物密度が非常に高い遺跡群として評価されよう。

ナイフ形石器文化期初頭の遺跡から多くの斧形石器が出土する。その数は野尻湖遺跡群だけで200点を上まわり、日本国内で検出されている斧形石器の半数前後におよんでいる。また、極めて高い形態的斉一性をもつ台形石器も他地域にはみられない。遺跡規模も大きく、貫ノ木遺跡や仲町遺跡での該期の遺物数は1万点ををはるかに上まわっている。

その後、約2.5～2.4万年前の始良丹沢火山灰(AT)降灰後には、系統が異なると思われる複数の石器群が存在するようになる。東裏H2Ⅱ石器文化のように黒曜石やチャート、無斑晶質安山岩などを石材とし、2側縁加工のナイフ形石器や槍先形尖頭器、搔器などをおもな組成とする石器群、貫ノ木H1Ⅲb石器文化や七ツ栗Ⅱ石器文化のような珪質頁岩や珪質凝灰岩、無斑晶質安山岩をおもな石材とし、基部加工ナイフ形石器、彫器を組成する石器群、西岡Ⅲb石器文化のような無斑晶質安山岩をおもな石材とし横長剝片を素材とするナイフ形石器を特徴とする石器群などが存在する。それぞれの石器群はある程度の時間幅をもって登場し、異なる系統の石器群が同時期に存在していた可能性が高い。

旧石器時代終末期には断片的に神子柴型石斧や細石器関連の遺物がみられるものの、それ以前と比較す

ると遺跡数は少ない。しかし、縄文時代草創期の遺跡数は多い。星光山荘B遺跡では隆起線文土器片とそれに伴う石器類が多量に発見されており、仲町遺跡には爪形文土器、円孔文土器が多くみられる。特に草創期末～早期にかけての表裏縄文土器の出土量は多い。その後、縄文時代前期頃までの遺物は多く発見されているが、中期以降になると少なくなり遺物が断片的に出土する程度になる。現在のところ縄文時代遺跡からの住居跡の発見はなく、土坑や陥し穴、集石遺構などが残されているのみである。

弥生・古墳時代の遺跡は非常に少なく、断片的に土器片などが出土するのみで、平安時代になると再び遺跡数が増える。大規模な集落は発見されていないが住居が数件程度の小規模な遺跡が点在するようになる。(各遺跡の位置、時期については第2図、第1表を参照・信濃町の遺跡調査の歴史については第2・3表に掲載した)。

3 石器石材と産地

野尻湖遺跡群では大量の石器が出土するが、石器石材となりうる緻密な岩石の産地は存在しない。地元で採集できる岩石は多孔質で粗粒な岩石が多く、敲石、台石等の礫石器に使用されることはあっても、剥片石器に使用されることはほとんどない。剥片石器に用いられる主要石材には、黒曜石、珪質頁岩、無斑晶質安山岩、チャート、凝灰岩などがあげられる。上信越自動車道建設に伴う野尻湖遺跡群の発掘調査のデータを例に、これら石材の使用状況と推定される産地を以下にあげる。

(1) 黒曜石

黒曜石は理化学的な分析により産地推定が行われている石材である。上信越自動車道建設に伴う野尻湖遺跡群の調査では、旧石器時代～縄文時代草創期の11遺跡から検出された黒曜石12,642点に対して、蛍光X線分析装置を用いた産地推定を行っている(長野県埋蔵文化財センター2000)。

そのうち12,156点から有効な数値が得られ産地が推定された。わずかであるが、青森県木造町・深浦町、秋田県男鹿市、栃木県矢板市・塩原町、東京都神津島村の長野県外産地と推定された石器が16点あった。青森県木造町までの直線距離は約460kmだが、直線上には日本海があり陸路で行くには500km以上の距離がある。神津島への直線距離は約300kmだが、必ず海を渡らないと行けない。これらは旧石器時代の石器石材が非常に遠くまで動いていることを示した貴重なデータとなった。

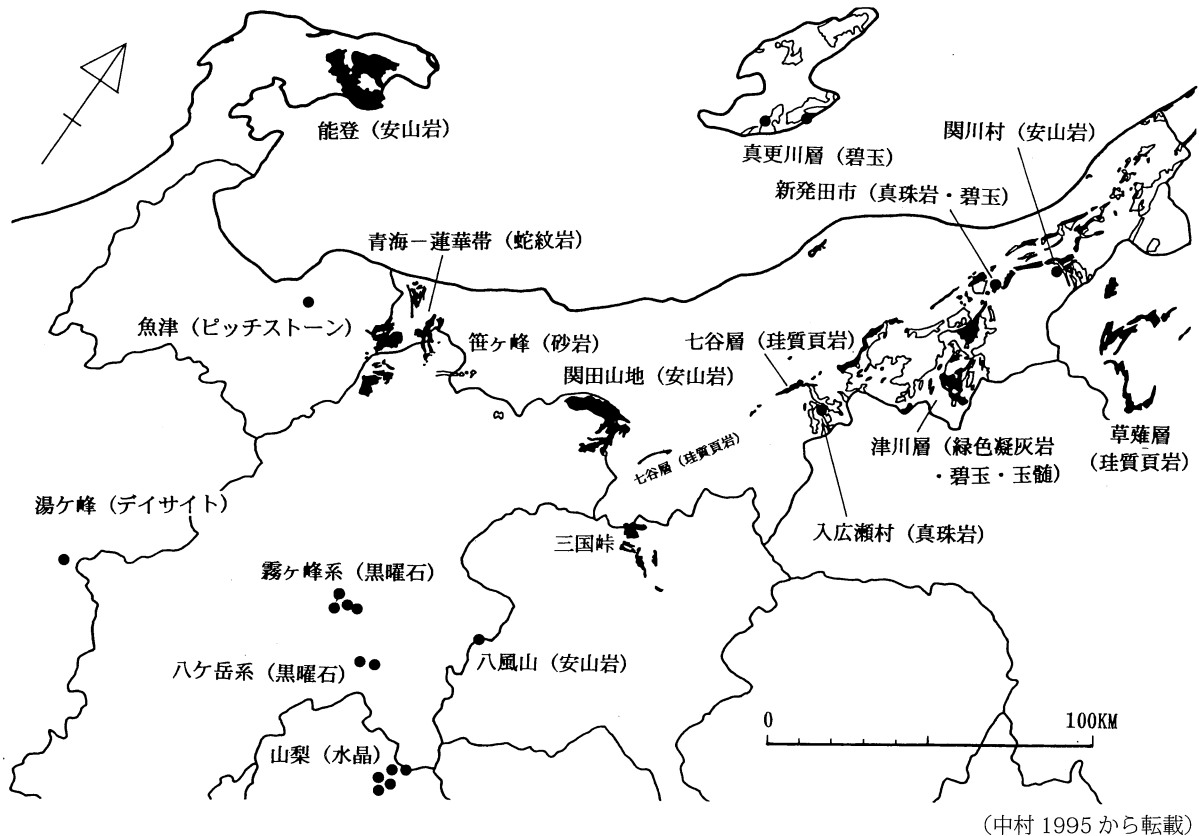
圧倒的多数を占めるのが長野県内の産地である。その中でも7割強を占めるのが「和田峠」「星糞峠」がある和田村・長門町内の産地である。野尻湖遺跡群までの距離が直線で約75kmだが、間には険しい山がある。鳥居川を下り、千曲川から依田川を上る川沿いのルートをとると100km以上の道のりで黒曜石産地にたどり着ける。県内だが広い長野県の北端に位置する野尻湖遺跡群と黒曜石産地の距離は遠いといえよう。

和田村・長門町内の産地の次に多いのが「星ヶ塔」「星ヶ台」がある下諏訪町・諏訪市内の産地で全体の約2割弱を占め、なかには主体となる石器群も存在する。距離的には、和田村・長門町内の産地とあまり変わらないが、分水嶺を越えることになる。

「麦草峠」「冷山」が存在する茅野市内の産地が全体の4%弱となっている。和田村・長門町、下諏訪町・諏訪市の産地より10km以上遠い上に、岩石の質的にも劣る茅野市内産の黒曜石が運び込まれる背景がどのようなものであったか興味深いところである。

(2) 無斑晶質安山岩

野尻湖から最も近い産地としては、長野県飯山市北部の関田山地から長野県栄村と新潟県津南町との境を流れる志久見川周辺までの長野・新潟県境一帯が知られている(中村1995)。野尻湖から産地までの直線距離は30～40kmで、在地石材とはいえない距離がある。また、長野・群馬県境にはガラス質黒色安



第3図 中部地方北部の石器石材産地

山岩を産出する八風山が存在する(中村 1995)。このガラス質黒色安山岩と無斑晶質安山岩は酷似しており、岩石学的には同じものと思われる。八風山までの距離は直線で約70kmで、黒曜石が多量に持ち込まれていることを考慮すると、野尻湖遺跡群で無斑晶質安山岩としているものの中に八風山のガラス質黒色安山岩が含まれている可能性が十分に考えられる。

産地が最も近くにあるためか、主要石材として最も多数の石器が出土している。また、大形の石核や分割剥片が持ち込まれている例もあり、剥片も他の石材と比べると大形のため、重量比は高くなる。しかし、黒曜石や珪質頁岩と比べると鋭利さに欠けるためか製品になる比率は低い。

ちなみに、貫ノ木遺跡高速道路地点では石器総数約34,000点中16,000点が無斑晶質安山岩となりその総重量は200kgを超える。

(3) 珪質頁岩・凝灰質頁岩・頁岩・珪質凝灰岩・凝灰岩・綠色凝灰岩

泥や火山灰の堆積岩であるこれらの岩石(以下頁岩系石材と記す)は蛍光X線等を用いた理化学的な産地分析法が確立していないため、厳密な産地がわからないのが現状である。また、珪化の進み具合や火山灰の含有比率は漸移的であり、それぞれの中間的な岩石がある点も注意が必要である。

最も近くにある産地は新潟県津南町周辺が知られている(中村 1995)。頁岩系石材のうち比較的粗粒で風化面が白色もしくは灰色となるものは、津南周辺では在地の石材として認識されている^{註1}。野尻湖遺跡群においてもこれと同質の頁岩系石材が数量、重量ともに最も多く用いられている。しかし、製品類の中にはよく珪化した褐色の珪質頁岩が多くみられる。これらは、山形県や秋田県で採集できる珪質頁岩によく似ている。秋田・青森産の黒曜石が持ち込まれている事実もあることから、新潟県北部・山形・秋田方面の頁岩の搬入の可能性も十分に考えられよう。

註1：津南町教育委員会山本 克氏のご教授による。

(4) チャート

チャートも頁岩系石材同様に理化学的分析による産地推定ができない石材である。長野県内には佐久地方の関東山地、南アルプス南部から木曾や伊那地方が産地として指摘されているが(中村 1995)、野尻湖から比較的近くの千曲川でも採集でき、最も近くに産地のある石材の可能性も考えられる。遺跡に持ち込まれているものは節理が多くサイズも小さい。

(5) 蛇紋岩

蛇紋岩を用いるほとんどの石器が斧形石器である。長野県内の白馬村や小谷村にも産地が存在するが、遺跡に持ち込まれている蛇紋岩の礫面形状や、透閃石、透緑閃石や曹長石が多く含まれていることから、糸魚川市内の姫川下流域から富山県境付近の日本海岸が産地として予想される。野尻湖までの距離は約50kmであるが、黒曜石や無斑晶質安山岩、頁岩系石材の産地とは別の方向にある。

(6) その他

玉髓、碧玉などその他の石材もみられるが、いずれも野尻湖周辺では採集できない。

第3節 調査・整理の方法

1 発掘調査の方法

(1) 試掘

今回の工事区域の大部分は貫ノ木遺跡および照月台遺跡として登録されている周知の遺跡の範囲内に収まっていた。そのため、試掘調査は実施されず、全面が調査の対象となった。

(2) 本調査

すべての調査対象地は国道に沿った山林であった。樹木に関しては工事に先立つ伐採が調査前に行われており、調査時には根株が残されている状態であった。本来であれば、表土からすべて人力による調査が望まれるところであるが、現実として広大な面積を全面人力による掘り下げは不可能であった。そのため、表土の除去および無遺物層の掘り下げについては、重機を用いた。

縄文時代以降の遺構検出 急斜面や低湿地等以外の地形については、遺構の存在が予想されることから面的遺構検出が必要であった。そのため、重機により表土を除去した後、鋤簾等を用いて人力による面の精査を行い、縄文時代以降の遺構検出を行った。

縄文時代以降の遺構の調査 竪穴住居跡や土坑等の掘り込みをもつ遺構は、半截もしくはセクションベルトを設定し、断面観察、記録を行った後に掘り込みを復元すべく掘り下げた。道跡、集石等の掘り込みをもたない遺構については使用時の状態の復元を行った後に、断ち割って断面を観察した。それぞれについて平面、断面、遺物出土状況等の図化および写真撮影の記録を行った。測量は原則としてトータルステーションによる単点測量を用いた。住居跡等の詳細な記録が必要なものについては、任意の2点を基準に方眼に人力で記録をした後に、その任意の2点の単点を測量した。

旧石器時代の遺構検出 旧石器時代の遺構の大部分は掘り込みをもたないため、テストピットおよびトレンチを設定して、ブロックおよび礫群の検出を行った。検出にあたっては以下の4つの方法のいずれかを実施した。①表土剥ぎ時や縄文時代以降の遺構調査時に遺物が検出されている部分等を対象に全面人力による掘り下げ。②重機による表土剥ぎの後、調査区長軸の調査区境に沿うトレンチを設定し、人力による掘り下げ。③表土剥ぎが行われていない範囲について一定間隔で2m×2mのテストピットを設定し、地表から人力で掘り下げ。④表土剥ぎが行われていない範囲について、約2m幅のトレンチを設定し、表

土を重機を用いて除去した後に、遺物包含の可能性が考えられる層の人力による掘り下げ。いずれの場合でもその深度は遺構検出面、もしくは約 40,000 年前とされる中部野尻ローム層上面である。

旧石器時代の遺構の調査 前記の①～④の方法で遺構が検出された場合は周囲を面的調査の対象とした。また、遺構は検出されないが遺物が出土した場合には、テストピットもしくはトレンチを拡幅し、さらに遺物が出土する場合は周囲を面的調査に切り替え、遺物が出土しない場合は周囲に遺構はないと判断した。掘り下げは鋤簾もしくは草かき鎌を用いた人力による削平を行い、遺物が出土する場合は土柱としてその位置を残した。測量はトータルステーションによる単点測量を行い、出土位置と同時に土器石器等の遺物種類と、出土層位を電子野帳に記録した。記録後はⅥ層～Ⅶ層上面まで掘り下げを行い、遺物が検出されなくなるのを確認して、調査を終了とした。

遺物密度が高い範囲が広がったため調査段階でのブロックの認定は行わなかったが、礫群については調査段階で認定している。

大形の炭化物については石器や礫と同様に単点測量を行っているが、粒子状の細かなものの記録は残されていない。

水洗選別による微細遺物の検出は今回は実施できなかった。

地形測量は面的調査を行った範囲について実施した。測量面はⅤ層上面を基本としたが、貫ノ木遺跡については、Ⅴ層がない範囲が広く、その部分については調査終了面の地形を測量した。

(3) 遺跡名称と遺跡記号

本書で報告する遺跡の名称と遺跡記号は、貫ノ木遺跡がMKN、照月台遺跡がMSGである。遺物・写真他の記録類の注記などもすべてこれによる。

(4) グリッドの設定と呼称法

センターでは従来、国家座標を基準として大々地区・大地区・中地区・小地区の4段階のグリッドを設定して調査を行っている。しかし、今回の調査では光波トランシットによる測量を主体としたため、特にグリッドは設定しなかった。測量は国土地理院の定める平面直角座標系の原点（長野県第Ⅷ系、X=0.000,Y=0.000）を基準点としている。なお、2002年以前の日本測地系（旧測地系）を用いている。

(5) 遺構記号

記録・注記等の便宜を図るために遺構名称は記号を用い、遺構番号は時代等にかかわらず種類ごと、検出順に付した。遺構記号は原則として検出時に決定するため、主として平面的な形態や遺物の分布状況等を指標としたもので、必ずしも遺構の性格を示すものではない。整理段階で遺構名称を変更する必要がある場合は、発掘時の遺構記号・番号は欠番とし、新しい遺構記号の最終番号に追加した。本書で報告する遺構番号は前述の理由から飛び番号が生じているが、混乱を避けるため発掘時の遺構記号・番号をそのまま使用した。したがって最終遺構番号が遺構総数とはならない。また、貫ノ木遺跡についてはセンターによる前回の調査（高速道および国道バイパス第1期工事に伴う事前調査）との重複を避けるため、検出されたBL・SH・SBについて、それぞれ、BL5001、SH201、SB201を開始番号とした。

なお、本書の遺構記号はセンターで共通して用いているもので、以下のとおりである。

[BL] 旧石器時代の石器・剥片集中

[SH] 礫群等の礫集中

[SK] 単独もしくは他の掘り込みと関係が認められないSB(住居跡等)より小さな掘り込み(土坑、陥し穴、貯蔵穴、井戸等)。

[SD] 溝跡

[SB] 竪穴住居跡

[SC] 道跡

(6) 遺物の取り上げと記録方法

旧石器時代の遺物が主体となったため、遺物の取り上げに際しては、測量業者に委託して、光波トランシットを用い単点測量を行った。成果品として編集図面、観測成果簿、観測データの3種で管理している。

遺物の取り上げ番号は、遺構に帰属する遺物については、遺構ごとに1番から番号を付した。ただし、旧石器時代のブロックについては調査時に認定していないため、遺構外遺物同様の扱いとなっている。包含層・遺構外の遺物については照月台遺跡は遺跡全体を対象とした通し番号を付した。なお、照月台遺跡はセンター調査が初めてのため、遺構、遺物番号とも1から番号を付したが、貫ノ木遺跡については高速道調査と混同を避けるため、遺構外遺物・ブロック出土遺物は50001、SBは201、SHは201から番号を付した。

なお、注記については遺構外遺物・旧石器時代ブロック出土遺物は「MKN50001」、遺構出土遺物は「MKN・SB201・1」とした。

2 整理作業の方法

(1) 遺物の整理方法

遺物の注記終了後、石器・礫を分別し、それぞれに作業を進めていった。

1. 石器の整理方法

石器の洗浄には、使用痕観察を考慮して、無斑晶質安山岩等の表面の風化、劣化が著しい石材以外は超音波洗浄機を用いた。

石器の属性観察については、器種・材質・重量を観察した。

器種の認定基準については本章第4節を参照願いたい。器種、石材の判別については基本的に上信越自動車関連の報告と同一の基準を原則として行っている。

なお、「破片」としたものについては次の2とおりある。1つは接合してほぼ完形となった器種で、個体数としては1でカウントしようとする観点から、接合した1点をその器種名として、他の接合した資料については「器種名+破片」とした。もう1つは接合しないが、石器の尖端や基部等がごく一部しか残っていないものについて破片とした。

石器石材の観察および個体判別・接合作業は器種判別後、石器実測作業と並行しながら行った。

石器および剥片を原石単位で把握することを目標として石材の個体判別作業を実施した。肉眼で詳細に観察して分類をし、その基準を表にして示した。しかし、個体差の少ない黒曜石や無斑晶質安山岩等は、見た目がそっくりであっても同一原石から剥離されたものでない場合が多い。また、チャートについては個体差はあるものの、持ち込まれている原石が小さく、非常に多くの個体が持ち込まれているため、1個体としたものの中には複数の原石が含まれてしまう場合がある。したがって、特徴的な個体については1個体1原石となっているが、それ以外には1個体に複数原石が存在するものがあることを了承願いたい。

個体分類と同時に石器製作工程の復元と遺跡構造の解明を目的とした接合作業を行った。個体分類作業では厳密な「個体」を示せなかったが、互いに接合する資料については確実に同一原石から剥離されたものとしての判断が可能である。

実際の作業にあたり、部分的特長しか読み取れない碎片は除外した。また、黒曜石は産地分析後に産地ごとに個体判別を行っている。ただし、分析上産地が異なっても見た目がそっくりな個体については、接合を試みており異なる産地群間での接合も存在する。

個体別資料の番号は石材に関係なく重複しないように複数資料がある個体は1、単独の石材は1001か

ら番号を付した。また、判別不能なものは9999とした。

接合資料については石材に関係なく1から連番で番号を付けた。

2. 礫の整理方法

礫の整理では、礫の計測・観察を行った後に接合した。礫の観察項目は材質・礫形状・遺存度・焼け面・付着物・長さ・幅・厚さ・重量である。

3. 土器の整理方法

縄文時代と古代の土器が存在するため、両者を分類後に縄文土器については文様別に分類した。また、接合できる破片は接合し、必要なものについては復元をした。

接合しない土器片についての観察項目は文様・部位・破片数・総重量である。

(2) 遺物の収納方法

旧石器時代、縄文時代、古代、その他の4つに大別し、各時代のまとまりで石器、礫、土器、その他の種別に従いそれぞれ収納している。

第4節 石器の器種分類

出土した石器は、まず石器（製品）、石核、剥片・碎片に区分される。石器（製品）は剥片を素材とする剥片石器と礫そのものを素材とする礫石器に分けられる。剥片石器は素材の縁辺を機能部とする石器、加工部位を機能部とする石器に分けられる。さらに下位のレベルとして個別の器種名が存在する。

1 素材の縁辺を機能部とする石器

剥片のもつ鋭い縁辺をそのまま刃部として利用する石器。大きくは基部が作り出されるナイフ形石器、組み合わせが予想される細石器、加工による形状変化が少ない石刃・貝殻状刃器等に分けられる。

(1) ナイフ形石器

剥片の鋭い縁辺を一部に残し、他の縁辺を細部加工した石器。台形石器もこの定義にあてはまるが、全体の形状で尖端を尖らせているものをナイフ形石器とした。

(2) 台形石器

剥片の鋭い縁辺を一部に残し、他の縁辺を細部加工した石器のうち、石器長軸（主軸）に直交もしくは斜交する刃部をもつ石器。基本的にはナイフ形石器の一部と考えるが、特徴的に存在しているため器種を分けた。AT降灰以前の時期を代表する「台形様石器」の一部や、AT降灰以降の「切出形石器」や「台形石器」と呼称されていた石器を含む。

(3) 貝殻状刃器

鋭い縁辺と切り立った側縁を持つ石器。「台形様石器」と呼称されている（佐藤1988）石器の一部。明瞭な加工は少なく、数回の剥離、折れ面、切断面、打面、素材末端などの切り立った面で1以上の側縁が形成される。2次加工のある剥片との区別が難しいが、長幅比が1:1に近く平面形が台形もしくは円形を呈しており、かつ刃部に使用痕と思われる微細剥離が認められるものをこれにした。

(4) 石刃

石核から規則的に連続して剥離された、左右側縁が平行する細長い石器。そのものが使用される他、ナイフ形石器等の素材となる。連続性、規則性が認められないものは含まない。また、組成表上では稜付き剥片も石刃としている。

2 加工部を刃部とする石器

(1) 彫器

槌状剥離によって作り出された彫刻刀面をもつ石器。

(2) 削片

槌状剥離によって剥がされた削片。

(3) 搔器

連続する加工により、厚い刃部が作り出されている石器。平面形は円形、拇指状を呈するものが多い。刃部の角度が45°以上のもの。

(4) 搔器状石器

加工によって比較的急角度の刃部が作り出されているもので、平面形が円形もしくは台形を呈する。従来「台形様石器」と呼ばれていたものの中で、連続する加工による刃部が認められるものをさす。「ウワダイラ型台形石器」(白石 1978)、「立野ヶ原型ナイフ形石器」(麻柄 1986)と呼ばれていたものの多くがこれに属する。

(5) 削器

連続する加工による刃部をもつ石器。形態や加工は様々である。刃部の角度が45°以下のもの。

(6) 抉入削器

削器のうち刃部がノッチ状になる石器。

(7) 鋸歯縁状削器

連続する強い加工や平坦な加工により、鋸歯縁状の刃部が作り出されている石器。複数のノッチ部によるベックと呼ばれる石器(芹沢 1986)などもここに含む。

(8) 厚刃搔器

打面や折れ面などの切り立った縁辺から加工を施し、90°に近い角度の刃部が作り出されているもの。

(9) 揉錐器

2側縁もしくは1側縁の加工により錐状の先端部が作り出されている石器。

(10) 楔形石器

相対する2端に反対方向からの剥離が認められる石器。剥離は加工だけではなく、使用の結果生じた可能性も考えられる。

(11) 斧形石器

石器の長軸と平行する2側縁に主として平坦な加工が施され、石器の長軸に直交するような刃部をもつ石器。刃部には研磨が施されるものが多い。「局部磨製石斧」がこれに含まれるが、研磨の認められないものや、用途が木材の伐採以外にもあったと考えられる点から斧形石器という呼称を用いる。削片ではなく礫を素材とする斧形石器も存在するため、礫石器の範疇に含まれるものがある。

刃部研磨部の破片を「斧形石器破片」に、調整削片を「斧形石器調整削片」とした。

3 礫石器

(1) 敲石

人為的な敲打痕のある石器。石器製作のためのハンマーと思われる。

(2) 凹石

人為的に凹部が作り出されている石器。

(3) 磨石

人為的な磨り面をもつ石器。

(4) 台石

台として用いられたと考えられる石器。

(5) 礫器

礫の一部に刃が付けられた石器。

4 剥片・碎片・石核

(1) 2次加工のある剥片

2次加工が認められるが器種名がつけられない石器。製品の破片で、器種名が判別できなかったものが大半を占める。

(2) 微細剥離のある剥片

微細な剥離を有する剥片。使用の痕跡の可能性が考えられる。

(3) 剥片

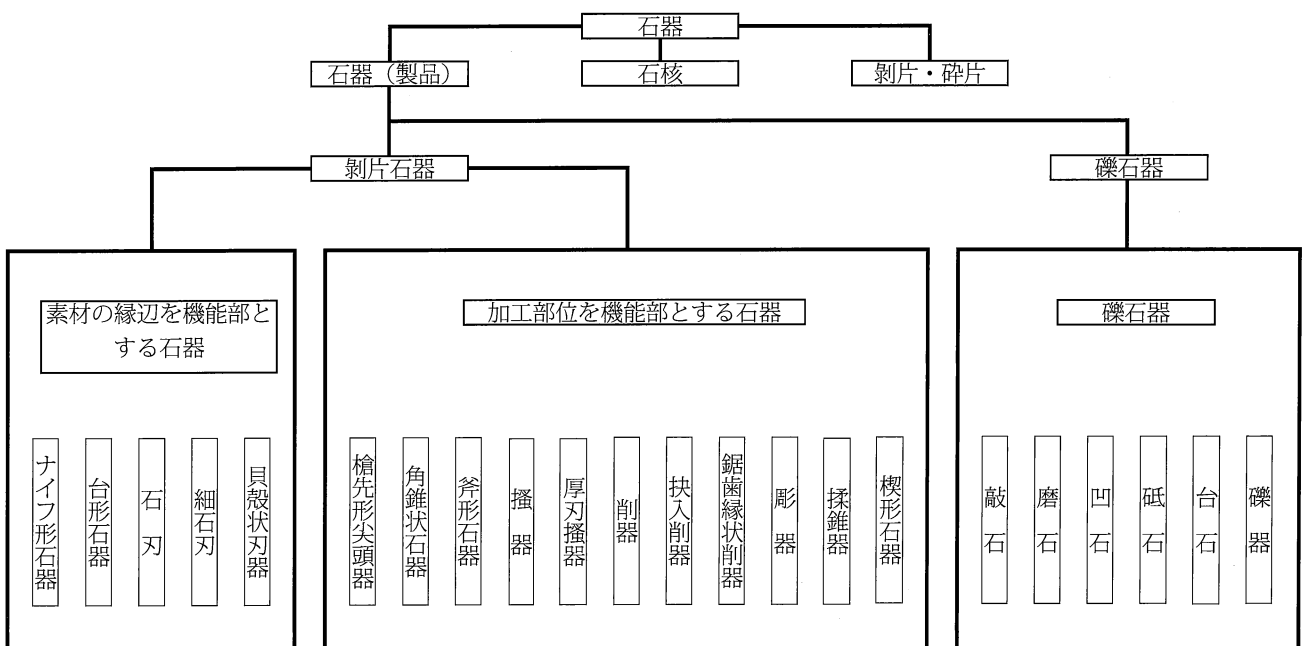
石核や原石から意図的に打ち剥がされた石片。

(4) 碎片

剥片剥離時や石器の2次加工を行う時に生じる非目的的な細かい石屑。剥片との厳密な区別が難しく、本書では1cm以下のものを碎片とした。

(5) 石核

剥片を剥離するために調整された石塊。または剥片が剥離された石塊。石塊には原石や大形剥片がある。



器種分類概念図

第2章 貫ノ木遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

貫ノ木遺跡の今回の調査地点は、長野県上水内郡信濃町大字野尻滝沢 766 ほかに所在する。野尻湖の西側に位置する北東 - 南西方向に細長い仲町丘陵は南西端で頂部に達する。その頂部周辺が貫ノ木遺跡とされている。丘陵の背の部分に位置する遺跡は長軸は 1km 弱、短軸 200m の広大な面積を有している。今回の調査地点は、貫ノ木遺跡では最も野尻湖に近い北東端に位置している。標高は 696m から 703m 前後である。

遺跡内には北流する関川水系と一度南流して千曲川に注ぐ鳥居川の分水嶺が存在し、小丘陵と低地が入り乱れる地形となっている。

遺跡地は土取り等によって形成された崖面が多く、野尻湖発掘調査団により地層の観察がよく行われてきており、風成の「野尻ローム層」の模式地となっている。土層観察の際に崖面より石器が発見されており、A・B・C の 3 地点が以前より確認されていた（野尻湖発掘調査団 1975）。

最初の発掘は野尻湖調査団により 1985 年に実施された第 4 回陸上発掘である。B 地点に 3m × 3m の連なる 2 グリッドが設定された。わずかな面積であったが、斧形石器を含む 285 点の石器が出土している（野尻湖人類考古グループ 1987）。

1988 年の第 5 回陸上発掘では前回調査した B 地点のグリッドを延長する形で（一部拡幅）、3m × 3m のグリッド 14 ヶ所の調査が行われ、礫を含む 1,888 点の遺物が出土した（野尻湖人類考古グループ 1990）。B 地点における 2 回の発掘調査で調査された面積はわずか 50 m² 程度であり、そこから 2,000 点を上まわる数の遺物が出土したのである。また、並行して A 地点でも 3m × 3m の連なる 2 グリッドが調査され、縄文土器 38 片を含む 58 点の遺物が出土している。

1991 年～ 1992 年には信濃町教育委員会により C 地点の一部の緊急調査が行われた。貫ノ木遺跡では初めての緊急発掘調査である。調査面積もこれまでの 10 倍以上の 635 m² となり、約 4,300 点の遺物が出土した。槌状剥離を有する尖頭器を含む石器群、杉久保型ナイフ形石器を含む石器群、斧形石器を含む石器群など、礫群を伴う複数の文化層が確認されている（渡辺・中村 1992）。

1993 年～ 1996 年に上信越自動車道建設に伴う長野県埋蔵文化財センターの調査が行われた^{註1}。調査面積が 46400 m² におよび、旧石器時代を主体とする石器 34,287 点、礫 11,325 点の遺物が出土し、国内では例をみない規模の調査となった（長野県埋蔵文化財センター 2000c）。旧石器時代から縄文時代草創期に属す約 250 ものブロックが認定された。石材産地以外では国内最大の規模といえよう。

1996 年には上信越自動車道の調査に並行して、信濃町教育委員会による個人住宅地点の調査も行われている（信濃町教育委員会 1995）。

これまでに、以上のような多くの調査が行われてきたことにより、貫ノ木遺跡の概要は次のようにまとめられる。

遺物は 3 万数千年前のいわゆる「後期旧石器時代初頭」と呼ばれている時期から縄文時代草創期まで

註 1: 国道 18 号野尻バイパス第 1 期工事部分も含まれる。なお、同工事による発掘調査の一部は 1996 年にも実施されている。

のものがある。特に始良丹沢火山灰（以下「AT」とする。）降灰以前の石器群が多い。

AT降灰以前の斧形石器・台形石器を主体とする石器群、AT降灰以降のナイフ形石器を主体とする石器群、AT降灰以降の槍先形尖頭器を主体とする石器群では、ブロック群が周辺の遺跡より高い密度で出土しており、遺跡群の「核」となるような遺跡であったと考えられる。

2 遺跡の調査地点

前項でも述べたように、貫ノ木遺跡は過去の調査履歴が多い。それぞれの地点名および調査年、調査主体は以下のとおりである。またそれぞれの位置を第4図に示す。

A地点 1988年野尻湖発掘調査団（野尻湖人類考古グループ1990）

B地点 1985年・1988年 野尻湖発掘調査団（野尻湖人類考古グループ1987・1990）

S地点（誠文堂地点） 1991年・1992年信濃町教育委員会（渡辺・中村1992）

K地点（金氏住宅地点） 1994年信濃町教育委員会（信濃町教育委員会1995）

P地点（帝国パイプライン地点） 1997年信濃町教育委員会

H1～4地点（高速道等第1～4地点） 1993～1995年センター（長野県埋蔵文化財センター2000c）

H5地点（高速道等第5地点）1999年センター（本書）

本書で報告するのはH5地点となる。1993年～1996年にセンターにより行われた調査は、上信越自動車道と国道18号野尻バイパス用地を総称しH地点（高速道等地点）としている。今回の事業はH地点と調査原因が一部重なっていることから、続きの第5地点としてH5地点（高速道等第5地点）と定める。なお、本書内においてはH5地点の名称は省略する。

3 遺跡の地形と基本層序

(1) 遺跡の地形

貫ノ木遺跡は北北東に延びる仲町丘陵の尾根の背から頂部に位置しており、今回の調査区は遺跡の北北東端から南南西の丘陵頂部方向に向かう、長さ約130m、幅約6mの細長いトレンチ状を呈している。調査区の長軸は丘陵の長軸とほぼ一致している。調査区が尾根の東側斜面に位置していることから、等高線は調査区の長軸にほぼ平行し、西から東へ下る斜面となっている。

信濃町内でのセンターの調査は、Vb層上面もしくは、V層上面で10cmもしくは20cmの精度で、地形測量を行ってきたことから、本調査区でもV層上面での地形測量を行った（第5図）。しかし、調査区の半分以上の範囲で、崖錘による層序の乱れによりV層が存在しなかった。その範囲については、調査終了面の地形を測量した。調査終了面はVII層上面付近となっている（層序については次項を参照）。

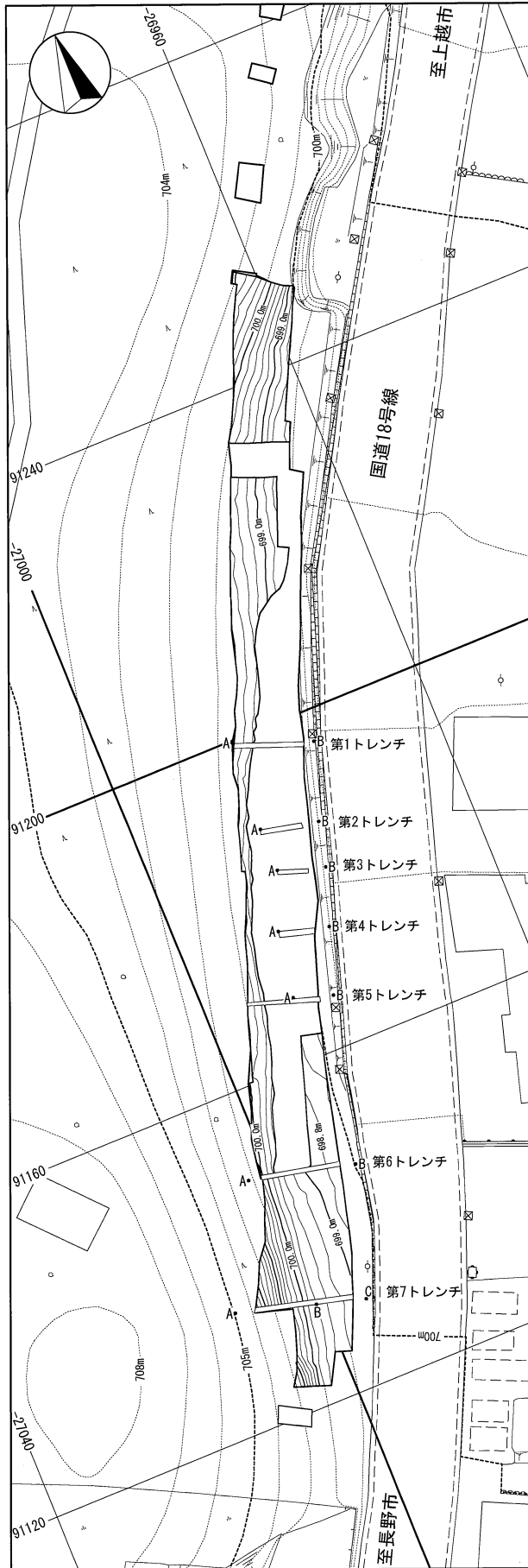
前記したように調査区は東向きの斜面となっているが、その中でも調査区中央北よりに存在する狭いがテラス状となる部分と、そこから南東に下ったノッチ状の低地部に遺物が集中して分布している。

(2) 遺跡の層序

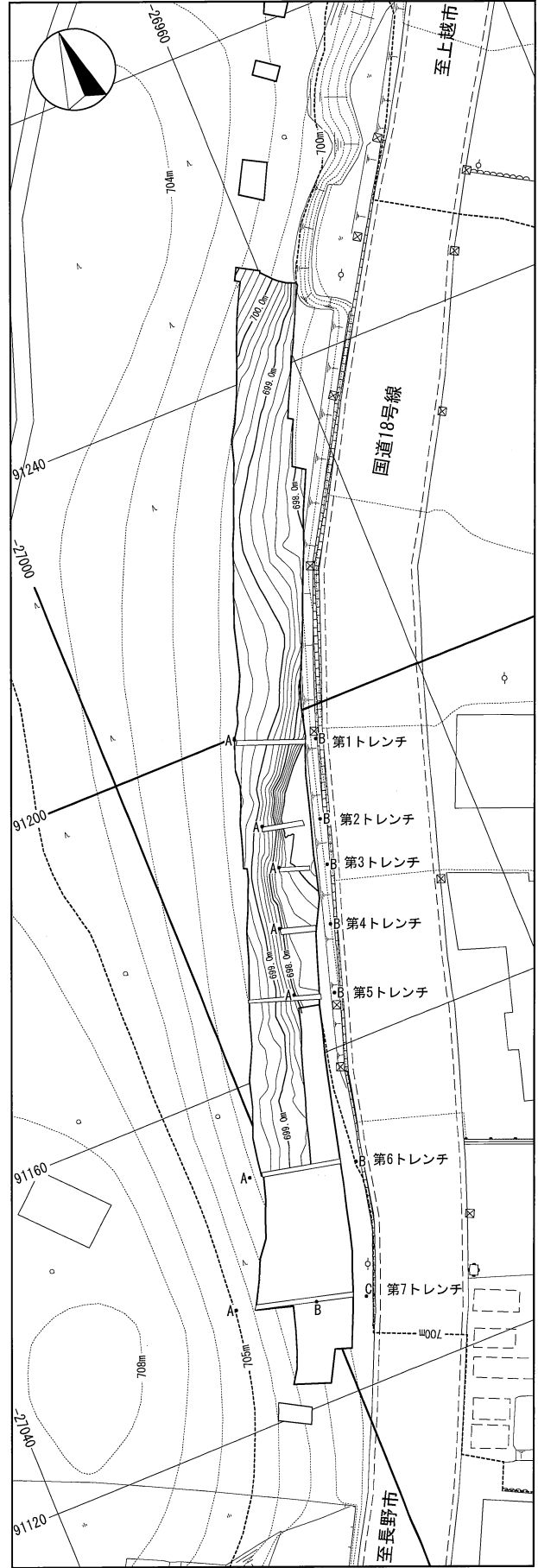
信濃町内においてセンターの標準層序が定められている。その基準となった断面が、貫ノ木遺跡H4地点の断面（第6図④）である。同じ高速道路関係による調査の周辺地点を含めて各層序を第6図に、内容を以下に示す（長野県埋蔵文化財センター2000cを引用）。野尻湖発掘調査団の定めた層序（野尻湖調査団1975他）との対比も示す。

I層：表土 黒色土（Hue7.5YR 1.7/1）白色粒子、黄色粒子を含む。攪乱層も含む。

II層：黒色土（Hue7.5YR 1.7/1）柏原黒色火山灰層に対比される。低地部では厚く堆積しており、以



調査区内のコンタはV層上面



調査区内のコンタは調査終了面（VII層上面付近）

0 (1:800) 40m

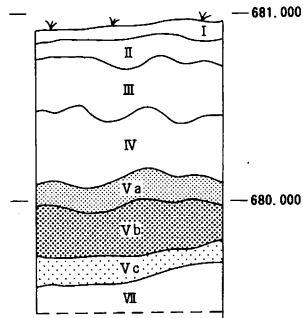
第5図 貫ノ木遺跡の地形とトレンチの位置

第2章 貫ノ木遺跡

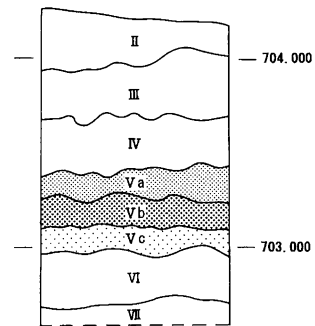
下のように細分される。

- II a 1層：黒色土 (Hue7.5YR 1.7/1) マトリックスはI層と同じ。ただ白色、黄色粒子をほとんど含まない。I層にくらべ柔らかい。
- II a 2層：黒色土 (Hue7.5YR 2/1) マトリックスは色調が若干褐色味をおびるほかはII a 1層と変わらない。白色粒子が目立つ。
- II a 3層：黒色土 (Hue7.5YR 1.7/1) II a 1層とほとんど同じ。ただ白色粒子がII a 2層ほどではないにしろ若干含まれる。
- II a 4層：黒褐色土 (Hue7.5YR 2/2) 白色粒子、黄褐色火山灰粒子をよく含む(小ブロックといった方がよいかもしれない。径2～5mm)。妙高の火山灰を含む層か。
- II a 5層：黒褐色土 (Hue7.5YR 2/2) マトリックスは基本的にII a 1・II a 2層と同様。白色粒子はほとんど含まない。
- II b層：明赤褐色土 (Hue5YR 5/8) マトリックスはII a 5層になると考えられるが、ごく限られた範囲に本層があらわれる。調査区全面にはみられず、低位面方向に分布した。粘性の強い、一見焼土のような土である。また赤味の強弱があり、平面的にはまだら状になる。径50～60cmの赤味の強い部分が点々とあり、周りに弱い赤味の部分がある。
- II c層：黒褐色土 (Hue7.5YR 3/1) マトリックスはII a 5層と同じ。遺物包含層となる。やや団粒状にみえるところがある。
- 低地部III層：灰褐色土 (Hue7.5YR 4/2) II層とIV層の漸移層と考えられる。若干の赤褐色粒子を含む。粘性に富み、固い。
- 低地部IV層：黄褐色水付ローム層 (Hue10YR 5/8) 赤色スコリアを若干含む。粘性に富む。
- III層：黒褐色土 (Hue10YR 3/2) 厚い層をなし、上層部ほど黒味が強い。下層部に黄色ロームを多く含む(20%)。粒子はやや粗く粘性は小さい。上部野尻ローム層IIモヤ層に対比される。
- IV層：黄褐色土 (Hue10YR5/6) 層の上部にIII層の黒色土の入り込みがみられる(5%)。層の下部に鈍い黄褐色の粘性のあるローム粒(1～3mm)がみられる(10%)。上部野尻ローム層II黄褐色ローム層に対比される。
- V a層：褐色土 (Hue10YR 4/4) 灰黄褐色ローム粒(1～5mm)を含む(10%)。粒子がやや粗く、粘性が少しある。北側約1mに灰黄褐色土の集中部(40%)がみられる。高速道調査地点では本層の中部で始良丹沢火山灰(AT)がブロックで確認された。上部野尻ローム層II最下部に対比される。
- V b層：暗褐色土 (Hue10YR 3/4) 粒子の細かい密なローム塊で、粘性がかなりある。上部野尻ローム層I上部の黒色帯上部に対比される。
- V c層：褐色土 (Hue10YR 4/6) V b層より若干色調が明るく、スコリアがわずかに含まれる。上部野尻ローム層黒色帯下部に対比される。
- VI層：明褐色土 (Hue7.5YR 5/6) 同色のローム粒を多く含む(50%)。粘性が少しある。上部野尻ローム層Iの下部に対比される。
- VII層：赤褐色土 (Hue2.5YR 4/6) 固い塊状をなし、内部に黄色の粒子(1～3mm)を多く含む(10%)。もろくはげやすい。鍵層赤スコが基調となり中部野尻ローム層IIIに対比される。
- VIII層：黄褐色土 (Hue2.5Y 4/6) 固くしまった岩盤状をなす。粒子は細かく密である。粘性はない。鍵層青ヒゲを含み、中部野尻ローム層IIおよびIに対比される。
- IX層：明赤褐色土 (Hue5YR 5/6) 粒子が粗く小さな塊をつくる(3～5mm)。濁くと白黄色になり、表面はぼろぼろとなる。青白い小粒の火山礫を3%含む。下部野尻ローム層IIIの最上部に対比される。

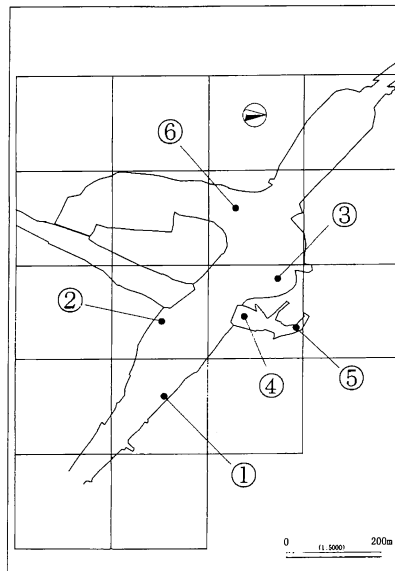
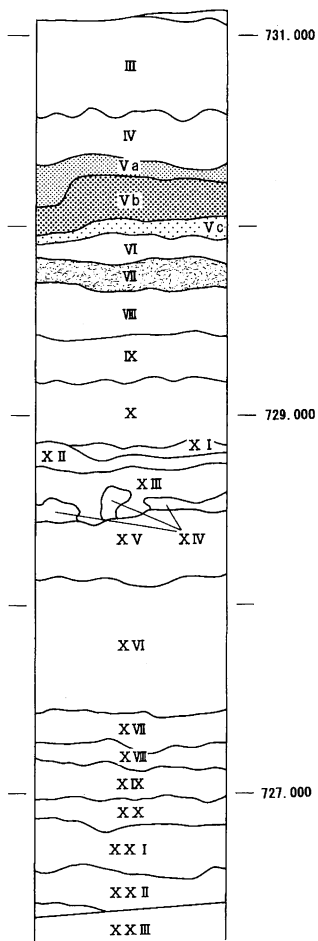
⑥西岡A遺跡
(V-Q)



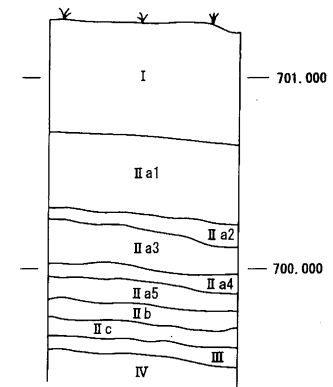
③貫ノ木遺跡第3地点
(VI-G)



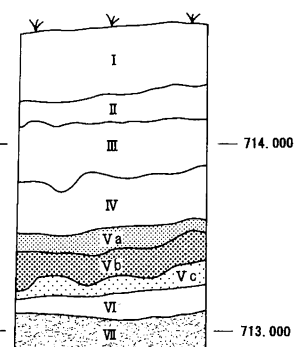
②貫ノ木遺跡第2地点
(X-M)



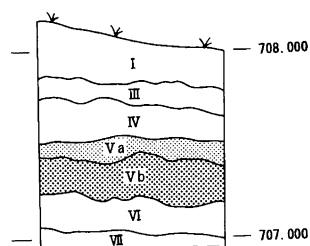
⑤貫ノ木遺跡第4地点(低地部)
(VI-D)



④貫ノ木遺跡第4地点
(VI-S)



①貫ノ木遺跡第1地点
(XI-M)



(長野県埋蔵文化財センター 2000c 第10図を再録)

第6図 貫ノ木の基本層序

第2章 貫ノ木遺跡

X層：黄褐色土（Hue10YR 5/6）粒子が細かく粘性をもつ。青白い小粒の火山礫を層の上部にわずかに含む。

X I層：オリーブ色土（Hue5Y 5/4）粒子が粗く砂状の塊をなす。鍵層ドライカレーを主体とする。

X II層：オリーブ褐色土（Hue2.5Y 4/3）粒子が細かく固くしまっている。間にX V層を含んでいるところもある。粘りはない。鍵層コナアズキを含む。

X III層：にぶい黄橙色土（Hue10YR 6/4）粒子は細かく固くしまった層をなす。青白い火山礫（1～10 mm）を多く含む（5%～7%）。鍵層コナアズキを主体とする。

X IV層：灰オリーブ色土（Hue5Y 5/3）細かい砂状の塊で固い岩盤をなす。鍵層ブレッチャーゾーンを主体とする。

X V層：褐色土（Hue10YR 4/6）青白色の小粒（1～3 mm）の火山礫を多く含む（5～7%）。粒子が細かく粘りが少しある。赤スコリア粒（1～2 cm）をわずかに含む。

X VI層：灰色土と明褐色土の互層が三回繰り返される。鍵層3点セットを含む下部野尻ローム層Ⅱに対比される。

X VII層：褐色土（Hue10YR 4/4）細かい粒子で密な層をなす。赤スコリア粒（1～2 cm）をわずかに含む。北端近くに鍵層灰ドロと思われる火山灰を少し含む。

X VIII層：黄褐色土（Hue10YR 5/6）粒子は細かい。層の堅さはX VIIより弱い。粘性がある。下部野尻ローム層Ⅰに対比され、所々に鍵層黄ゴマ（粒子が粗い砂状の塊・大山倉吉パミス）を含む。粘性のある土である。

X IX層：にぶい黄褐色土（Hue10YR 5/4）固い層をなし、青白い火山灰（1 mm以下）をかなり多く含む（7～10%）。

X X層：褐色土（Hue10YR 4/6）固くしまった層になっているが、赤スコリア粒（1～3 cm）を多量（25%）に含む。粒子は細かく粘性が少しある。

X X I層：明黄褐色土（Hue10YR 6/6）粒子が細かく粘性が強い。水分を多く含む。黒いガラス状粒（輝石）を多く含む（3%）。

X X II層：黄褐色土（Hue10YR 5/6）細かい粒子の土でしまった層をなす。青白い火山粒（1 mm以下）を少し含む（2%）。

X X III層：黄褐色土（Hue10YR 5/8）粒子が細かく密である。黒いガラス状粒（輝石 1 mm以下）を若干含む。水につきやや脱色している。

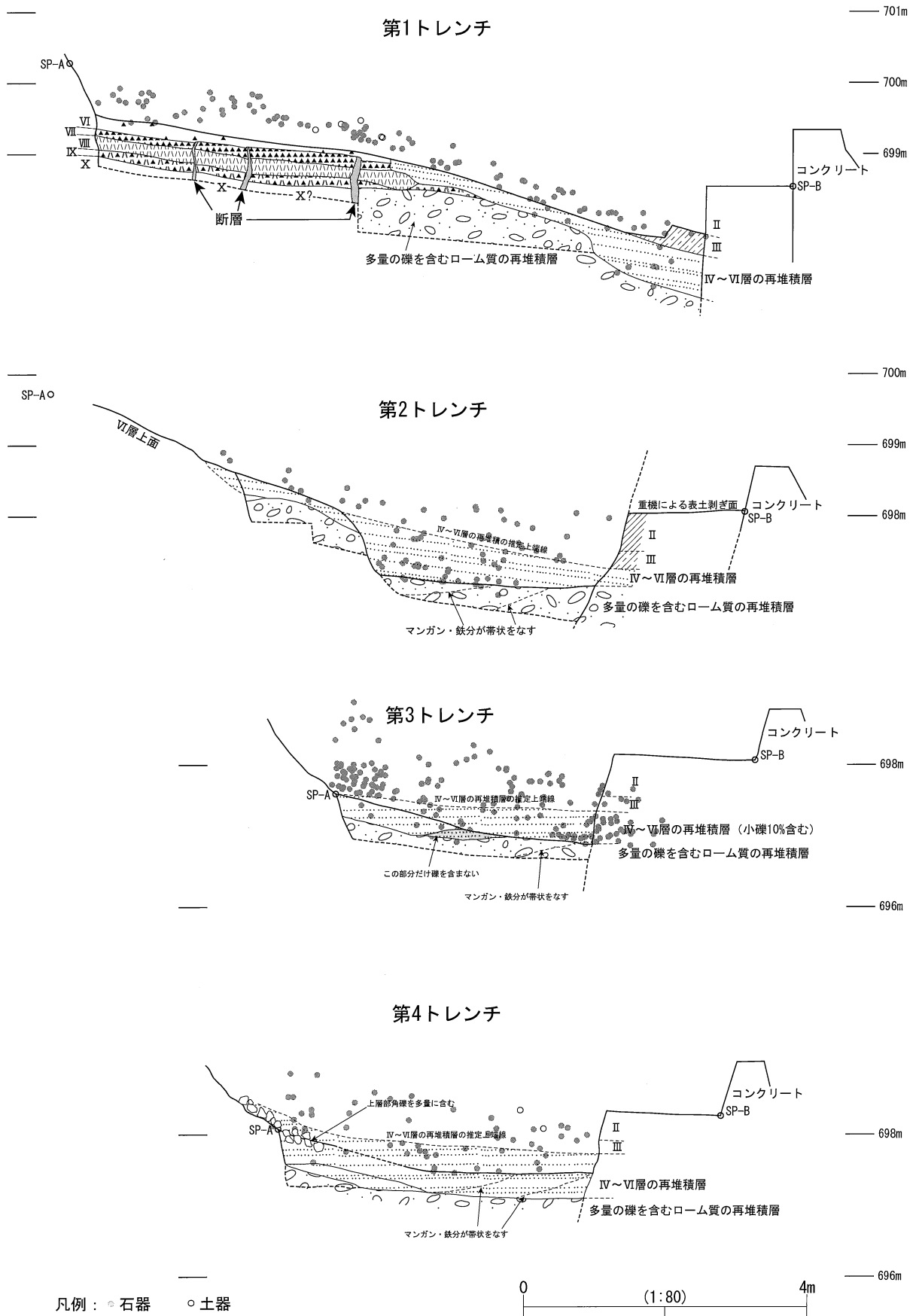
第6図中の③・④が信濃町の良好で標準的な層序といえよう。今回の調査区においても、調査区西側に斜面上部およびテラス状地形の上では、V層のa・bの細分ができることから、標準的な層序に近い状態といえよう。ただし、斜面であるため乱れがある。

調査区南端付近については、距離的に近いこともあり、第6図⑤の第4地点低地部と同様に縄文時代以降の黒色土の厚い堆積がみられた。

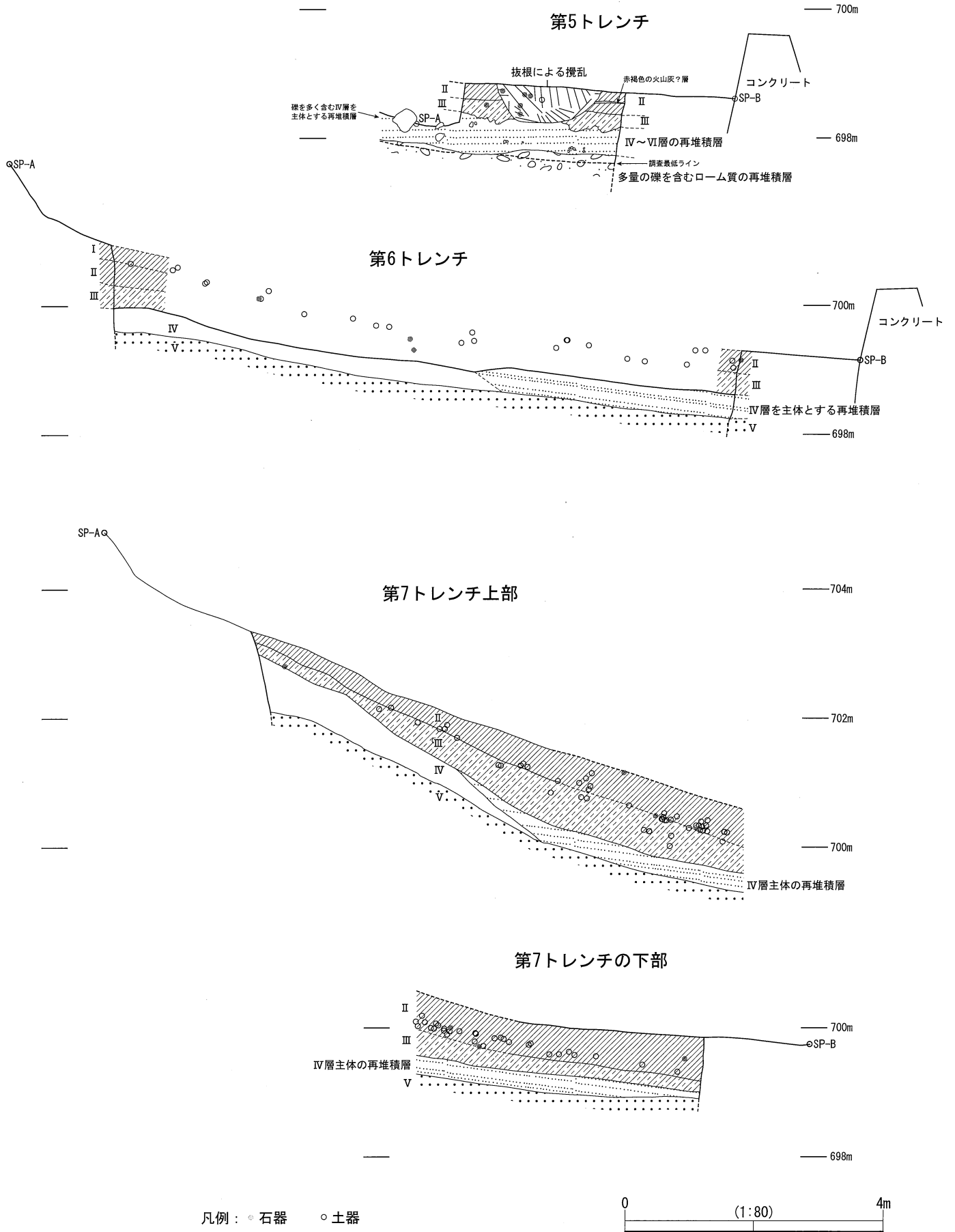
標準的な土層堆積状況と異なることから、確認のために設定したトレンチの層序記録を第7・8図に示す（トレンチの位置は第5図に示す）。トレンチを設定した大部分が斜面もしくは斜面下部であり、崖錐の影響により、IV～VI層間はブロック状に混ざり合う再堆積層となっていた。図中には断面記録壁面の、1m以内から出土した遺物の垂直分布を示した。石器はIV～VI層の再堆積層の中で大きく上下に分布している。土器も2次移動が認められるようだが、IV～VI層の再堆積層には入り込まずⅢ層より上位に収まる。

(3) 遺物の層位別平面分布

第9図にⅡ～Ⅲ層から出土した石器と土器の分布を示した。石器は調査区中央付近のテラスから斜面



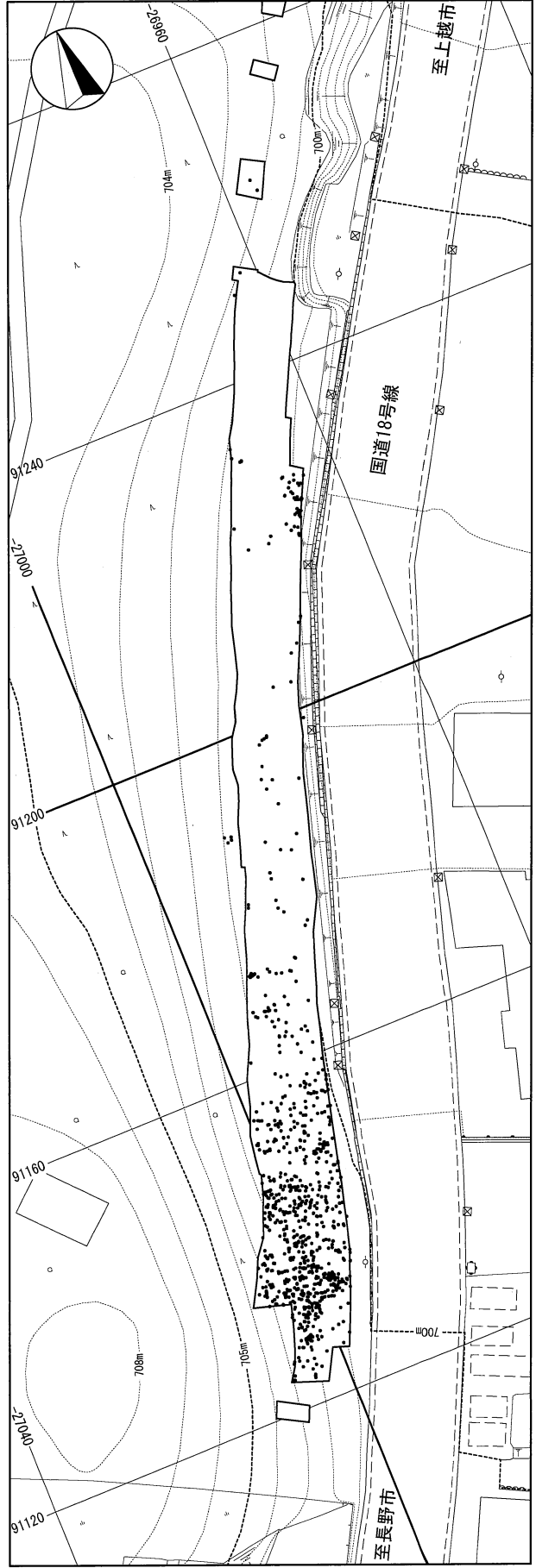
第7図 貫ノ木遺跡の層序1



第8図 貫ノ木遺跡の層序2



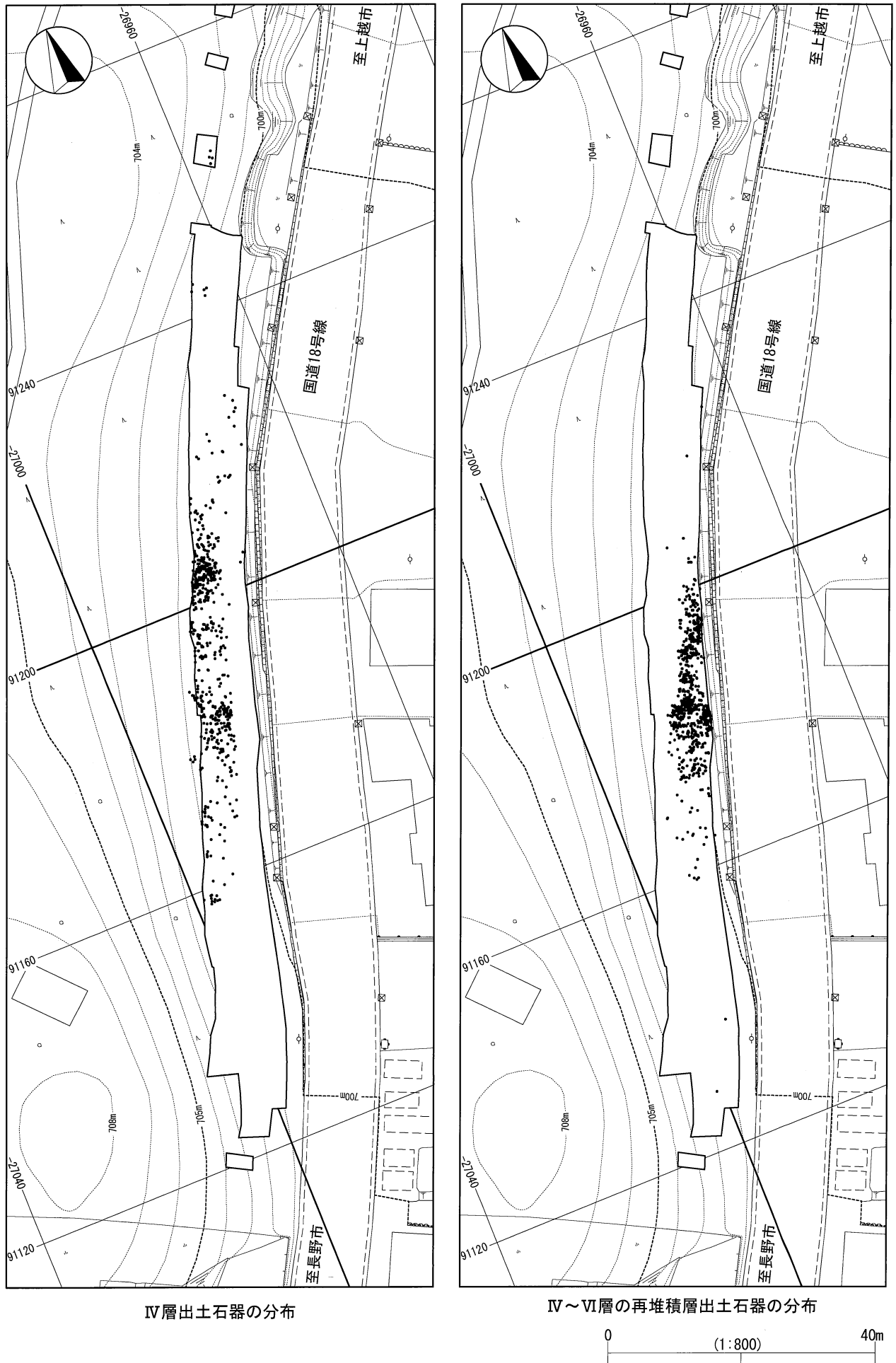
II～III層出土石器の分布



II～III層出土土器の分布

0 (1:800) 40m

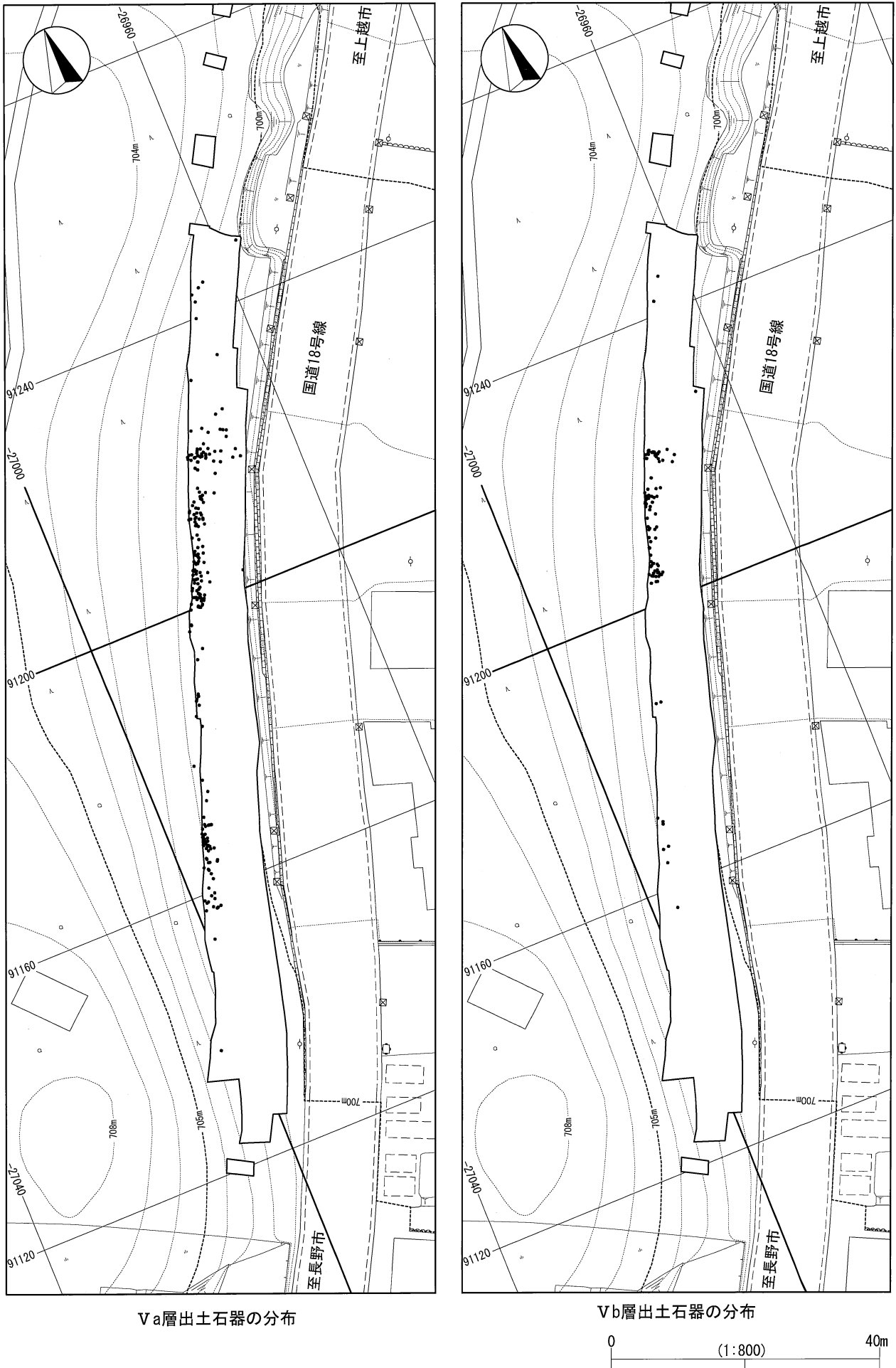
第9図 貫ノ木遺跡層位別遺物分布図1



IV層出土石器の分布

IV~VI層の再堆積層出土石器の分布

第10図 貫ノ木遺跡層別遺物分布図2



第11図 貫ノ木遺跡層位別遺物分布図3

にかけて広く分布する。一方、土器は調査区南半に多く分布し、北側にも1ヶ所まとまった分布が確認できる。

第10図にIV層から出土した石器の分布と、IV～VI層の再堆積層から出土した石器の分布を示した。IV層が純層で確認できない部分をIV～VI層の再堆積層としているため、両者の分布は当然相容れない。また、IV層から出土した土器はなく、IV～VI層の再堆積層から出土した土器片もわずかに1片であった。そのため、IV層およびIV～VI層の再堆積層は旧石器時代の遺物が包含される層と判断できる、平面分布を見ると、南側の土器分布域と重なる部分の石器の分布がほとんどなくなっている。そのため、土器分布域に重なっていた石器の大部分が、縄文時代の石器であることが推測される。

第11図にV a層およびV b層から出土した石器の分布を示した。数量的にはV a・V b層から出土する石器よりIV層から出土する石器が多いが、IV層から出土する石器は、斜面下方にむかって散らばっているように見える。もともと上方にあったものが、斜面下にむかって動いたもので、まとまりの良いV a・V b層の石器はより原位置に近いと考えられる。

また、V a層とV b層の関係は、平面的な分布は重なり、数量的にV a層から出土する石器が上まわる。しかし、V b層から出土する遺物も少なくない点が注目される。これは、生活面がV b層に近いV a層にあった可能性を示しているといえようか。



調査終了後の貫ノ木遺跡 H5 地点（平成 15 年 12 月 24 日撮影・南より）

第2節 旧石器時代

1 旧石器時代の概要

(1) 地形と遺物の分布

調査区は南北に細長く、その長軸は等高線とほぼ平行している。そのため、調査区全域は東に下る斜面となっている。斜面中には等高線の間隔が広く、テラス状の地形を呈する場所が存在する。また、調査区の東側は国道18号線が走っているが、この道路は谷状地形の谷部を通っている。したがって、国道下は低地性の堆積となっており、一般的な堆積と異なる。低地性の堆積はⅡ層の堆積が厚い一方、Ⅳ層以下のロームには水の影響がみられる。

一般的な旧石器時代の遺物に石器と礫があげられる。当遺跡では調査区内の広い範囲に自然礫が多く分布しており、焼けや人為的配置が認められる礫がなかったため、遺物として取り上げた礫はない。

以下の3つの地形に非常に多くの石器が分布している。

1つはテラス状の地形である。BL6・8・12などがこの地形上に立地する代表的なブロックとなる。主に調査区の西側境に沿ってこの地形が存在するが、テラスとしては西側上部の調査区外の方が平坦で広い。したがって、今回調査のテラス状の地形部はテラスから斜面落ち際といった印象を与えられる。しかし、調査区内に存在するテラス状地形の大部分に旧石器時代の石器の分布が認められる。土層の堆積もⅣ層・Ⅴa層・Ⅴb層の分層が可能であり、ここで出土する石器は旧石器時代人が残した原位置に近いものと考えられる。

2つめとしてテラス下の斜面部である。BL4・5・7の他、多くのブロックがこの地形に立地している。斜面部の遺物密度はテラス状地形部とくらべて低く、出土層も厚くなる傾向がみられる。また、ほとんどの場合は上部のテラス状地形部に遺物が密度高く分布している。したがって、斜面部の遺物は上部から落ちてきたものである可能性が高い。

3つめとしては斜面から低地への変換点となる斜面裾部である。BL10およびBL13がこの地形上に立地する代表的なブロックとなる。斜面から崩れ落ちてくる土石がたまる場所であり、上部の斜面部およびテラス部には遺物の分布域があるため、これらから崩れ落ちてきた遺物が多いと思われる。堆積も不安定で、斜面上部から供給されたと思われるⅣ層～Ⅵ層の土がブロック状に入り乱れている。しかし、すべての遺物が流れ込んできたものとするには数が多すぎるように思える。野尻湖遺跡群ではこのような裾部にブロックが立地するのはむしろ一般的といえよう。今回の調査で低地部を面的に広げることができなかったため、その全容は不明である。

以上の地形部に石器の分布が認められる。高い遺物密度と遺物数の多さは、一般的な旧石器時代のブロックとは大きく異なるといえよう。大別した3つの地形部も実際は連なっていて、遺物の分布域も一連性が認められる。そのため、調査区内の遺物分布域全域が1つの巨大なブロックとして捉える見方もできる。

(2) ブロックの認定

旧石器時代の石器の平面的なまとまりをブロックとして認定した。ブロックの認定方法は、石材、出土層位別の平面分布図を作成し、微地形図を重ねて境界を定めていった。

野尻湖遺跡群では土層の堆積は薄く同一層準から出土したからといって同時に埋没したとはいきれない。また、回帰性の強い重層遺跡内では同一石材だから同時であるとの限定もできない。個体差の少ない黒曜石や無斑晶質安山岩が多いため、個体分類作業においても個体の抽出まで行うことができていない。

遺構	II	III	IV	V	V a	V b	V c	IV~VI	攪乱	合計	比率
BL5001		1	4							5	0.2%
BL5002			5		5	2				12	0.4%
BL5003	2	2	6		6	1		1		18	0.6%
BL5004	1	4	8		41	27		1		82	2.9%
BL5005	1	6	7		2					16	0.6%
BL5006	30	30	24		35	27	1		2	149	5.3%
BL5007	11	25	8					1	1	46	1.6%
BL5008	57	227	270	1	65	26	7	1	6	660	23.3%
BL5009	3	12	2		1			5		23	0.8%
BL5010	67	131	20					209	3	430	15.2%
BL5011	18	8	7					49		82	2.9%
BL5012	6	45	47		8	2				108	3.8%
BL5013	105	118	102	3				383		711	25.1%
BL5014	37	73	43		3		2	92		250	8.8%
BL5015	7	12	6					6		31	1.1%
BL5016	4	19	20		9	3		2		57	2.0%
BL5017	10	19	1					10		40	1.4%
BL5018	1	8	7		32	3				51	1.8%
BL5019	3	15	1					7		26	0.9%
BL5020	1	1	13		17	1			1	34	1.2%
外					5			1		6	0.2%
合計	364	756	601	4	229	92	10	768	13	2837	
比率	12.9%	26.6%	21.2%	0.1%	8.1%	3.2%	0.4%	27.1%	0.5%		

第3表 遺構別出土層位分布

本来はそれらを突き詰めた上で、ブロックの認定を行うべきなのであろうが、発掘調査のみの情報と限られた時間の中ではきわめて難しい。

したがって、本書で定めたブロックはあくまで、報告に必要な分析をするための空間を区分する単位となる。そのため、旧石器時代人が残した一連の活動痕跡を複数に分けていたり、複数の活動痕跡を1単位としている場合がありうる。

第12図に旧石器時代の石器の分布と、認定したブロックに境界線を示した。

(3) 遺物の出土層位

ブロックごとの出土層位の分布を第3表に示した。各ブロックの詳細については次項に記す。出土層位ごとの平面分布は第9～11図に示した。

合計2837点の石器が出土している。II～VI層の間で出土し、最も多いのがIV～VI層の再堆積層となっている。II層・III層も多くV a層・V b層も少量ではないため、全体的にばらついているといえよう。前節で記したように、斜面部および斜面裾部の堆積は不安定で、斜面上部からの崩れ落ちが予想されることや、テラス部でも平らではないため、このような出土層位のばらつきが表われるのだろう。

したがって、本来遺物が包含されるべき生活面の決定は難しく、単純に出土層準のみで決められない。

(4) 器種組成

遺構別の器種組成を第4表に示した。器種別の分布図については、次項でブロック単位に示す。

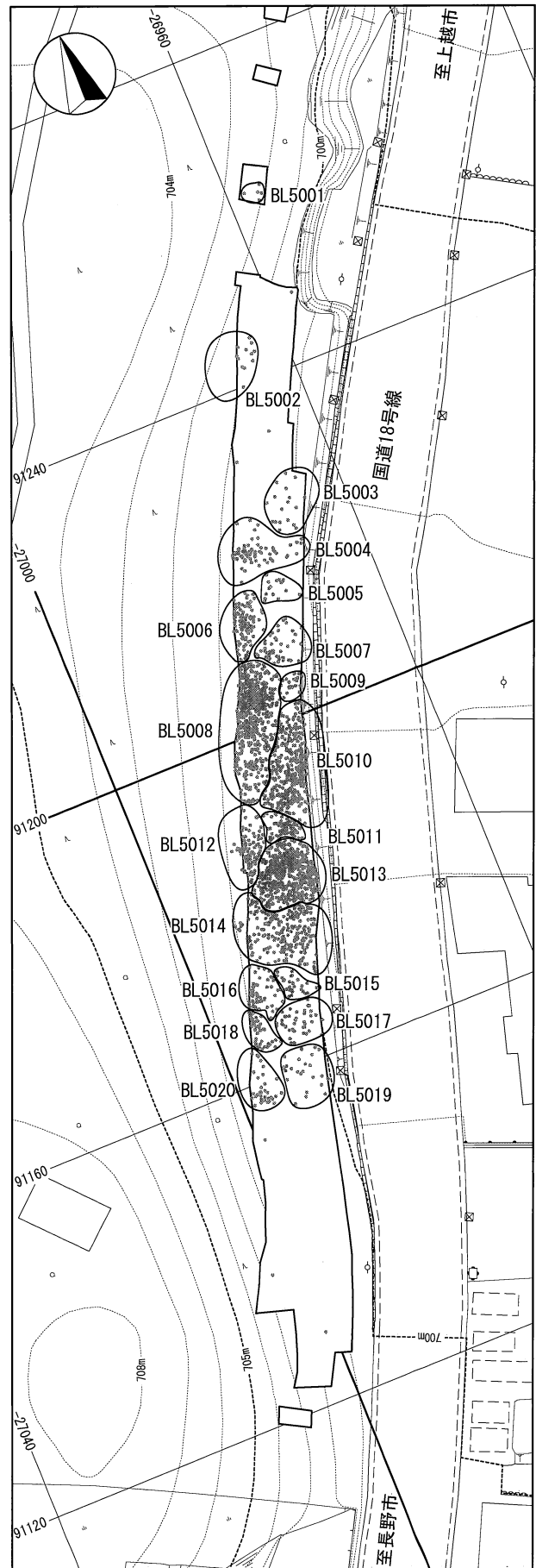
石器総数2837点で、組成はナイフ形石器51点（別に破片2点）、台形石器8点、貝殻状刃器13点、彫器28点（別に破片1点）、削片4点、搔器78点、削器63点、抉入削器9点、鋸歯縁状削器13点、揉錐器5点、楔形石器49点、石刃60点、2次加工のある剥片63点、微細剥離のある剥片116点、剥片1517点、碎片651点、石核55点、原石29点、斧形石器4点、敲石12点（別に破片1点）、凹石2点、槍先形尖頭器1点、細石刃1点、細石核1点となっている。

ナイフ形石器、台形石器、彫器、搔器、斧形石器の組成を特徴とする。

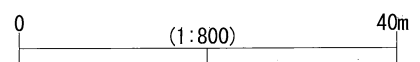
大半はナイフ形石器文化に属す石器群である。細石核や槍先形尖頭器などの明らかに時期が異なるものが含まれているが、ごくわずかで、単体に近い状態にあると考えられる。ただし、平面的に重なっているため、定形的石器以外の分離は難しいことから、定形的石器も含めて、各ブロックに属す石器として報告、分析する。



旧石器時代の石器分布



ブロックの分布



第12図 旧石器時代の遺物とブロックの分布

第2章 貫ノ木遺跡

遺構	ナイフ形石器	ナイフ形破片	台形石器	貝殻状刃器	彫器	彫器破片	削片	搔器	削器	抉入削器	鋸歯縁状削器	搔錐器	楔形石器	石刃	2次加工削片	微細剥削片	剥片	砕片	石核	原石	斧形石器	敲石	敲石破片	凹石	槍先形尖頭器	細石刃	細石核	合計	比率
BL5001														1			2		1		1							5	0.2%
BL5002			1	1					1	1			1			1	6											12	0.4%
BL5003		1		2					1	1					1	9	2	1										18	0.6%
BL5004	1							1	2	1	2		5		2	31	33	1			1							82	2.9%
BL5005	1		1													1	10	2	1									16	0.6%
BL5006									2			1	9		4	2	85	11	6	28		1						149	5.3%
BL5007				1					1			1	2		2	1	30	7				1						46	1.6%
BL5008	3		2	7	4			15	11			4	1	9	12	14	17	377	150	24	1	1	6		2		660	23.3%	
BL5009	2							1									14	4	1		1							23	0.8%
BL5010	7		1	1	8		1	18	17	3	5	1	8	7	12	20	239	71	8			2				1	430	15.2%	
BL5011	6						1	6	2				5	3	1	6	33	18	1									82	2.9%
BL5012	2			1	1			8	1				1	3	3	8	47	33										108	3.8%
BL5013	13	1			6	1	1	16	16	2	1	1	7	22	12	32	361	210	7			2						711	25.1%
BL5014	6		1		5			6	6	1			1	7	8	14	135	59	1									250	8.8%
BL5015					1											1	20	8								1		31	1.1%
BL5016	1							4					1	2	2	29	17					1						57	2.0%
BL5017	3		1		1			1	1				2	1	3	19	7								1			40	1.4%
BL5018	4		1		1								1		2	29	13											51	1.8%
BL5019	2				1				2			1	1	1	1	3	13	1										26	0.9%
BL5020							1			1						1	23	5	3									34	1.2%
外									1								5											6	0.2%
合計	51	2	8	13	28	1	4	78	63	9	13	5	49	60	63	116	1517	651	55	29	4	12	1	2	1	1	1	2837	
比率	1.8%	0.1%	0.3%	0.5%	1.0%	0.0%	0.1%	2.7%	2.2%	0.3%	0.5%	0.2%	1.7%	2.1%	2.2%	4.1%	53.5%	22.9%	1.9%	1.0%	0.1%	0.4%	0.0%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%		

第4表 遺構別器種組成

遺構	黒曜石	無斑晶質安山岩	珪質凝灰岩	凝灰岩	珪質頁岩	チャート	凝灰質頁岩	安山岩	砂岩	下呂石	頁岩	玉髓	鉄石英	蛇紋岩	緑色凝灰岩	合計	比率
BL5001	1	2	0										1		1	5	0.2%
BL5002	4	8	0													12	0.4%
BL5003	7	8	1			2										18	0.6%
BL5004	27	47	1	1	1	4								1		82	2.9%
BL5005	7	5	1		1	2										16	0.6%
BL5006	54	23	66	4					1	1						149	5.3%
BL5007	7	8	25	2		1	1	1		1						46	1.6%
BL5008	334	117	142	26	10	3	8	1	7	4	4	1	2	1		660	23.3%
BL5009	11	6	2	2			1								1	23	0.8%
BL5010	289	45	60	13	15	2	2		1	1	1	1				430	15.2%
BL5011	71	5	0	4	1		1									82	2.9%
BL5012	64	30	2	2	6	2	1	1								108	3.8%
BL5013	528	98	6	22	33	9	8	3	1		1	1	3		1	711	25.1%
BL5014	218	3	4	10	6	5	4									250	8.8%
BL5015	27		0	3	1											31	1.1%
BL5016	44	6	3		1			1	1			1				57	2.0%
BL5017	37	1	0					2								40	1.4%
BL5018	40	7	0					4								51	1.8%
BL5019	21	3	0		1	1										26	0.9%
BL5020	29	2	0	1			2									34	1.2%
外	4		2													6	0.2%
合計	1824	424	315	90	76	31	28	13	11	7	6	5	5	4	1	2837	
比率	64.3%	14.9%	11.1%	3.2%	2.7%	1.1%	1.0%	0.5%	0.4%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.1%	0.0%		

第5表 遺構別石材数量組成

(5) 石材組成と石材別平面分布

遺構別の石材数量組成を第5表、重量組成を第6表に示した。また、石材、産地群別の石器平面分布を第13図～第16図に示した。

数量は黒曜石が最も多く、64.3%と約3分の2を占めている。次いで無斑晶質安山岩、珪質凝灰岩となる。一方重量での黒曜石の比率は18.1%と下がる。重量的に多いのが主要石材の中では産地が近い無斑晶質安山岩で25.9%である。砂岩の重量比も高くなるが、これは敲石等の礫石器が多いためである。

黒曜石については、蛍光X線分析装置を用いた産地推定を行っている。分析の詳細については添付CD-ROMの自然科学分析フォルダ内の自然科学分析.pdfファイル内に記すが、ブロックごとの産地の組成は第7表に示した。また、器種別の石材組成を第8表に示した。

特筆されるべきは、和田土屋橋西群、和田土屋橋南群、和田土屋橋北群という新和田トンネル土屋橋周

第2節 旧石器時代

遺構	黒曜石	無斑晶質 安山岩	珪質 凝灰岩	凝灰岩	珪質頁岩	チャート	凝灰質 頁岩	安山岩	砂岩	下呂石	頁岩	玉髓	鉄石英	蛇紋岩	緑色 凝灰岩	合計	比率
BL5001	21.93	9.68										7.98		172.4		211.95	1.0%
BL5002	9.97	103.9														113.89	0.5%
BL5003	14.31	309.9	13.07			3.16										340.48	1.6%
BL5004	52.73	287.2	23.91	16.65	2.34	41.38							10.24			434.45	2.0%
BL5005	29.97	122.1	5.11		7.01	3.86										168.03	0.8%
BL5006	239.7	313.2	405.8	61.18					246.6	10.43						1276.821	5.8%
BL5007	22.77	88.23	239.2	41.54		19.6	57.16	87.11		9.37						564.97	2.6%
BL5008	792.9	2187	1275	403.6	35.01	15.94	64.78	388.4	3511	17.28	49.93	3.59	32.71	81.7		8858.65	40.4%
BL5009	32.25	96.21	23.57	29.74			12.8							50.48		245.05	1.1%
BL5010	730.9	779	642.1	489.6	78.97	3.91	28.8		392.4	5.57	441.6	12.78				3605.5	16.5%
BL5011	190.5	24.57		253.4	8.01		25.14									501.6	2.3%
BL5012	103.9	360	2.9	8.85	118.7	3.38	21.67	26.74								646.11	2.9%
BL5013	801.6	684	28.44	666.8	214.68	25.87	309.5	53.36	269.2		14.11	0.27			38.97	3106.729	14.2%
BL5014	424.4	70.64	29.35	132.6	55.71	28.1	27.37									768.231	3.5%
BL5015	57.84			35.73	12.19											105.76	0.5%
BL5016	112.5	23.45	13.28		0.31			20.72	34.52			3.12				207.86	0.9%
BL5017	106	6.31						33.77								146.03	0.7%
BL5018	72.08	56.88						65.28								194.24	0.9%
BL5019	83.97	147.7			17.8	6.57										256.07	1.2%
BL5020	53.71	9.2		9.12			38.4									110.43	0.5%
外	16.58		25.7													42.28	0.2%
合計	3970	5679	2727	2149	550.73	151.8	585.6	675.4	4453	42.65	505.6	27.74	32.71	314.8	38.97	21905.13	
比率	18.1%	25.9%	12.5%	9.8%	2.5%	0.7%	2.7%	3.1%	20.3%	0.2%	2.3%	0.1%	0.1%	1.4%	0.2%		

第6表 遺構別石材重量組成

遺構	和田芙蓉 ライト群	和田 鷹山群	和田 小深沢群	和田土屋 橋北群	和田土屋 橋西群	和田土屋 橋南群	和田 高松沢群	和田ブド ウ沢群	諏訪 星ヶ台群	礫科 冷山群	下呂石	NK群	推定不可	合計	比率
BL5001		1												1	0.1%
BL5002		4												4	0.3%
BL5003		4			1									5	0.4%
BL5004	1	12				1				1				15	1.1%
BL5005		4			1				1					6	0.5%
BL5006	7	18		2	3	2	1				1		20	54	4.1%
BL5007		2			3							1		6	0.5%
BL5008	1	14	5	4	96	70	30	1	7		3	1	1	233	17.7%
BL5009			1		5	1	1							8	0.6%
BL5010	1	15	3	5	92	66	20		15			1	3	221	16.8%
BL5011		10	3	4	17	13	4		4					55	4.2%
BL5012	1	6	3	1	13	11	1		2					38	2.9%
BL5013	1	87	11	26	118	59	25	1	20	1			7	356	27.0%
BL5014	6	44	1	14	51	25	13		5				2	161	12.2%
BL5015	2	6	1	1	6	2	1							19	1.4%
BL5016	1	11	1	1	11	3			1					29	2.2%
BL5017	2	10	2	1	7	6	1							30	2.3%
BL5018	3	13		1	10	1	1							29	2.2%
BL5019		10	1	2	4	2			1					20	1.5%
BL5020	1	13	2	1	4	3								24	1.8%
外	1	3												4	0.3%
合計	28	287	34	63	442	265	98	2	56	2	4	3	33	1318	
比率	2.1%	21.8%	2.6%	4.8%	33.5%	20.1%	7.4%	0.2%	4.2%	0.2%	0.3%	0.2%	2.5%		

第7表 遺構別黒曜石産地組成

辺で採集される産地群が半数以上の比率を占めることである。土屋橋周辺の黒曜石は単独で持ち込まれる場合が多く、原産地遺跡以外で1遺跡からこれだけ多くの数が出土したのは初めてである。また、100点を上回る「男女倉産」と呼ばれる和田高松沢群、和田ブドウ沢群の出土もめずらしい。

土屋橋からやや下流には男女倉遺跡群が存在する。男女倉遺跡群内を流れる男女倉川の川原で、土屋橋周辺の産地群と、男女倉産の黒曜石の両者を採集することができる。そのため、貫ノ木遺跡に持ち込まれた黒曜石の採集地の中心が男女倉川であった可能性が考えられる。

産地ごとの平面分布図を第13・14図に示した。産地ごとに分布が偏らない特徴があるといえよう。最も多い土屋橋西群や南群は、第5008～5014号ブロックのそれぞれで、主体として存在している。この産地が主体となるのは一般的ではないことから、これらのブロックの同時性の高さがうかがえる。ただし、第5001～5006・5020号ブロックについては、土屋橋西・南が少なく、和田鷹山群が多くみられる。

第2章 貫ノ木遺跡

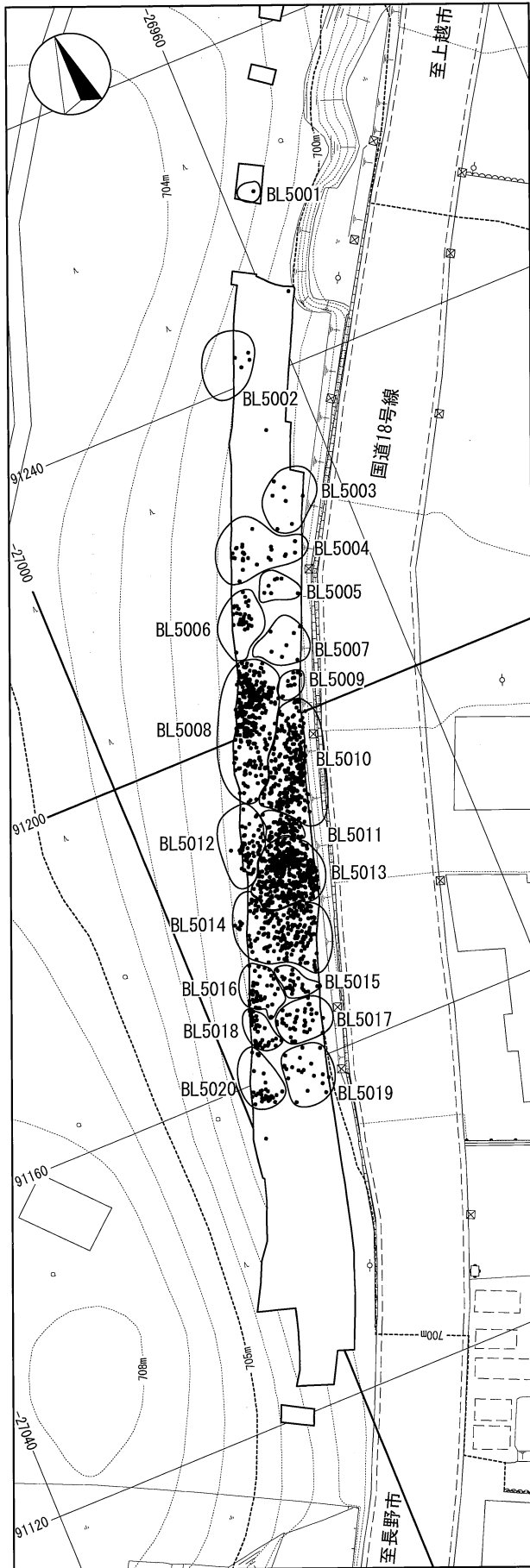
器種	黒曜石	無斑晶質 安山岩	珪質 凝灰岩	凝灰岩	珪質頁岩	チャー ト	凝灰質 頁岩	安山岩	砂岩	下呂石	頁岩	玉髓	鉄石英	蛇紋岩	緑色 凝灰岩	合計	比率
ナイフ形石器	50	1														51	1.8%
ナイフ形石器破片	2															2	0.1%
台形石器	7									1						8	0.3%
貝殻状刃器	9	1			1					1			1			13	0.5%
彫器	22	2			2						1		1			28	1.0%
彫器破片	1															1	0.0%
削片	4															4	0.1%
搔器	70	2			5	1										78	2.7%
削器	44	6	1	5	2		3			1		1				63	2.2%
扶入削器	5	2		1			1									9	0.3%
鋸歯縁状削器	8		3	2												13	0.5%
撻錐器	3	1			1											5	0.2%
楔形石器	40	3	5			1										49	1.7%
石刃	47	3		2	2	1										60	2.1%
2次加工のある削片	47	11	3	1	1							1	3			63	2.2%
微細剥離のある削片	104	1	2		5	1	1			1	1					116	4.1%
削片	792	298	254	70	48	23	17	10		1	1	2			1	1517	53.5%
砕片	513	79	36	6	6	2	5	1		1	1	1				651	22.9%
石核	24	14	11	2		2	1				1					55	1.9%
原石	29															29	1.0%
斧形石器														4		4	0.1%
敲石				1				2			1					12	0.4%
敲石破片									1							1	0.0%
凹石									2							2	0.1%
槍先形尖頭器	1															1	0.0%
細石核	1															1	0.0%
細石刃	1															1	0.0%
合計	1824	424	315	90	73	31	28	13	11	7	6	5	5	4	1	2837	
比率	64.3%	14.9%	11.1%	3.2%	2.6%	1.1%	1.0%	0.5%	0.4%	0.2%	0.2%	0.2%	0.2%	0.1%	0.0%		

第8表 器種別石材組成

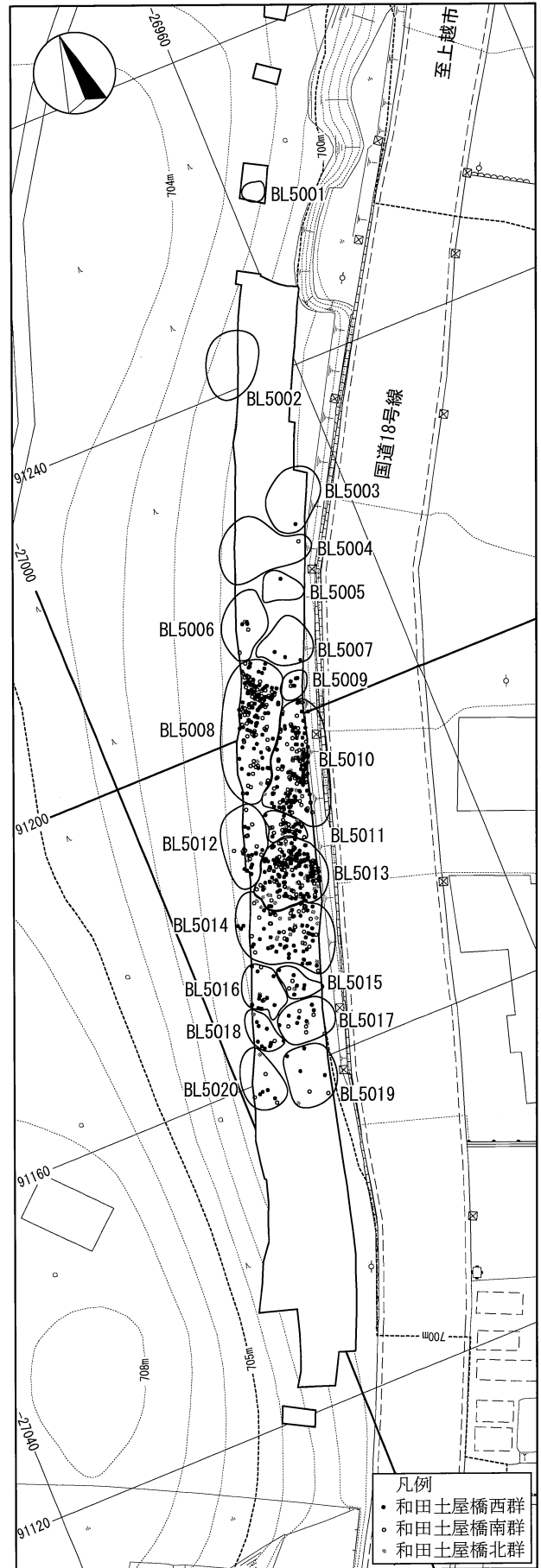
無斑晶質安山岩は飯山市北部から新潟県境を産地とし、野尻湖遺跡群内では一般的な石器石材である。削片石器の石材では野尻湖遺跡群に最も多く持ち込まれているが、本石器群では少ない。第15図に平面分布を示した。分布は黒曜石とほぼ重なっており、無斑晶質安山岩の多い場所はそれ以上に黒曜石が多い傾向がある。第5002と5003号ブロックでは主要石材となっているが、石器総数が少ない。

珪質凝灰岩は、白色で石英の斑晶が特徴的な流紋岩質の珪質凝灰岩が目立つ。同種の石材は野尻湖遺跡群で一般的にみられるが、組成比は低く、主体とならないのが一般的である。そのような中での本石器群の流紋岩質の珪質凝灰岩の出土量が多いといえる。第15図に平面分布を示した。第5006～5008・5010号ブロックに集中しており、他の石材より空間的なまとまりが良いといえよう。器種的には削片、砕片類が多く製品に加工されるものは少ない。

その他に注目される石材として下呂石があげられる。下呂石は岐阜県益田郡下呂町の湯ヶ峰を産地とする。黒曜石とまったく同じ方法で蛍光X線分析による産地推定が可能である。第7表で下呂石とNK群と推定されたものが、下呂石である。本来NK群と推定されるものは明らかに黒曜石であるが、下呂石と元素組成が近く、一部に重なりができることから、今回の推定結果は下呂石の一部がNK群と推定されている。肉眼観察によるNK群の黒曜石とNK群に含まれてしまう下呂石は明らかに異なる。平面分布は第14図中にある。



黒曜石

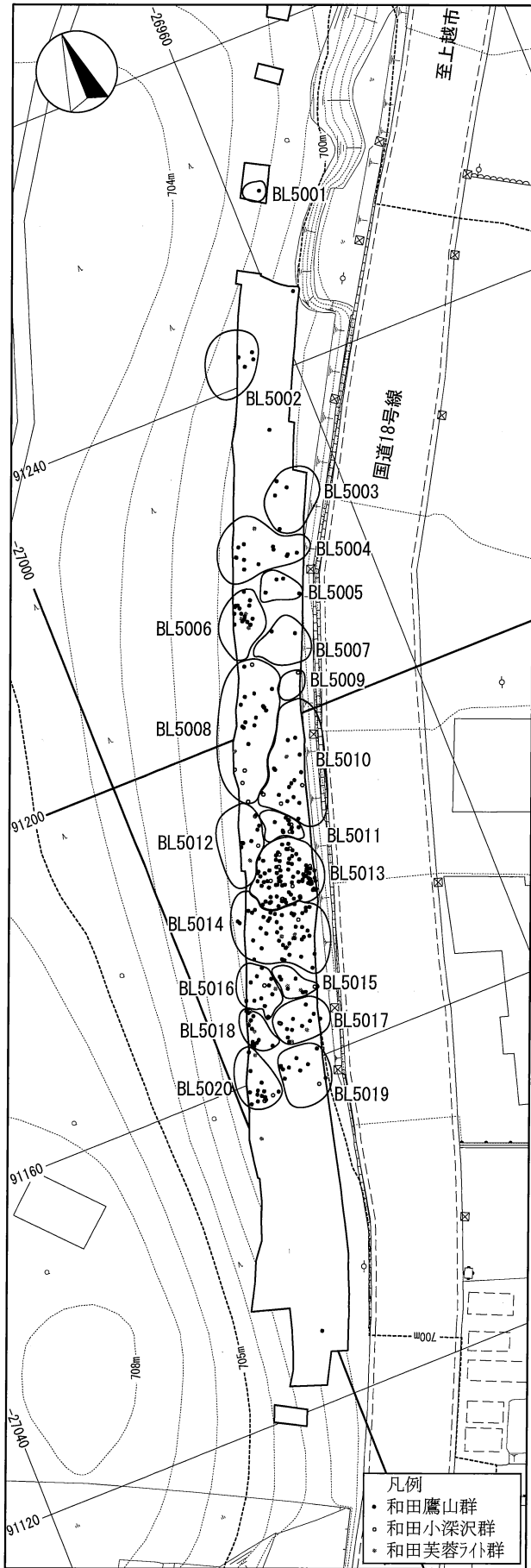


黒曜石和田土屋橋西・南・北群

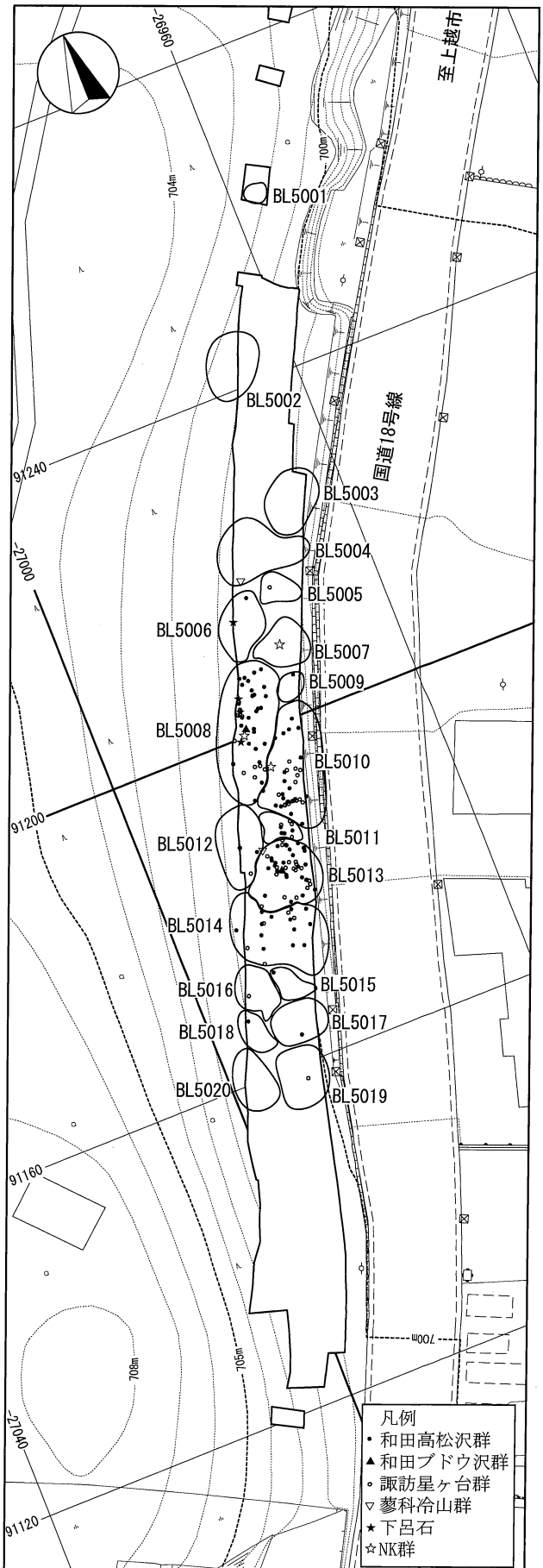
- 凡例
- 和田土屋橋西群
 - 和田土屋橋南群
 - 和田土屋橋北群

0 (1:800) 40m

第13図 貫ノ木遺跡石材別石器分布図1



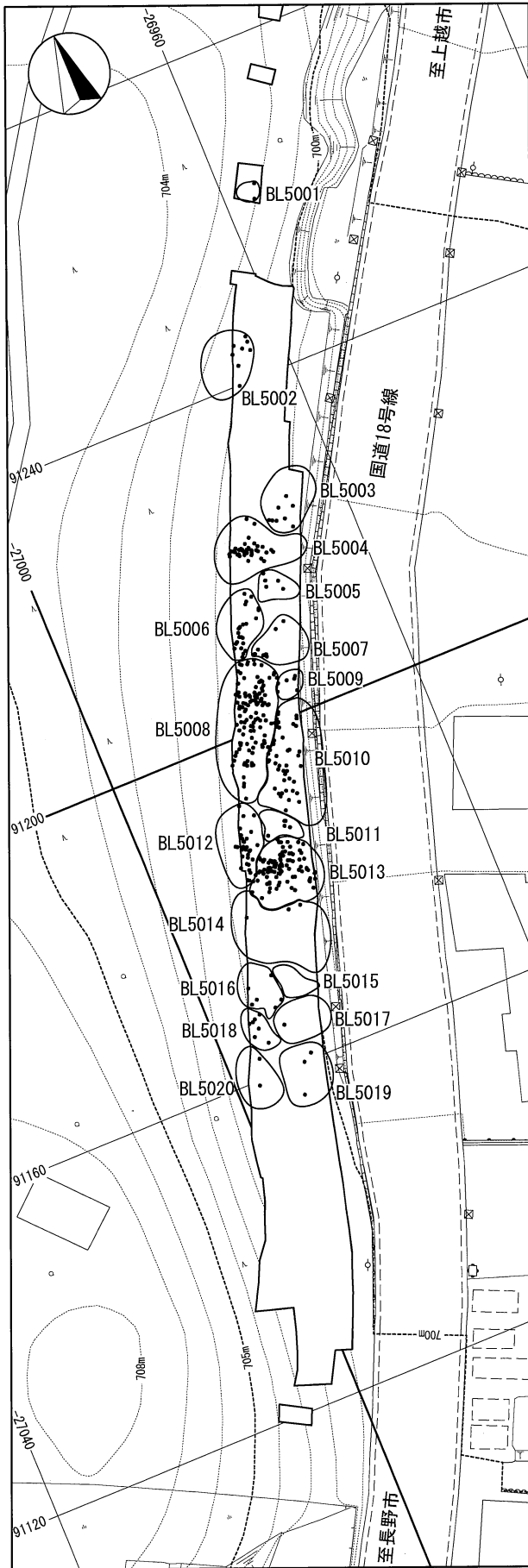
黒曜石和田鷹山・小深沢・芙蓉ライト



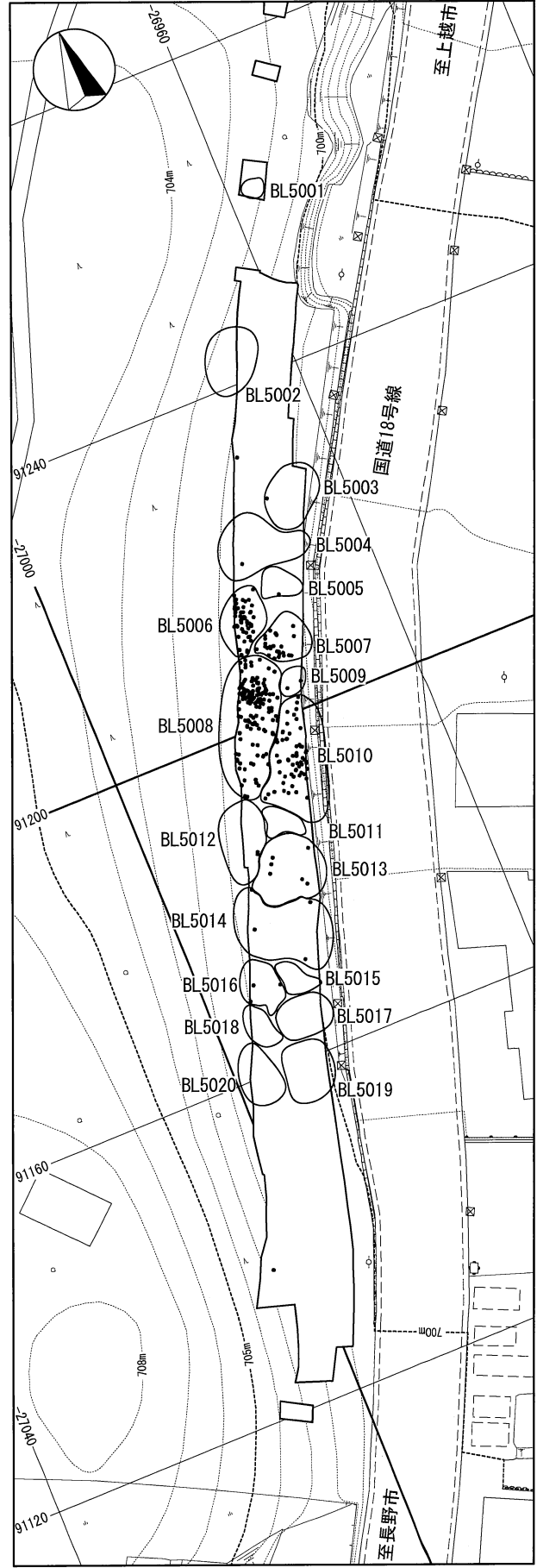
黒曜石和田高松沢・ブドウ沢・蓼科冷山・下呂石他

0 (1:800) 40m

第14図 貫ノ木遺跡石材別石器分布図2



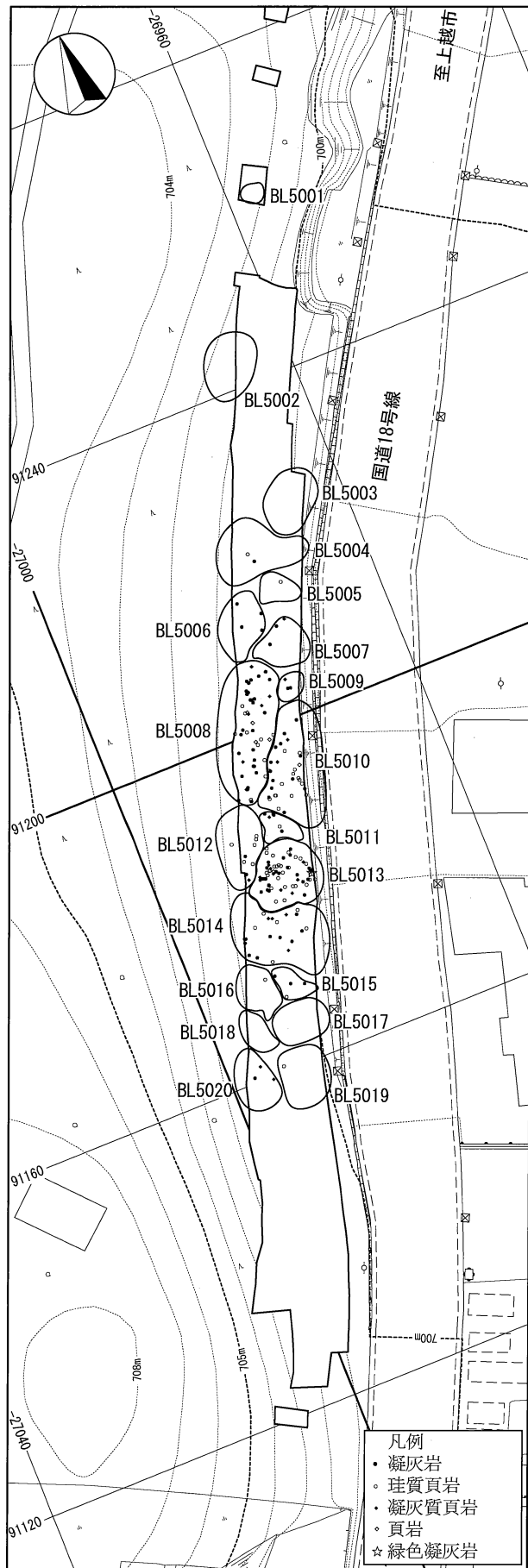
無斑晶質安山岩



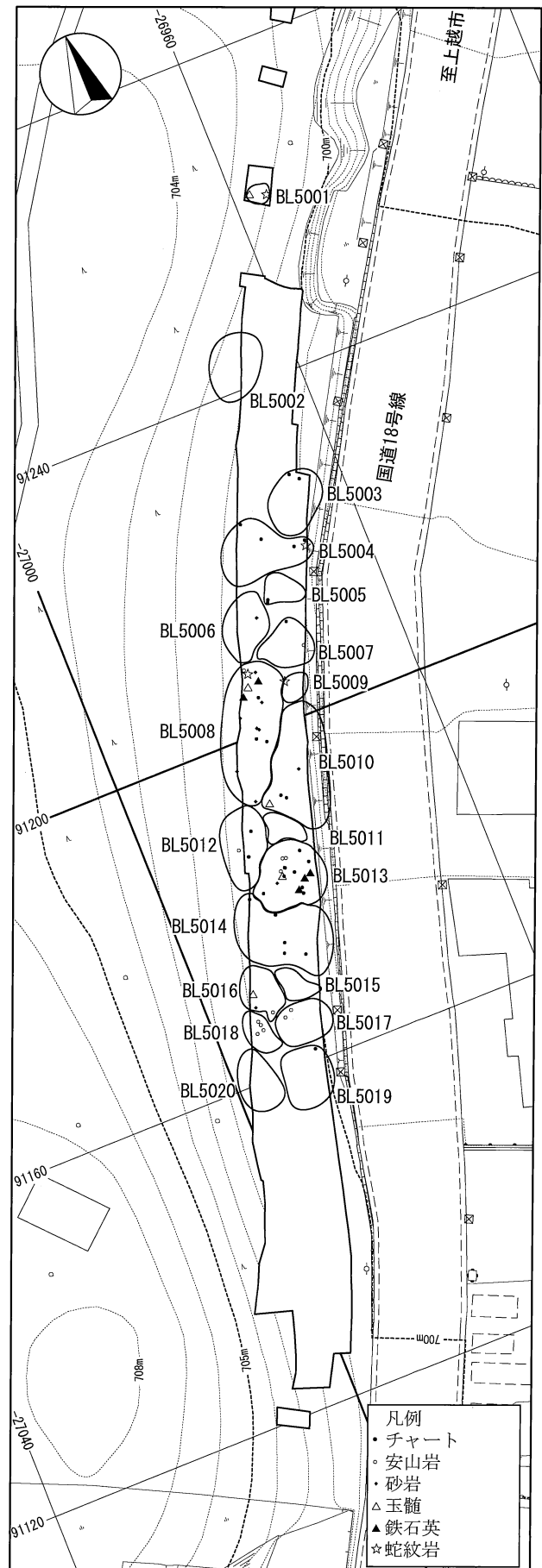
珪質凝灰岩

0 (1:800) 40m

第15図 貫ノ木遺跡石材別石器分布図3



頁岩・凝灰岩系石材



その他石材

0 (1:800) 40m

第16図 貫ノ木遺跡石材別石器分布図4

2 旧石器時代の遺構

旧石器時代の遺構として認定したのはBL5001～5020の20ブロックのみである。なお、BL5021として、データ上の処理を行ったものが存在するが、それらは、縄文時代遺物分布域から出土した石器群である。

(1) ブロック

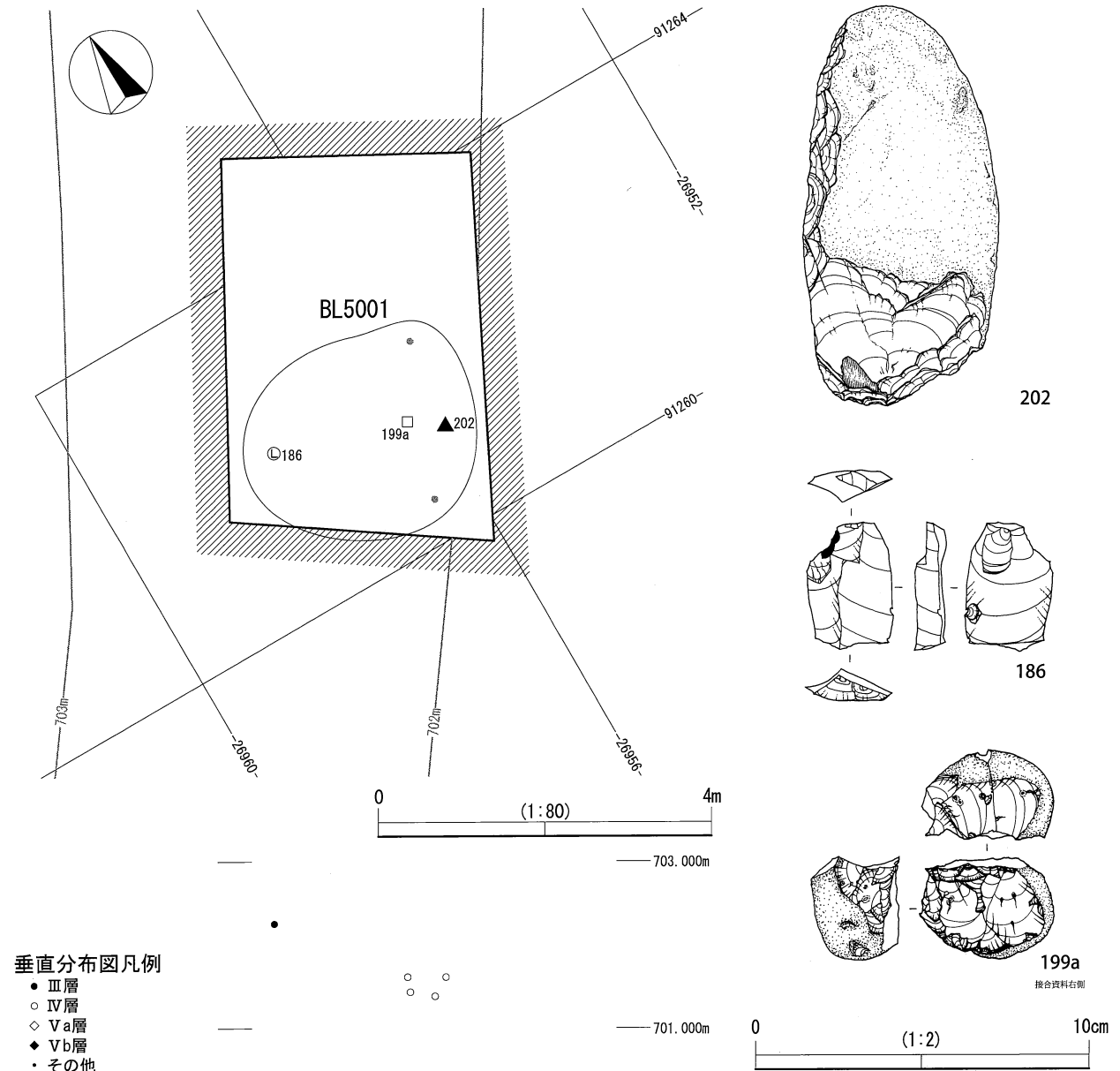
1.BL5001 (第17図)

南東向きのやや急斜面に位置し、X=96216.5,Y=-26957座標付近を中心として直径約2.7mの円形の広がりをもつ。テストピット内から出土した5点の石器の分布域を当ブロックとしたが、調査時にはこれ以上の広がりが予想できなかったため、テストピットの拡幅は行わなかった。

面的調査区から飛び地状に離れているため、隣接するブロックはない。

出土層位はⅢ層とⅣ層で、5点中4点がⅣ層出土である。

器種組成は斧形石器1点、石刃1点、石核1点、剝片2点である。



石材は無斑晶質安山岩が2点、黒曜石、玉髓、蛇紋岩が1点ずつである。

石核1点はBL5010の石核と接合している。

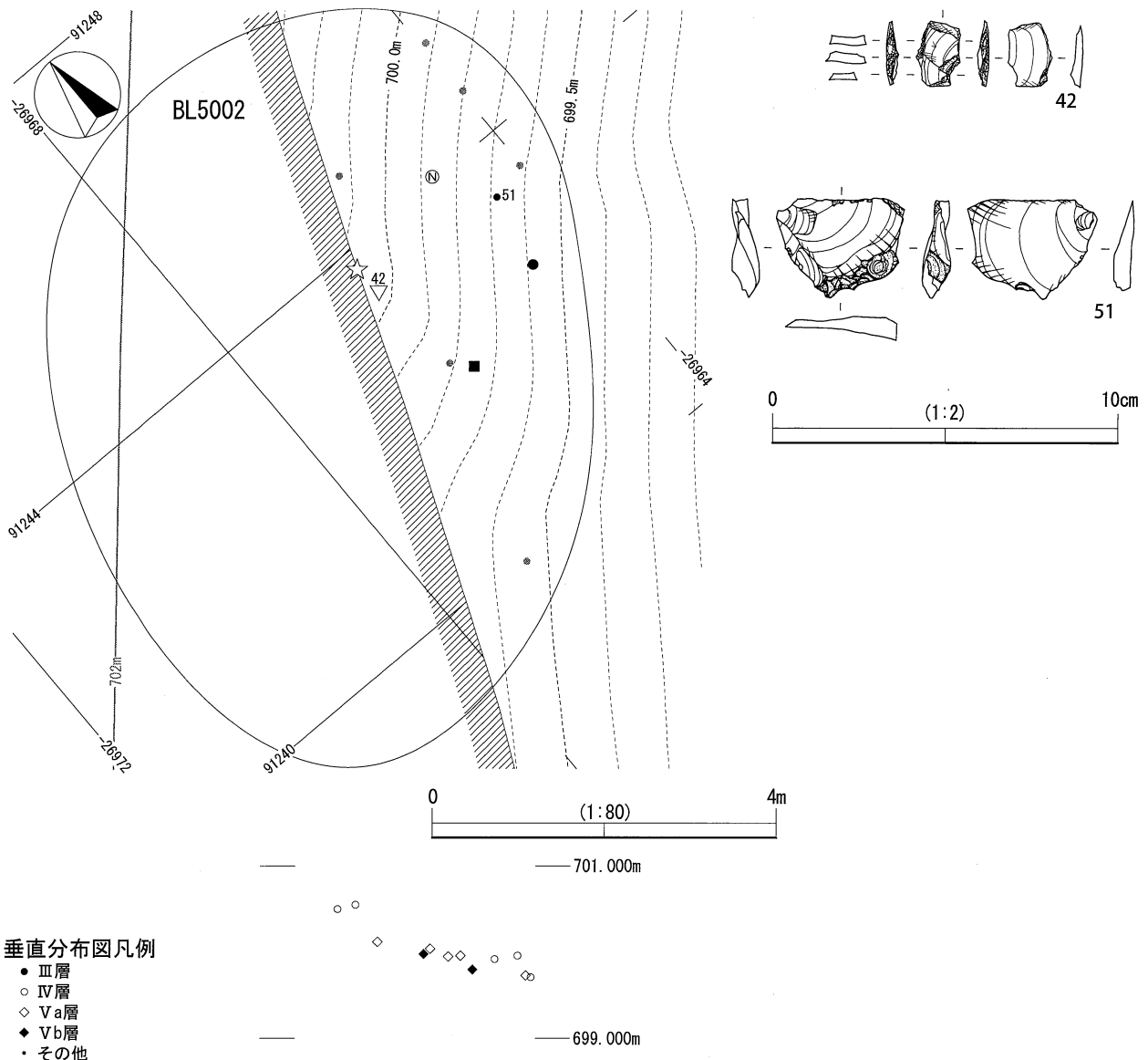
BL5002 (第18図)

調査区北端に近い南東向きやや急斜面に位置し、X=91243,Y=-26967座標付近を中心として長径約6.5m、北東-南西方向に長い楕円形の広がりをもつ。石器の分布は斜面上部北西調査区外に広がること予想される。約11m南にBL5003があるが、離れていて明瞭な遺物空白部がある。

IV~Vb層で遺物が出土しており、IV層とVa層が5点ずつ、Vb層が2点となっている。

石器12点が出土した。組成は台形石器1点、貝殻状刃器1点、削器1点、抉入削器1点、楔形石器1点、微細剝離のある剝片1点、剝片6点となっている。破片がなく石器製作の痕跡は認められない。

石材は無斑晶質安山岩が8点、黒曜石4点である。黒曜石の産地はすべて和田鷹山群が分析されている。ブロック内で削器と抉入削器が接合するが、他のブロックとの接合資料の共有はない。

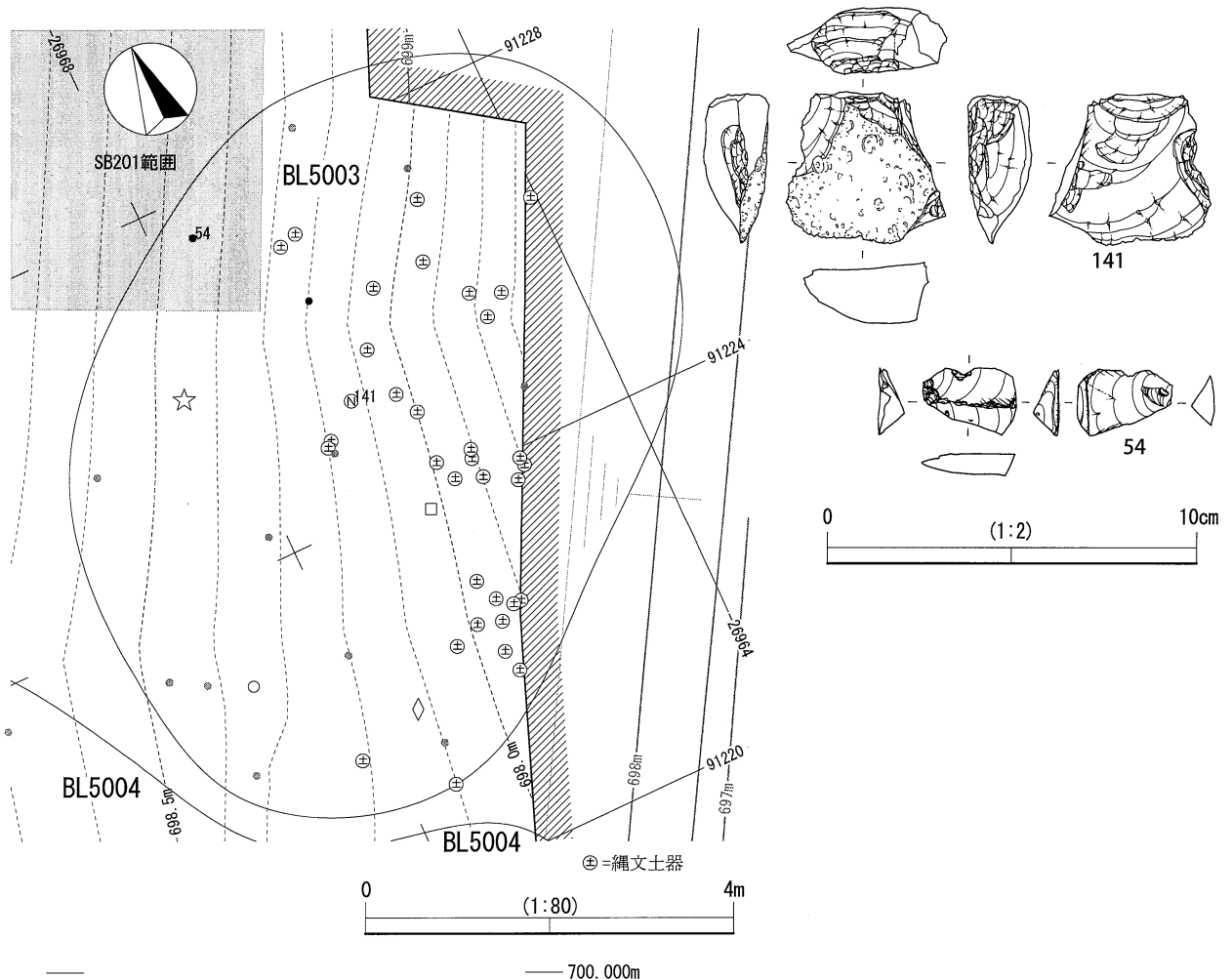


BL5003 (第19図)

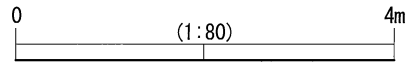
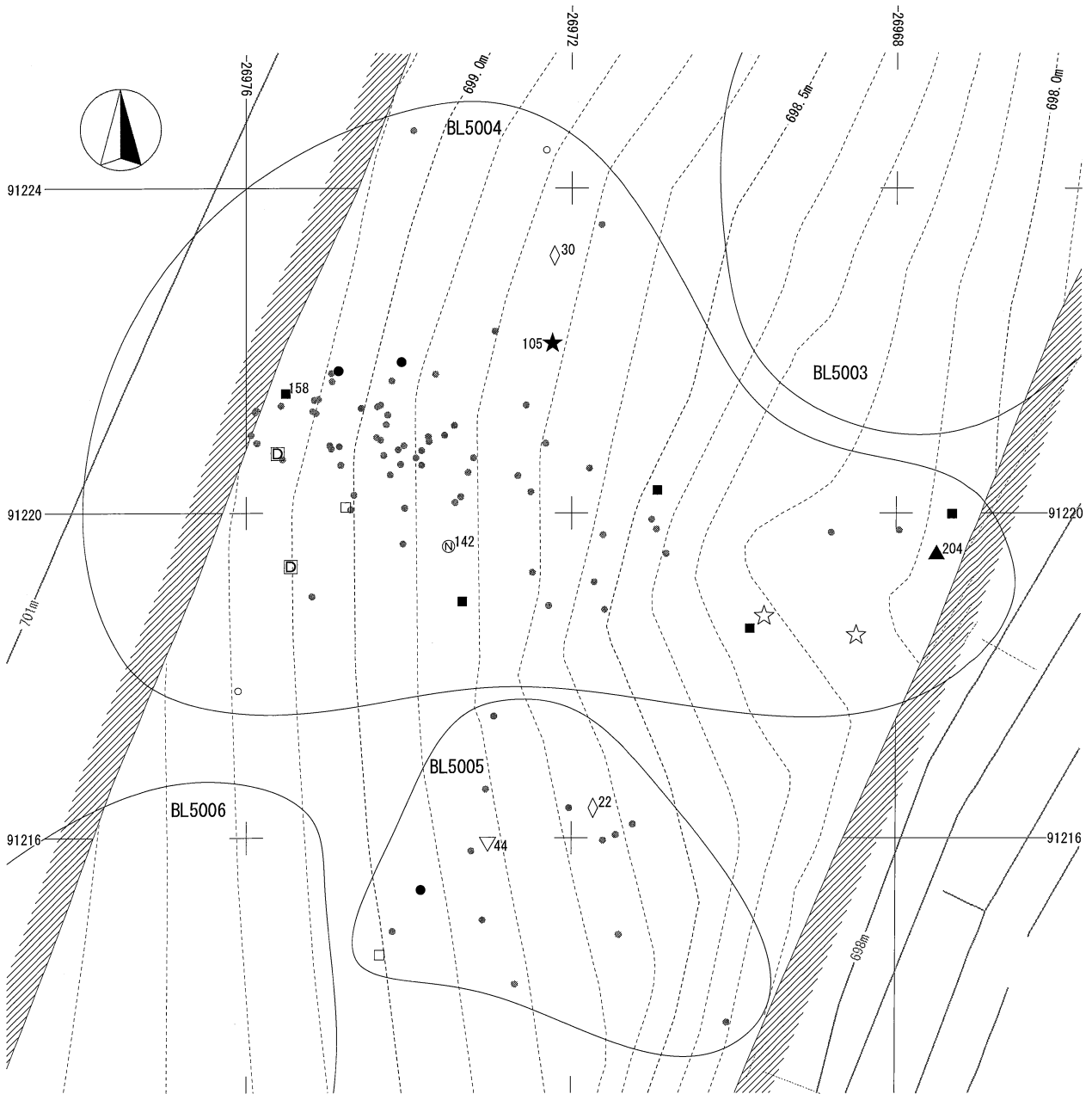
調査区北よりの東南東向きのやや急な斜面に位置し、X=91225, Y=-26967 座標付近を中心として長径約 8.5m、短径約 6m の北東-南西に長い楕円形の広がりをもつ。北東は調査区外に広がることが予想される。南西には BL5004 が存在し、その間にはわずかな遺物空白部が見受けられる。ブロック北端付近は、平安時代の住居跡 SB201 と一部分布が重なっている。しかし、この住居跡の掘り込みは浅く、旧石器時代の包含層への影響は少ないと思われる。

出土層位はⅡ層からⅣ～Ⅵ層の再堆積層で、Ⅳ層とⅤa層が多い。垂直分布図中にアミで示したのが、土器である。土器には表裏縄文、押型文、条痕文系の縄文土器と、平安時代の土師器がみられるが、出土層位が浅く、石器群の一部が縄文時代に属す可能性はあるものの、土器包含層より下層に含まれる石器群の存在も明らかである。

18 点の石器が出土した。組成はナイフ形石器破片 1 点、貝殻状刃器 2 点、削器 1 点、抉入削器 1 点、2 次加工のある剥片 1 点、剥片 9 点、碎片 2 点、石核 1 点となっている。



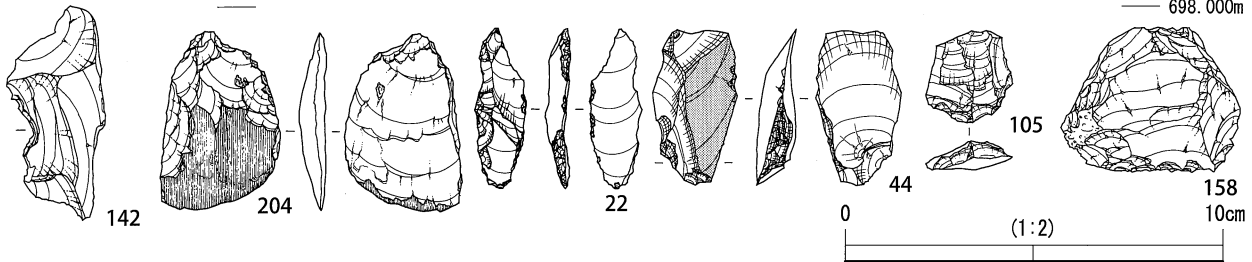
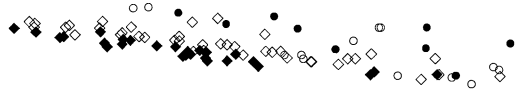
第19図 BL5003 遺物分布図



700.000m

垂直分布図凡例

- III層
- IV層
- ◇ Va層
- ◆ Vb層
- ・ その他



第20図 BL5004・BL5005 遺物分布図

石材は無斑晶質安山岩、黒曜石、チャート、珪質頁岩がみられ、無斑晶質安山岩が最も多い。

接合資料はない。

BL5004(第20図)

調査区北よりの東へ下るごく浅い谷状地形の中とその周囲に位置し、X=91220,Y=-26973 座標付近を中心として長径約 8.5m、短径約 7.5m の東-西に長くてくびれた楕円形の広がりをもつ。

東西両側は調査区境に接しており、ぎりぎりまで遺物が出土することから、調査区外まで分布域が広がることが予想される。北に BL5003、南に BL5005 が存在するが、両ブロックとの間にはわずかな遺物空白部が認められる。

II層からIV～VI層の再堆積層から出土しており、V a層が最も多い。

石器 82 点が出土した。組成はナイフ形石器 1 点、搔器 1 点、削器 2 点、挟入削器 1 点、鋸歯縁状削器 2 点、楔形石器 5 点、2 次加工のある剥片、微細剥離のある剥片 2 点、剥片 31 点、碎片 33 点、石核 1 点、斧形石器 1 点となっている。

石材は無斑晶質安山岩が主体となり、黒曜石も多い。黒曜石の産地は和田鷹山群が主体となっている。

BL5008 と 1 点の接合資料を共有している。

BL5005 (第20図)

調査区北よりの東へ下る斜面に位置し、X=91215.5,Y=-26972 座標を中心として長径約 5m、短径約 4m の北西-南東方向に長い楕円形の広がりをもつ。

南東に調査区境があるものの、遺物の分布は調査区内でほぼ収束している。北に BL5004、斜面上部の西に BL5006 が存在するが、両ブロック間にはわずかな遺物空白部が認められる。

II層からV a層で遺物が出土しており、IV層が最も多い。

石器 16 点が出土した。組成はナイフ形石器 1 点、台形石器 1 点、微細剥離のある剥片 1 点、剥片 10 点、碎片 2 点、石核 1 点となっている。

石材は無斑晶質安山岩、黒曜石、チャートがみられ、黒曜石が主体となり、無斑晶質安山岩も多い。

BL5006 と 2 点の接合資料を共有している。

BL5006(第21図)

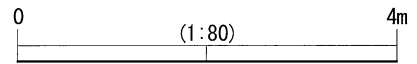
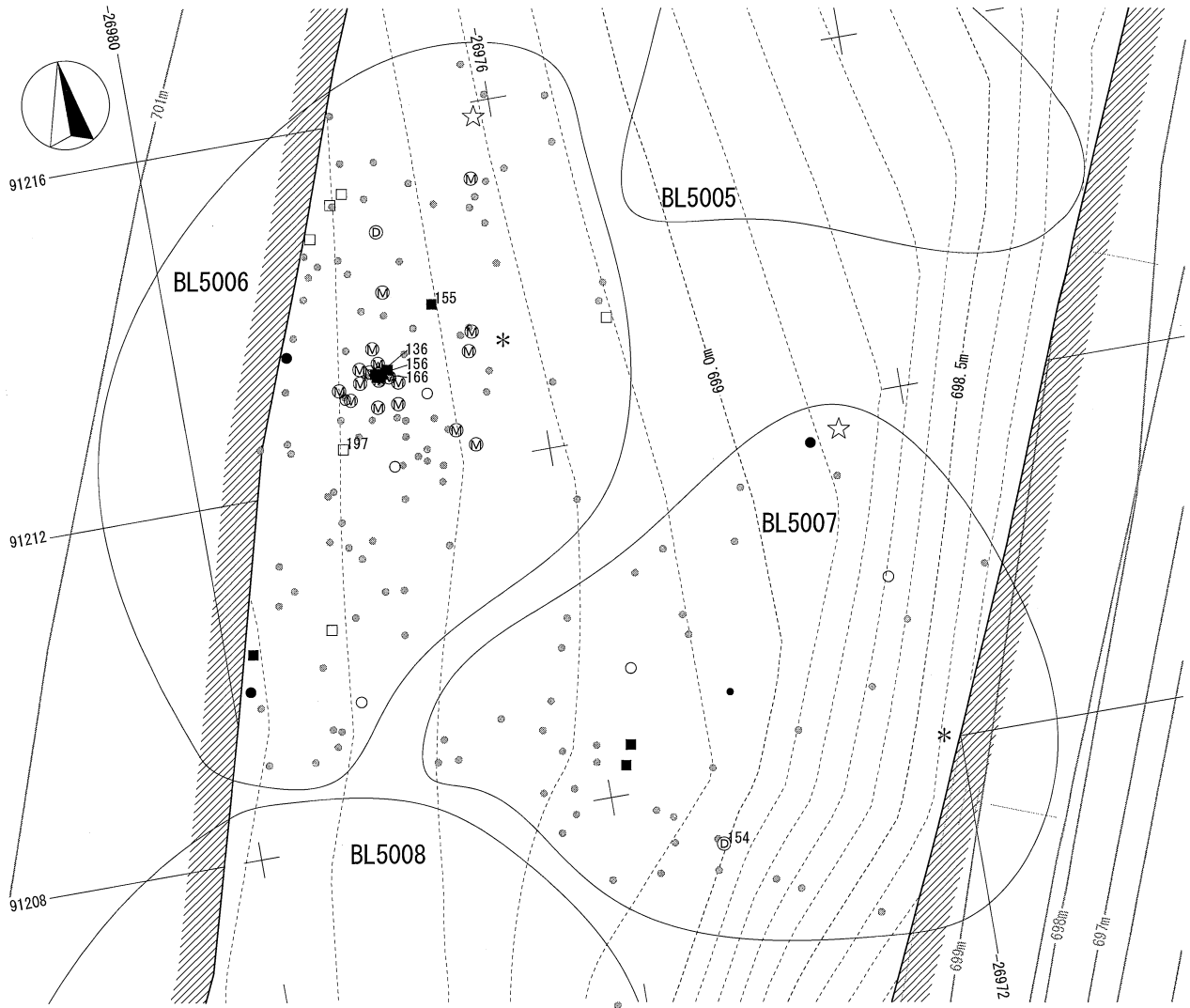
調査区中央からやや北よりの東南東に張り出すテラス状の傾斜地に位置している。X=91213,Y=-26978 座標を中心として長径約 8.5m、短径約 4m の楕円形の広がりをもつ。

斜面上部の北北西に調査区境があり、際まで高い密度で遺物が分布するため、遺物分布域が調査区外に大きく広がることが予想される。北の BL5004、東の BL5005 との間にはわずかな遺物空白部が認められるが、南東の BL5007、南の BL5008 との間の遺物分布は連続的で、明瞭な境目をもたない。

出土層位はII層からV c層で、V a層が最も多いが、II層、III層、IV層、V b層も多く、上下に広がる。

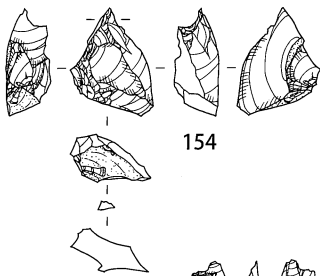
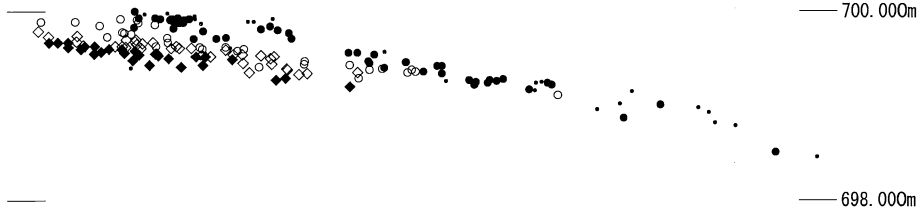
石器 149 点が出土し、組成は削器 2 点、揉錐器 1 点、楔形石器 9 点、2 次加工のある剥片 4 点、微細剥離のある剥片 2 点、剥片 85 点、碎片 11 点、石核 6 点、原石 28 点、敲石 1 点となっている。

注目されるのは原石 28 点である(添付 CD の ¥ 貫ノ木遺跡 ¥ 遺物写真 ¥ 非報告石器 ¥ 040BL5006 原石 28 点表・同 041BL5006 原石 28 点裏に画像掲載)。いわゆる "ズリ" と呼ばれている長さ 3～4cm 前後の小形で板状の原石である。この原石を石核としても、得られる剥片は原石以下の大きさしかないため、これらは石核として利用するために持ち込まれたものではないと考えられる。この原石が直接素材となる削器(報告番号 136)、楔形石器(報告番号 155・156・166)が存在することから、これらの素材として持ち込まれたのであろうか。出土層位はIV層とV a層の深いものがわずかにあるものの、II層からIII層が主体となっているため、ナイフ形石器石器群より新しい可能性が考えられる。ただし、垂直分布を

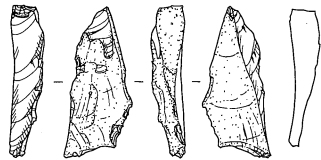


垂直分布図凡例

- III層
- IV層
- ◇ Va層
- ◆ Vb層
- ・ その他



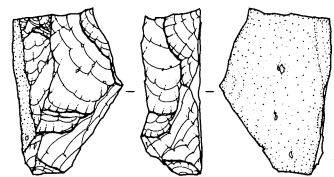
154



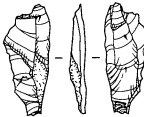
155



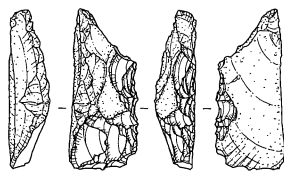
156



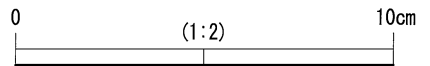
197



166



136



第21図 BL5006・BL5007 遺物分布図

みるかぎり、IV層からV層に生活面をもつ石器群が存在することは確実で、ブロックすべての遺物が新しい時期とはいえない。

石材は珪質凝灰岩が最も多く、黒曜石と無斑晶質安山岩も多用される。

BL5005 と 2 点の接合資料を共有している。

BL5007 (第 21 図)

調査区中央やや北よりの東南東に張り出すテラス状の地形先端から斜面にかかる傾斜地に位置している。X=91208.5, Y=-26974 座標付近を中心に直径約 6m でほぼ円形の広がりをもつ。

斜面下部にあたる東南東には調査区境があるが、付近の遺物密度は低く遺物分布域が調査区外に大きく広がることはない。北西の BL5006、南西の BL5008 との遺物分布は連続的である。南の BL5009 との間には遺物空白部が認められる。

出土層位はⅡ層からⅣ～Ⅵ層の再堆積層で、Ⅲ層が最も多い。傾斜が急な斜面に位置しているため、2 次的に動いている可能性が考えられる。

石器 46 点出土した。組成は貝殻状刃器 1 点、削器 1 点、揉錐器 1 点、楔形石器 2 点、2 次加工のある剥片 2 点、微細剥離のある剥片 1 点、剥片 30 点、碎片 7 点、敲石 1 点となっている。

石材は黒曜石、無斑晶質安山岩、珪質凝灰岩等がみられ珪質凝灰岩が主体となっている。

BL5008 と 1 点の接合資料を共有している。

出土層位および石材組成から、BL5006 の一部にみられるように、ナイフ形石器石器群より新しい一群が含まれている可能性が考えられよう。

BL5008 (第 22・23 図)

調査区ほぼ中央の東南東に張り出すテラス状の地形に位置し、X=91201, Y=-26982 座標付近を中心に、長径約 17.5m、短径約 5.5m の半月形の広がりをもつ。

斜面上部の北西側は調査区境となっているが、ブロック内全体にわたって、調査区境まで高い密度で遺物が出土しており、調査区外に大きく分布域が広がることが予想される。

全体的に遺物密度が高く、特に集中する部分が数ヶ所みられることから、複数のまとまりが重なっていることが予想されるが、内部を明瞭に区画するのは難しい。

北の BL5006、北東の BL5007、東の BL5009、南東の BL5010 との遺物分布域とは連なっており、明瞭に区分できない。

出土層位はⅡ層からⅣ～Ⅵ層の再堆積層で、Ⅳ層から最も多くの遺物が出土している。

石器 660 点が出土した。組成はナイフ形石器 3 点、台形石器 2 点、貝殻状刃器 7 点、彫器 4 点、搔器 15 点、削器 11 点、鋸歯縁状削器 4 点、揉錐器 1 点、楔形石器 9 点、石刃 12 点、2 次加工のある剥片 14 点、微細剥離のある剥片 17 点、剥片 377 点、碎片 150 点、石核 24 点、原石 1 点、斧形石器 1 点、敲石 6 点、凹石 2 点となっている。剥片碎片が多いため、石器製作を行った可能性がある。

石材は黒曜石、無斑晶質安山岩、珪質凝灰岩等がみられ、黒曜石が主体となっている。

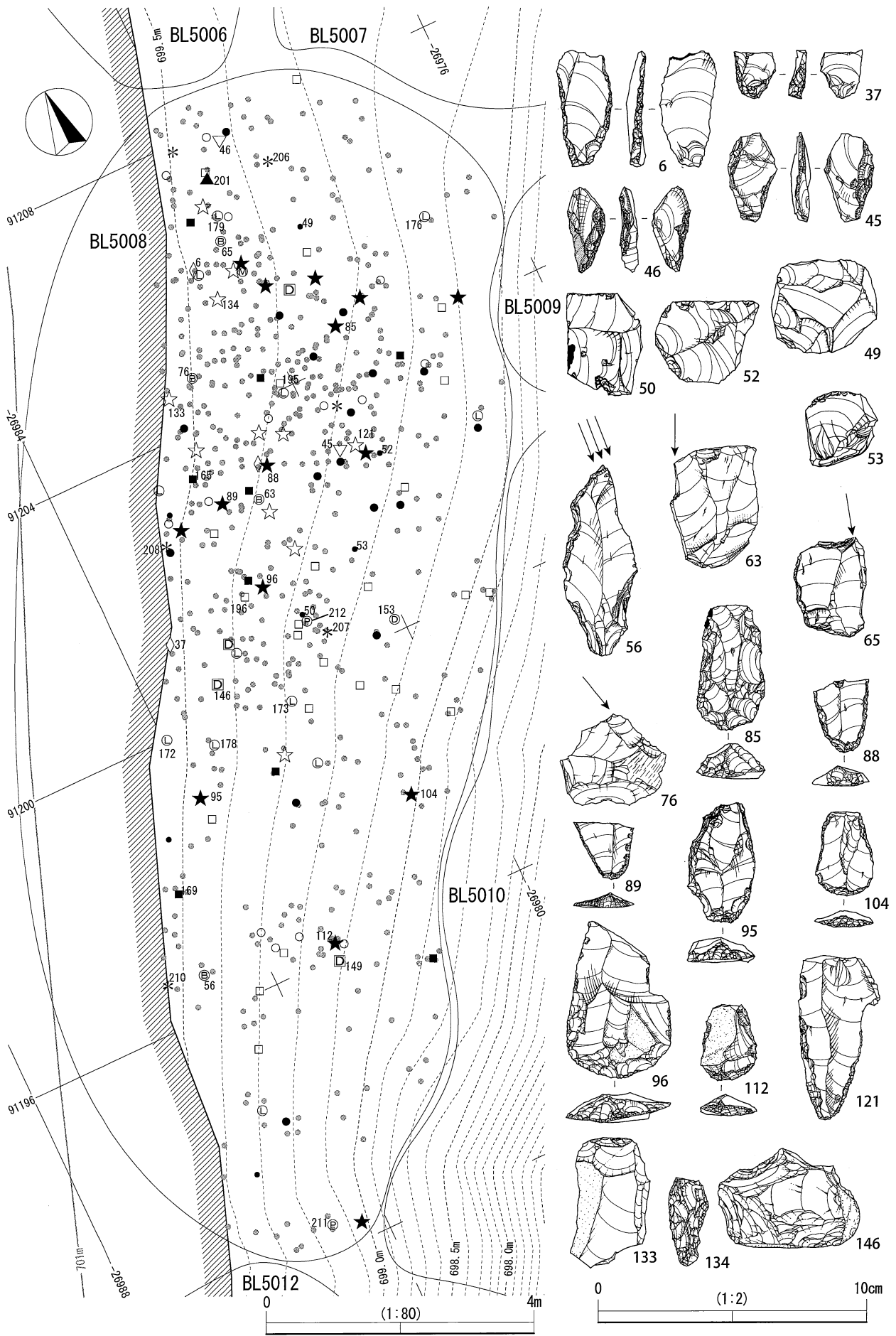
BL5010 と 4 点、BL5004・5007・50016 とそれぞれ 1 点ずつの接合資料を共有している。

石器数が多く、密度も高いことからテラス状地形にあるブロックの中では中核的存在となっている。

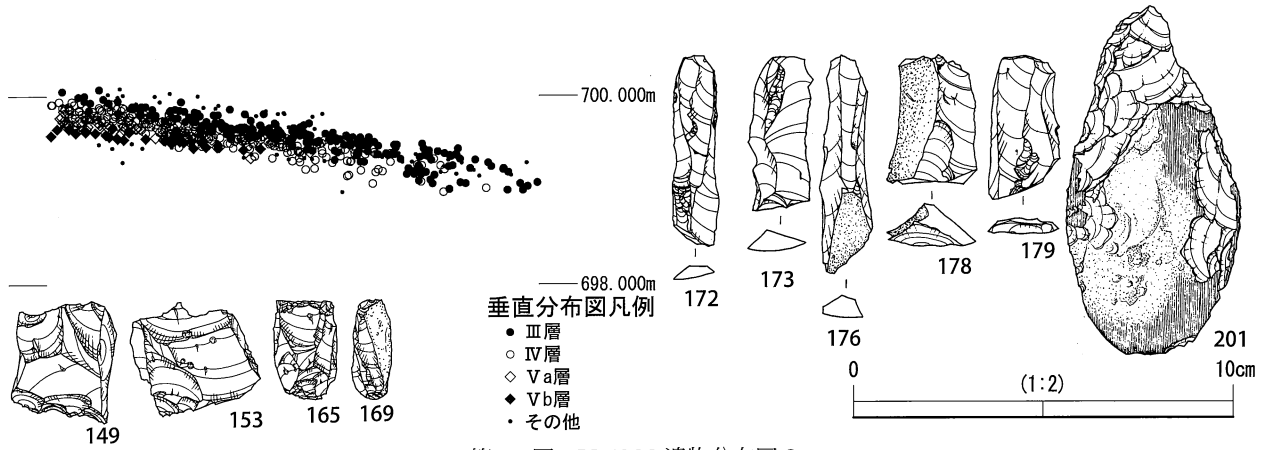
BL5009(第 24 図)

調査区ほぼ中央の東南東に張り出すテラス状の地形から下る急な斜面に位置している。X=91203.5, Y=-26975 座標付近を中心に直径約 3.5m の円形の広がりをもつ。

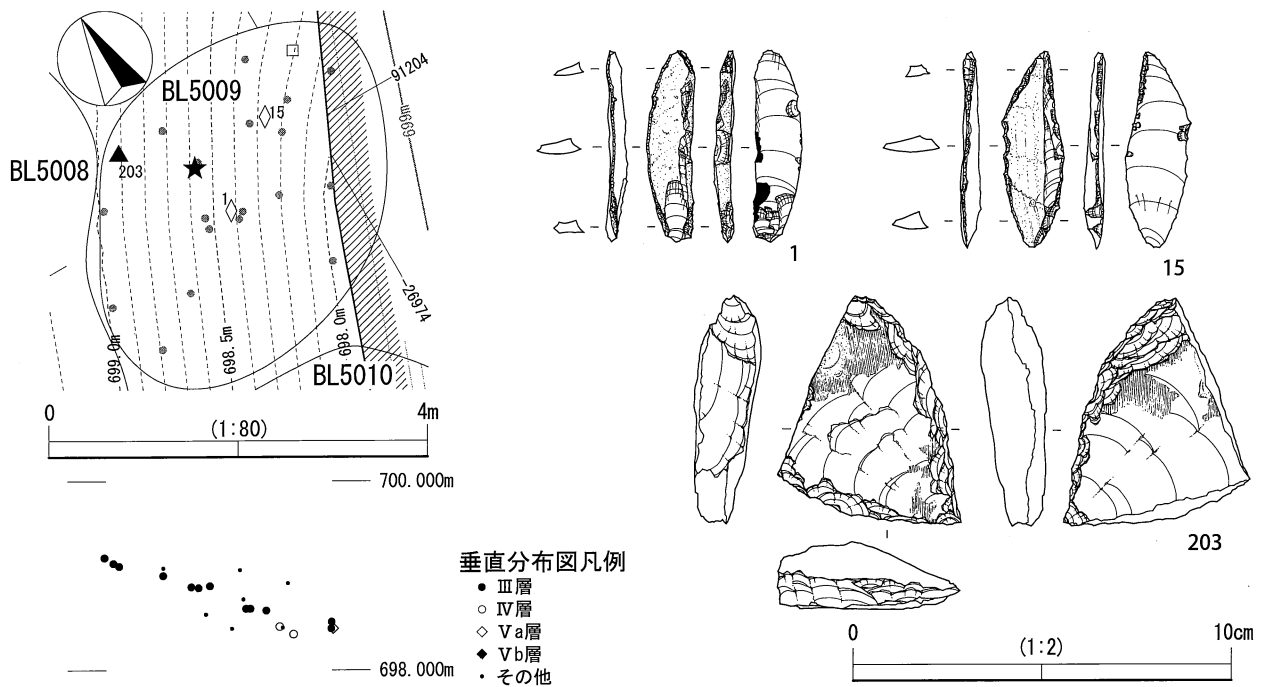
遺物点数が少なく、立地の状況を考慮すると BL5008 から崩れ落ちてきた遺物群の可能性が高い。そのためか BL5008 との境界は不明瞭である。BL5010 との間には遺物空白部が存在する。



第22図 BL5008 遺物分布図 1



第23図 BL5008 遺物分布図2



第24図 BL5009 遺物分布図

出土層位はⅡ層からⅣ～Ⅵ層の再堆積層で、Ⅲ層が最も多い。

石器 23 点が出土した。組成はナイフ形石器 2 点、搔器 1 点、剥片 14 点、碎片 4 点、石核 1 点、斧形石器 1 点となっている。

石材は黒曜石、無斑晶質安山岩等がみられ、黒曜石が主体となっている。

接合資料はない。

BL5010 (第25図)

調査区ほぼ中央の南東に張り出すテラス状の地形から南東に下る斜面および裾部に位置する。X=91194, Y=-26978 座標付近を中心として、長径 15m、短径 8m の北北東 - 南南西方向に長い楕円形の広がりをもつ。斜面下部の低地部にあたる南東側は調査区境となっているが、ブロック内全域にわたり調査区境まで高い密度で遺物が分布することから、分布範囲は大きく調査区外に広がる。

BL5008 と遺物分布域が完全に連なっており境界がない。両者の区分はテラス部と斜面部の地形の差で行った。立地状況から考えると BL5010 の遺物は BL5008 の遺物が崩れ落ちてきたものと考えられるが、すべてが崩れ落ちてきたものとするには数が多すぎる。

出土層位はⅡ層からⅣ～Ⅵ層の再堆積層で、Ⅳ～Ⅵ層の再堆積層が最も多い。垂直分布をみると、上下



第25図 BL5010 遺物分布図

の幅が大きく、特定レベルに遺物が集中することがない。

石器 430 点が出土した。組成はナイフ形石器 7 点、台形石器 1 点、貝殻状刃器 1 点、彫器 8 点、削片 1 点、搔器 18 点、削器 17 点、抉入削器 3 点、鋸歯縁状削器 5 点、揉錐器 1 点、楔形石器 8 点、石刃 7 点、2 次加工のある剥片 12 点、微細剥離のある剥片 20 点、剥片 239 点、碎片 71 点、石核 8 点、敲石 2 点、細石核 1 点となっている。細石核が含まれることから、ナイフ形石器石器群より新しい時期の石器の混在が予想されるが微量と思われる。また、この細石核はⅡ層から出土しているが、ナイフ形石器石器群中に、同じような法量をもつ小形石刃石核も存在すること、黒曜石の産地が和田土屋橋南群に推定されていることなどから、細石核ではなく、小形の石刃石核の可能性も考えられる。

石材は黒曜石が主体となり、他に珪質凝灰岩、無斑晶質安山岩等が用いられる。

BL5008 と 4 点、BL5013 と 3 点、BL5001 および BL5012 と 1 点ずつの接合資料を共有している。

BL5011 号ブロック (第 26 図)

調査区ほぼ中央の東南東に下る斜面の裾部に位置し、X=91188,Y=-26982.5 座標付近を中心として、長径約 6m、短径約 3.5m の北西 - 南東に長い楕円形の広がりをもつ。

本ブロックは非常に遺物数が多く密度の高い BL5010 と BL5013 に挟まれた場所に位置しており、実際は BL5010、BL5011、BL5013 の遺物分布域は途切れないため、報告上の便宜的な区分となっている。西の斜面上には BL5012 があり、BL5012 から崩れ落ちてきた遺物の分布である可能性も考えられる。

出土層位はⅡ層からⅣ～Ⅵ層の再堆積層で、Ⅳ～Ⅵ層の再堆積層が最も多い。BL5010 と同様に再堆積層中での上下幅が大きい。

石器 82 点が出土し、組成はナイフ形石器 6 点、削片 1 点、搔器 6 点、削器 2 点、楔形石器 5 点、石刃 3 点、2 次加工のある剥片 1 点、微細剥離のある剥片 6 点、剥片 33 点、碎片 18 点、石核 1 点となっている。

石材は黒曜石が主体を占め、無斑晶質安山岩、凝灰岩等がわずかにみられる。

BL5013 と BL5014 と 1 点ずつの接合資料を共有している。

BL5012 (第 26 図)

調査区のほぼ中央の東南東に下る斜面に位置している。X=91187,Y=-26989 座標付近を中心として、長径約 9.5m、短径約 3.5m の北東 - 南西に長い楕円形の広がりをもつ。

斜面上部の北西には調査区境があり、境に近づくほど遺物密度が高くなるため、ブロックの主体は調査区外に広がると予想される。北東の BL5008 とは途切れるようにみえるが、調査区外で連なることも考えられる。斜面下部に位置する東の BL5011 南東の BL5013 へは本ブロックの遺物が流れ込んでいる可能性がある。

Ⅱ層からⅤb層で遺物が出土しており、Ⅳ層が最も多い。斜面のために堆積環境はあまりよくない。

石器 108 点が出土し、組成はナイフ形石器 2 点、貝殻状刃器 1 点、彫器 1 点、楔形石器 1 点、石刃 3 点、2 次加工のある剥片 3 点、微細剥離のある剥片 8 点、剥片 47 点、碎片 33 点となっている。BL5011 同様に石核をもたず、剥片剥離の痕跡が少ないといえよう。

石材は黒曜石が主体となり、無斑晶質安山岩も多用される。

BL5013 と 2 点、BL5010 と 1 点の接合資料を共有している。

BL5013(第 27 図)

調査区中央からやや南よりの東へ下る斜面裾部に位置する。X=91182.5,Y=-26984 座標付近を中心として、直径約 8.5m の円形の広がりをもつ。

斜面下部の低地部と接する南東側には調査区境があり、境まで遺物密度が高いことから遺物分布域は調査区外に大きく広がる。北の BL5011、南の BL5014 と遺物分布域が連なっており、明瞭な境目がない。

また、斜面上部のBL5012との境も不明瞭で、遺物が流れ込んできている可能性がある。

出土層位はⅡ層からⅣ～Ⅵ層の再堆積層で、Ⅳ～Ⅵ層の再堆積層が最も多い。垂直分布をみると、上下幅が大きいことがわかる。

石器711点が出土した。今回の調査で最も遺物数が多いブロックとなる。器種組成はナイフ形石器13点、ナイフ形石器破片1点、彫器6点、彫器破片1点、削片1点、搔器16点、削器16点、抉入削器2点、鋸歯縁状削器1点、揉錐器1点、楔形石器7点、石刃22点、2次加工のある剥片12点、微細剥離のある剥片32点、剥片361点、碎片210点、石核7点、敲石2点となっている。剥片、碎片数も多く石核がみられることから、剥片剥離を行ったブロックであろう。平面・垂直分布的な位置は2次的に動いているものと思われる。

石材は黒曜石が主体で、無斑晶質安山岩も多用されている。その他に凝灰岩、珪質頁岩等もみられる。

BL5014と4点、BL5010と3点、BL5012とBL5015とは2点、BL5011とBL5016とは1点の接合資料を共有している。

BL5014 (第28図)

調査区中央からやや南よりの東に下る斜面から裾部に位置する。X=911176,Y=-26988 座標付近を中心として、長径約10m、短径約6.5mの西北西-東南東に長い楕円形の広がりをもつ。

北西に斜面上部、南東には斜面下部の低地部と接する調査区境があり、調査区際まで遺物が分布するため、分布域は両側調査区外に広がるものと思われる。

北のBL5013、南のBL5015、南西のBL5016との境に遺物空白部はなく、分布域は連なっている。

出土層位はⅡ層からⅣ～Ⅵ層の再堆積層で、Ⅳ～Ⅵの再堆積層が最も多い。しかし、Ⅲ層他の数も多く2次的な上下移動が考えられる。

石器250点が出土している。組成はナイフ形石器6点、台形石器1点、彫器5点、搔器6点、削器6点、抉入削器1点、楔形石器1点、石刃7点、2次加工のある剥片8点、微細剥離のある剥片14点、剥片135点、碎片59点、石核1点となっている。

石材は黒曜石が主体を占め、他に凝灰岩、珪質頁岩等がみられるが、数は少ない。

BL5013と4点、BL5011・5019・5020と各1点ずつの接合資料を共有している。

BL5015 (第29図)

調査区中央からやや南よりの東に下る斜面から裾部に位置する。X=911169.5,Y=-26988.5 座標付近を中心として、長径約5.5m、短径約3.5mの北西-南東に長い楕円形の広がりをもつ。

斜面下の低地部にあたる東に調査区境があるが、境付近の遺物密度は低く、分布域は調査区内でほぼ収束しているとみられる。

斜面裾部にあたる北のBL5014と南のBL5017、斜面上部にあたる西のBL5016との間に遺物空白部はなく、一連の様相を示している。

出土層位はⅡ層からⅣ～Ⅵ層の再堆積層で、Ⅲ層が最も多いが上下幅が大きい。

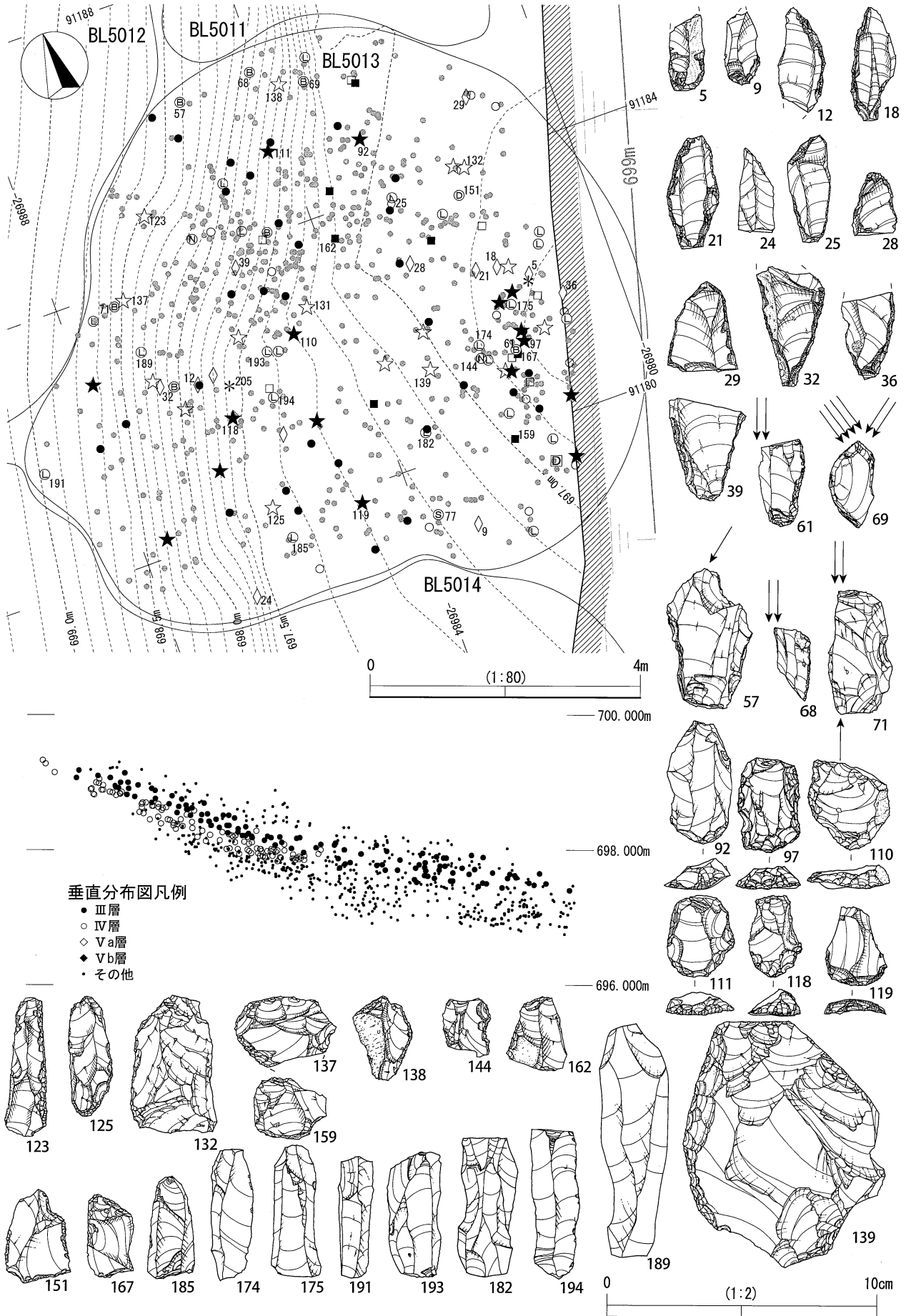
石器31点が出土した。組成は彫器1点、微細剥離のある剥片1点、剥片20点、碎片8点、細石刃1点となっている。

石材は黒曜石が主体で、他に凝灰岩、珪質頁岩がみられる。

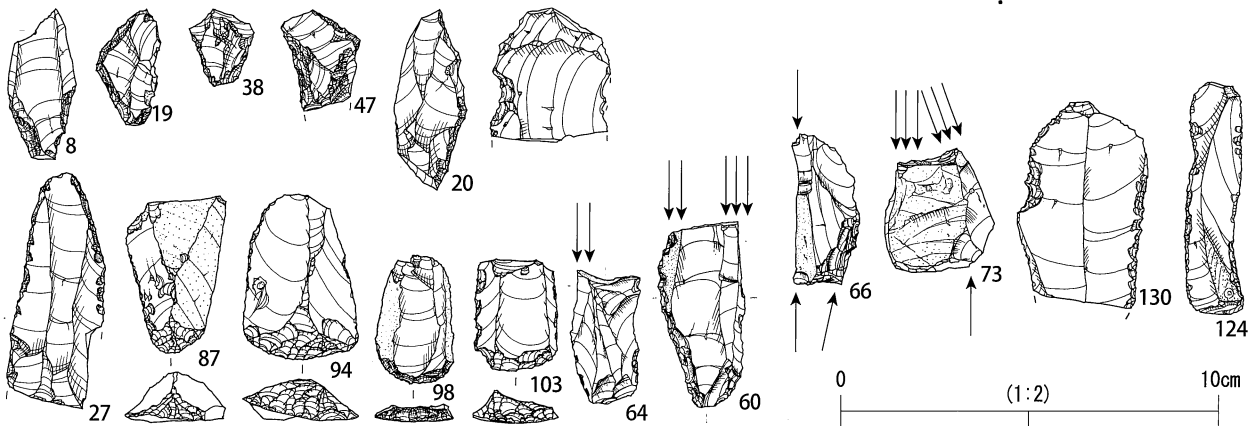
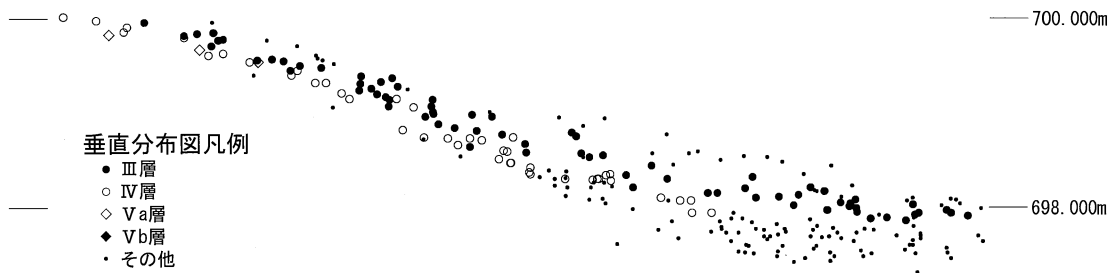
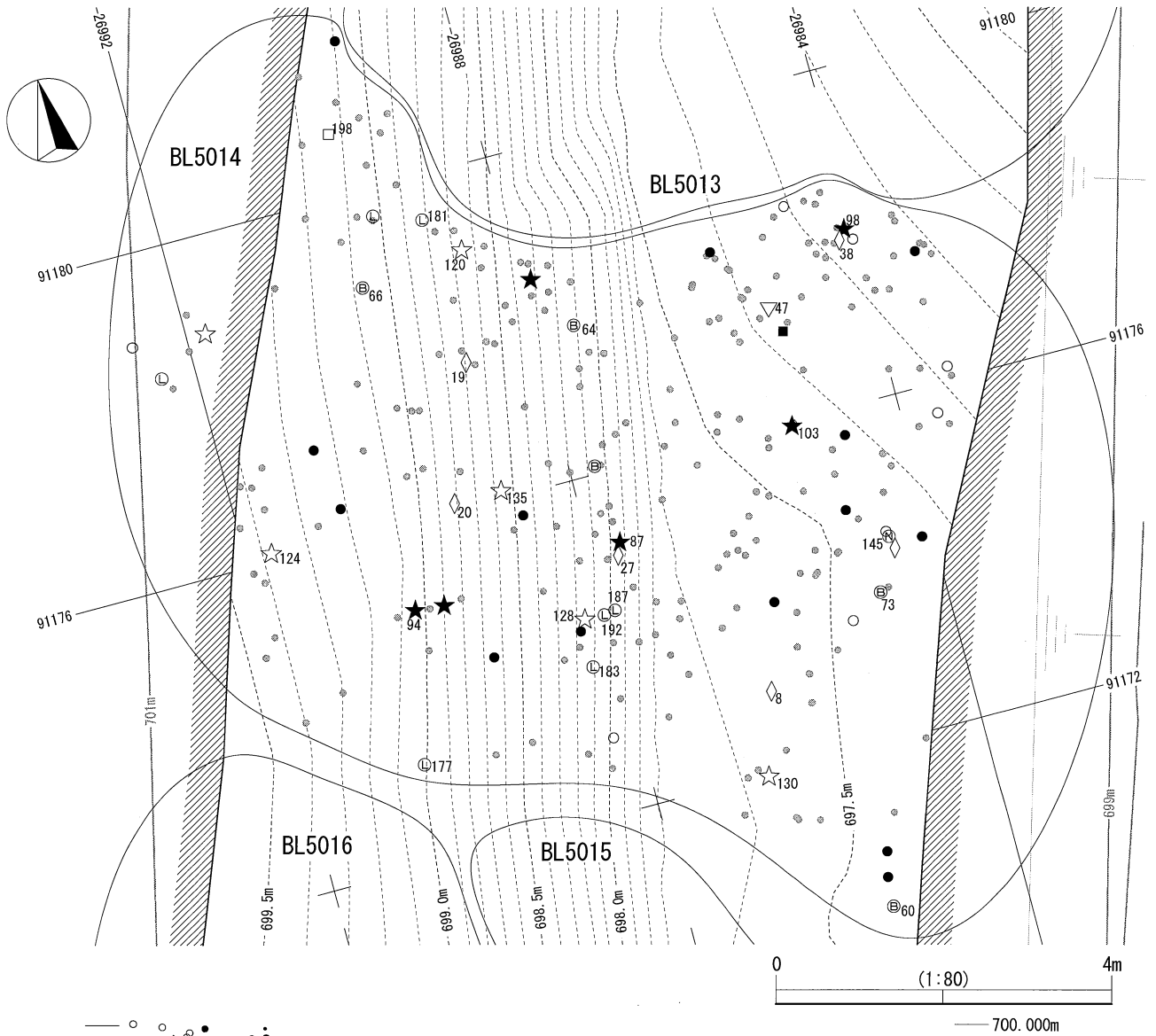
BL5013と2点、BL5016と1点の接合資料を共有している。

BL5016 (第29図)

調査区中央からやや南よりの東へ下る斜面に位置する。ブロック内の等高線の間隔は斜面下部より広く、わずかにテラス状に地形を呈している。X=911170.5,Y=-26992.5 座標付近を中心として直径約5.5mの円



第27図 BL5013遺物分布図



第28図 BL5014 遺物分布図

形の広がりをもつ。

斜面上部の西は調査区境となるが、境際まで遺物がみられるため、遺物分布域は調査区外へと広がる。同一等高線上で地形的に連なる北のBL5014と南のBL5018、および斜面下部のBL5015との間に遺物空白部はなく一連の様相を示している。

出土層位はⅡ層からⅣ～Ⅵ層の再堆積層で、Ⅳ層が最も多いが上下幅が大きい。

石器57点が出土した。組成はナイフ形石器1点、搔器4点、石刃1点、2次加工のある剥片2点、微細剥離のある剥片2点、剥片29点、碎片17点、敲石破片1点となっている。

石材は黒曜石が主体で無斑晶質安山岩、珪質凝灰岩等が用いられている。

BL5008・5013・5015と1点ずつの接合資料を共有している。

BL5017 (第30図)

調査区中央から南よりの東へ下る斜面から裾部に位置する。X=91165,Y=-26989座標付近を中心として長径約5.5m、短径4.5mの東-西に長い楕円形の広がりをもつ。

斜面下部の低地部がある東側に調査区境があるが、多くはないが調査区境まで遺物が分布することから、遺物分布域はわずかに調査区外にまでおよんでいると思われる。

斜面から裾部で地形的に連なる北のBL5015と南のBL5019、および斜面上部のBL5018との間に遺物空白部はなく一連の様相を示している。

出土層位はⅡ層からⅣ～Ⅵ層の再堆積層で、Ⅲ層が最も多いが上下にばらつく。

石器40点が出土し、組成はナイフ形石器3点、台形石器1点、彫器1点、搔器1点、石刃2点、2次加工のある剥片1点、微細剥離のある剥片3点、剥片19点、碎片7点、槍先形尖頭器1点となっている。槍先形尖頭器は細石器関連の両面加工石器の可能性もあり、型式学的にナイフ形石器等と時期は異なる。

石材は黒曜石が主体となっている。

接合資料はない。

BL5018 (第30図)

調査区中央から南よりの東へ下る斜面に位置する。ブロック内の等高線の間隔は斜面下部より広く、弱いテラス状の地形を呈している。X=91166,Y=-26995座標付近を中心として長径約5.5m、短径約3mの北-南に長い楕円形の広がりをもつ。

斜面上部の西には調査区境となるが、境際まで遺物がみられるため、遺物分布域は調査区外へと広がる。同一等高線上で地形的に連なる北のBL5016と南のBL5020、および斜面下部のBL5017との間に遺物空白部はなく一連の様相を示している。

出土層位はⅡ層からⅤb層で、Ⅴa層が最も多い。

石器51点が出土し、組成はナイフ形石器4点、台形石器1点、彫器1点、石刃1点、微細剥離のある剥片1点、剥片29点、碎片13点となっている。

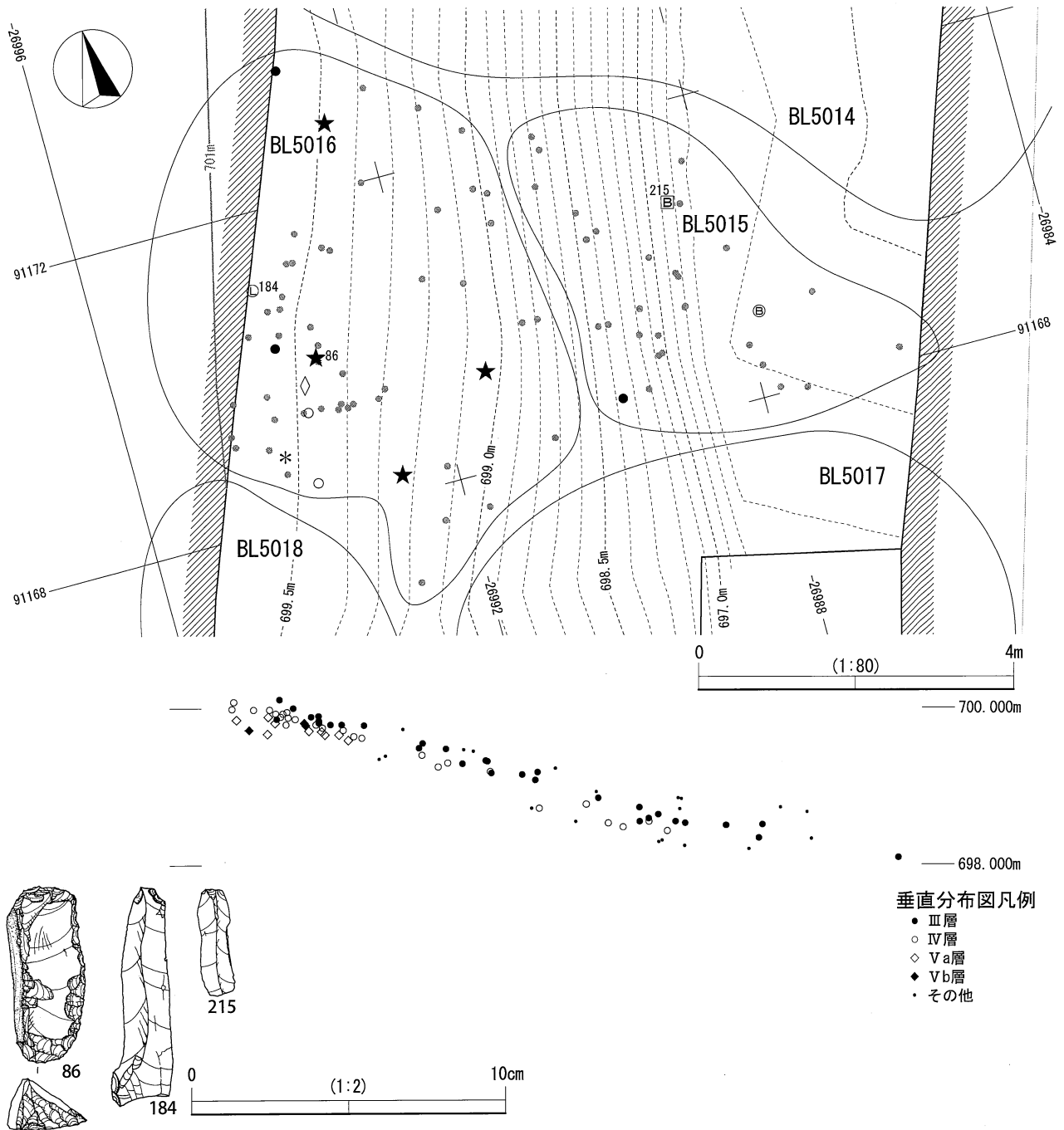
石材は黒曜石が主体で、他に無斑晶質安山岩等がみられる。

BL5020と1点の接合資料を共有している。

19.BL5019 (第31図)

調査区中央から南よりの東へ下る斜面から裾部に位置する。X=91158.5,Y=-26991座標付近を中心として長径約7m、短径5.5mの北-南に長い楕円形の広がりをもつ。

斜面下部の低地部にあたる東側は調査区境となるが、密度は低いものの調査区境まで遺物が分布することから、遺物分布域はわずかに調査区外にまでおよんでいると思われる。



斜面から裾部で地形的に連なる北の BL5017、および斜面上部の BL5020 との間に遺物空白部はなく一連の様相を示している。南側の遺物の分布は途切れる。

出土層位はⅡ層からⅣ～Ⅵ層の再堆積層で、Ⅲ層が最も多いが2次的な上下移動があると思われる。

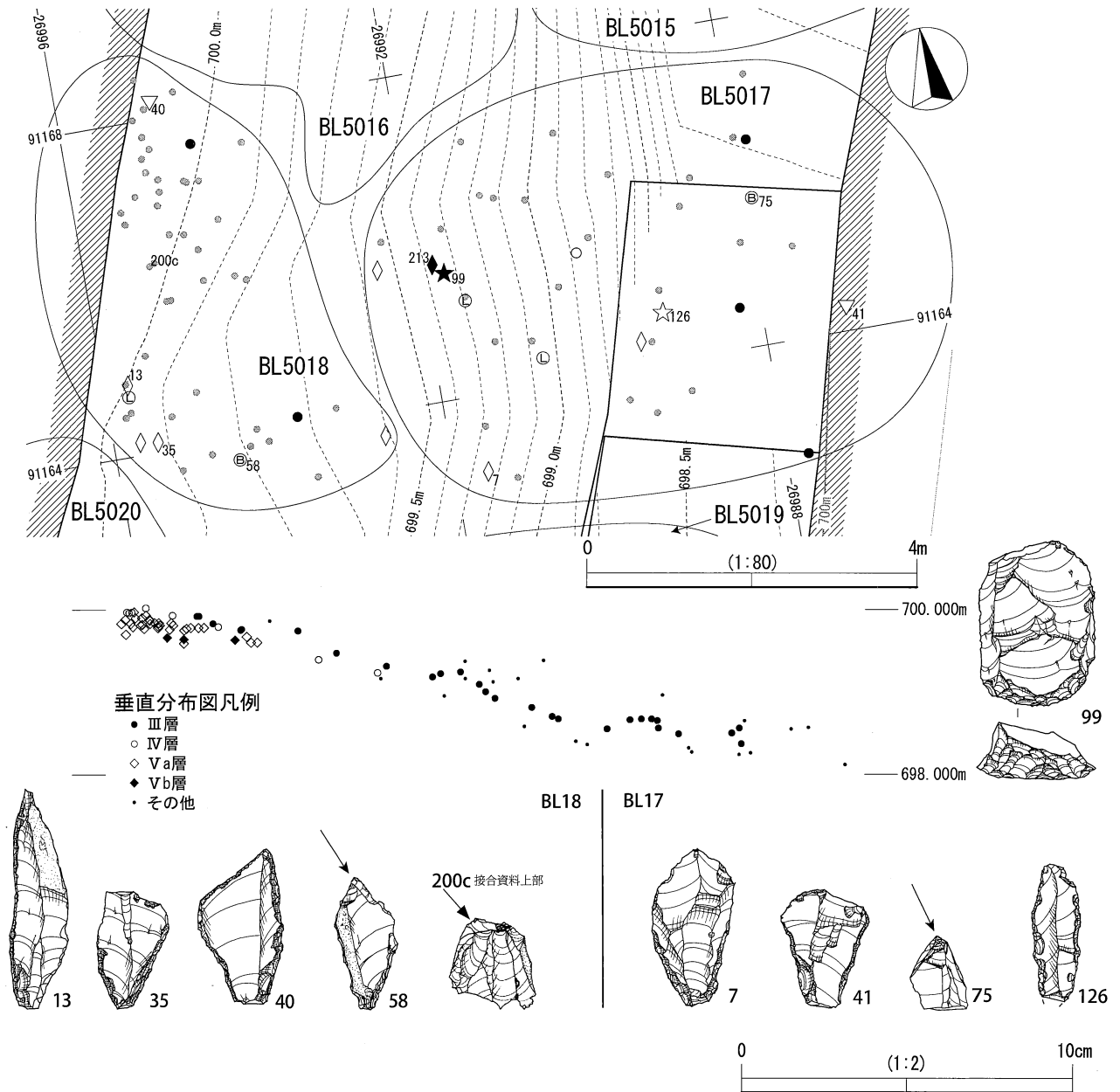
石器 26 点が出土し、組成はナイフ形石器 2 点、彫器 1 点、搔器 2 点、鋸歯縁状削器 1 点、楔形石器 1 点、石刃 1 点、2 次加工のある剥片 1 点、微細剥離のある剥片 3 点、剥片 13 点、碎片 1 点となっている。

石材は黒曜石が主体となっている。

BL5013 および BL5014 と 1 点ずつの接合資料を共有している。

BL5020 (第31図)

調査区中央から南よりの東へ下る斜面に位置する。ブロック内の等高線の間隔は斜面下部より広く、わずかにテラス状に地形を呈している。X=91166,Y=-26995 座標付近を中心として長径約 5.5m、短径約



第30図 BL5017・5018 遺物分布図

3mの北-南に長い楕円形の広がりをもつ。

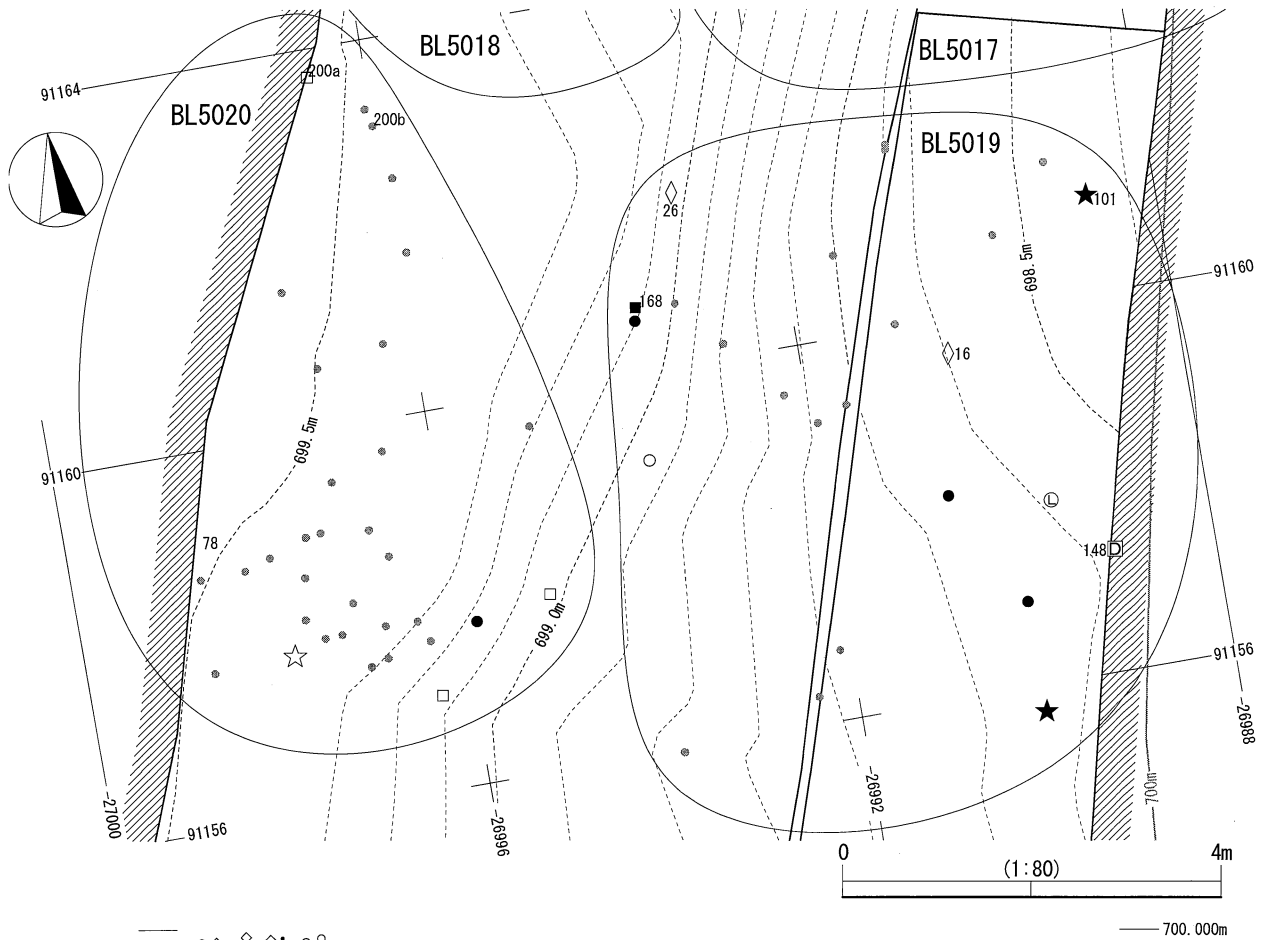
斜面上部の西には調査区境があるが、際まで遺物がみられるため、遺物分布域は調査区外へと広がる。同一等高線上で地形的に連なる北のBL5018、および斜面下部のBL5019との間に遺物空白部はなく一連の様相を示している。南側への遺物の分布は途切れる。

出土層位はII層からVb層で、Va層が最も多い。

石器34点が出土し、組成は削片1点、削器1点、微細剝離のある削片1点、削片23点、碎片5点、石核3点となっている。

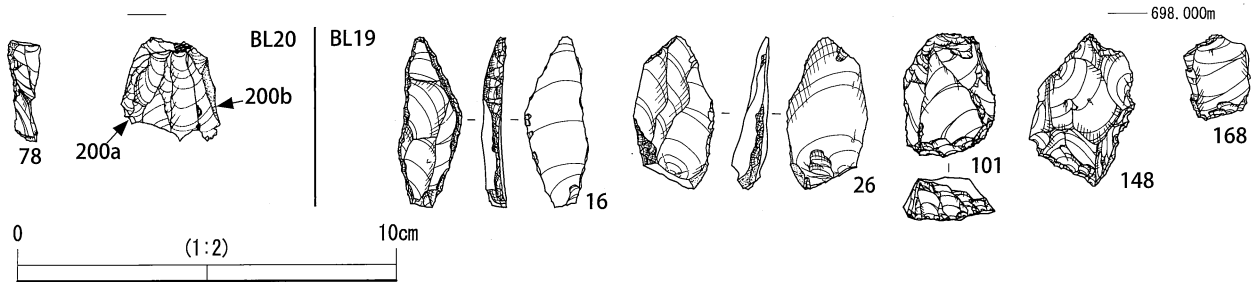
石材は黒曜石が主体となっている。

BL5014およびBL5018と1点ずつの接合資料を共有している。



垂直分布図凡例

- III層
- IV層
- ◇ Va層
- ◆ Vb層
- ・ その他



第31図 BL5019・5020 遺物分布図

ブロック外の出土遺物について

ブロック範囲内に入らず、単独で出土している石器が6点存在する。それぞれの分布および器種、石材については、付属 CD-ROM 中の属性表を参照願いたい。

3 旧石器時代の遺物

(1) 石器

2,837 点の石器が出土している。主な石器について以下に記載するが、その他の器種、法量等の属性は添付 CD-ROM 中の ¥貫ノ木遺跡 ¥Excel ¥貫ノ木旧石器時代石器属性.xls ファイルを参照願いたい。属性の観察項目は、遺物番号・遺構の種類・遺構番号・出土層位・X 座標・Y 座標・標高・器種・材質・重量 g・報告番号・個体番号・接合番号・推定産地、である。

ナイフ形石器 (第 32～35 図・報告番号 1～39)

51 点のナイフ形石器が出土している。50 点が黒曜石、1 点が無斑晶質安山岩を石材としている。黒曜石の産地は和田土屋橋西群が 24 点、和田土屋橋南群が 10 点、和田鷹山群が 10 点である。

1～11 は基部に加工が施されるナイフ形石器である。

1 は黒曜石の縦長剥片を素材としている。背面の大部分が礫面で構成されているが、石器主軸に平行する 1 筋の稜があり、稜上に調整が施されている。右側縁は基部と先端にブランディングが施され、その他の部位も切り立っており、ブランディングに類似する機能が想定できる。左側縁基部にはブランディングが施されているが、中央部に向かうにつれ漸移的に加工が弱くなり、先端にかけては、加工と使用痕との判断がつけ難い微細な剥離が連続的にみられる。基部腹面に基部端からの平坦な剥離がみられる。基部と先端がわずかに欠損しているが、平面形は左右ほぼ対称の柳葉形を呈する。横断面形は薄い台形を呈し、左右側面形の反りは小さく直線的である。

2 は黒曜石の石刃を素材としている。基部に打面が残され、その両側に正方向のブランディングが施されている。左右基部への加工は器体下から 3 分の 1 前後までで、左右側縁の中央部から先端にかけて微細剥離痕が認められるが加工はない。左側縁には加工部位がノッチ状を呈する部位があり、挿入削器の機能を有していた可能性がある。平面形は基部が平たく、先端が欠損していることから短冊形を呈し、左右側面形はバルブが目立ち、反りもやや大きい。

3・4 は黒曜石の石刃を素材としている。いずれも基部側に素材の打面が置かれるが、基部は欠損している。先端に素材を斜めに断ち切るようにブランディングが施されている。

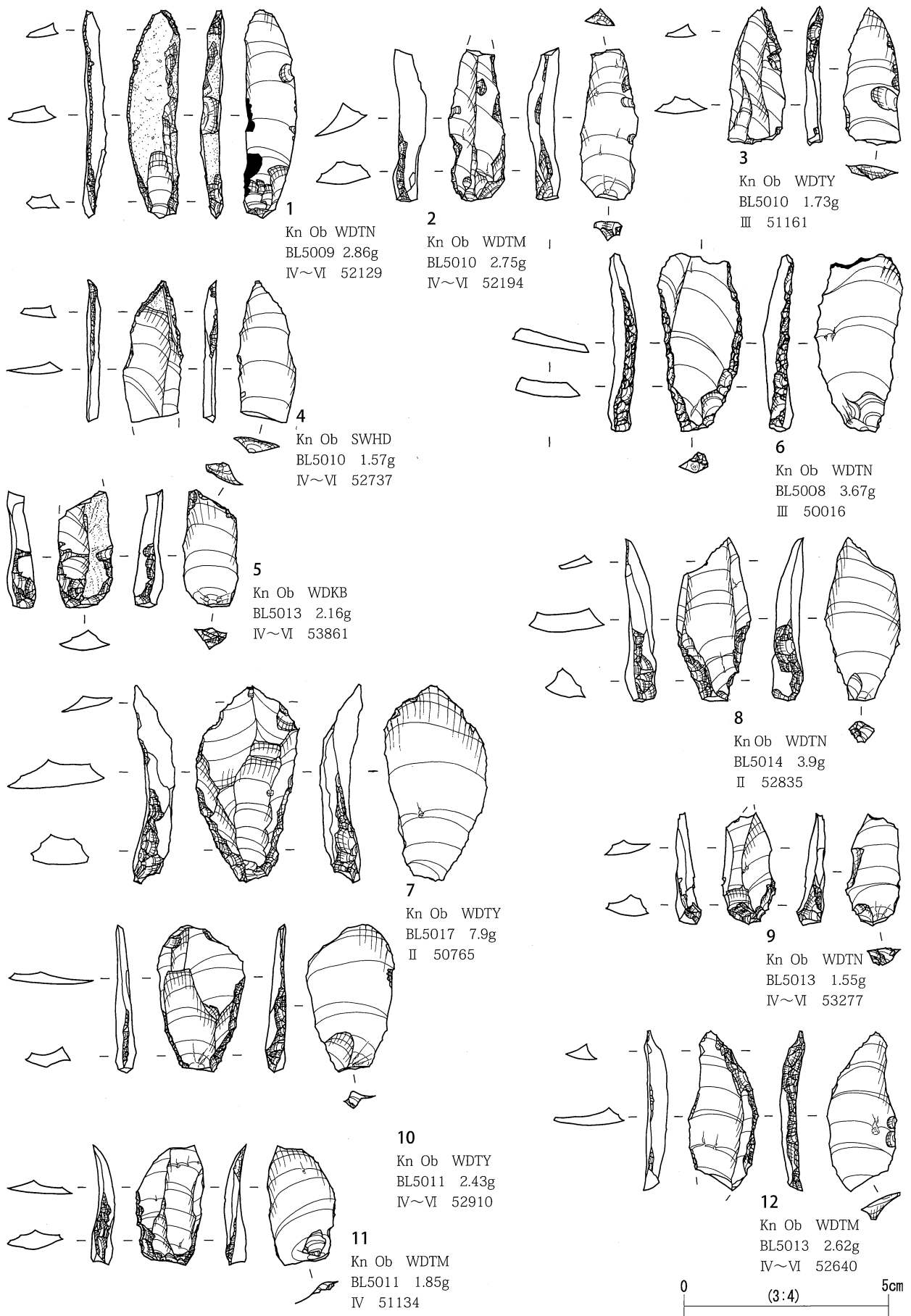
5 は黒曜石の石刃を素材としている。基部に素材打面を置き、打面の左右脇に正方向の加工が施されている。打面は残されており、打面調整が認められる。先端は欠損していて全体形状が捉えられない。

6 は黒曜石の石刃を素材としている。左右側縁の基部から先端付近まで広い部位に正方向のブランディングが施されている。加工により素材は折断されているが、基部に打面が残されている。先端は欠損しているが、厚みが薄いため、欠損部位はわずかと思われる。横断面形は薄い台形を呈し、左右側面形の反りとバルブが目立つ。

7 は黒曜石の縦長剥片を素材としている。この黒曜石の剥離面は特徴的で、梨の切り口のようにざらざらしている。産地は和田鷹山群が推定されている。基部側に素材打面が置かれているが、加工により折断されている。基部端に折れ面があるが、折れ面を切る 2 次加工がみられることから、意図的な折断の可能性が高い。平面形はゆがんだペン先形を呈し、横断面形は基部が厚く先端に向かって漸移的に薄くなる。左右側面形の反りがやや目立つ。

8 は黒曜石の石刃を素材としている。左右側縁下半部に正方向のブランディングが施されている。基部が厚いためこの加工により素材が折断されているが、基部に置かれた打面は残されている。先端は加工はないが鋭く尖っている。平面形は先端が右に偏ったペン先形を呈し、基部は厚くバルブが目立つ。

9 と 11 は黒曜石の縦長剥片を素材としている。平面形は先端が尖らない短冊形を呈す。小形で加工頻



第32図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図1 (ナイフ形石器1)

度が低い。

10は黒曜石の縦長剥片を素材としている。素材打面を基部に置き、左右側縁基部にブランディングを施すが、厚みが薄いため左側縁への加工は弱い。尖端がわずかに欠損しているが、平面形は7に近い。左右側面の反りは小さく薄い。

12は黒曜石の石刃を素材としている。基部側に素材打面が置かれるが、基部は欠損している。右側縁全体に正方向のブランディングが施され、弧状の側縁が作出されている。また、この側縁には尖端部に対向調整が、基部に折れ面からの剥離が認められる。

13～17は側縁全周に加工が施されているナイフ形石器である。したがって、素材の鋭い縁辺を刃部とするナイフ形石器の定義から外れてしまうもので、周縁調整の槍先形尖頭器、あるいは削器という分類も考えられる石器である。しかし、素材、形状、基部への加工はナイフ形石器そのものであり、また、ナイフ形石器の刃部に対応する部位への加工は、ブランディングと異なる緩やかな角度の加工が施されていることからナイフ形石器とした。

13は黒曜石の石刃を素材としている。正方向のブランディングにより、基部周辺の形状は大きく変えられているが、基部に置かれた素材打面は狭いが残されている。左側縁の加工は基部でやや面的で大きく、側縁中央に近づくにつれ漸移的に微弱になる。さらに上半部で急角度のブランディング状の加工に変わり、尖端で再度微弱な加工になる。また、尖端方向からのとても小さな樋状剥離もみられる。右側縁は基部と尖端で急角度の明瞭なブランディングが施されるが、中央部付近で微細な剥離となっている。これら左右側縁の微細な剥離は加工であるのか、使用痕であるのか判断がつけ難い。平面形は柳葉形を呈し、尖端は鋭くどがり、基部は丸い。横断面形は比較的薄く、左右側面形は反りが小さく直線的である。

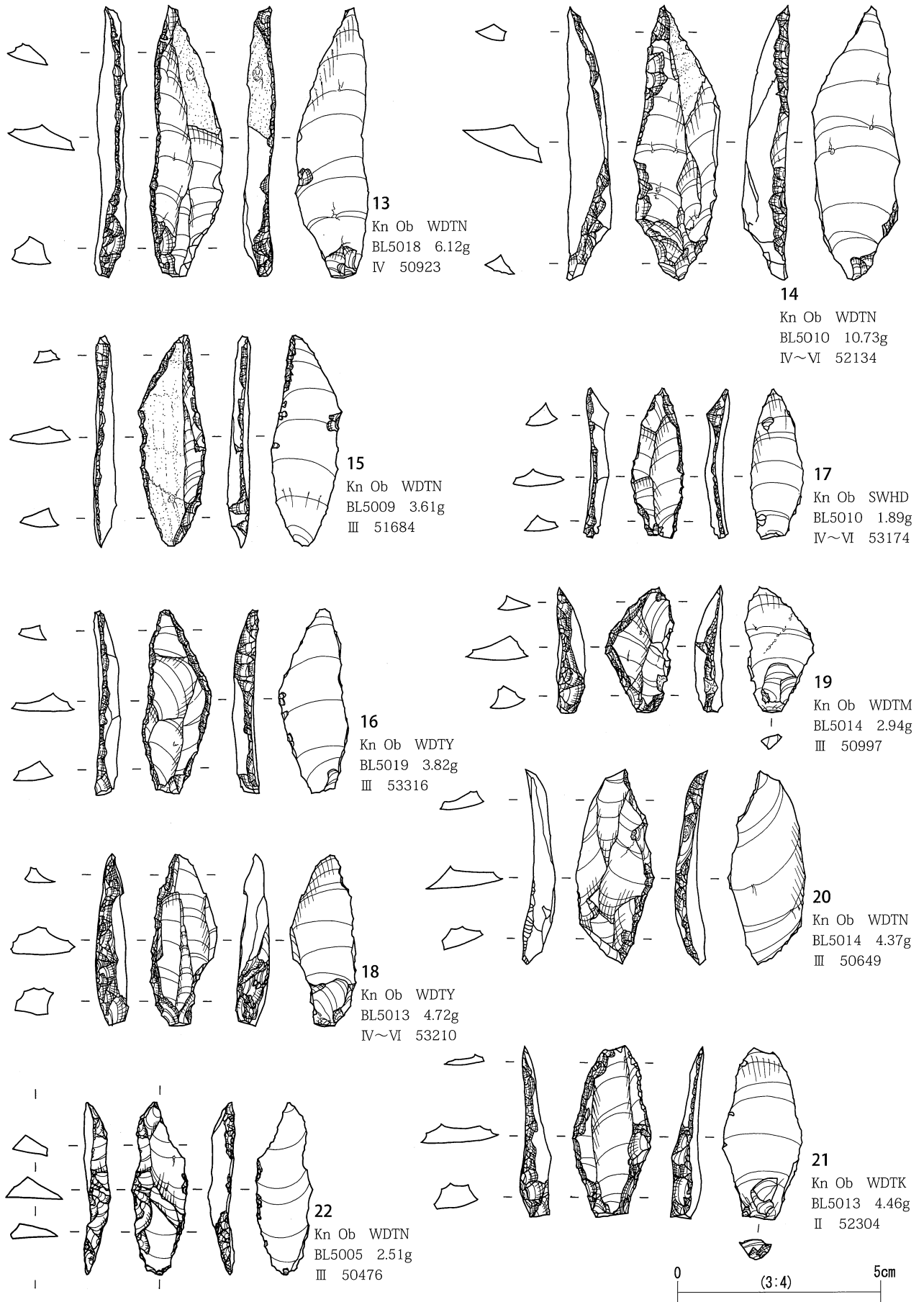
14は黒曜石の石刃を素材としている。素材の打面は基部に置かれるが、加工により折断されている。左側縁には、基部に正方向のブランディングが施されているが、中央に剥離はなく、上半部から尖端には平坦で細かい正方向の剥離がみられる。基部以外の剥離については、加工か使用痕かの判断が難しいが、剥離は背面に偏っている。左側縁の基部と尖端に正方向のブランディングが施されている。中央に1cm強の剥離のない部分があるが、腹面との角度は鈍角である。平面形は幅広の柳葉形を呈し、尖端は鋭く尖り、基部は凸凹している。左右側面形はやや反りがみられる。

15は黒曜石の石刃を素材としている。素材打面は基部に置かれるが、加工により折断されている。左側縁には、尖端に素材を斜めに断ち切る正方向のブランディングが施され、中央から基部に微細で急角度の正方向の剥離がみられる。右側縁には、基部に正方向のブランディングが施され、中央から尖端に正方向の微細な剥離がみられる。平面形は左側縁が「く」の字状となるが全体的には幅広の柳葉形を呈し、尖端は鋭く、基部は鈍く尖る。横断面形は薄く左右側面形は反りが少なく直線的である。

16は黒曜石の石刃を素材としている。素材打面は基部に置かれるが、加工により折断されている。左側縁全体に正方向のブランディングが施されているが、尖端付近の剥離は弱い。右側縁全体にも正方向のブランディングが施されているが、上半部の剥離は強く、素材を斜めに折断している。平面形は右側縁が「く」の字状となるが、全体的には幅広の柳葉形を呈し基部は平たく、尖端は尖る。左右側縁形は反りが小さい。

17は黒曜石の石刃を素材としている。素材打面は基部に置かれるが、加工により折断されている。左右側縁のほぼ全体に正方向のブランディングが施されている。右側縁尖端と左側縁基部への加工は強く、それ以外は急角度だが弱い。平面形は柳葉形を呈し、尖端は尖り基部は平たい。左右側面形の反りが目立つ。

18は黒曜石の石刃を素材としている。素材打面は基部に置かれ、加工により変形しているが残されて



第33図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図2 (ナイフ形石器2)

いる。左側縁全体に正方向のブランディングが施されており、素材が折断されている。右側縁基部には、下端からの槌状剥離が施された後に、この剥離を消すように、正反方向のブランディングが施されている。平面形は右側縁が「く」の字状となる切出形を呈し、断面は厚い。左右側面形の反りが目立つ。

19は黒曜石の縦長剥片を素材としている。素材打面は基部に置かれ、加工により縮小しているが残されている。左側縁は中央部に肩が張るように正方向のブランディングが施されている。右側縁にも正方向のブランディングが施されるが、先端部に刃部となる素材の鋭い縁辺が残されている。平面形は、三角形を呈し、横断面形はやや厚く、左右側縁形での反りは小さい。

20は黒曜石の石刃を素材としている。素材打面は先端側に置かれるが、加工により折断されている。素材の剥離軸と、石器の主軸はやや斜めに交わる。左側縁には基部近くに正方向の弱いブランディングがみられる他に加工部位はなく、刃部となる鋭い素材縁辺が残されている。右側縁は基部および先端部に正方向のブランディングが施され、中央上よりに無加工部位があるが、腹面と背面の角度は切り立っている。平面形は木葉形を呈し、先端基部とも鋭く尖っている。そのため、基部とした部分が、先端として利用されていた可能性も考えられる。横断面形は薄い台形を呈し、左右側面形に反りがみられる。

21は黒曜石の石刃を素材としている。素材打面は基部に置かれ加工により変形しているが残されている。素材剥離軸と石器主軸はほぼ一致している。左右側縁基部には正方向のブランディングが施されており、左右側縁の上半部にはブランディングと異なる正方向の平坦な剥離がみられる。平面形は先端、基部とも平たい。断面形は薄い台形を呈し、左右断面形はバルブの膨らみがあるものの、直線的で反りが小さい。

22は黒曜石の石刃を素材としている。素材打面は先端側に置かれるが、加工により折断されている。素材の剥離軸と石器の主軸はほぼ一致している。左側縁は所々に正方向の弱い剥離がみられるが、明瞭な加工部位はなく素材縁辺が残されているものの、あまり鋭利ではない。右側縁は先端と基部に正方向のブランディングが施され、中央部に反方向の弱いブランディングがみられる。平面形は右側縁がわずかに肩が張る左右非対称形を呈し、横断面形は薄い三角形を呈し、左右側面形は反りが小さく直線的である。

23～25は石刃を素材として、正方向のブランディングにより、素材の末端を斜めに折断したナイフ形石器である。23は先端への加工のみ、24は基部が欠損、25は基部にも加工を施している。

26は黒曜石の短い石刃を素材としている。加工部位は25に近く、斜めに折断された先端と基部両側に正方向のブランディングが施されているが、長さは短い。

27は黒曜石の石刃を素材としている。右側縁先端近くに正方向のブランディングが施され、その他に多くの微細剥離痕がみられる。しかし、明瞭な加工がみられるのは先端近くだけである。先端は尖らず丸い。

28・29の基部は欠損している。先端部の形状は27と似ている。

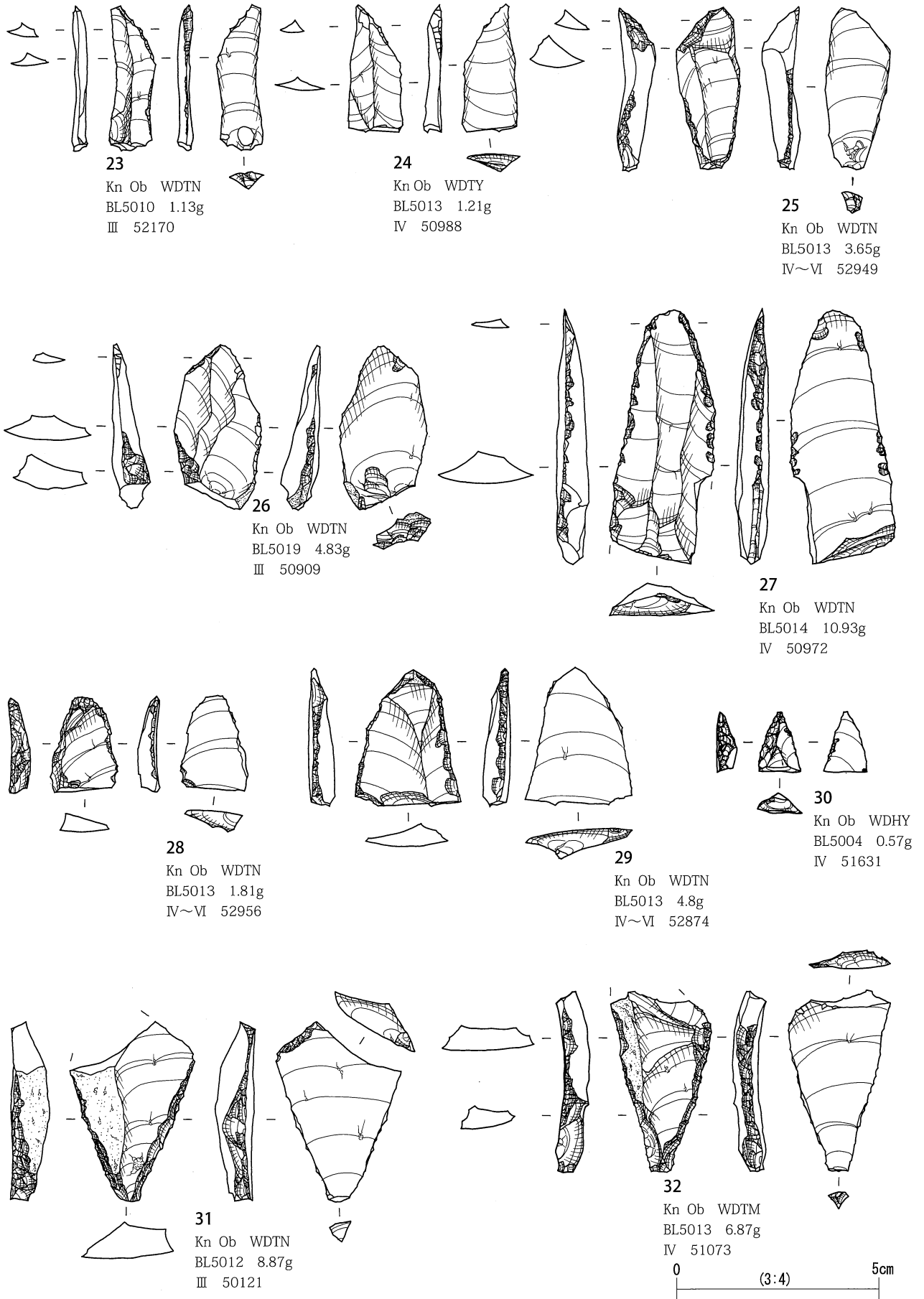
30はナイフ形石器の先端部である。右側縁には鋭い刃部がみられる。

31～39はナイフ形石器の基部である。素材打面は基部に置かれ、比較的強い正方向のブランディングによって、左右側縁に加工が施されるが、打面は残るものが多い。先端の尖るナイフ形石器、尖らないナイフ形石器、彫器、搔器にも同様の基部がみられることから、器種判別が難しい。とりあえずナイフ形石器とした。

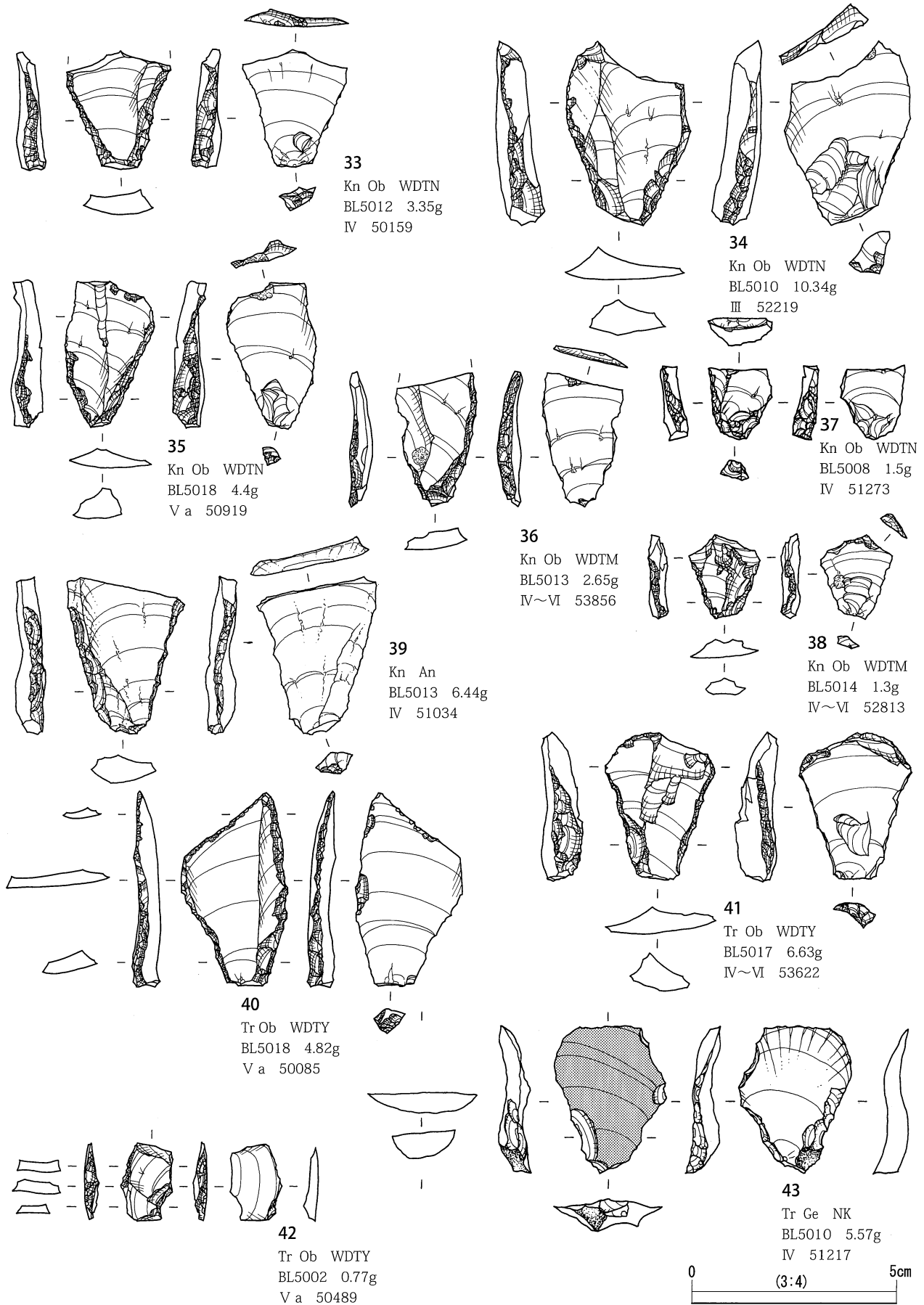
39は無斑晶質安山岩を石材としている。黒曜石以外のナイフ形石器はこれのみである。基部のみが残されており、左右側縁に正方向のブランディングが施されているが打面は残る。

台形石器 (第35～36図・報告番号40～47)

8点の台形石器が出土したが、形態的なまとまりはやや弱く、それぞれが特徴的である。



第34図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図3 (ナイフ形石器3)



第35図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図4 (ナイフ形石器4・台形石器1)

40は黒曜石の縦長剥片を素材としている。7および8のナイフ形石器に類似しているものの、尖端左側には石器の主軸と60°前後の角度で交わる直線的な刃部がみられることから台形石器とした。右側縁はほぼ全体に正方向のブランディングが施されている。左側縁は下半部に正方向の弱いブランディングが施され、上半部に刃部が存在する。

41は黒曜石の縦長剥片を素材としている。31～38のナイフ形石器の基部との共通性が認められるが、尖端側が薄く、欠損部位がわずかであることが予想されるため台形石器とした。しかし、上面には折れ面や、楔形石器にみられるような上端からの平坦な剥離もある。

42は黒曜石の貝殻状剥片を素材としている。素材打面を横に置き、加工により打面を除去している。左右側縁への加工は、正方向のブランディングとなっているが、基部端近くで両側ともノッチ状を呈する。平面形は台形を呈し、刃部は平たく石器主軸にほぼ直交している。横断面形、左右側面形とも薄く反りは小さい。

43は下呂石で、寸詰まりの縦長剥片を素材としている。素材打面は基部に置かれ、加工により変形しているが残されている。背面は1枚の大きく平坦な剥離面で構成されているが、この面はポジ面の可能性が高い。左右側縁の基部を中心に反方向の平坦な加工が施されている、器体上部へ向かうほど加工は漸移的に弱くなり、中央で剥離はなくなる。平面形は台形を呈し、刃部は平たく石器主軸に対しほぼ直交している。横断面形は下が凸の「D」字状を呈し、左右側縁形はバルブの厚みと、素材の反りが目立ち波打っている。

44は黒曜石の縦長剥片を素材としている。素材打面は基部に置かれ、両側縁に強い加工が施されているが残されている。素材剥離軸は石器の主軸に対して斜めに用いられている。背面にはポジ面がみられる。左側縁は正方向の平坦な剥離と微細な剥離が施されているが、加工部位は基部近くのみである。右側縁は下半部に反方向のブランディングが施されているが、上半部に加工はない。平面形はやや縦に長い台形を呈し、刃部は平たく石器主軸に対してほぼ直交している。横断面形はやや厚く、三角形あるいは台形を呈し、左右側面形はバルブの発達が目立ち、若干の反りもみられる。

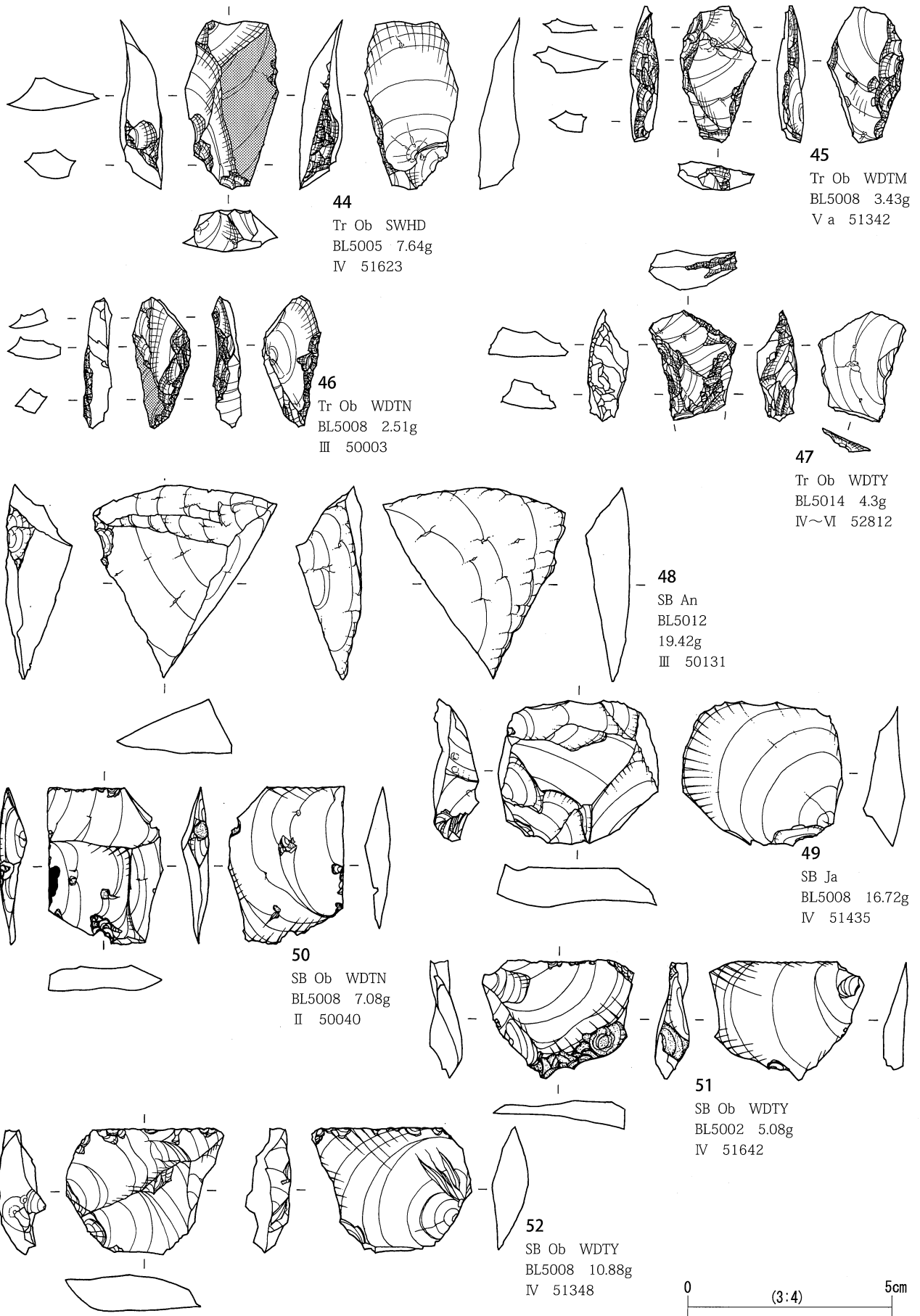
45は黒曜石の横長剥片を素材としている。素材打面を左側縁に置き、反方向の平坦な剥離を施して打面を除去している。右側縁は折れ面となっているが、折れ面から背面に微細な剥離が施されている。平面形は切出形を呈するようだが、尖端部は折れている。横断面形はゆがんだ菱形を呈し、左右側面形は比較的直線的である。

46は黒曜石の横長剥片を素材としている。素材打面は右側縁に置かれ、打面より平坦な剥離が多数施されているが、主要剥離面との切り合いがない。背面にはポジ面がみられる。左側縁下半部には反方向の中剥離が施される。この剥離はブランディングより細かく形が揃っている。上端は折れており全体形状ははっきりしないが細長い。横断面形は菱形あるいは平行四辺形を呈し、表裏対称形となっている。左右側面形は反りが小さく直線的である。

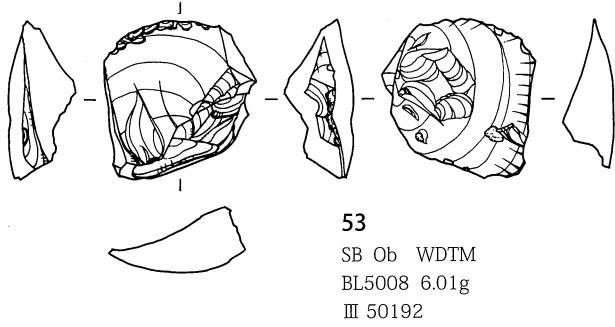
47は黒曜石で、素材が大きく変形しているため、原形の予想はできない。左側縁に素材打面が置かれ、正方向の強いブランディングにより打面が折断されている。また、右側縁上半部に正方向のブランディングが施されているが、下半部および基部は折れ面となっている。これらの折れ面から先に、ナイフ形石器の刃部や尖端部があった可能性も考えられる。刃部は上辺左側に存在する。

貝殻状刃器 (第36～37図・報告番号48～54)

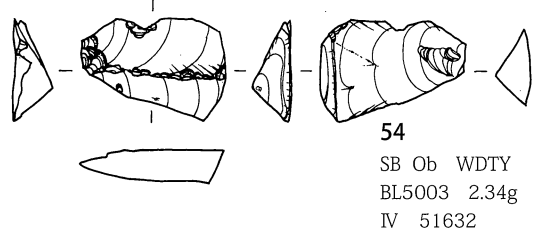
13点の貝殻状刃器が出土している。側縁は打面もしくは折れ面で構成されているものがほとんどで、明瞭な加工が施されるものはない。いずれも貝殻状剥片を斜めに用いており、刃部は鋭く顕著な微細剥離痕がみられる。平面形は台形あるいは円形を呈し、素材の形状をほぼ維持している。



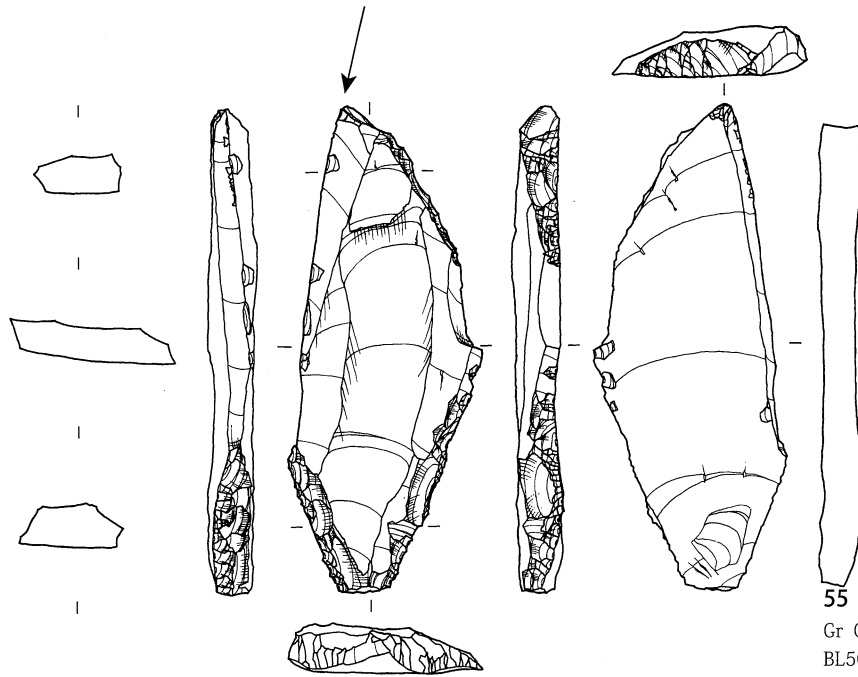
第36図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図5 (台形石器2・貝殻状刃器1)



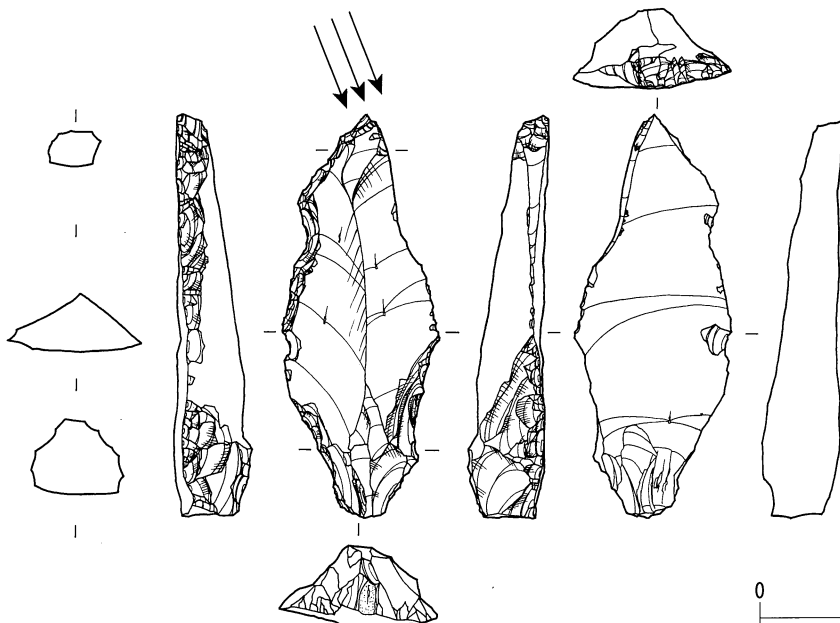
53
SB Ob WDTM
BL5008 6.01g
III 50192



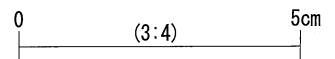
54
SB Ob WDTY
BL5003 2.34g
IV 51632



55
Gr Ob WDTN
BL5010 21.41g
III 51717



56
Gr Ob WDTN
BL5008 16.93g
IV 51182



第37図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図6 (貝殻状刃器2・彫器1)

彫器 (第37～41図・報告番号55～76)

28点の彫器が出土している。内22点が黒曜石製である。槌状剝離打面の作出、彫刀面の再生等確実に彫器に分類できる一群である。

55～58はナイフ形石器と同一形態の基部をもつ。石刃を素材として打面を基部に置き、左右側縁に正方向のブランディングを施して基部を作出している。打面は切除されずに残されている。57には対向調整といえる反方向のブランディングも確認できる。素材末端を斜めに折断するようにブランディングを施し、そこを打面として槌状剝離を行っている。57は折れがからんでいるが、55・56・58はまるでナイフ形石器の刃部を再生するかのように、刃部に対応する部位に彫刀面が作出されている。平面形は菱形もしくは木葉形を呈する。基部は素材打面が残されるため平たい。56は基部加工がノッチ状を呈するため、有茎状の基部となっている。横断面形は山形、台形を呈し、左右側縁形は反りが少なく直線的になる。

59～61は黒曜石の石刃を素材として、素材側縁に平行する彫刀面をもち、周縁に加工が施される彫器である。素材打面を基部に置き、彫刀面と反対側の側縁に正方向のブランディングが施されている。59の側縁は複数のノッチ部をもつように作出される特徴がある。素材末端の折れ面を打面として側縁に平行する槌状剝離を施して、彫刀面を作出している。

62～64は石刃を素材として、素材側縁に平行する彫刀面をもつが、周縁への加工がみられない彫器である。槌状剝離打面は62が正方向のブランディングによる作出面、63が素材打面、64が素材末端の切り立った礫面となっている。

65・66は黒曜石の縦長剝片が素材となり、周縁への加工がみられる彫器である。

67～69は黒曜石の縦長剝片が素材となり、周縁への加工がみられない彫器である。69は槌状剝離の回数が多い。

70～76は石刃、縦長剝片以外が素材となっている彫器である。70・71は器体が厚く、切り立った上端、下端から複数の槌状剝離が行われている。甲高のためごろっとした印象を与えさせられる。

72は搔器を転用した彫器である。搔器であった時の刃部が右上辺と左下辺に残されているが、これらを打面として槌状剝離を施している。

削片 (第41図・報告番号77～79)

4点の削片が出土している。槌状剝離の調整打面や稜の調整が顕著なものはない。

搔器 (第41～46図・報告番号80～119)

78点と多くの搔器が出土しており、定形的な形態をもつ器種の中では最も数が多い。

80～87は石刃を素材としており、縦長の平面形を呈する。

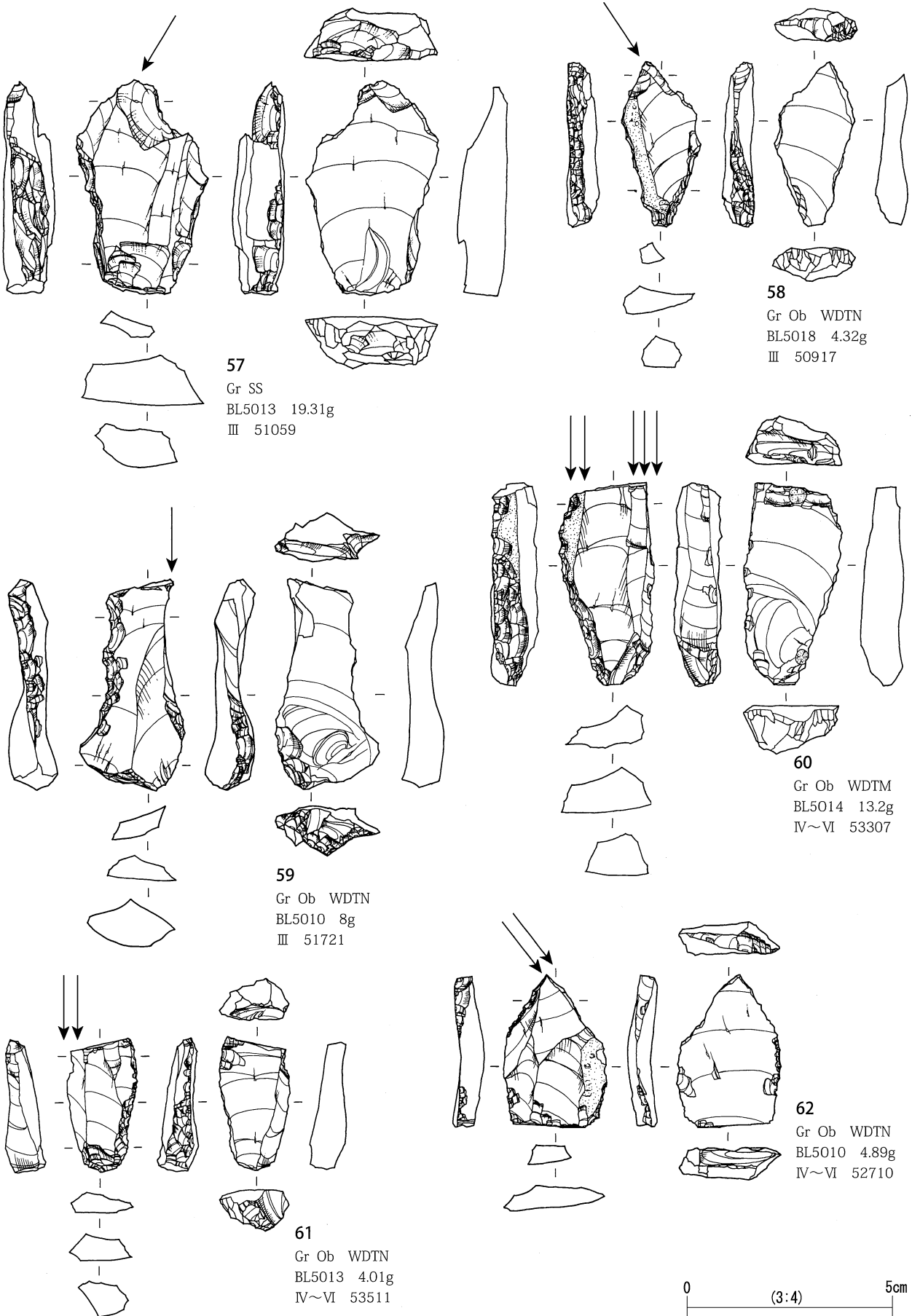
80・81は珪質頁岩を石材としている。素材断面は基部に置かれるが欠損している。素材末端に正方向の急角度で平坦な剝離を施して丸い刃部を作出している。周縁調整は認められないが、側縁に残されている素材縁辺には微細剝離痕がみられる。

82～84は黒曜石製で、素材打面を基部に置き、基部両側縁に正方向のブランディングが施されている。この加工はナイフ形石器の基部に対する加工と共通性をもつ。素材末端に正方向の平坦で急角度の剝離を施して刃部を作出している。

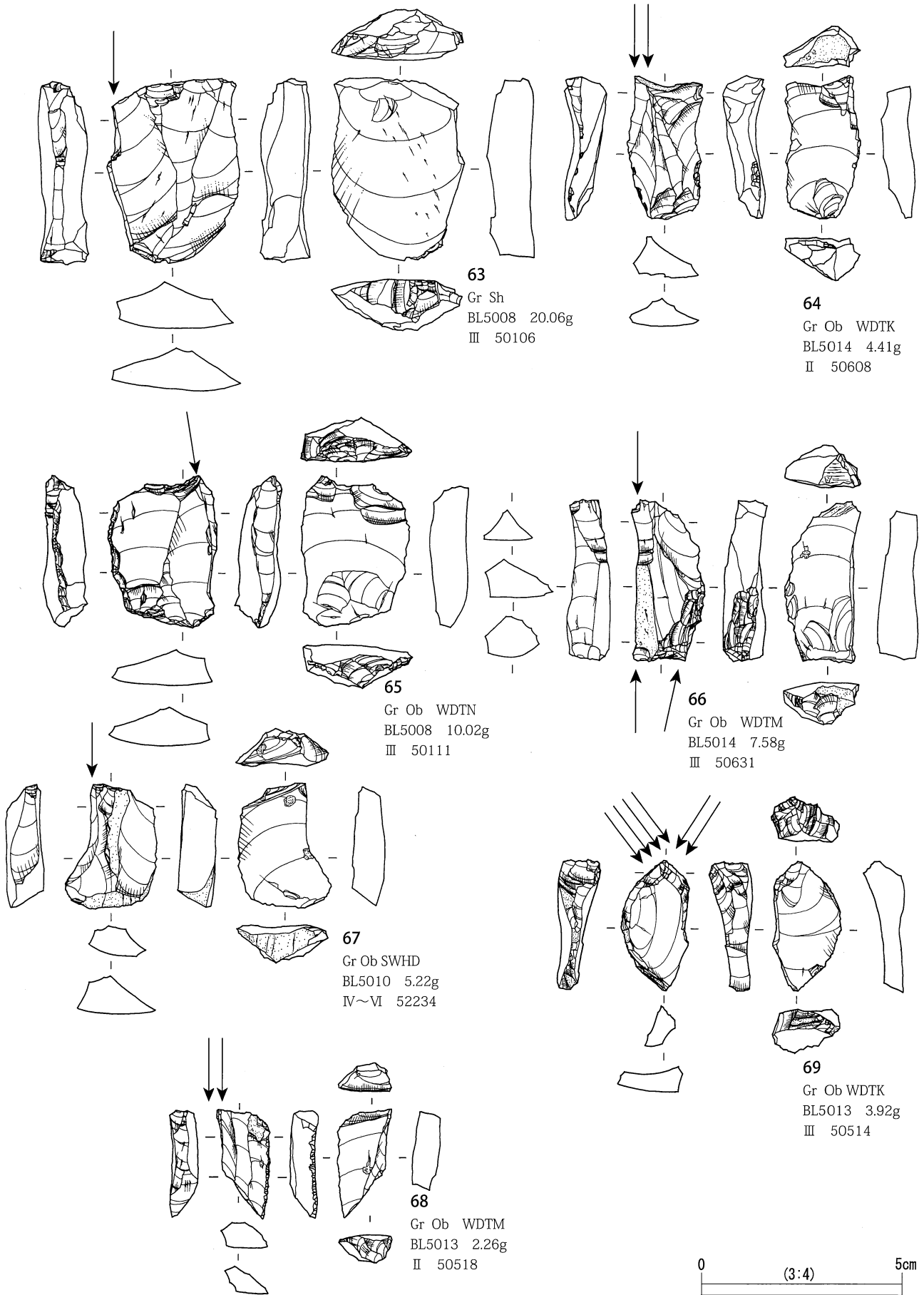
85・86は黒曜石製で、素材打面を基部に置き、末端に正方向の急角度で平坦な剝離を施して刃部を作出している。また、側縁に正方向の平坦な剝離が施され、削器の刃部的な側縁が作出されている。

87は黒曜石製で、右側縁には搔器刃部側からの槌状剝離がみられる。その後、正方向の平坦で急角度の剝離により搔器の刃部が作出されている。

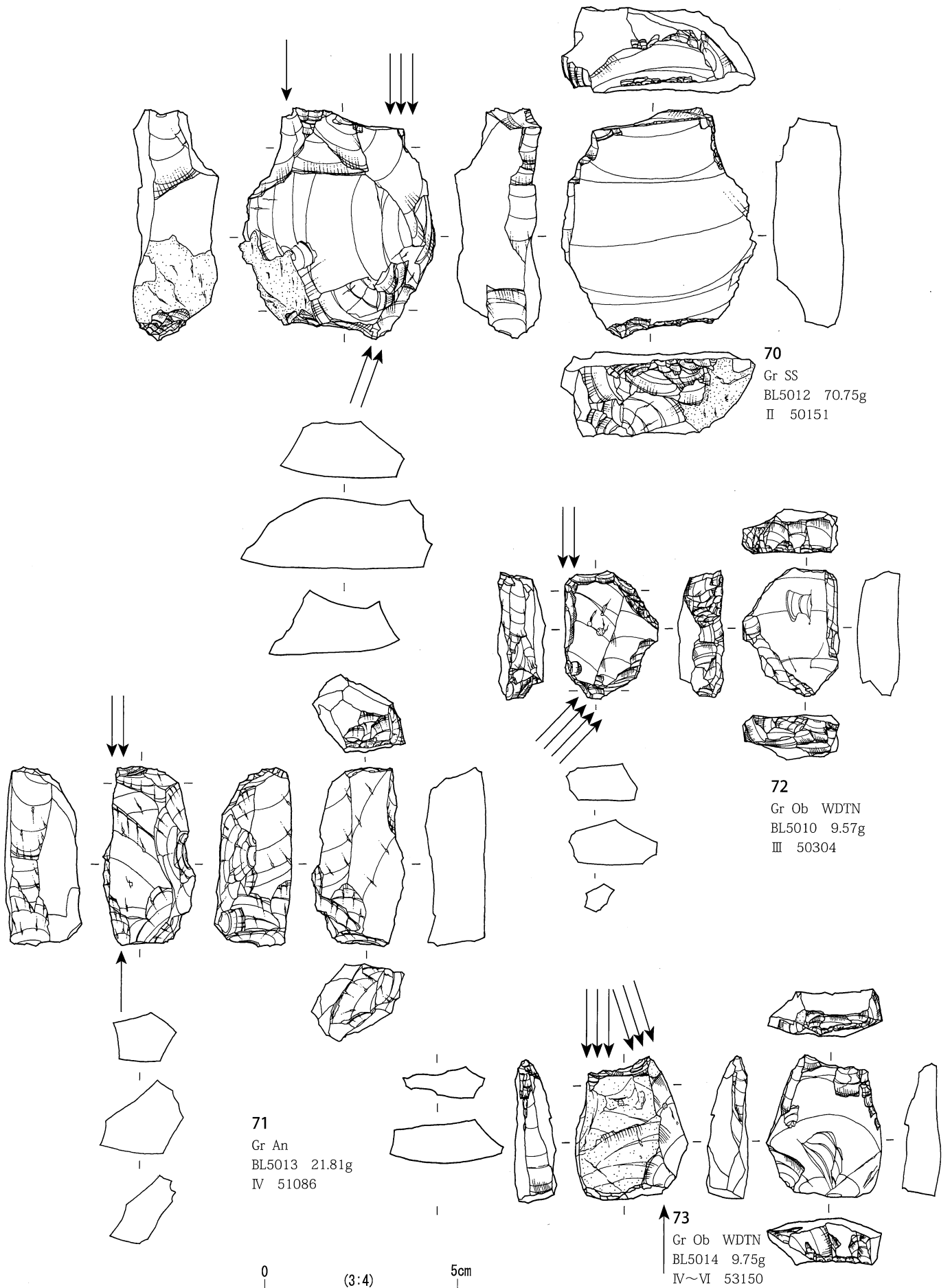
88と89は黒曜石製で、石刃を素材としていると思われるが、基部側が大きく欠損しているため明言



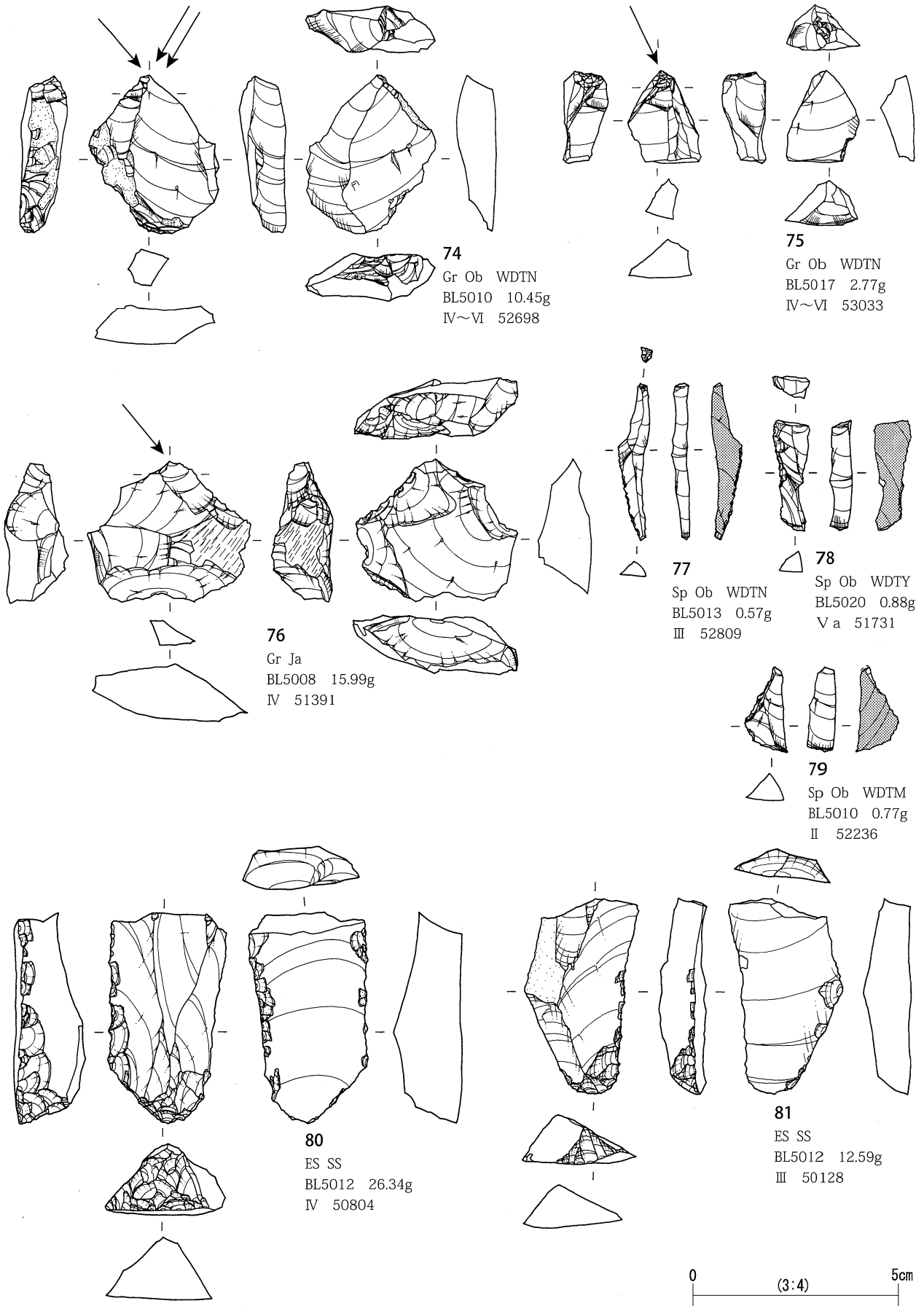
第38図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図7 (彫器2)



第39図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図8 (彫器3)



第40図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図9 (彫器4)



第41図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図10 (彫器5・削片・搔器1)

できない。

90～104は幅広あるいは寸詰まりの縦長剥片を素材としている。98は素材打面を刃部側に置くが、それ以外は素材末端側に正方向の急角度で平坦な剥離により刃部が作出される。95・97にはナイフ形石器に類似する基部加工がみられ、99の側縁には削器の刃部的な加工が施されている。

105～119は貝殻状剥片を素材としている。素材の貝殻状剥片はやや縦に長いものが多い。素材の末端部を中心に正方向の平坦で急角度の剥離が施され刃部が作出されている。平面形は拇指状を呈する。加工部位が全周におよび円形になるものは認められない。

削器（第47～49図・報告番号120～140）

63点の削器が出土した。数量は多いものの、刃部加工以外の加工がほとんどないため、目的形状の作出がない。そのため、最終形状と素材の形状の差が小さい。

120～134は石刃あるいは縦長剥片を素材としている。左右側縁のいずれか、または両側に平坦剥離や微細な剥離を施して刃部を作出している。加工は正方向が主体となり、連続する剥離により直線的な刃部が作出されている。

134は玉髓製で、縦長剥片の両側縁に角度のある平坦な剥離が施されている。加工頻度が高い。

135・137・138は貝殻状剥片および横長剥片を素材として、部分的に正方向の平坦な剥離や微細な剥離を施して刃部を作出している。

136は黒曜石の小形の板状原石を素材としている。平面形が方形を呈する板状礫の一変に正反方向の平坦な剥離を施して刃部を作出している。この素材と同種の実石が第5006号ブロックから複数出土しているが、いずれも出土層位がⅡ層からⅢ層と浅いため、他とは時期が異なる可能性がある。

139と140は大形の貝殻状剥片を素材としている。石材も凝灰質頁岩で、主要石材の黒曜石と異なる。側縁に正方向の平坦、微細、強い剥離を施して刃部を作出している。

挟入削器（第50図・報告番号141～145）

9点の挟入削器が出土している。いずれも貝殻状剥片や横長剥片を素材としており、石刃を用いない。正方向あるいは反方向の平坦な剥離等によりノッチ状の刃部が作出されている。周縁への加工はなく刃部以外への形状の作出が認められない。素材形状が多様なことから完成品の形状も多様である。

鋸歯縁状削器（第50～51図・報告番号146～150）

13点の鋸歯縁状削器が出土している。いずれも貝殻状剥片や横長剥片を素材としており、石刃を用いない。正方向または反方向の平坦剥離や強い剥離を施して鋸歯縁状の刃部を作出している。周縁加工はなく刃部以外への形状の作り出しはない。そのため、形状は多様である。

揉錐器（第51図・報告番号151～154）

5点の揉錐器が出土している。いずれも貝殻状剥片や横長剥片を素材としており石刃を用いない。素材の打面等のやや厚みのある端部に、急角度の剥離をノッチ状に施して尖頭部を作出している。

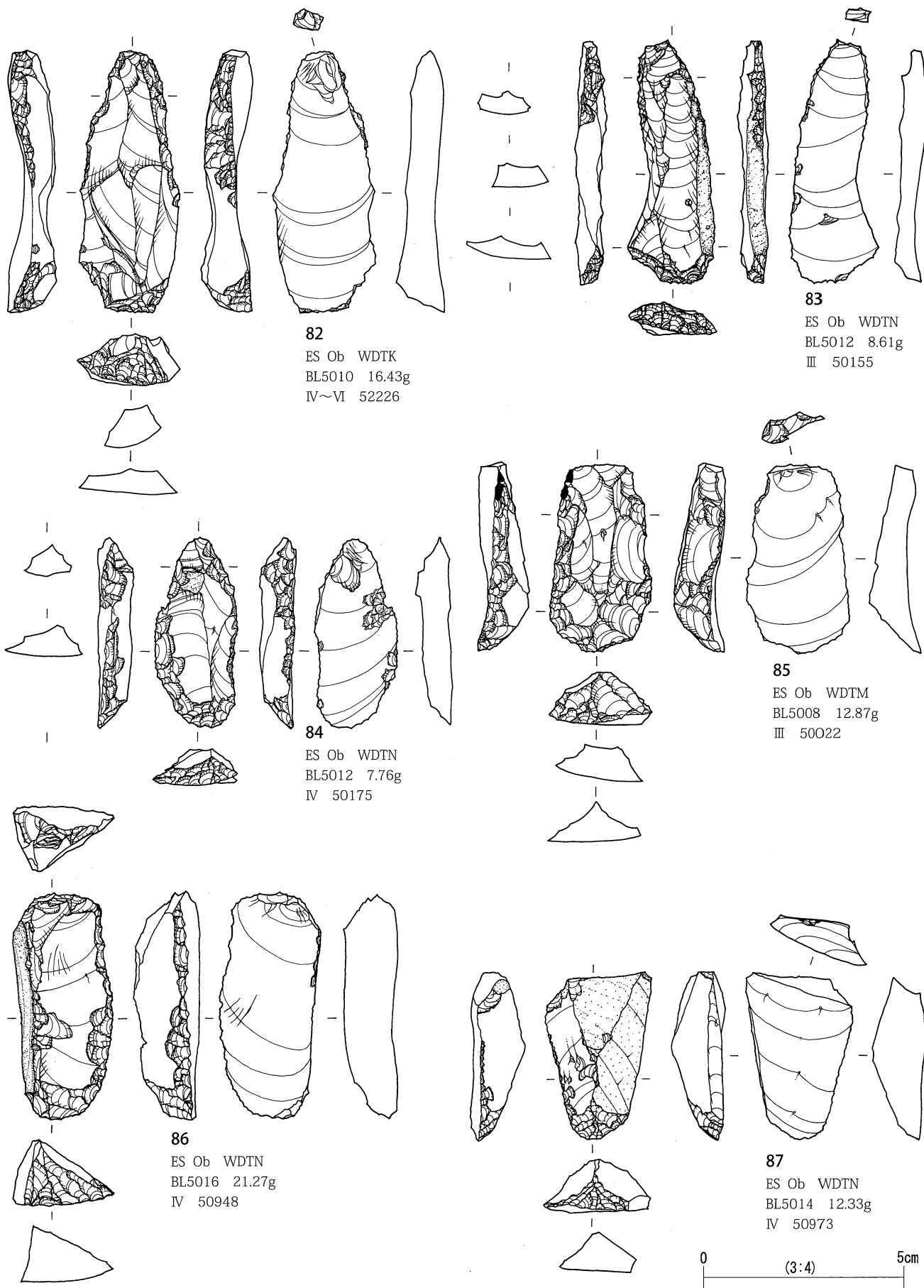
楔形石器（第51～53図・報告番号155～169）

49点の楔形石器が出土している。剥片素材が多いが板状の礫を素材とするものもみられる。

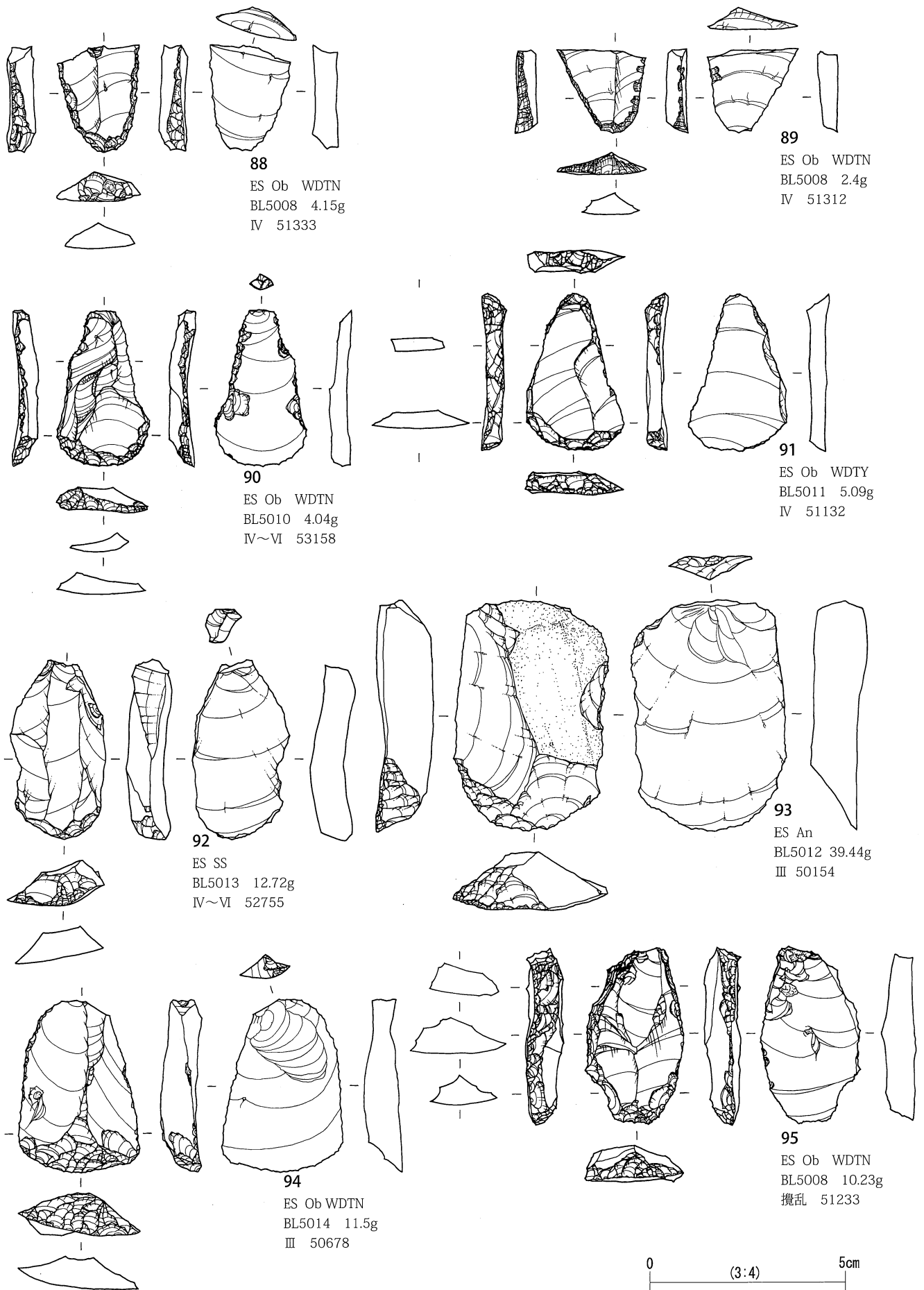
155は表裏に礫面を有するため、明らかに小形板状礫が素材であることがわかる。2次剥離はあまり顕著でないが、上端および下端にみられる。

156～162は貝殻状剥片を素材としている。上下両端に潰れを伴う正反方向の平坦な剥離がみられる。少数ではあるが、剥離方向が片面に偏るものもある。平面形は崩れた正方形や五角形を呈する。

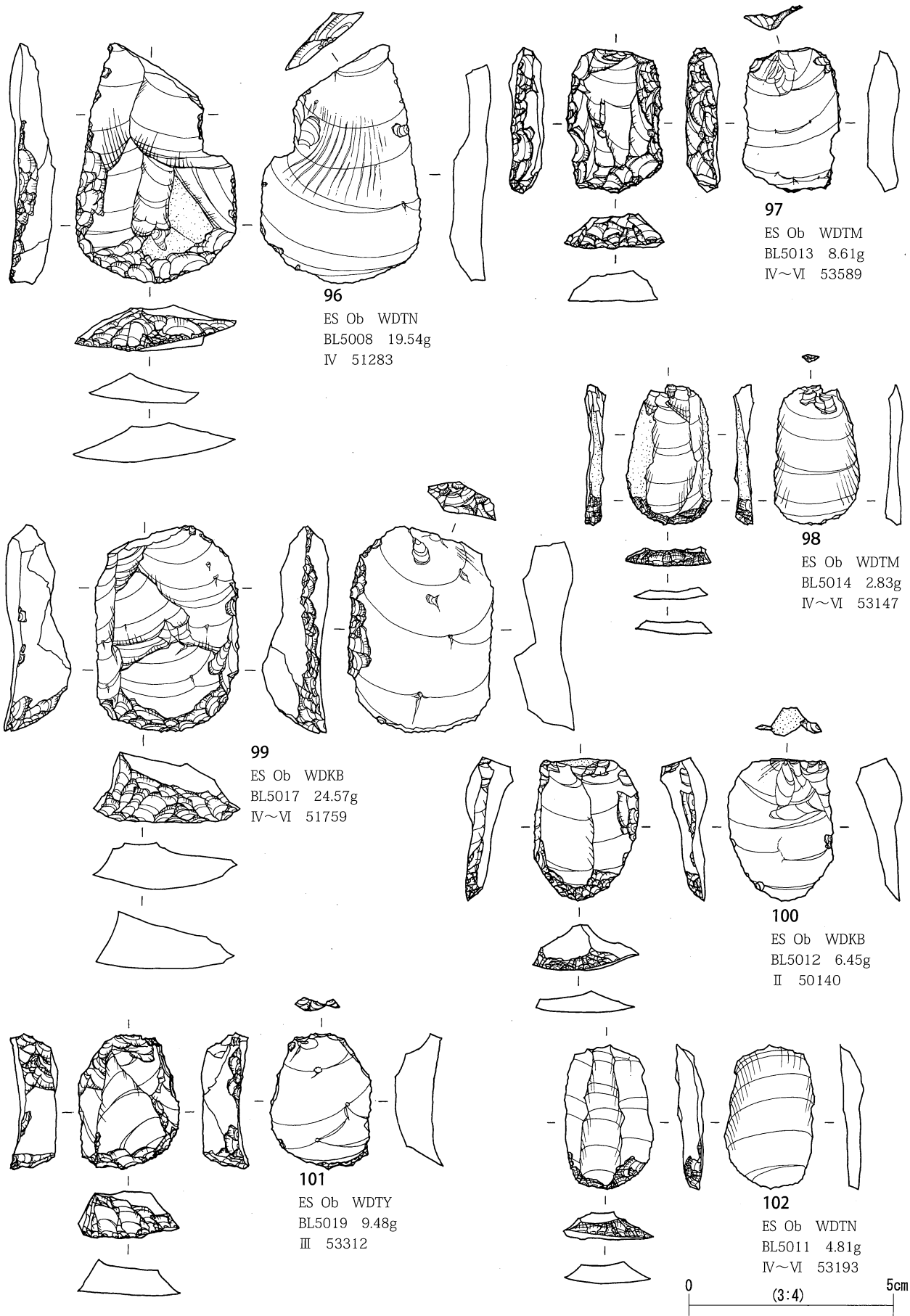
163～169は石刃もしくは縦長剥片を素材としている。素材を縦に用いて上下両端を利用している。平面形は縦長の長方形を呈するものが多い。



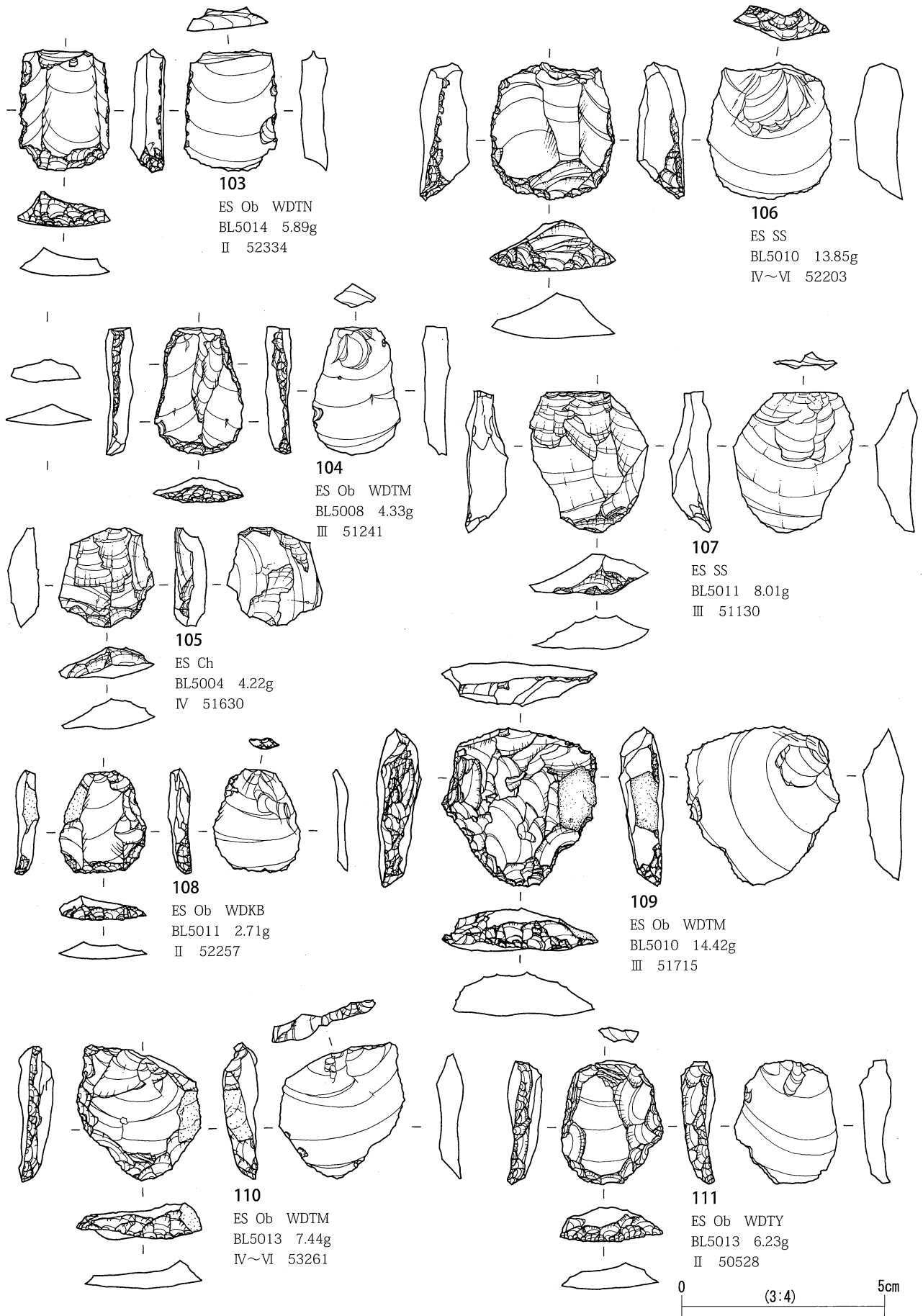
第42図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図11(搔器2)



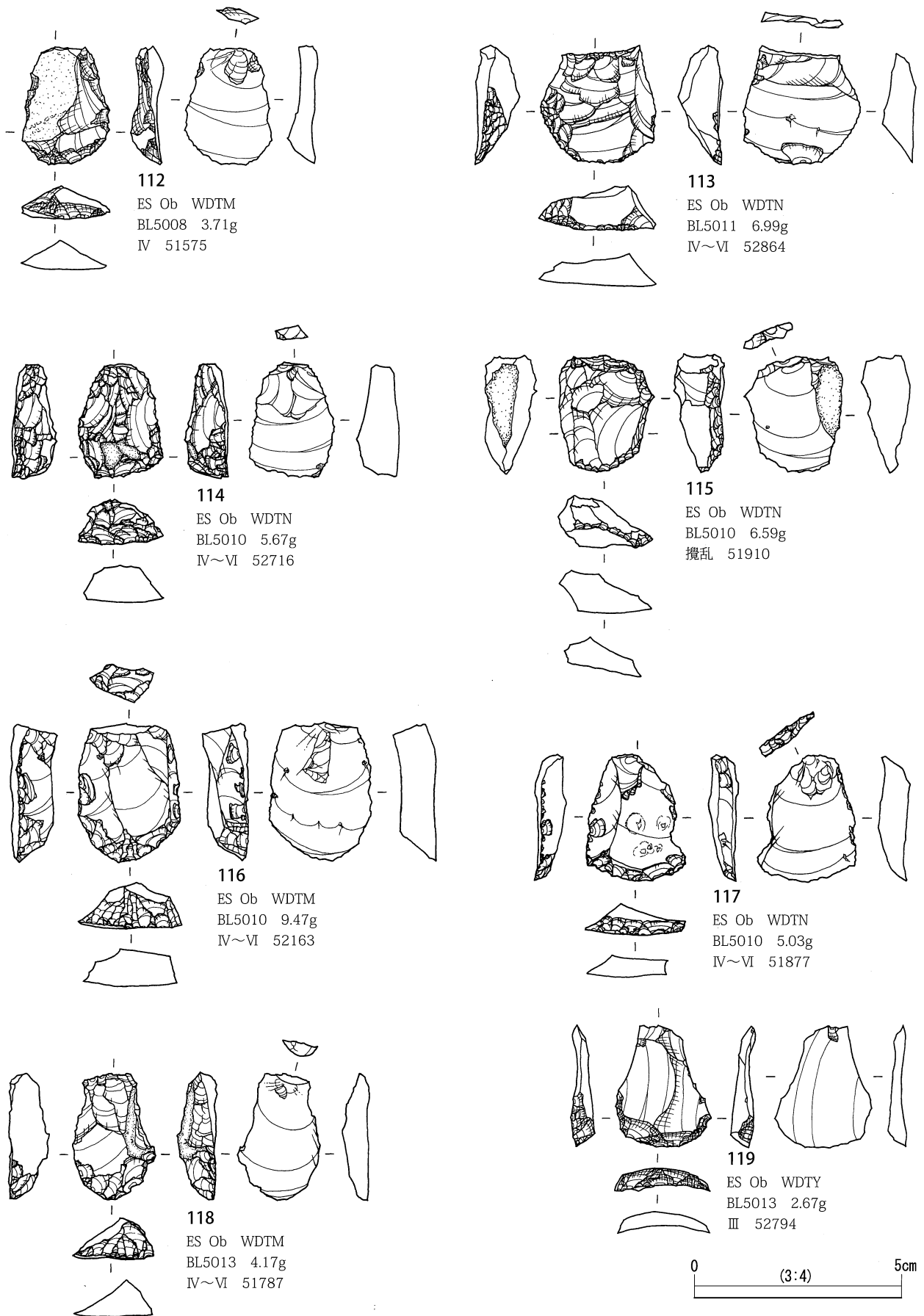
第43図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図12(搔器3)



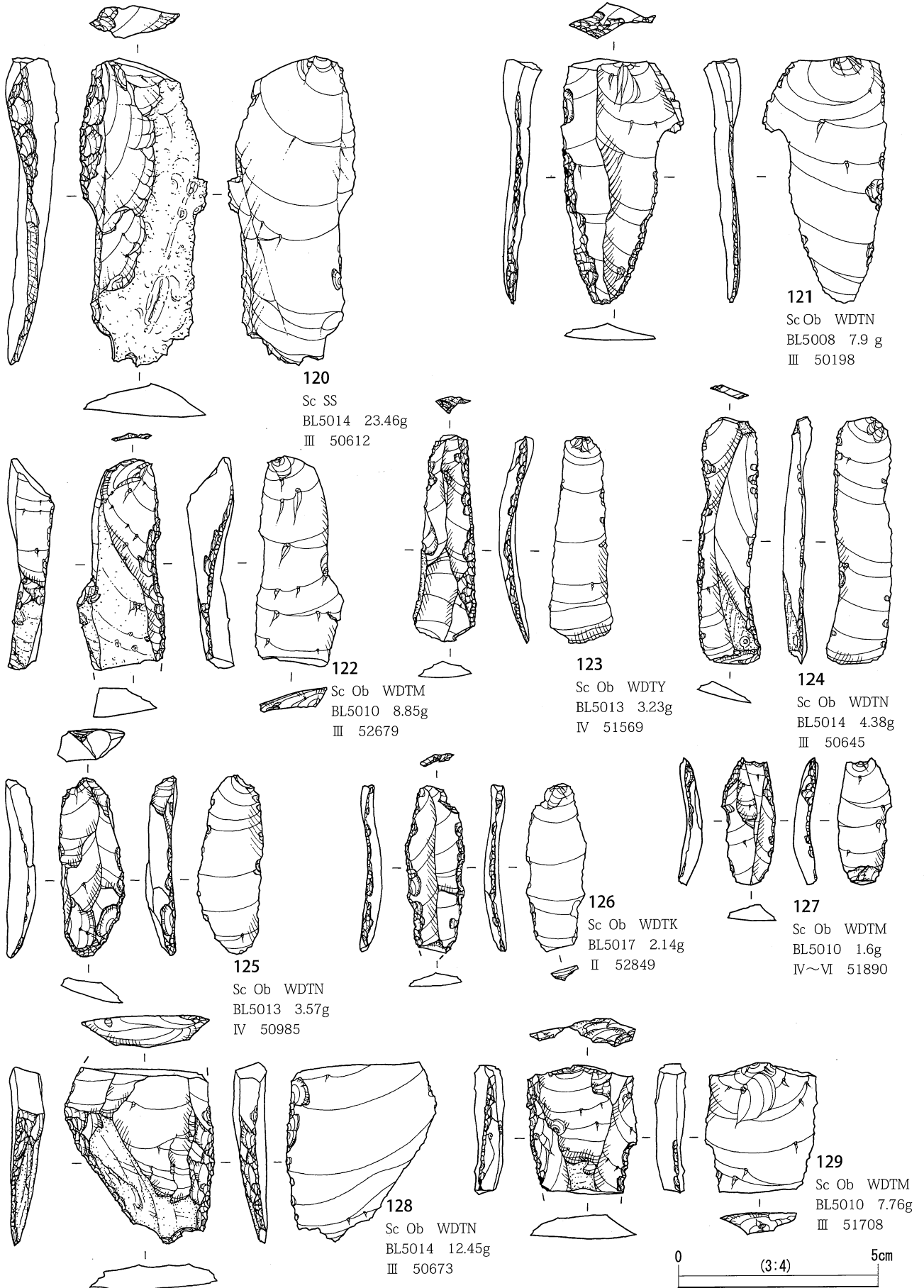
第44図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図13 (搔器4)



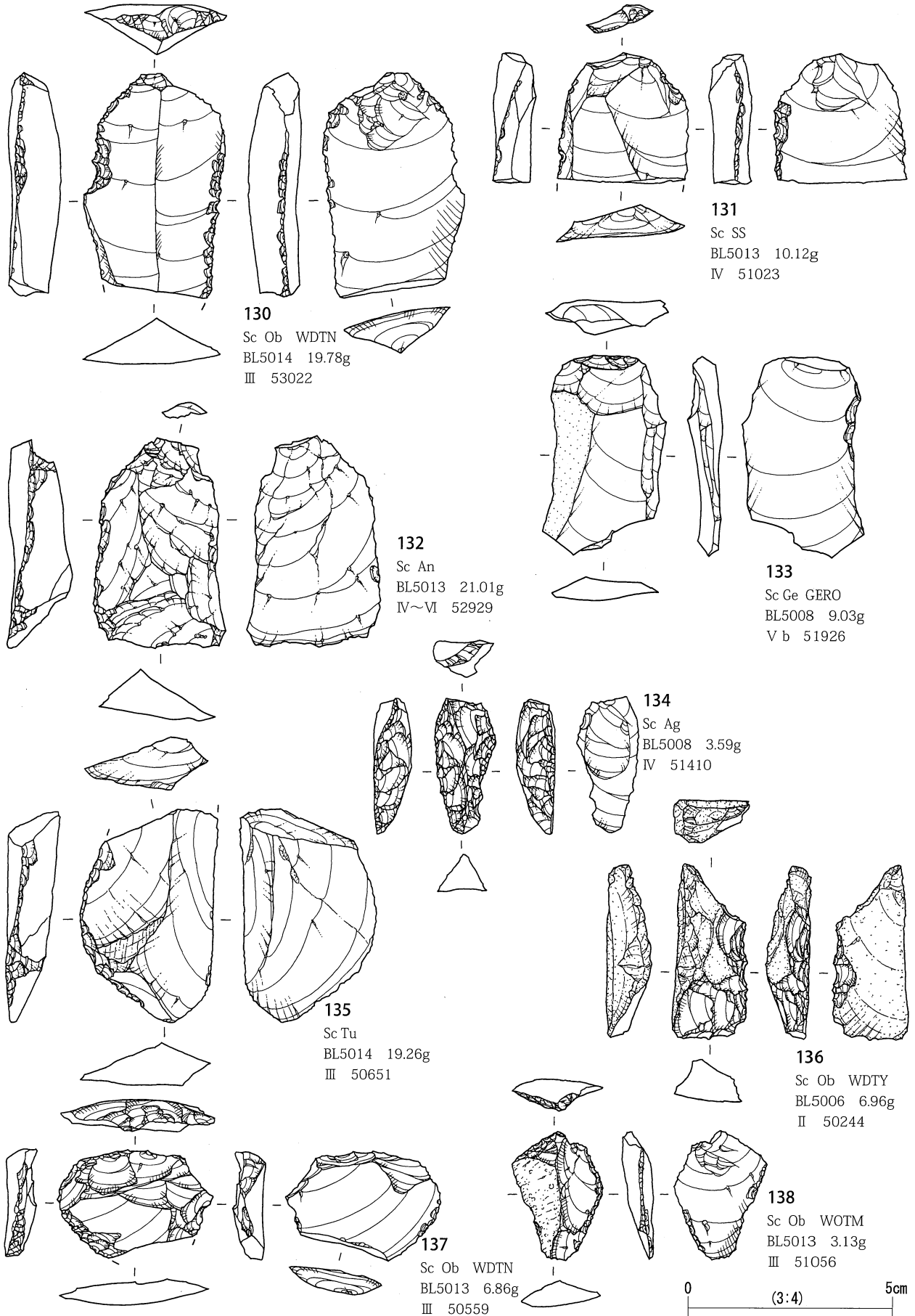
第45図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図14 (搔器5)



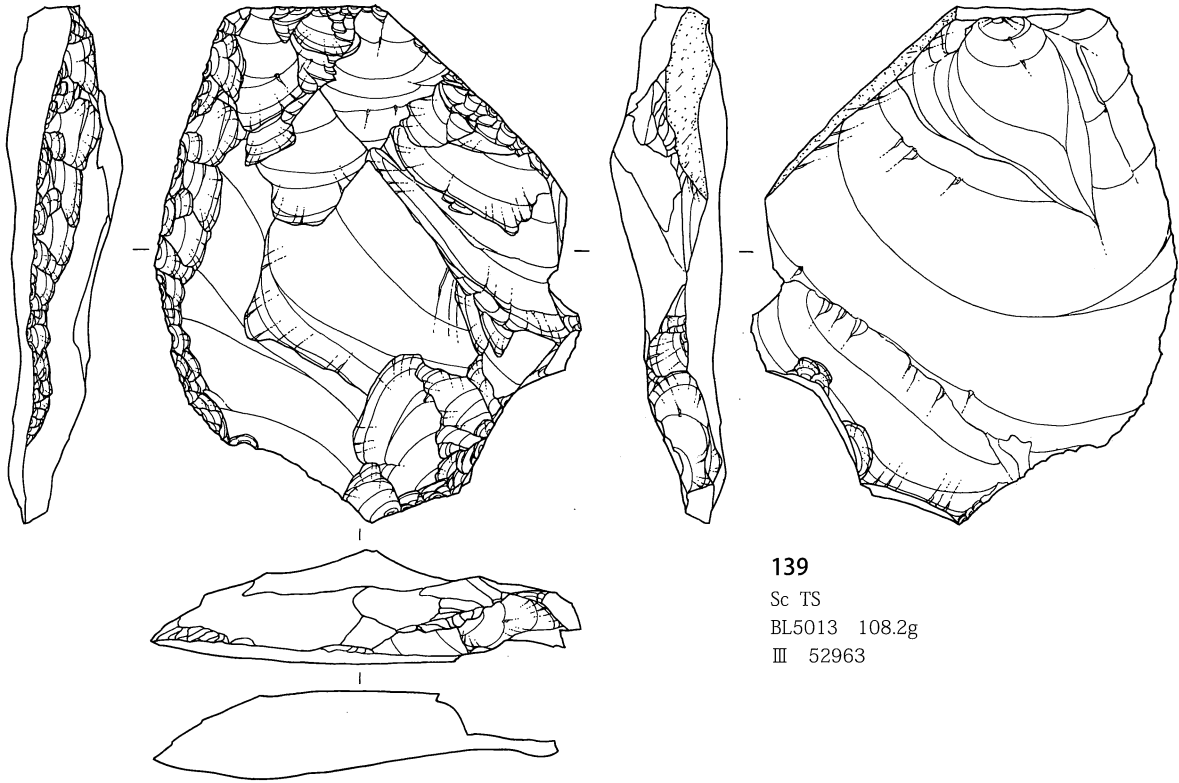
第46図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図15 (搔器6)



第47図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図16(削器1)

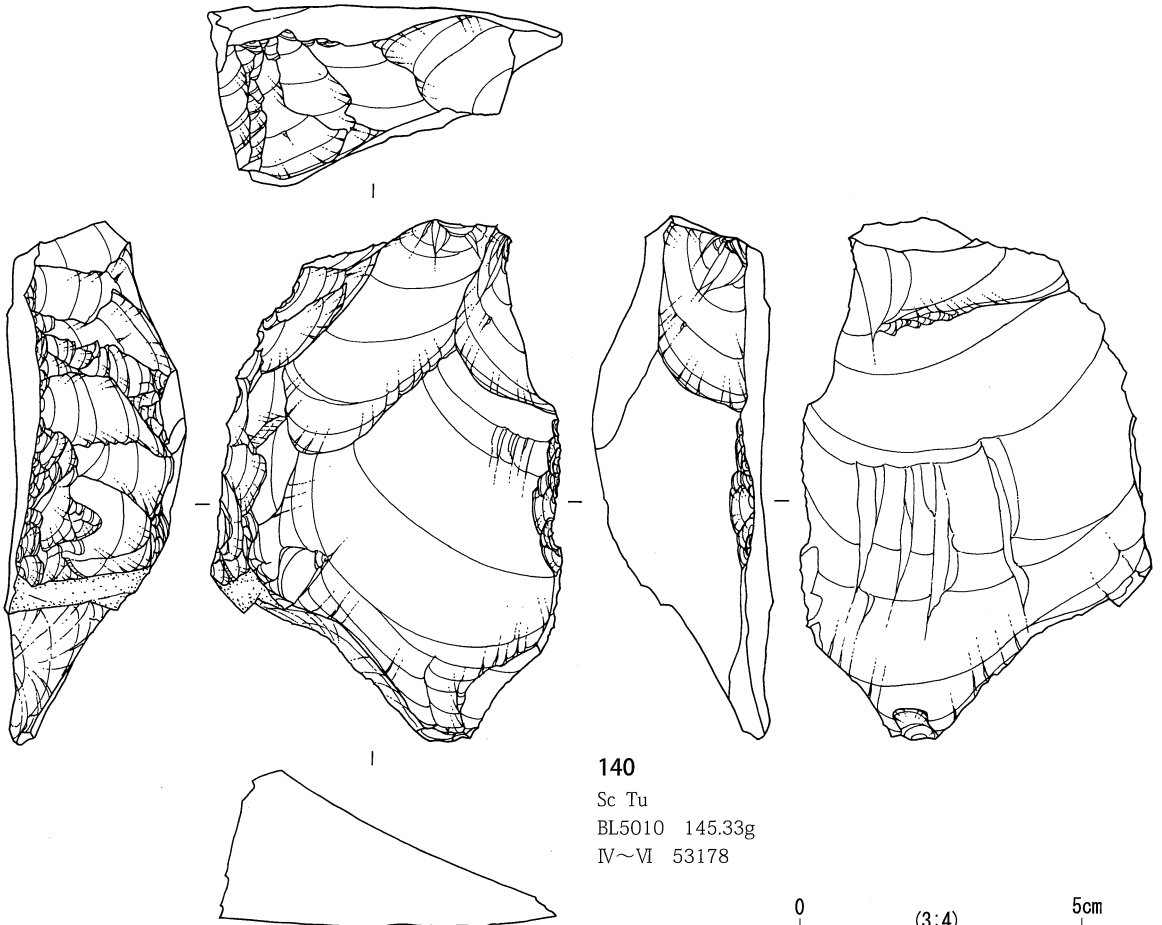


第48図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図17(削器2)



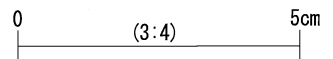
139

Sc TS
BL5013 108.2g
III 52963

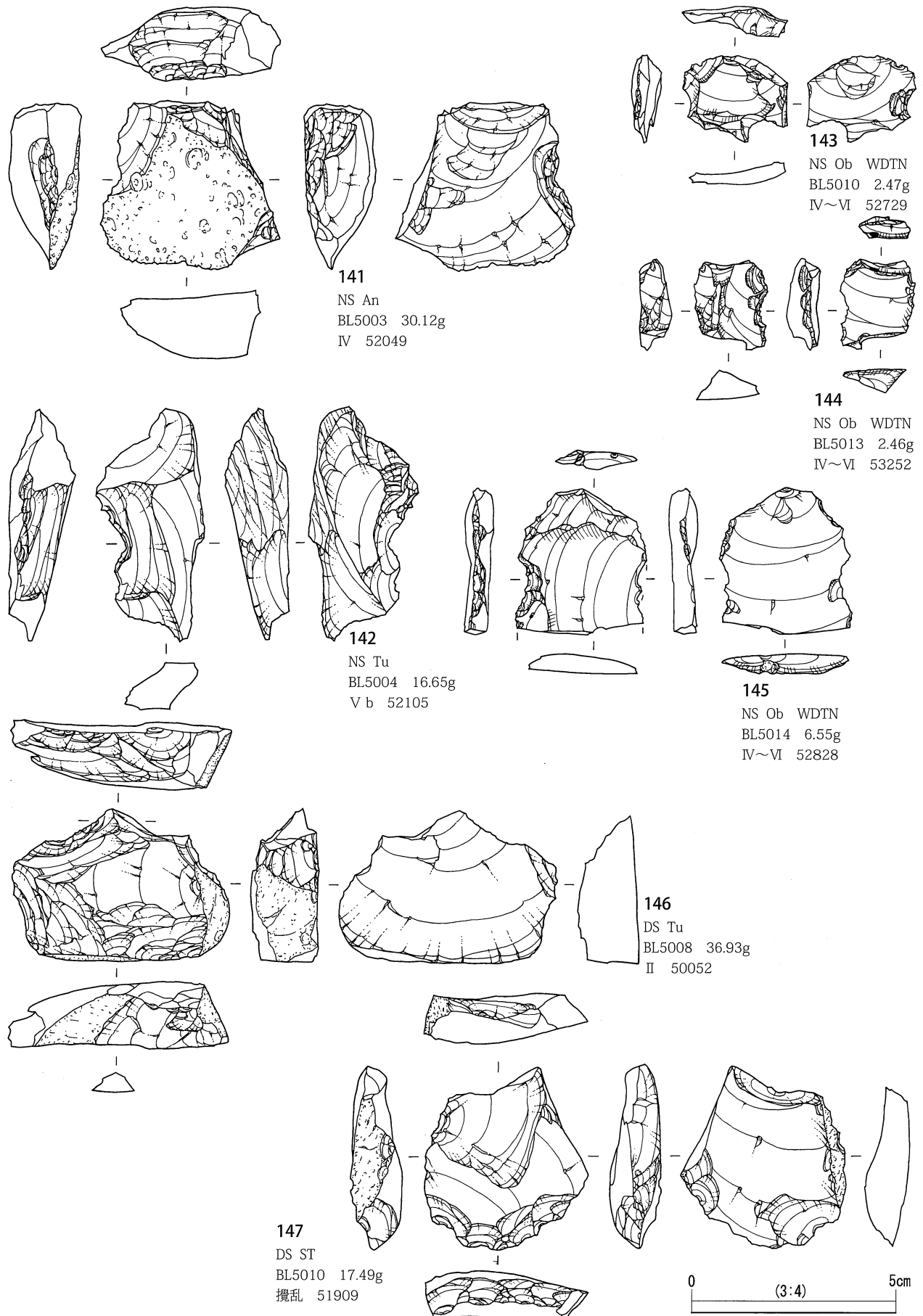


140

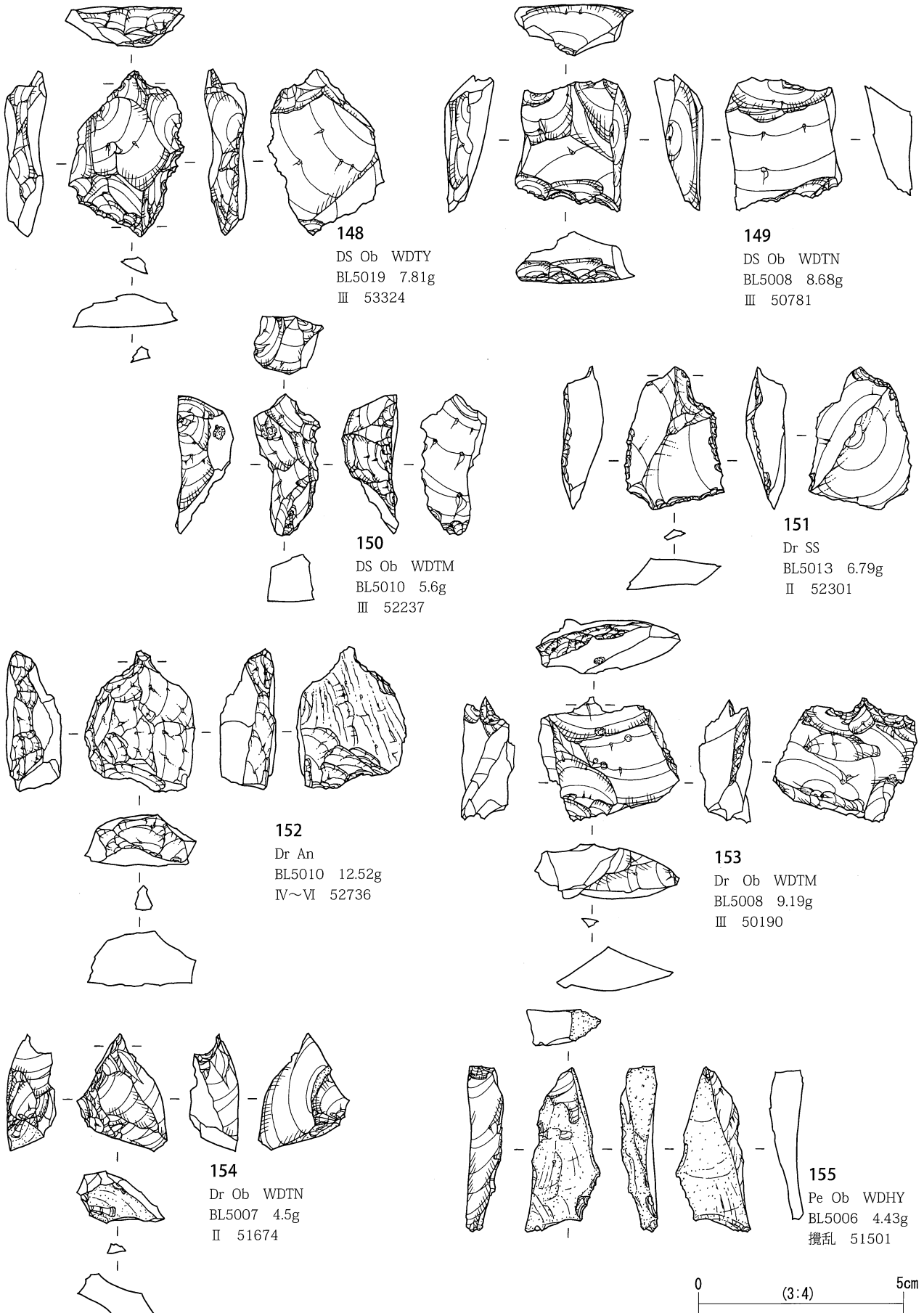
Sc Tu
BL5010 145.33g
IV~VI 53178



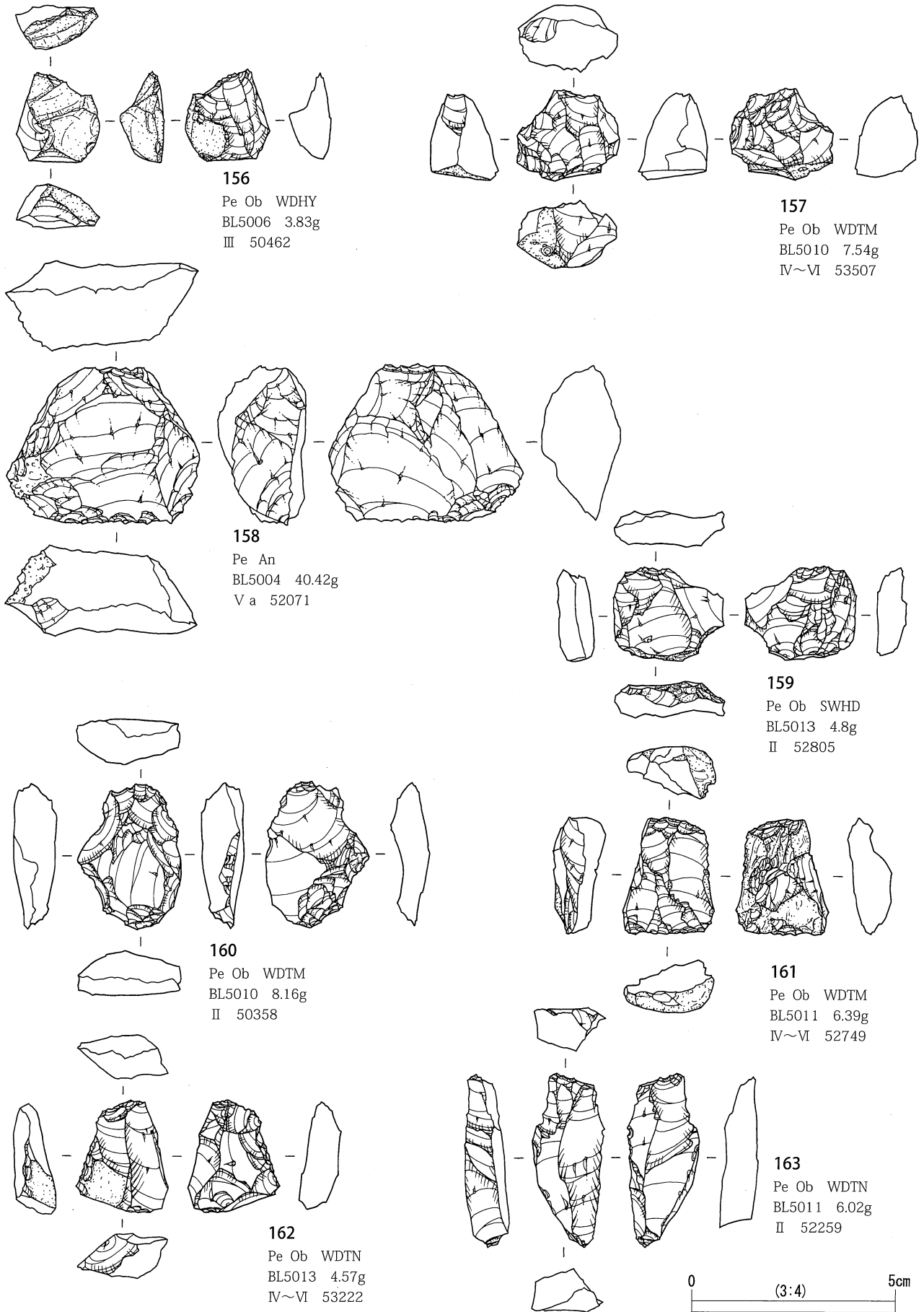
第49図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図18 (削器3)



第50図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図19 (抉入削器・鋸齒縁状削器1)



第51図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図20 (鋸齒縁状削器2・採錐器・楔形石器1)



第52図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 21 (楔形石器 2)

石刃（第53～55図・報告番号170～194）

60点の石刃が出土している。数は多いが遺跡内で剥離された痕跡はなく、他で製作されたものが持ち込まれていると思われる。

170～181には打面調整が施されている。182～189に打面調整はなく単剥離面、平坦な複剥離面、礫面等が打面となっている。頭部調整がはっきりと認められるものはない。

190には稜上調整がみられる。

191～194は打面が折れにより欠損している。

石核（第55～56図・報告番号195～200）

55点の石核が出土している。多くが貝殻状剥片剥離の痕跡をもつ石核で、剥離枚数が少なく形状に斉一性はない。

195は無斑晶質安山岩の剥片素材の石核である。素材の腹面と背面を作業面として、数枚の貝殻状剥片剥離を行っている。

196は無斑晶質安山岩のチョッピングツール状の石核である。作業面と打面を交互に入れ替えて貝殻状剥片を剥離している。

197は無斑晶質安山岩の縦長剥片剥離の痕跡をもつ石核である。石核調整はみられない。

198は黒曜石の楔状の石核である。小形の縦長剥片剥離の痕跡をもつが、有効な剥片が得られたかは疑問である。楔形石器の可能性も考えられる。

199は黒曜石の縦長剥片を剥離した石核である。離れたブロックから出土した2点が接合している。199bは剥離後に打面と作業面の接する単部を尖頭部に加工して、揉錐器として利用した可能性がある。

200は黒曜石の小形石刃石核である。打面再製剥片を含む剥片2点と石核が接合したものである。細石核の可能性も考えられたが、出土層位はいずれもV a層と深い。

斧形石器（第56～57図・報告番号201～204）

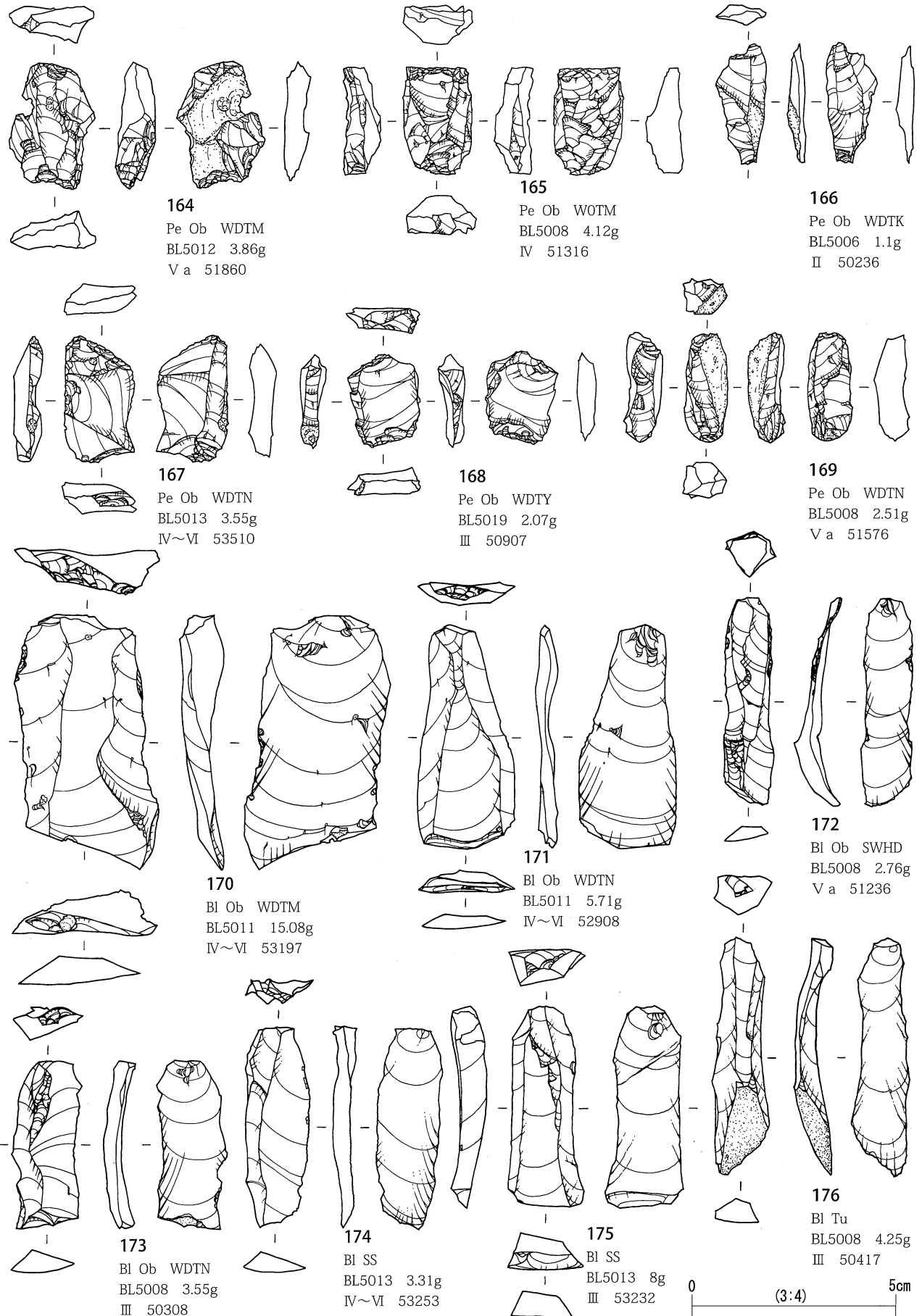
4点の斧形石器が出土している。すべて蛇紋岩製である。

201は背面に礫面を有する横長剥片を素材としている。右側縁は、下半部に平坦な正反方向の剥離が施され、上半部は切り立った折れ面となっている。素材打面は右側縁に置かれているが、加工により除去されている。左側縁は反方向の平坦な剥離を中心とした加工が施されている。両側縁とも下半部の加工は丁寧で、直線的な側縁が作出されているが、上半部の加工は粗く稜線が波打つ。研磨は刃部を中心に施されるが、所々、胴部や基部にまで達している。研磨方向は石器長軸にほぼ平行する。刃部腹面には研磨の段階差による稜がみられ、腹面基部にも研磨方向が交差する部位が認められる。刃部尖端はわずかに欠けているが、残っている部分は両面からの研磨により鋭く作出されている。平面形は左右対称で最大幅がやや下半部にあり、刃部が丸く基部が細い涙形を呈する。縦横の断面形は凸レンズ状を呈する。

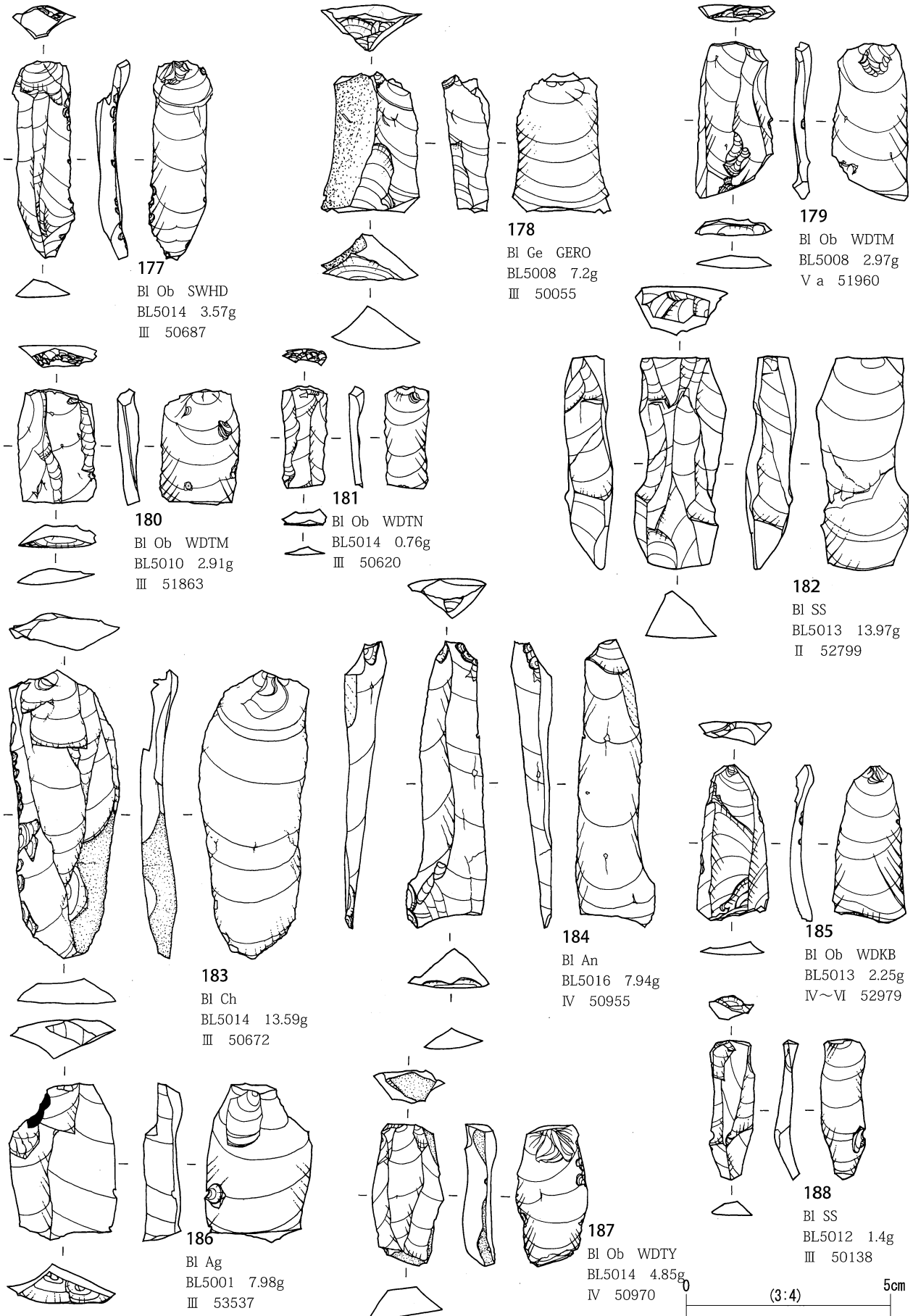
202は背面のほとんどが礫面となる横長剥片を素材としている。素材打面は左側縁に置かれ、正反方向の平坦な剥離が施され大部分が除去されているがわずかに残る。右側縁は反方向の平坦剥離が施され直線的な表裏の稜線が作出されている。刃部は先端方向からの大きく平坦な剥離がみられる。刃部再生を行おうとして、やめた結果であろうか。研磨は刃部付近に施されており、前記した刃部再生により大きく失われているが、残されている研磨部には石器長軸にほぼ平行する線条痕がみられる。平面形はわらじ形を呈し、縦横断面形は凸レンズ状を呈する。

203は大きく欠損しており素材の状況がつかめないが、残っている部分に礫面はない。基部の一部とみられるが、表裏に研磨面も認められる。

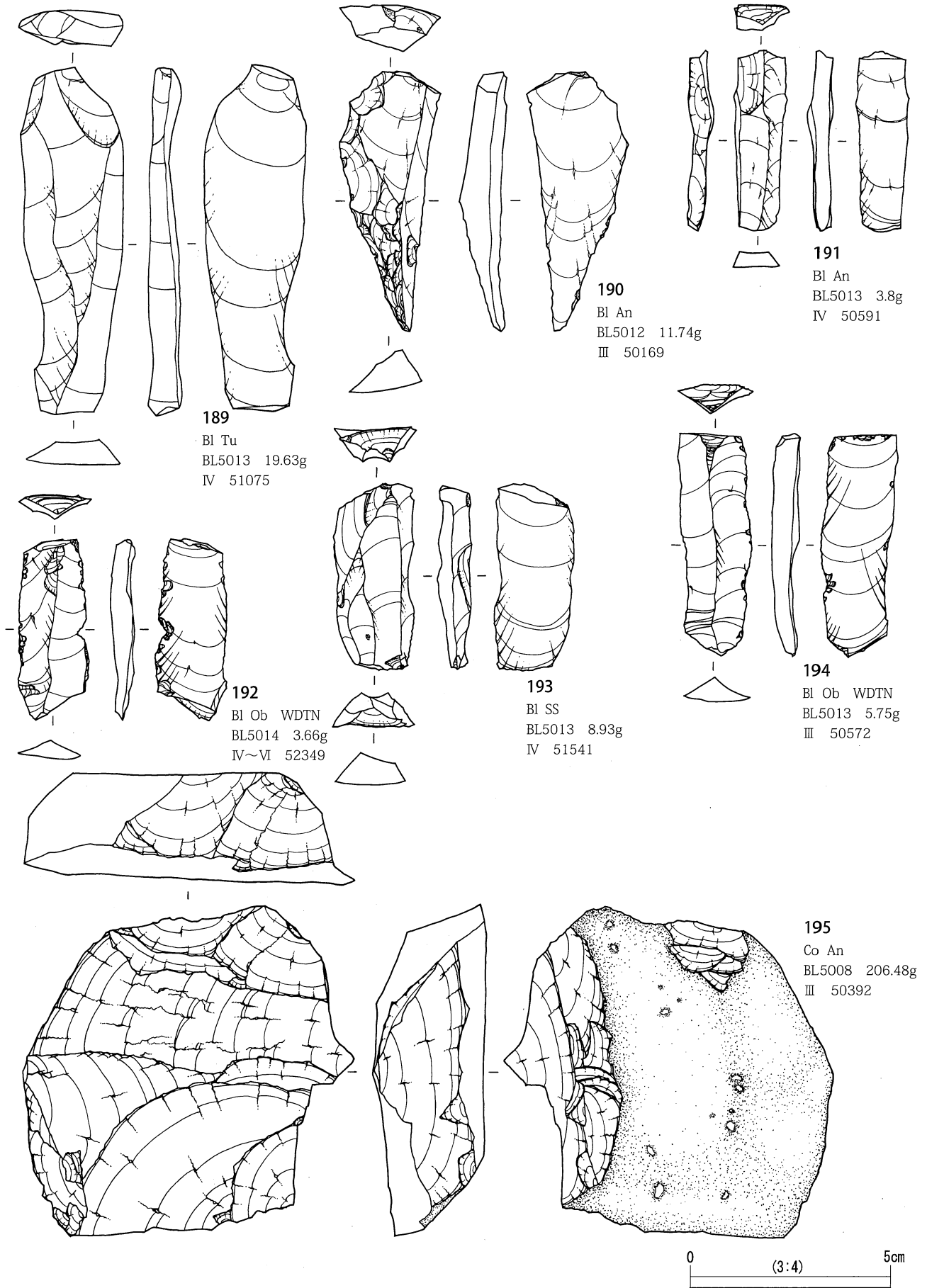
204は大形斧形石器の調整剥片を素材とした小形斧形石器であろうか。礫面のない幅広の若干縦に長



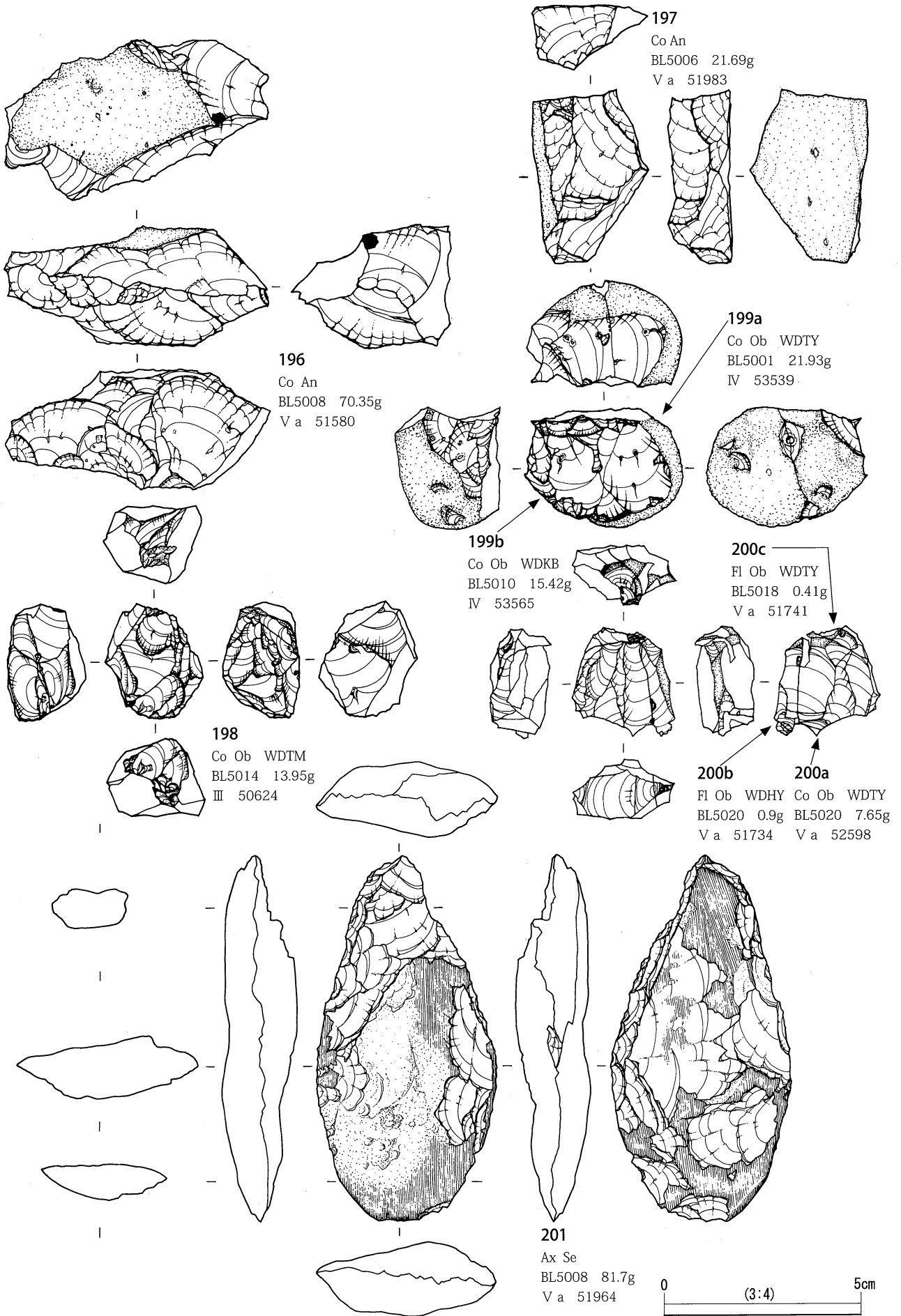
第53図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図 22 (楔形石器 3・石刃 1)



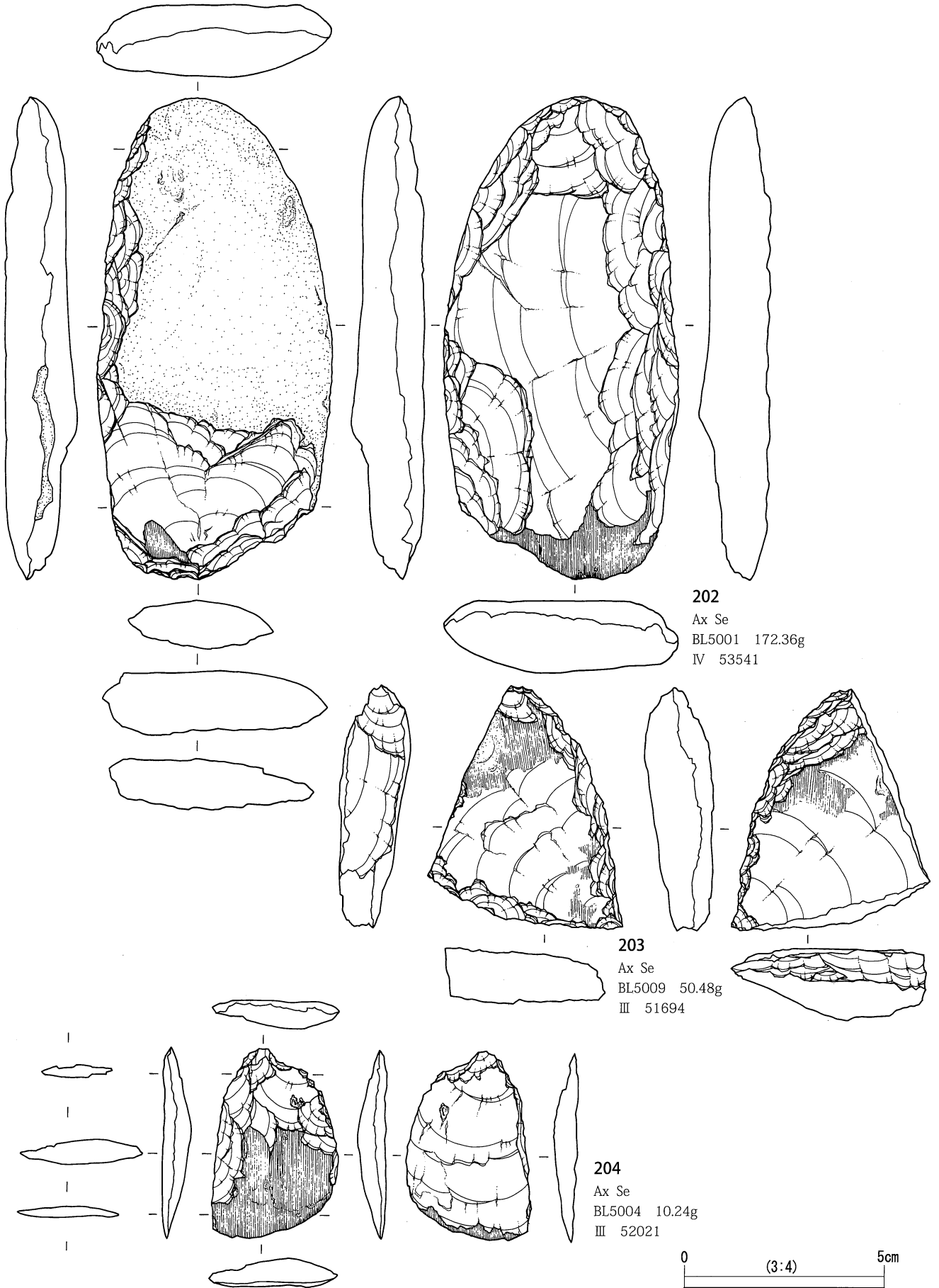
第54図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図23(石刃2)



第55図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図24 (石刃3・石核1)



第56図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図25 (石核2・斧形石器1)



第57図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図26(斧形石器2)

い剥片を素材としている。左右側縁への加工はわずかだが、表裏に研磨が施され鋭い刃部が作出されている。基部は欠損しているのであろうか。

敲石（第58～59図・報告番号205～210）

12点の敲石が出土している。石材は砂岩が多い。

205は扁平円盤の敲石である。ほぼ全周に敲打痕がみられる。

206は小形の棒状敲石である。端部および側縁に敲打痕がみられる。

207は大形棒状に敲石である。端部に敲打痕がみられる。

208は扁平長楕円形の敲石である。端部と側縁の一部に敲打痕がみられる。

209は大形棒状の敲石である。端部および側縁の広い部分に敲打痕がみられる。下端の剥離は敲打によるものではなく、意図的な加工の可能性が考えられる。

210は扁平長楕円形の敲石である。側面に敲打による面が形成されており、縄文時代早期の特殊磨石のように見えるが、磨痕がまったくない点で異なる。また、下面の折れ面をスタンプ形石器的に使用したと思われる敲打痕、および下面からの剥離も認められる。縄文時代石器の可能性がないとはいえないが、出土層位がIV層であることや209・211・212のような敲石、凹石の存在から旧石器時代の石器として捉えた。

凹石（第59図・報告番号211～212）

211と212は大形で太い棒状の礫が2つに折れたものに凹が残されている。凹は残存している胴部中央付近に位置している。凹は敲打痕の集合ではなく、細長い傷が集合した結果凹んだものと思われる。照月台遺跡や吹野原A遺跡県道地点においてこの種の凹石は、楔形石器との関係が予想された。貫ノ木遺跡にも楔形石器が多く組成している。

211の端部には敲石と同種の敲打痕がみられる。

槍先形尖頭器（第60図・報告番号213）

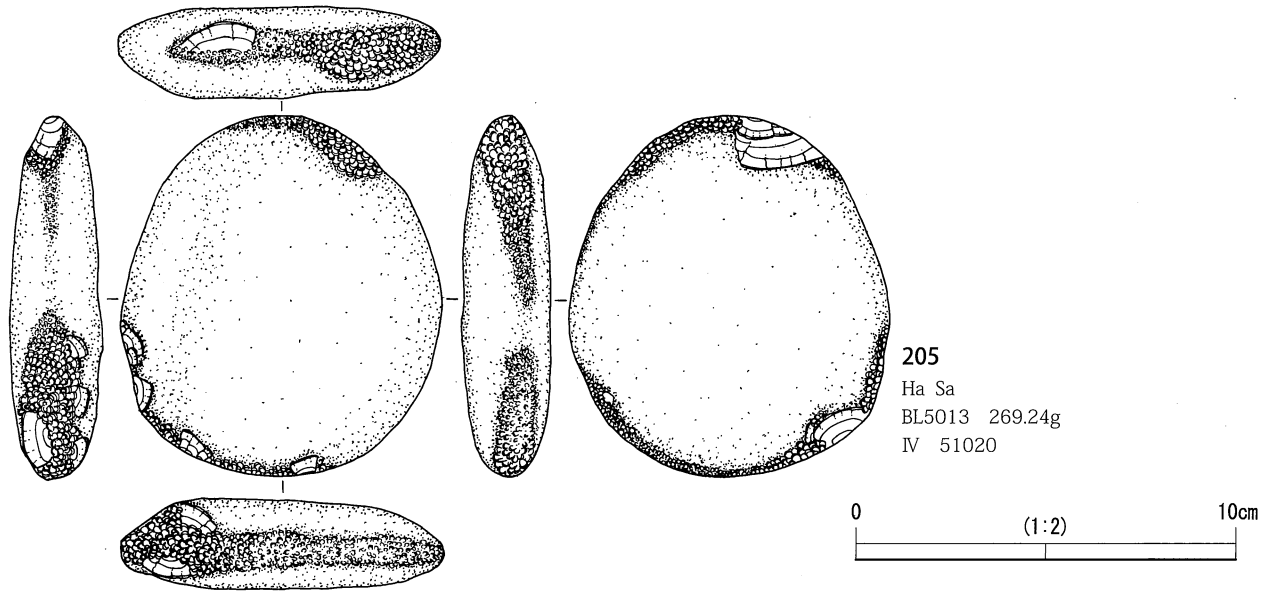
213は黒曜石の両面加工石器である。便宜上槍先形尖頭器としたが、典型的なものとは異なる。全面が剥離に覆われているため素材がわからない。尖端側半分は折れているが、折れ面から平面への平坦な加工が施されている。基部端も尖らず、完形形態も幅広を呈することから、細石器に関連する両面加工石器の可能性も考えられる。

細石核（第60図・報告番号214）

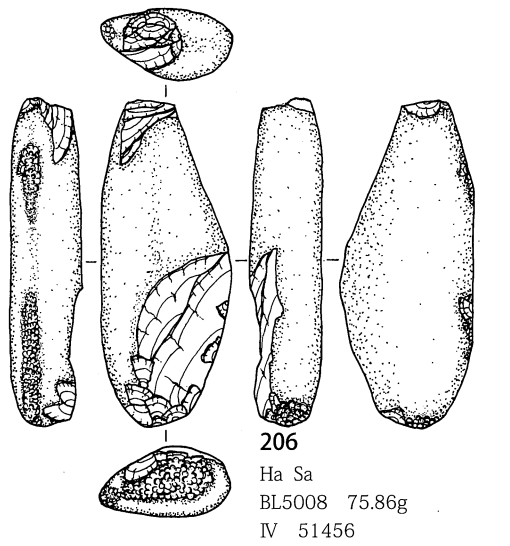
214は出土層位が浅く、連続して小石刃が剥離されていることから細石核とした。しかし、石材の黒曜石は和田土屋橋南群の産地が推定されており、ナイフ形石器の石器群に特徴的に存在する産地と同一となっている。顕著な頭部調整が施されており、単剥離打面から数枚の剥離が行われている。形状は稜柱形を呈するが、ナイフ形石器群の小石刃を剥離する石核との共通点もみられる。

細石刃（第60図・報告番号215）

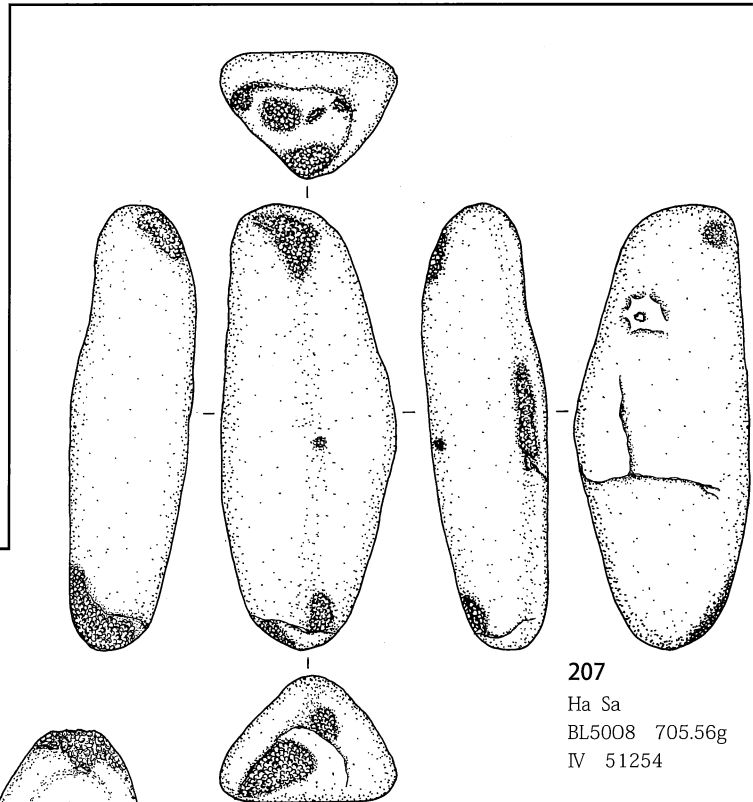
215は黒曜石の細石刃であるが、産地が和田土屋橋西とナイフ形石器群の産地と共通性があることから、ナイフ形石器群に属す小石刃の可能性も考えられる。



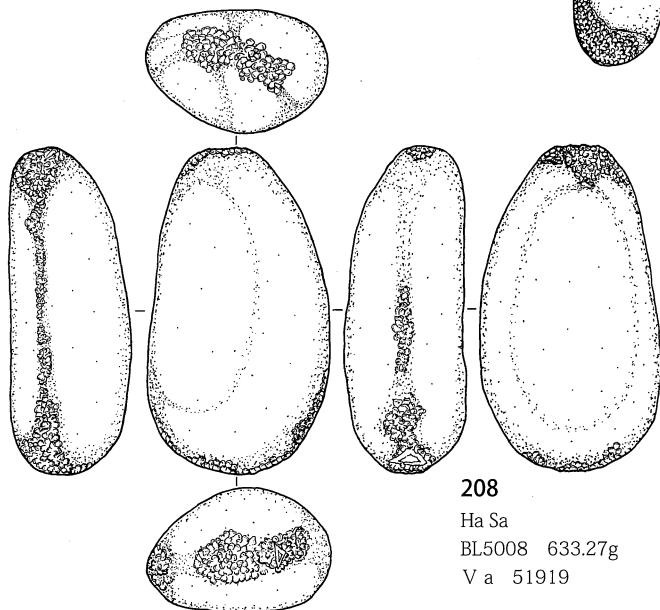
205
Ha Sa
BL5013 269.24g
IV 51020



206
Ha Sa
BL5008 75.86g
IV 51456

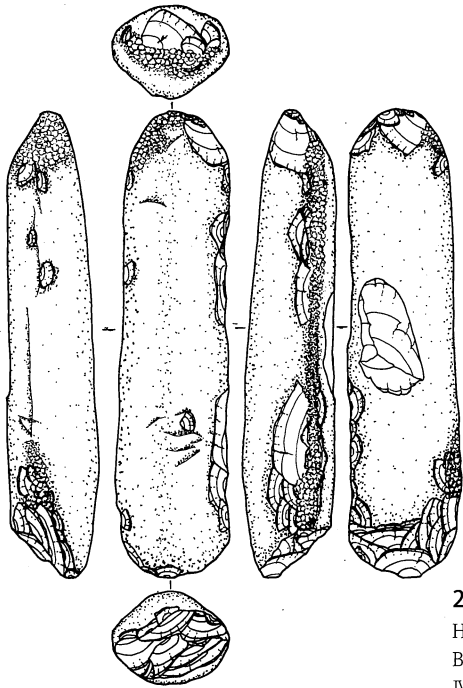


207
Ha Sa
BL5008 705.56g
IV 51254

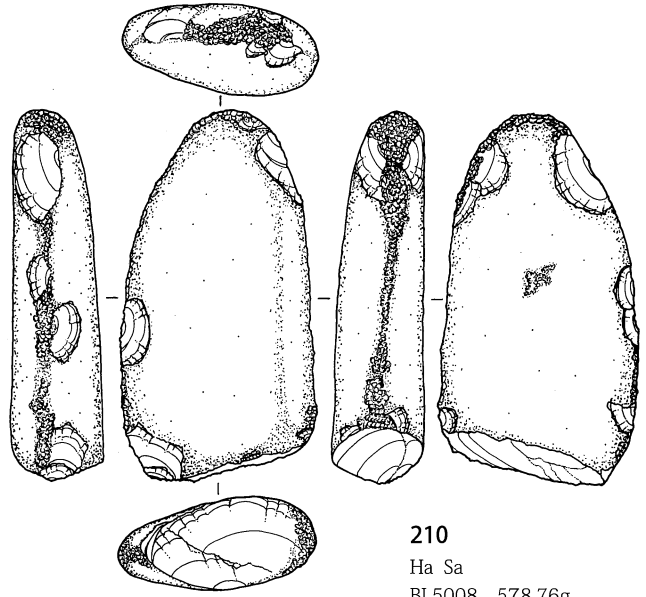


208
Ha Sa
BL5008 633.27g
V a 51919

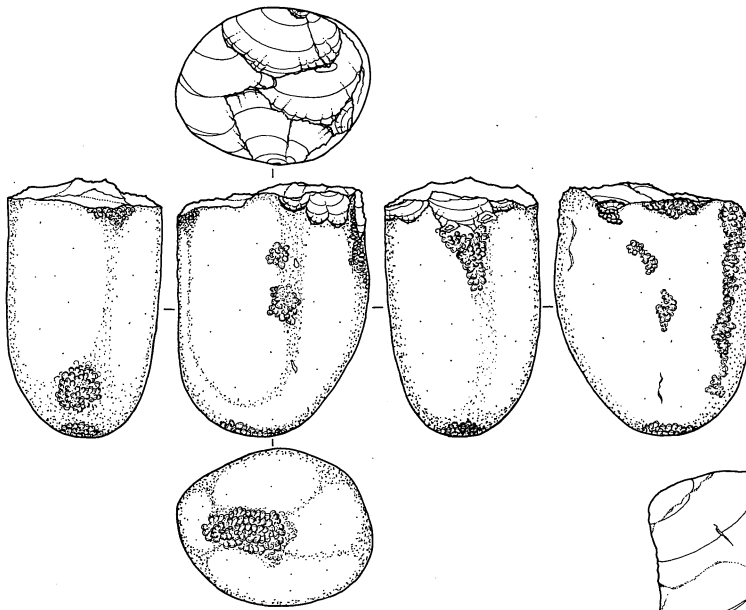
第58図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図27(敲石1)



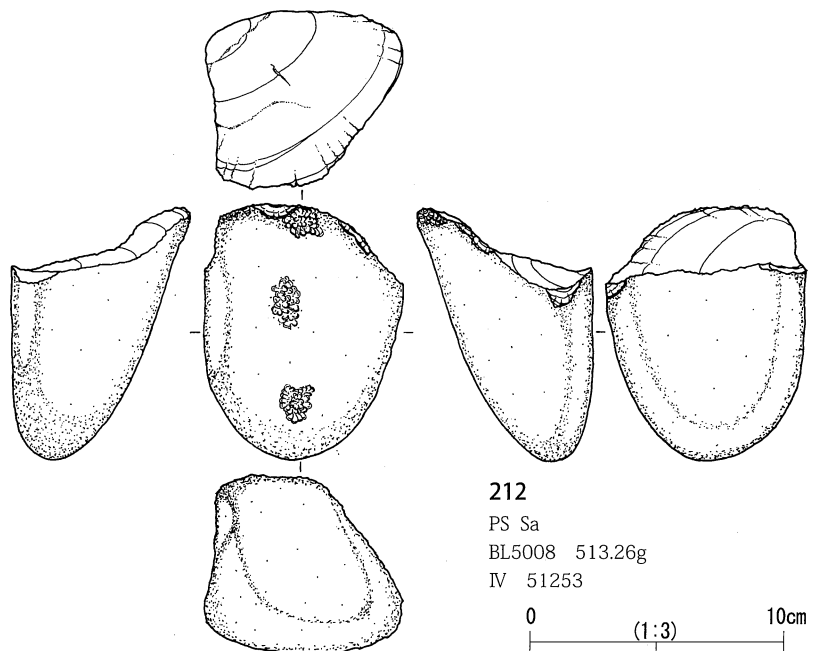
209
Ha Sh
BL5010 441.55g
IV~VI 52706



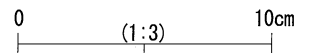
210
Ha Sa
BL5008 578.76g
IV 51183



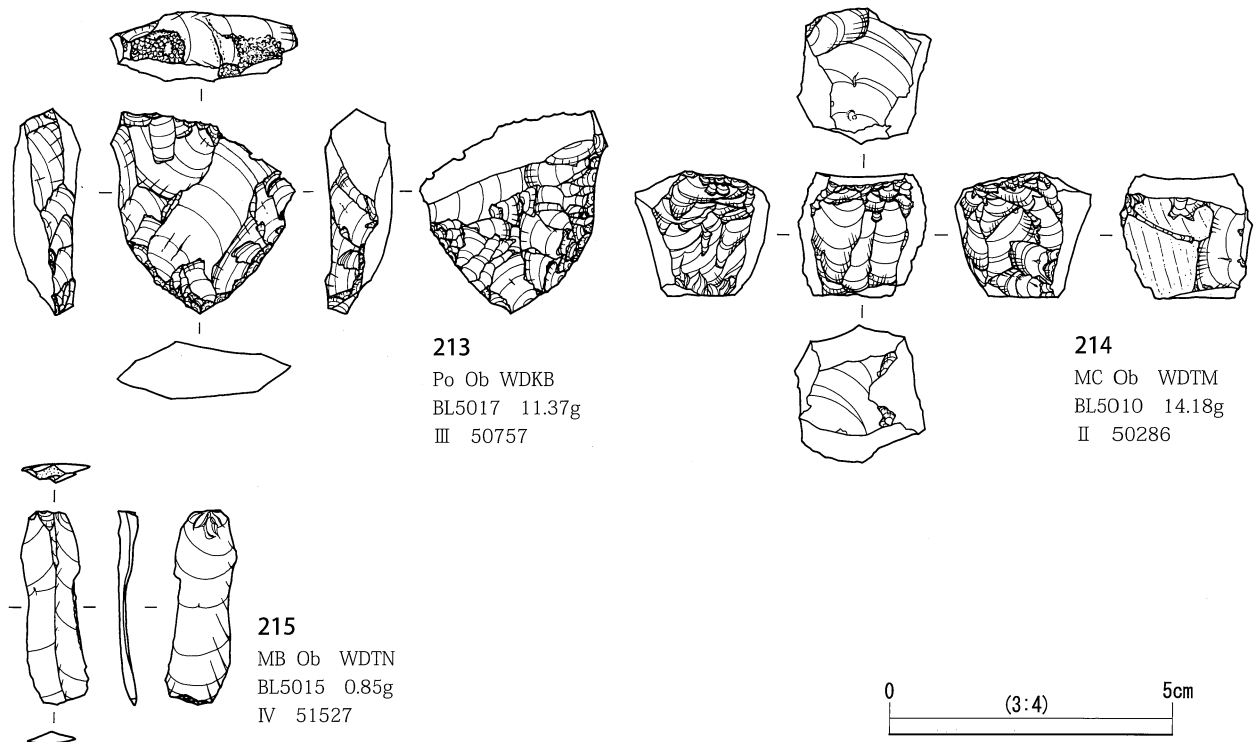
211
PS Sa
BL5008 705.6g
IV 51145



212
PS Sa
BL5008 513.26g
IV 51253



第59図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図28(敲石2・凹石)



第60図 貫ノ木遺跡旧石器時代石器実測図29（槍先形尖頭器・細石核・細石刃）

(2) 個体別資料

2,196点を対象に個体分類を行った。対象としたのは碎片と敲石等の礫石器以外のすべての器種である^{註1}。個体分類の基準については添付CD-ROM中の¥貫ノ木遺跡¥EXCEL¥貫ノ木個体分類基準表.XLSファイルに示した。また、個々の石器の個体番号は¥貫ノ木遺跡¥EXCEL¥貫ノ木石器属性表.XLSファイルに示した。

2,182点が301種の個体に分類された。2182点からはずれた14点は焼けや風化が原因で個体分類ができず、個体番号が9999となっている。第1章第4節の方法を原則として付したが、作業手順上ごく一部に1000未満の番号でも1点しかないもの、1001以上の番号でも複数あるものが存在する。

黒曜石については産地推定後に個体分類を行ったため、産地群単位で分類をした。そのため、異なる産地で同一の個体番号はないのが原則となっている。

異なる産地群間で接合したものがある。これらは産地群の第1候補の確立が低く、第2候補の確立が高い、中間的な元素組成をもつものである。そのため、測定誤差から1個体が2つの産地に推定されたと思われる。これらについては数が少ない個体を多い産地の個体番号に変えたため、例外的に同一個体番号中に複数の産地が推定されたものが存在する。

複数遺物を有する個体別のブロック分布状況について、添付CD-ROM中の¥貫ノ木遺跡¥EXCEL¥貫ノ木個体別ブロック分布状況.XLSファイルに示した。石材の分布状況と同じく、特定ブロックに集中することなく、各個体が分散しているといえよう。理由としては個体分類が難しい黒曜石が主体であること、2次的に動いていると考えられる遺物が含まれること、石材が均質に混ざりあう人間活動があったこと等が考えられる。

註1：作業上の都合で数点の例外あり。

(3) 接合資料**1. 接合資料の分布**

接合作業を行った結果、51組 115点の石器が接合した。接合資料の分布を第61図に示す。

接合線の方向性には等高線に平行する一群と、直交する一群の2種に大きく分けられる。

等高線に直交する接合線は、人為的な遺物の移動のほかに、斜面を転がり落ちるといった自然現象が考えられる。斜面に平行する接合線は自然現象での移動が考えづらいため、人為的移動の可能性が高い。

2. 接合資料

ほとんどの接合資料が2点の接合であり、最も多くても4点である。そのため、接合状況からの石器製作技術の復元はほとんどできない。

おもな接合資料を抽出し以下に記述する。

接合資料4 (第62図)

和田男女倉高松沢群の黒曜石の接合資料である。黒曜石の剥片素材の石核を含む。剥片剥離の際の衝撃により、裏面の礫面に残存していた力により、4つに割れている。したがって、打面はすべて裏面としたが、人為的な打撃ではない。また、剥離順序もつけてあるが、同時割れと考えられようか。搔器としたものが1点含まれているが、搔器として機能していたのはこの接合資料が分割される前の段階と思われる。

接合資料9 (第62図)

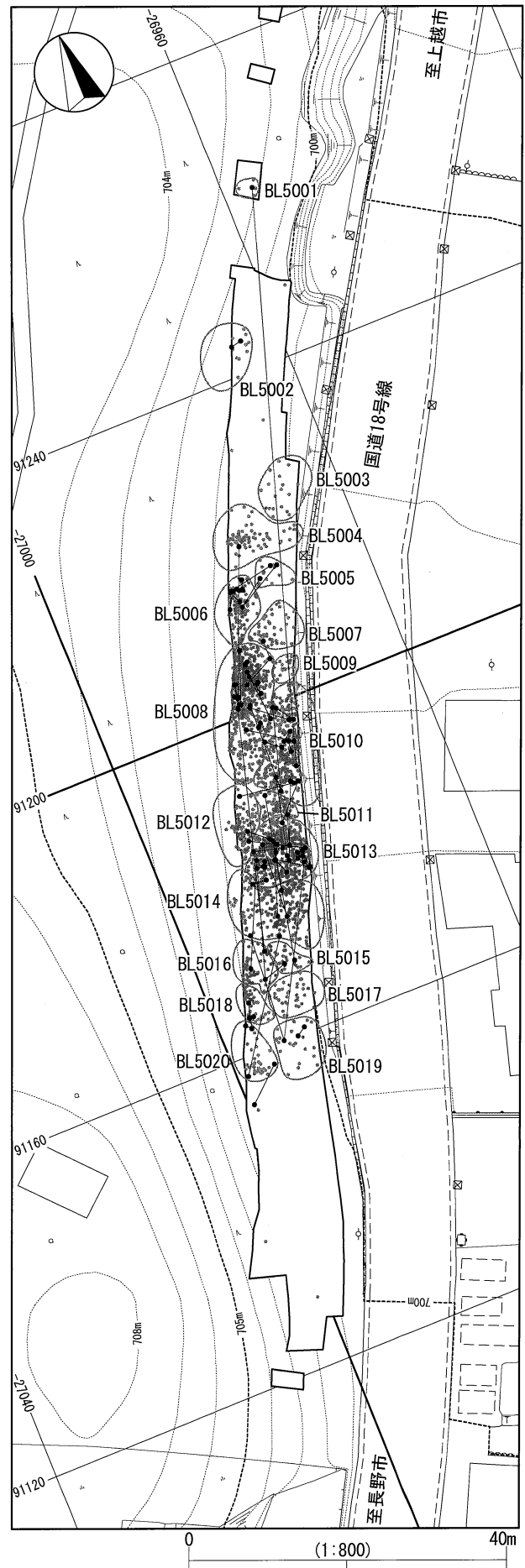
和田鷹山群の黒曜石の小形石刃石核から連続して剥離された石刃と縦長剥片の接合である。打面、作業面とも共通している。

接合資料10 (第62図)

和田鷹山群の黒曜石の接合資料である。2次加工のある剥片の折れと、調整剥片の接合である。接合した結果、2次加工のある剥片が鋸歯縁状削器の可能性が高いと考えられる。

接合資料12 (第62図)

和田鷹山群と和田芙蓉ライト群の黒曜石の接合資料である。両産地群は値が近く中間的なものが存在するため、接合しても矛盾はない。小形石刃石核と小形縦長剥片の接合である。



第61図 貫ノ木遺跡接合資料分布図

接合資料 15 (第 62 図)

和田鷹山群の黒曜石の接合資料である。分厚い剥片を素材とする石核から、剥離された剥片 3 点と石核 1 点の接合資料である。貝殻状剥片を目的剥片とするが、あまり有効な剥片は得られていないようだ。

接合資料 25 (第 62 図)

和田土屋橋西群の黒曜石のナイフ形石器と石刃の接合である。接合はしないが明らかに同一個体と思われる削器(報告番号 130)と石刃が存在する。いずれも反りの小さい整った石刃および石刃素材の石器であり、他の場所で剥離されたものが、製品あるいは素材として持ち込まれたと考えられる。

接合資料 31 (第 63 図)

和田鷹山群と和田小深沢群の異なる産地が推定されている黒曜石同士の接合である。両産値群は値が近く中間的なものが存在するため、接合しても矛盾はない。ピンポン玉のような黒曜石の円礫を素材とした石核同士の接合で、両者の出土位置は約 100m も離れている。第 10 号ブロックから検出されたものは、揉錐器として利用された可能性が考えられる。

接合資料 41 (第 63 図)

無斑晶質安山岩の削器と微細剥離のある剥片の接合である。両者の打面は同一面となっているが、若干のずれがある。

接合資料 43 (第 63 図)

無斑晶質安山岩の剥片 3 点の接合である。同一作業面での 90° の打面転移がみられる。

(4) 剥片剥離技術

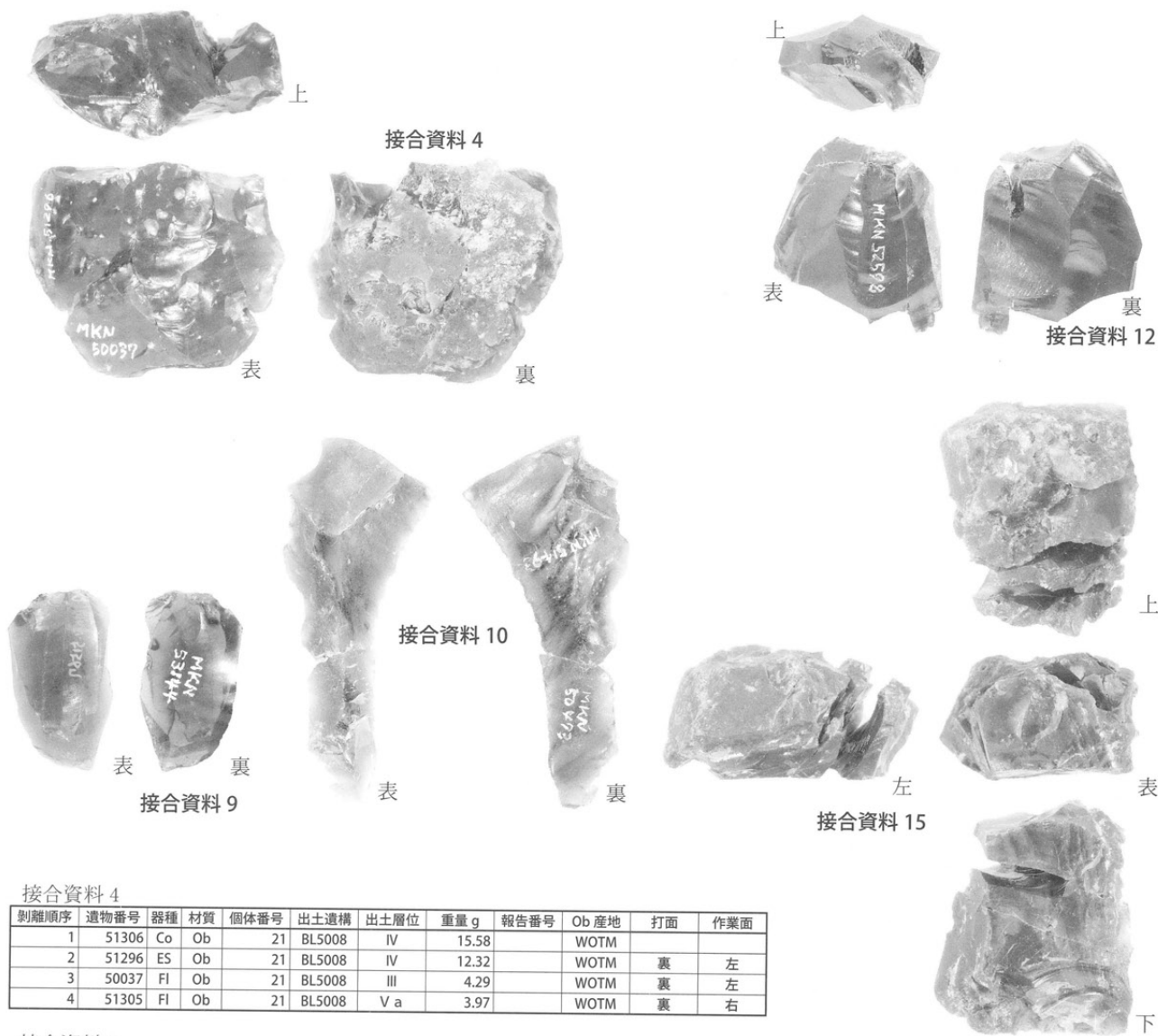
剥片数に対する石核数の割合が低く、接合作業においてもその接合数が少なかった。2837 点もの石器が検出されていることから、調査区幅の狭さだけでなく、遺跡の性格によるものと思われる。

検出された石器群にみられる目的剥片の形態は以下の 2 つに大別される。

1 つは石刃を代表とする縦長剥片である。大形・中形の石刃は石核がなく、剥片剥離の痕跡がほとんどみられない。打面調整が顕著だが頭部調整は少ないため、打面が広く残るものが多い。その打面がナイフ形石器の基部におかれるため、その加工は素材を強く断ち切るものとなっている。大形・中形の石刃はナイフ形石器のほかに彫器、搔器、削器の素材として用いられている。

小形の石刃については少量だが、石核や接合資料が存在する。報告番号 200 (接合資料 12・第 56 図・第 62 図) や接合資料 9 (第 62 図) が該当する。これらについては細石核・細石刃とした報告番号 214・215 (第 60 図) との共通性があり、細石器関連資料の可能性もあろう。しかし、決定的な細石器の特徴がみられず、接合資料 12 については出土層位が 3 点とも V a 層で、本来細石器が包含される III 層より深い。そのため、細石器よりは主体となるナイフ形石器石器群に属す可能性が高いと思われる。これら小形石刃石核には頭部調整がみられるが打面調整は少ない。小形石刃を素材とする器種はみられない。

目的剥片の 2 つめは貝殻状剥片である。形状・大きさとも様々で、目的形状の規制が低い。石核も大形剥片を素材として、作業面を素材の背面あるいは腹面の広い面に固定する板状石核や、打面と作業面を入れ替えるチョッピングツール状の石核がみられる。貝殻状剥片を素材とする器種には台形石器、貝殻状刃器、楔形石器等がある。



接合資料 4

剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	Ob 産地	打面	作業面
1	51306	Co	Ob	21	BL5008	IV	15.58		WOTM		
2	51296	ES	Ob	21	BL5008	IV	12.32		WOTM	裏	左
3	50037	Fl	Ob	21	BL5008	III	4.29		WOTM	裏	左
4	51305	Fl	Ob	21	BL5008	V a	3.97		WOTM	裏	右

接合資料 9

剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	Ob 産地	打面	作業面
1	51567	Bl	Ob	26	BL5013	IV	1.01		WDTY	上	表
2	53144	Fl	Ob	26	BL5013	IV~VI	5.47		WDTY	上	表

接合資料 10

剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	Ob 産地	打面	作業面
1	51618	Fl	Ob	28	BL5005	IV	2.4		WDTY	裏	表
2	51493	RF	Ob	28	BL5006	V a	9.31		WDTY	上	表
3	50473	UF	Ob	28	BL5005	III	3.21		WDTY	上	表

接合資料 12

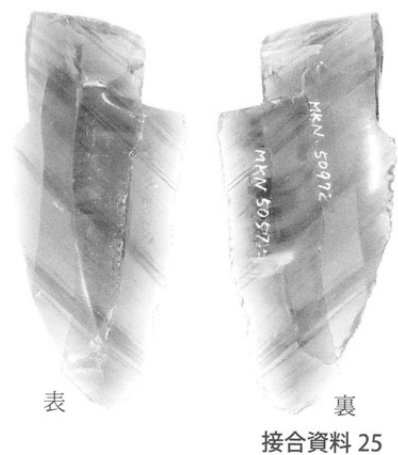
剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	Ob 産地	打面	作業面
1	51741	Fl	Ob	32	BL5018	V a	0.41	200	WDTY	右	上
2	51734	Fl	Ob	32	BL5020	V a	0.9	200	WDHY	上	左
3	52598	Co	Ob	32	BL5020	V a	7.65	200	WDTY		

接合資料 15

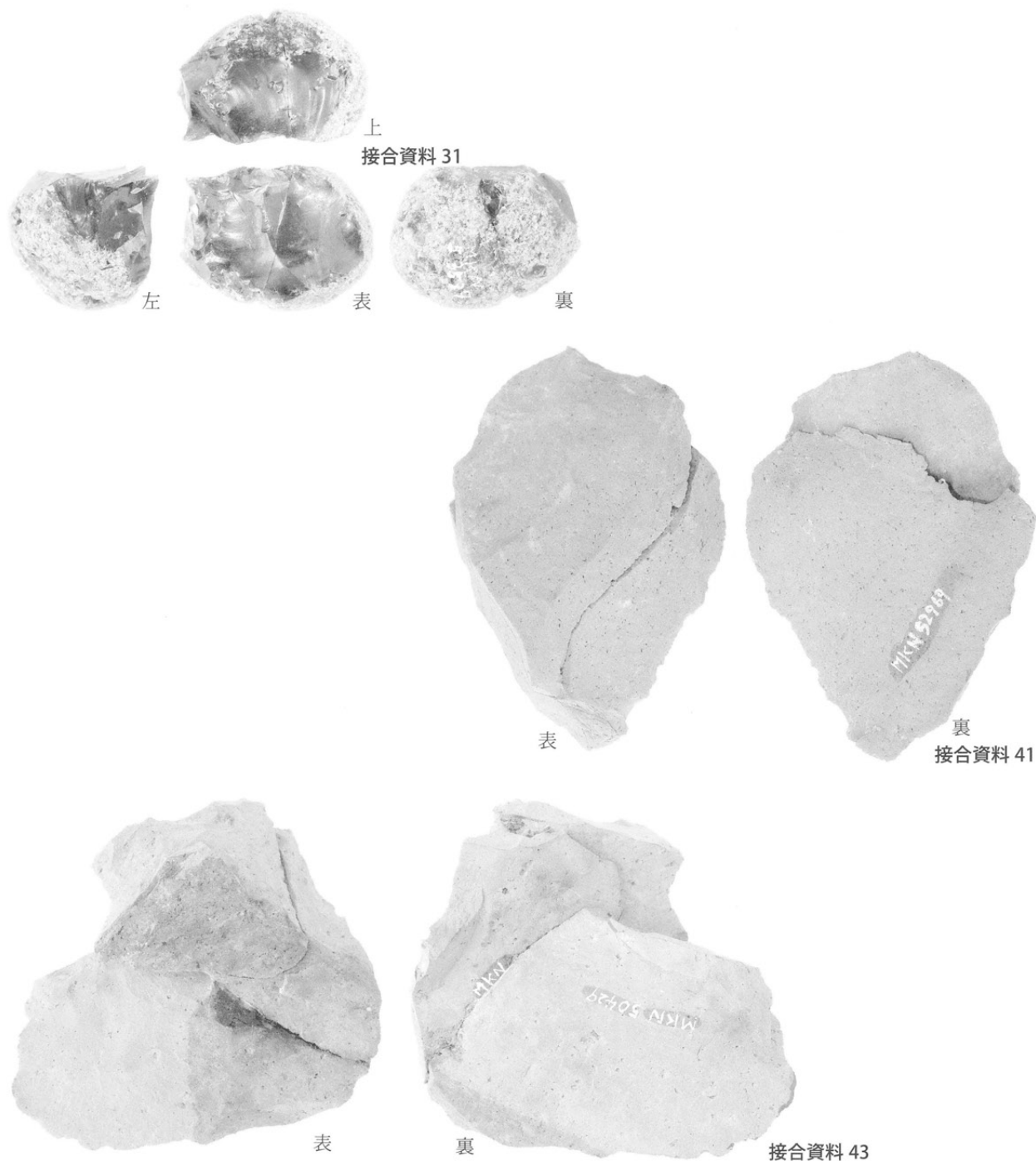
剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	Ob 産地	打面	作業面
1	51997	Fl	Ob	34	BL5006	V b	4.86		WDTY	上	表
2	51500	Fl	Ob	34	BL5006	IV	6.62		WDTY	上	表
3	51621	Fl	Ob	34	BL5005	IV	10.98		WDTY	右	裏
4	50472	Co	Ob	34	BL5006	III	17.19		WDTY		

接合資料 25

剥離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	Ob 産地	打面	作業面
1	50972	Kn	Ob	58	BL5014	IV	10.93	27	WDTN	上	表
2	50572	Bl	Ob	58	BL5013	III	5.75	194	WDTN	上	表



第 62 図 貫ノ木遺跡の石器接合資料 1



接合資料 31

剝離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	Ob 産地	打面	作業面
1	53539	Co	Ob	1014	BL5001	IV	21.93	199a	WDTY		
2	53565	Co	Ob	1014	BL5010	III	15.42	199b	WDKB		

接合資料 41

剝離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	Ob 産地	打面	作業面
1	52233	UF	An	109	BL5010	IV~VI	33.13			上	表
2	52969	Sc	An	109	BL5013	III	48.58			上	表

接合資料 43

剝離順序	遺物番号	器種	材質	個体番号	出土遺構	出土層位	重量 g	報告番号	Ob 産地	打面	作業面
1	51335	Fl	An	119	BL5008	IV	21.35			上	表
2	50419	Fl	An	119	BL5008	III	18.57			上	表
3	50429	Fl	An	119	BL5007	III	44.93			右	表



第 63 図 貫ノ木遺跡の石器接合資料 2

第3節 縄文時代

1 概要

(1) 遺物の分布

縄文土器の分布域は南北に長い調査区の南側に偏り、北に向かうにつれ漸移的に密度が低くなる。土器片および石器は原則として、個々の出土位置の座標および出土層位を遺物取り上げ時に記録した。その後文様分類を行って作成した土器の分布を第64図に示した。文様分類とそれぞれの分布の特色を以下に記す。

1. 隆起線文土器の分布

調査区南端付近に1個体が集中して出土している。

2. 表裏縄文土器の分布

破片数、個体数とも多いが復元できる個体がない。特定の場所に集中せず全体に広く分散している。

3. 撚糸文土器の分布

破片数が少なく集中して分布することもない。

4. 押型文土器の分布

格子目文が主体となっており、復元できる1個体が集中して出土しているが、その他は分散している。

5. 無文土器の分布

縄文時代早期に属するものが主体である。表裏縄文土器同様に全体的に分散している。

6. 沈線文土器の分布

数量は少ないが多くが1ヶ所にまとまって分布する。

7. 条痕文系土器の分布

数量は少なく分散している。

8. 早期末～前期縄文土器の分布

繊維を含む縄文時代前期の土器片が分散している。

9. その他の土器の分布

時期を特定することができない縄文が施文された土器を「縄文土器」、平安時代の素焼きの土器片を「土師器」、破片が小さいことや摩滅が原因で判別ができなかった土器を「不明土器」として分布図に載せた。土師器は1軒検出されている平安時代の住居跡に関連すると思われる。

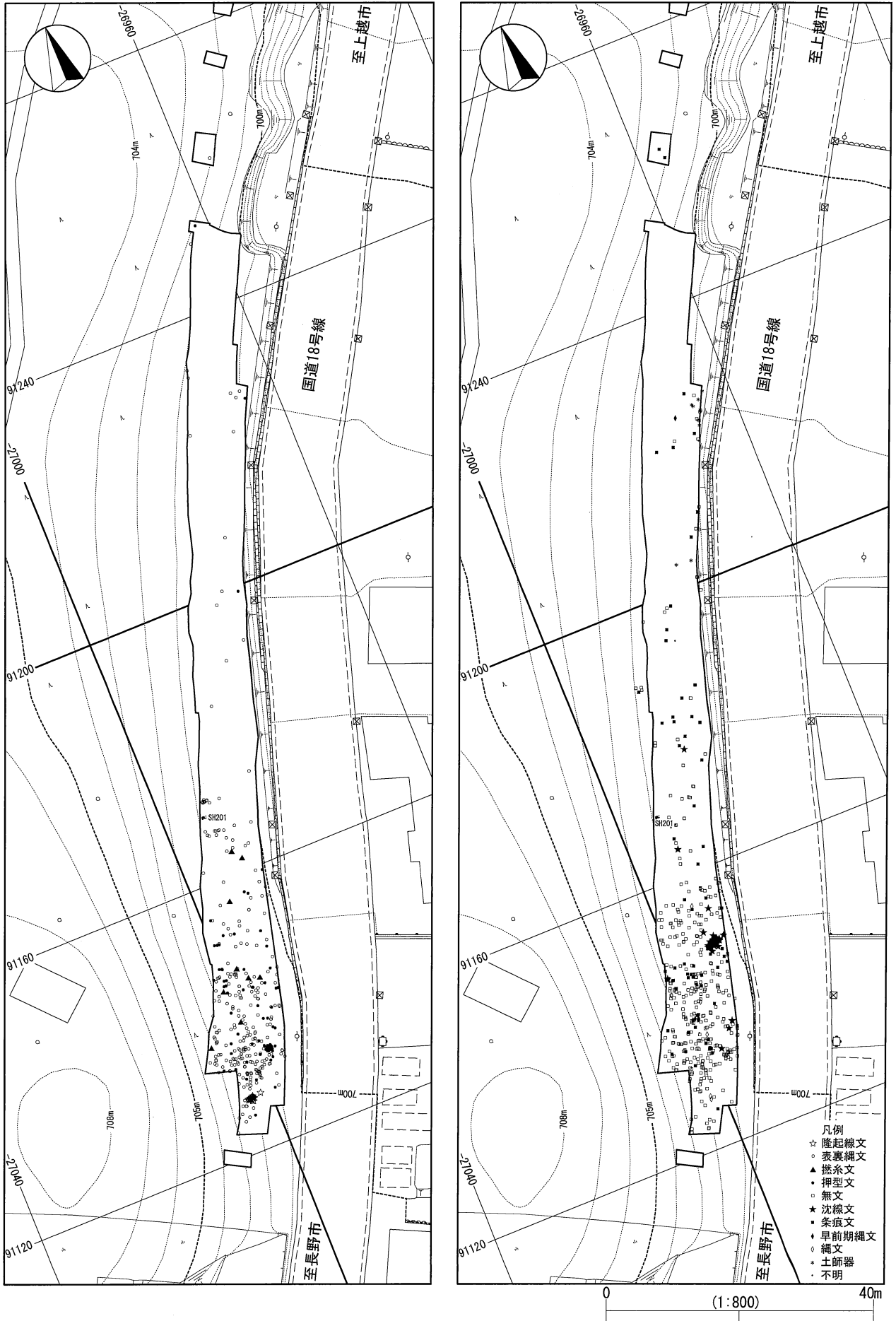
10. 接合した土器の分布

接合した土器片同士を線で結んだ分布図を第65図に示した。接合線は一筆書きでなるべく単純な形になるようにした。遺物は斜面に分布するため、斜面上になる西から東に向かって2次的に動いている可能性が考えられるが、この図では等高線に平行する接合線が目立つ。

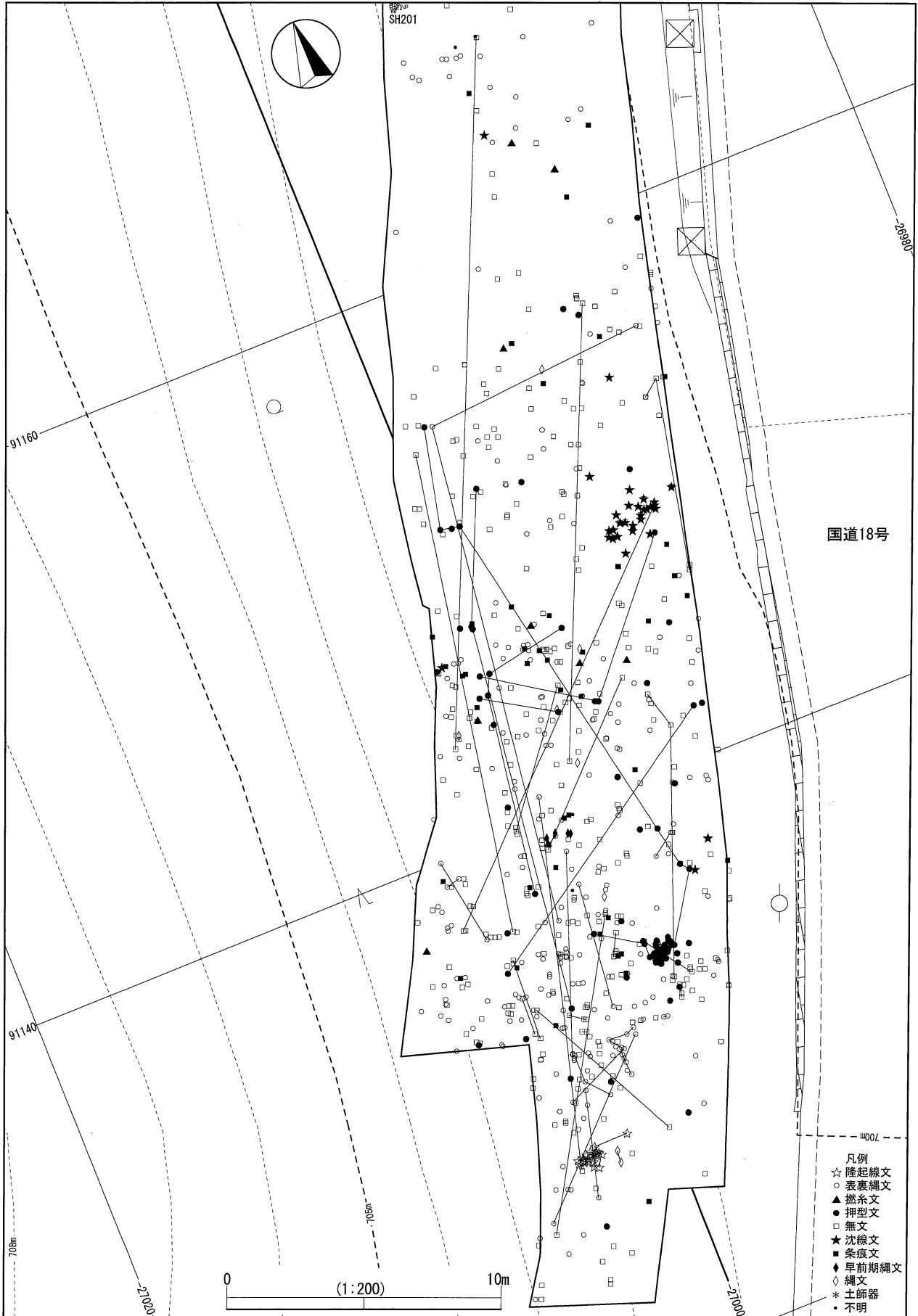
(2) 遺物の出土層位

ほとんどがⅡ層からⅢ層の間で出土している。今回遺物が出土した場所はⅡ層の堆積が厚く一見縄文時代遺物包含層は安定しているかのように思われるが、縄文時代草創期から早期の表裏縄文や早期の押型文、無文、沈線文の土器はⅡ層とⅢ層の両方から同程度分布している。そのため、Ⅱ層の堆積が安定したのは縄文時代前期以降と考えられる。

隆起線文土器以外はⅡ層からⅢ層にかかる同一の層準から出土するが、隆起線文土器はすべてⅢ層出土



第64図 貫ノ木遺跡文様別土器分布図



第65図 貫ノ木遺跡土器接合資料分布図

で、他の土器より 50cm 近くレベル的に深い。

2 遺構

縄文時代の遺構は集石が 1 基のみで、住居跡ならびに土坑は検出されなかった。

集石

SH201 (第 66 図)

X=91169.5, Y=-26994 座標を中心として、直径 50cm ほどの円形の広がりをもつ。周囲に遺構はなく単独で存在する。Ⅲ層最下部で出土しているため、旧石器時代末に属す可能性も考えられるが、縄文土器の分布域に属していることから縄文時代の遺構と判断した。

礫 24 点で構成され、ほかに遺物はない。掘り込み等の施設も検出されなかった。

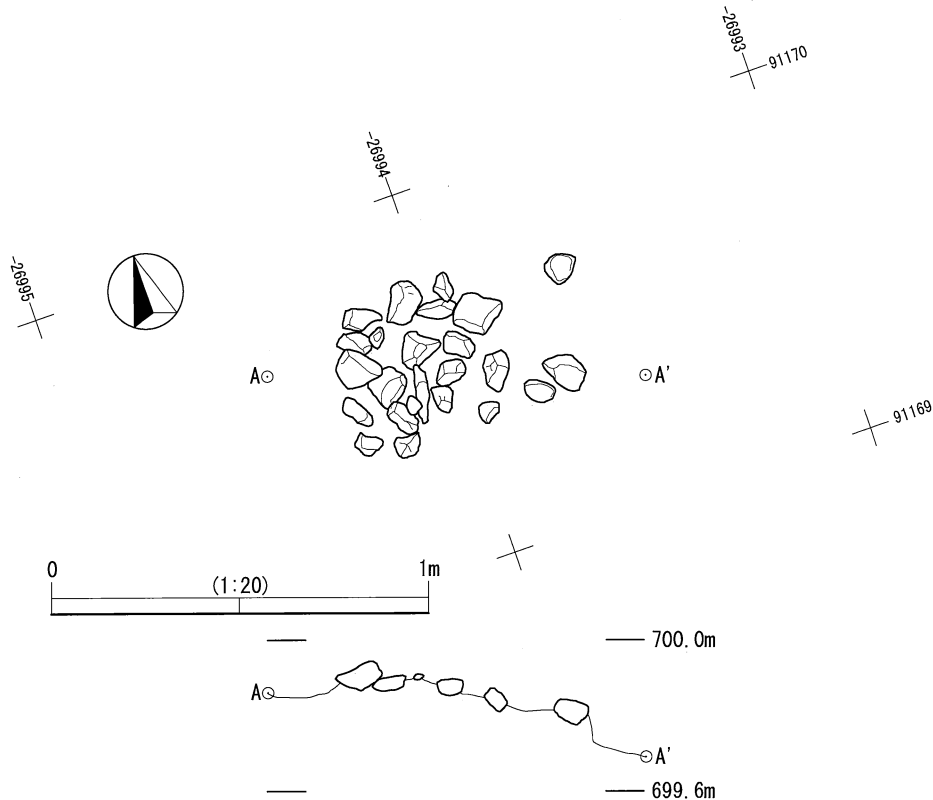
3 遺物

(1) 土器

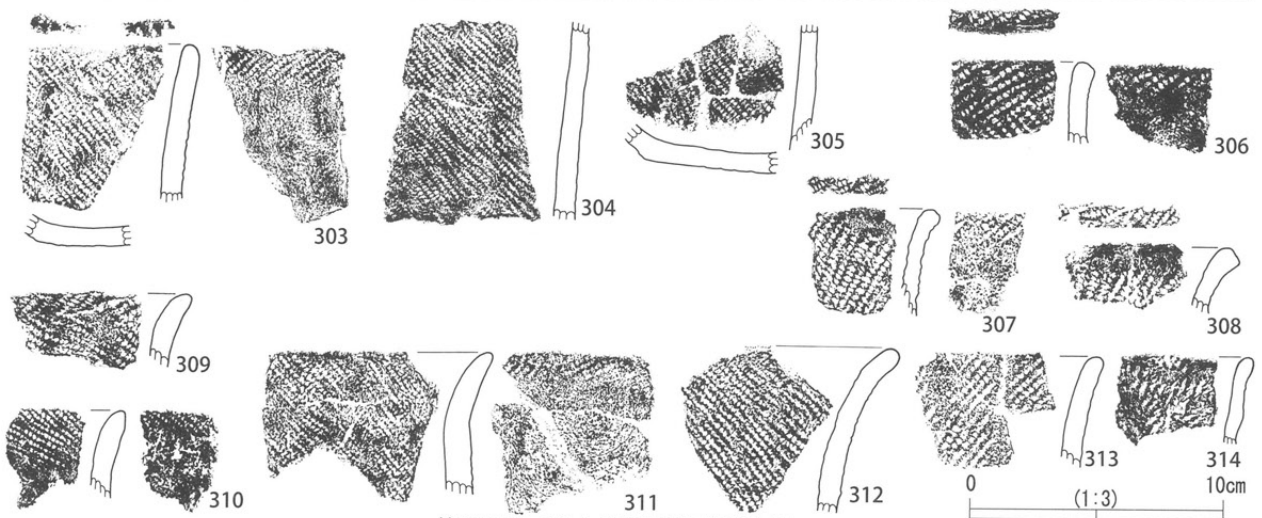
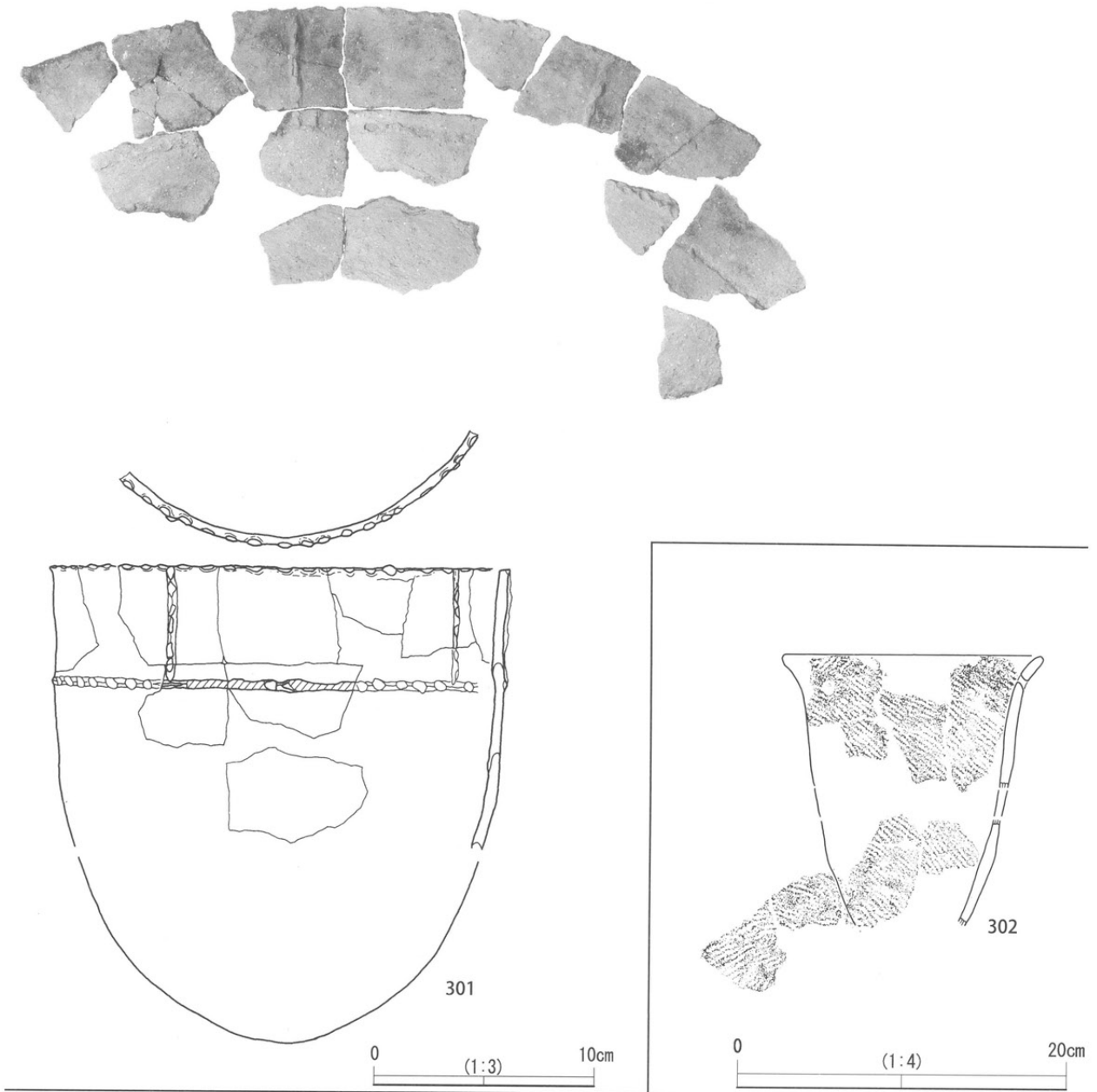
縄文時代草創期から前期の土器片が 911 片が出土した。その内訳は隆起線文土器 21 片、表裏縄文 284 片、撚糸文 10 片、押型文 103 片、無文 366 片、沈線文 45 片、条痕文 68 点、前期の縄文 8 片、時期不明の縄文 8 片、不明 6 片となっている。

1. 隆起線文土器 (第 67 図・報告番号 302)

21 片の隆起線文土器が出土しているが、すべて同一個体である。口縁部から下半部までの破片があるが底部は出土しなかった。出土した土器片は全体の 30～40% 程度と思われ、多くが接合する。出土位置は X=91128, Y=-27003 座標付近の直径 1m 以内の範囲にほとんどが分布しており、出土層位はⅢ層となっている。報告番号 321 の撚糸文土器との平面位置は近接しているが、隆起線文土器の方が 30cm か



第 66 図 貫ノ木遺跡 SH201



第67図 貫ノ木遺跡縄文時代土器1

ら 60cm 深いところで出土している。

器厚は 4～5mm で底部に近い部分は若干厚みを増す。口径は 30cm 前後で口縁部は口唇がわずかに外反するがほぼ垂直に立つ。底部は丸くなると思われ全体形状は砲弾形を呈すると予想される。

口唇部は外縁にリップ状の隆起を作出するか、あるいは隆帯を貼りつけているかは微妙なところだが、隆起が付く状態で平らに整形されている。その後、口唇部外縁隆起部に外面側から棒状工具の腹部を押し付けて 7～8mm 幅のノッチ状の刻みが入れている。

胴部には幅 5mm、厚さ 3mm 前後の隆帯が貼りつけられている。口縁から垂直に約 55mm 下る隆帯が 5～6 単位あり、下端で水平方向 1 条の隆帯と合流する。垂直方向の隆帯には貼り付け後に器体とを接着させるための隆帯に平行するナデ痕がみられる。隆帯全体には口縁部と同様の一方向からの棒状工具による刻みが施されている。

器外面および器内面は指頭圧痕により凸凹が目立つ。器厚が薄いのはこの指頭圧痕により薄く伸ばされているためと思われる。また、部分的に横方向の条痕が認められる。

色調は橙色を基調としているが、黒ずんで褐灰色を呈する部分が見られる。器内面には部分的に炭化物が付着している。胎土には白色の長石が多く含まれている。

2. 表裏縄文土器 (第 67～68 図・報告番号 302～320)

284 片の表裏縄文土器が出土しており、部位別の内訳は口縁部 23 点、胴部 258 点、底部 3 点で、総重量は 2828.8g である。表裏縄文土器の内面への施文は口縁から 1 条のみであるため、口縁部以下に施文がないが、胎土の観察から表裏縄文土器と判断した。また、若干であるが、同時期と思われる口縁内面に施文がないものも含まれている。

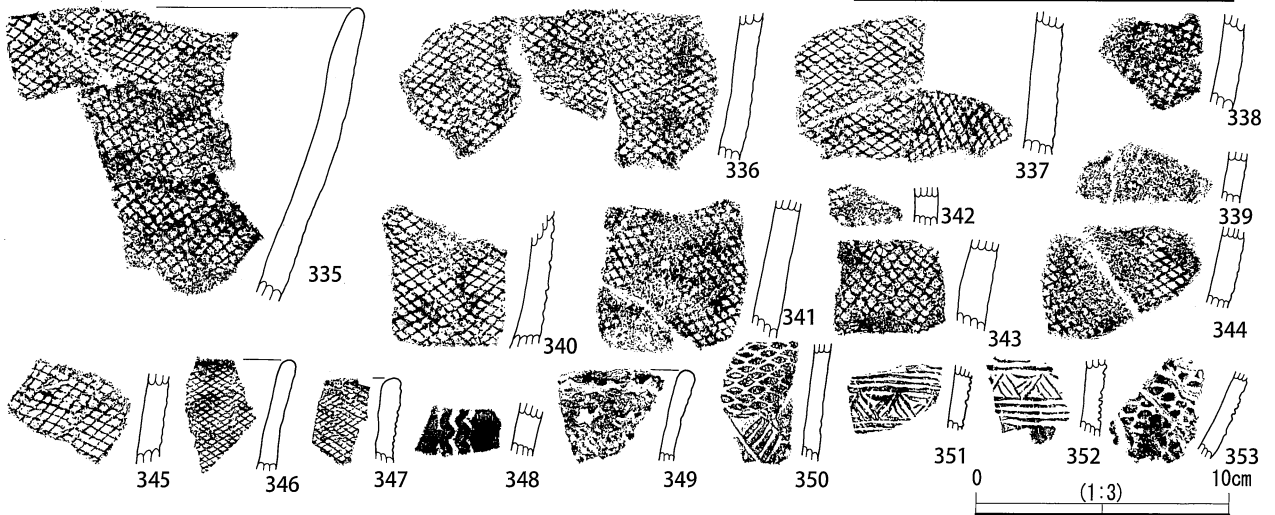
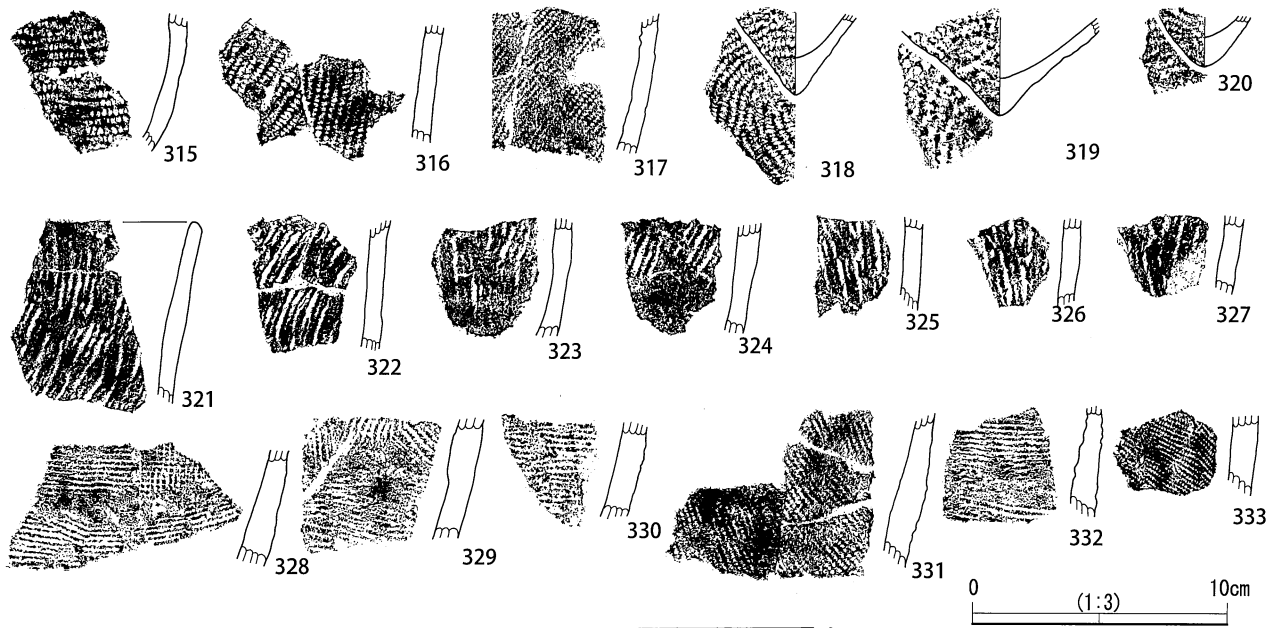
302 は唯一ある程度の器形が復元できたものである。器厚 7～8mm で尖底部に近い部分は若干厚い。推定口径 16cm、器高 20cm 前後であるが、尖底部はみつからない。器形は尖底部から口縁に向かい漸的に口径を広げるが、口縁部下で直立に近くなり口縁部で外反する。施文原体は「LR」の単節縄文が用いられ、内面は口辺部に 1 条の施文が行われているが、劣化のため文様がはっきりしない。外面では原体を縦方向に転がして施文した後に、口唇部の整形を行い、さらに口縁部下と外面の隙間を埋めるように 1cm 前後の幅の施文がある。色調は赤褐色で、胎土には黒雲母と透明な石英が多く含まれている。また、焼成後の補修孔がみられる。

303～305 は同一個体である。縦方向の稜がみられることから、平面形状が多角形を呈する。口縁部付近の破片しか出土しなかったことから全体形状はわからない。口縁はわずかに外側に開くが直立に近い。原体は単節の「LR」が用いられている。内面は口縁に平行して横方向に 1 条の施文が施され、外面は原体を縦方向に転がしている。口縁端部に縄文原体を押し付けた刻みが入れている。色調はにぶい黄橙色で、胎土には石英や長石が含まれる。

306～308 は口唇部に面が作られ、その後に施文が施される。原体は単節の「LR」が用いられ、内面は口縁に 1 条のみの施文となる。308 の内面施文は拓本に出ないが認められる。外面への施文は 307、308 には横方向に原体を転がす 1 方向の施文が、306 には羽状の施文がみられる。色調は明赤褐色から橙色で、胎土には石英と黒雲母が含まれる。

309 は口縁部下と外面の隙間を埋めるような施文がみられるもので、302 とよく似ており同一個体の可能性も考えられる。

310 は原体に無節の「R」が用いられている。口縁内面に口縁に平行する 1 条の施文と口唇部にも 2mm 程度の狭い幅の施文がみられる。外面は磨かれた後に施文されたようである。色調は暗褐色で、胎土には石英や長石が含まれる。



第68図 貫ノ木遺跡縄文時代土器2

311 と 312 は口唇部への施文がないものである。原体には単節の「RL」が用いられており、内面への施文はやはり口縁に接する1条のみとなっている。色調は311は橙色、312が赤褐色で、胎土には石英や長石が含まれる。

313 は口唇部に面が作出されているが施文はなく、内面施文もみられない。原体は単節の「LR」が用いられ、色調はにぶい赤褐色で、胎土には黒雲母が特に多く含まれている。

314 は無節の「L」が外面のみに施文されている土器である。色調は明黄褐色で、胎土に含まれる鉱物は少なく繊維が含まれているため、時期が異なる可能性が考えられる。

3. 撚糸文土器 (第68図・報告番号321～332)

21片出土したが、個体数は2～3と思われる。総重量407.3gである。部位別内訳は口縁部1点、胴部20点で底部は出土しなかった。個体数は少ないが分散している。

321～327は同一個体の土器である。器厚は7～8mmだが、破片数が少なため器形復元ができない。

321には直線的に外向する口縁部がみられる。内外面に指頭圧痕があり器面に凹凸がみられる。無節の縄の撚糸による施文が垂直からやや斜めに施され、その傾きは部位によって異なる。色調は赤みのない灰白色で、胎土には長石および黒雲母が含まれる。

328～333は同一個体あるいは2個体からなる。器厚は10mm前後と比較的厚い。無節の細い縄による施文が施されているが、施文単位が2cm前後と短いことから、回転施文ではなく、幅の狭い板状の施文具に縄を巻きつけて押し付けた可能性もあろう。色調は橙色で、胎土には石英と長石が含まれる。撚糸文として分類したが、縄文時代早期前半に属さない可能性も考えられる。

4. 押型文土器 (第68図・報告番号333～351)

103片、総重量1871.6gの土器が出土している。部位別内訳は口縁部3点、胴部99点、尖底部1点となっている。個体数は少ないが、確実に複数型式の土器が存在する。

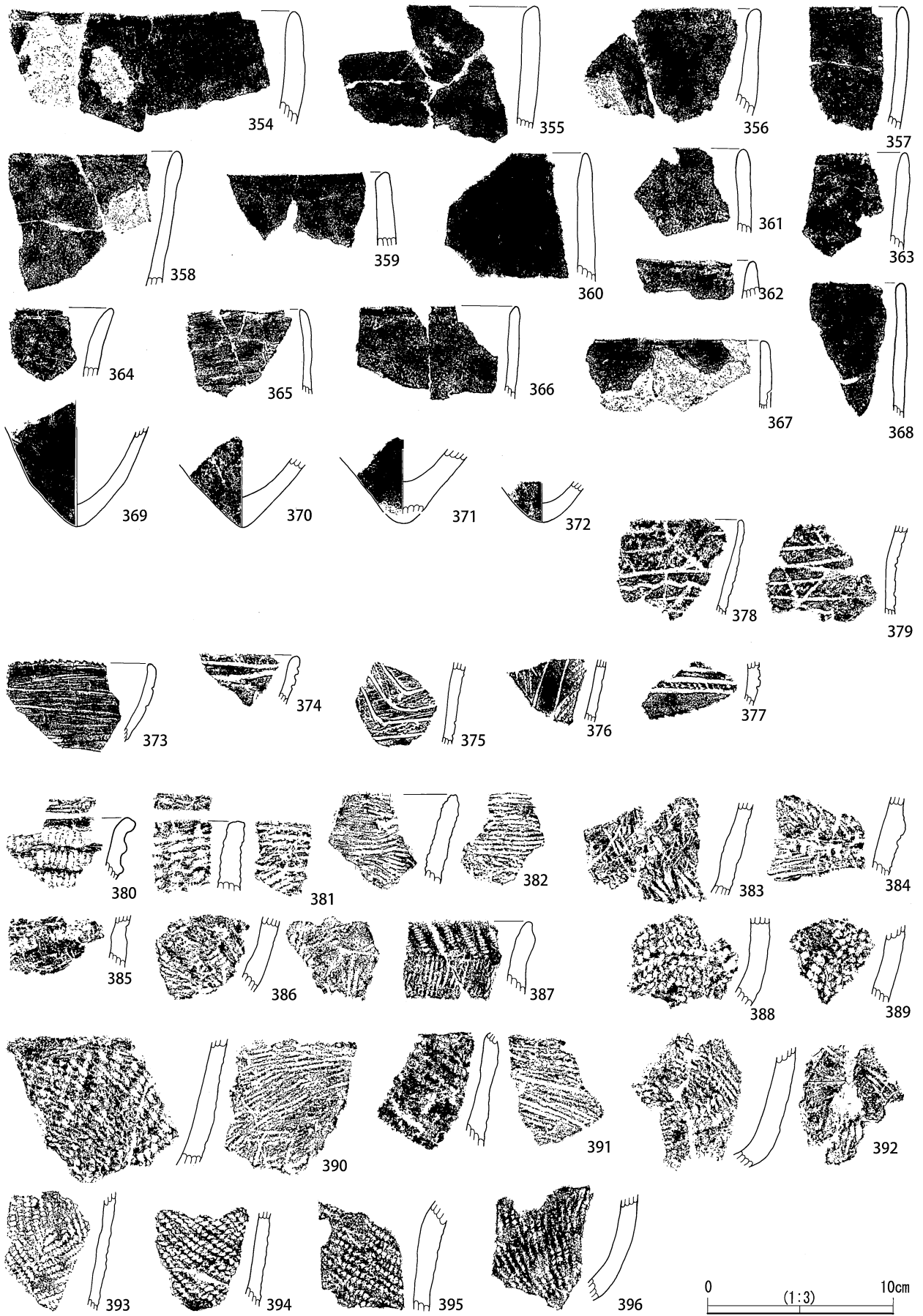
334は唯一ある程度の復元ができた個体である。X=91134, Y=-26998座標付近を中心とした直径1m弱の範囲から集中して出土している。出土層位はⅡ層からⅢ層で、両層にほぼ同数分布している。推定される大きさは、器高40cm弱、口径約30cmである。器厚は7～10mmで、尖底部以外では口縁部に最も厚い部分がある。格子目の押型文で上半部を中心に文様が残っている。施文は土器が硬くなってから行われたようで浅く、しかも施文後の擦り消しにより薄くなっている。そのため、胴部下半部は尖底部にわずかに文様が確認できるほかは無文となっている。施文方向は縦・横の両者がみられ、一部に交差する部位がある。外面には全体的に擦痕がみられ、色調は橙色で赤っぽく、胎土に石英が含まれる。

335～345は同一個体の格子目文土器である。下半部が出土していないため底部形状がわからない。胴部から口縁部に近づくにつれ直線的に径を増し、口縁部でわずかに内反する。口径は30cm前後が予想され、口縁付近の器厚が約7mm、同部の器厚が約9mmとなっている。口縁部付近では、原体をやや斜めに転がすものもあるが、縦方向に転がすのを基本としており、出土した部位の外面すべてに施文されている。内面はわずかに凹凸がみられるが平らに整形されている。色調はすすけた部位が黒褐色、すすけていない部位が明黄褐色で、胎土に石英が多く、長石や輝石もみられる。

346と347は同一個体の格子目施文の口縁部である。335～345とくらべ薄手で焼きがよい。口縁部はわずかに外反し約7mmの厚みをもつ。色調はにぶい赤褐色で、胎土には黒雲母が目立ち、石英、長石も含まれている。

348は唯一の山形文が縦方向に施文されている。器厚は9mmと厚く、色調は橙色で、胎土に石英、長石がわずかにみられる。また、繊維もわずかに含まれている。

349は楕円文と変形重菱文の異種多段施文の土器である。単体で350から353とは胎土および原体が



第 69 図 貫ノ木遺跡縄文時代土器 3

やや異なる。器厚は約7mm、色調はにぶい黄橙色で、胎土には石英と長石と思われる白色粒子および、わずかな繊維が含まれている。

350～352は楕円文と変形重菱文の異種多段施文の土器で同一個体と思われる。350と351は胴部、352は尖底部近くで、器厚は約7mmである。外面は横方向に異なる原体が多段に施文されており、内面は磨かれているようで、なめらかで若干光沢を帯びている。色調はにぶい黄橙色で、胎土には長石と思われる白色粒および繊維が含まれている。

5. 無文土器 (第69図・報告番号354～372)

386片、総重量3852.1gの無文土器が出土しており、数量、重量とも縄文土器の中では最大である。多くは縄文時代の早期に属す尖底の無文土器と考えられるが、他時期の土器の無文部が若干混じっている可能性もある。

無文で斉一性が高いため、全体的な特徴を述べ、必要なものについては個別に記する。

口径30cm前後、器厚は口縁部で6～8mm、尖底部近くで8～12mm前後とやや厚手の印象を受ける。口縁部は反らずに垂直に立つものが多いが、内傾するものと外傾するものもみられる。底部は尖るが、乳頭状に突出することはない。外面および内面は磨かれているものが多く、内面より外面の磨きが顕著である。磨きの方向は横方向と縦方向のどちらかである。色調は赤味が少ないにぶい黄褐色であるが、すすけたり炭化物が付着して黒味を帯びるものも多くみられる。胎土には石英や長石が含まれ、黒雲母が含まれるものは少ない。繊維が含まれる土器は少なく、含まれていてもわずかである。

354～368は口縁部破片である。362と365の口唇部が平らに整形されるが、他は尖るように整形される。

356・361～363・366の外面には炭化物が付着している。

369～372は尖底部である。369の外面には縦方向への磨痕が認められる。

6. 沈線文土器 (第69図・報告番号373～379)

45片、551gの沈線文土器が出土している。出土位置はX=91149, Y=-26993座標付近を中心とする直径2mの範囲に集中している。出土層位はⅡ層～Ⅲ層で、両者はほぼ同数となっている。破片数が少なく集中して出土しているものの最低5個体は確認できる。器形が復元できるようなものはない。

373は口縁部である。器厚は5mmと薄く、外傾する口縁部は口端に近づくにつれ緩やかに内反し、口端でほぼ垂直に立つ。口唇部は内面側に尖るように整形された後に、貝殻腹縁により約4mm幅で刻みが施されている。外面には口唇部下約12mmに横方向の沈線と、その下約10mmに平行する沈線が施されている。その後に横方向の条痕により整形されている。内面には横方向の磨痕があり、非常に滑らかな器面が作り出されている。

374は口縁部である。沈線および貝殻腹縁による施文が認められる。胎土には石英が多く含まれ繊維もみられる。

375と376は同一個体である。平行沈線の間貝殻腹縁が施文されている。内外面ともよく磨かれており焼きも良い。

377は狭い平行沈線の間隆帯を貼り付け、その上に貝殻腹縁を施文している。

7. 条痕文土器 (第69図・報告番号380～387)

68片、635.8gの条痕文土器が出土している。出土層位はⅡ層～Ⅲ層で、Ⅱ層が主体である。出土位置はまとまることなく分散している。

380～382は口縁部である。380は横方向に隆帯が貼り付けられその間に絡条体が押し付けられている。381は縦方向に絡条体圧痕が施文されており、382に絡条体圧痕は施されない。いずれも、内外面に横

方向の条痕がみられる。器厚は1cm前後と厚く、胎土には繊維が多く含まれている。

383～386は胴部破片である。器厚は1cm前後と厚く、外面は全体的に条痕がみられ、部分的に絡条体圧痕が施されている。胎土には繊維が多く含まれている。

387は口縁部破片であるが、条痕がみられずやや異質である。外面上端は約18mmの幅で厚く整形され、撚糸の原体で連続して斜めに圧痕されている。その下には縦方向に撚糸が施文されている。器厚は10mmと厚く、胎土には石英が多くみられ、繊維は含まれない。

8. 早期末～前期縄文土器 (第69図・報告番号388～393)

7片、212.8gの土器が出土している。6片が同一個体で、全部で2個体確認できるのみである。

388～392は同一個体である。X=91139, Y=-27000座標付近で集中して出土している。器厚は10mm強と厚く、繊維を多く含んでいる。392で確認できるように尖底の土器である。外面には撚りの大きな単節の縄文が多方向に施文されており、底部付近には条痕もみられる。内面は横や斜め方向に縄文条痕らしきものがみられる。

393は外面に菱形構成がみられる縄文施文の土器である。器厚が6mmで、比較的焼きが良く繊維が含まれている。

9. その他縄文土器 (第69図・394～396)

394～396は所属時期が不明の縄文が施文された土器である。表裏縄文に属す可能性が高いと思われる。

(2) 石器 (第70図)

縄文時代の石器としたものは、土器分布域と重なるBL5021とした範囲内から出土した石器である。Ⅱ層から37点、Ⅲ層から31点が出土している。縄文時代の草創期から前期の間の複数時期の石器が混在している。また、周囲から旧石器時代の非定形的な石器が少量紛れ込んでいる可能性が考えられる。器種組成は石鏃4点、搔器1点、削器2点、楔形石器1点、石槍1点、2次加工のある剥片3点、剥片45点、破片2点、石核1点、敲石3点、凹石1点、打製石斧2点、三角錘形石器1点、打製石斧2点、有溝砥石1点となっている。石材組成は無斑晶質安山岩25点、珪質凝灰岩22点、チャート5点、凝灰岩5点、黒曜石3点、珪質頁岩2点、玉髓1点、安山岩3点、砂岩2点である。

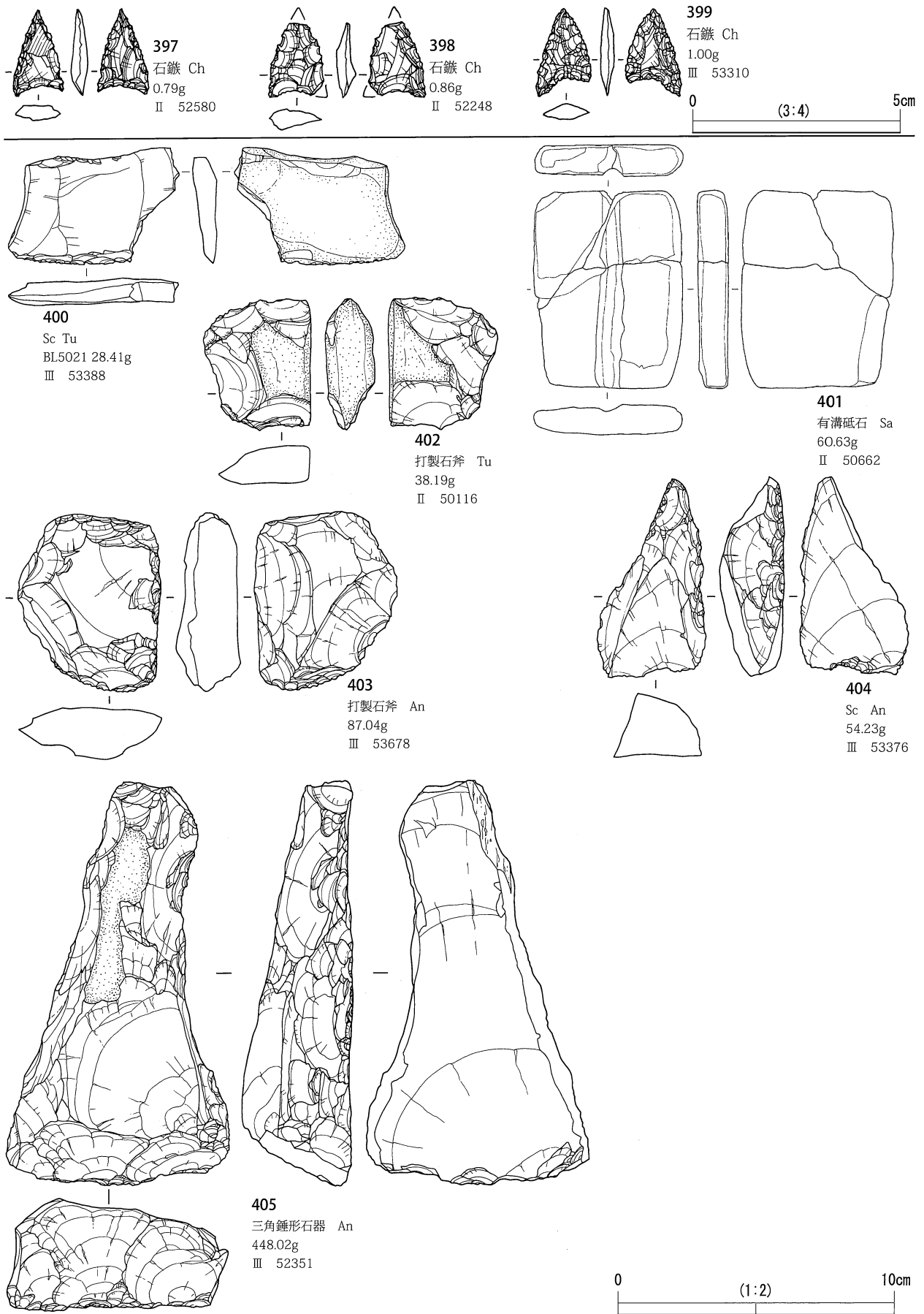
397～399は石鏃である。チャート製の凹基無茎で、両面に平坦な加工が施されることから、素材は明らかではない。

400と404はスクレイパーである。400は節理で割れた板状の素材に、直線的な刃がつけられたもので、404は無斑晶質安山岩の分厚い剥片の末端に、緩やかな弧状を呈す刃部が作出されている。

402と403は打製石斧としたものである。打製石斧によくみられる側縁方向からの平坦な加工が表裏に施されているが、完形ではないため打製石斧ではない可能性がある。

401は有溝砥石である。赤褐色の粗粒の砂岩を素材としており、分厚い面子のような形状を呈している。各面が平たく定角化しているため、磨りによる面取りがなされている可能性が考えられるが、表面の風化が激しく決定的ではない。長軸の中央に径約8mmの溝1条が作出されている。

405は三角錘形石器である。非常に大きく厚い剥片の3辺に急角度で強い正方向の加工を施し、三味線の撥形の平面形が作出されている。



第70図 貫ノ木遺跡縄文時代石器

第4節 古代以降

1 遺構

古代以降の遺構は平安時代の竪穴住居跡 1 軒が確認されたのみである。

(1) 竪穴住居跡

1.SB201 (第71 図)

今回の調査で唯一の住居跡となる。

Ⅱ層掘り下げ中に傾斜に平行して角礫が多く検出された。ほぼ直線状に並ぶものもあり、近くから土師器片が検出されたことから、平安時代の住居跡と判断した。

ロームマウンドと分布が重なっているが、覆土が炭化物の多い黒色土や締りのない黄褐色土で構成されていることから、ロームマウンドより住居跡の方が新しいと判断できた。そのため、ロームマウンドの凹地を利用して作られた住居跡と考えられる。

斜面に立地することや、検出時にはすでに覆土の大部分が失われていたため、壁面および床面を明確にすることができなかった。住居跡に伴うと思われる遺物やピットが 3.5m ～ 4.0m の範囲に広がることからそれに近い規模が想定される。角礫の集中部には焼土や炭化物が分布することから、カマドがあったことが考えられるが、壊されており原形を留めていない。一部に黄褐色の緻密なローム土が 1 ～ 2cm 貼られた床面が確認された。6 基のピットは、柱穴と考えられるものもあるが、明確ではない。

2 遺物

(1) SB201 出土遺物 (第72 図・報告番号 406 ～ 410)

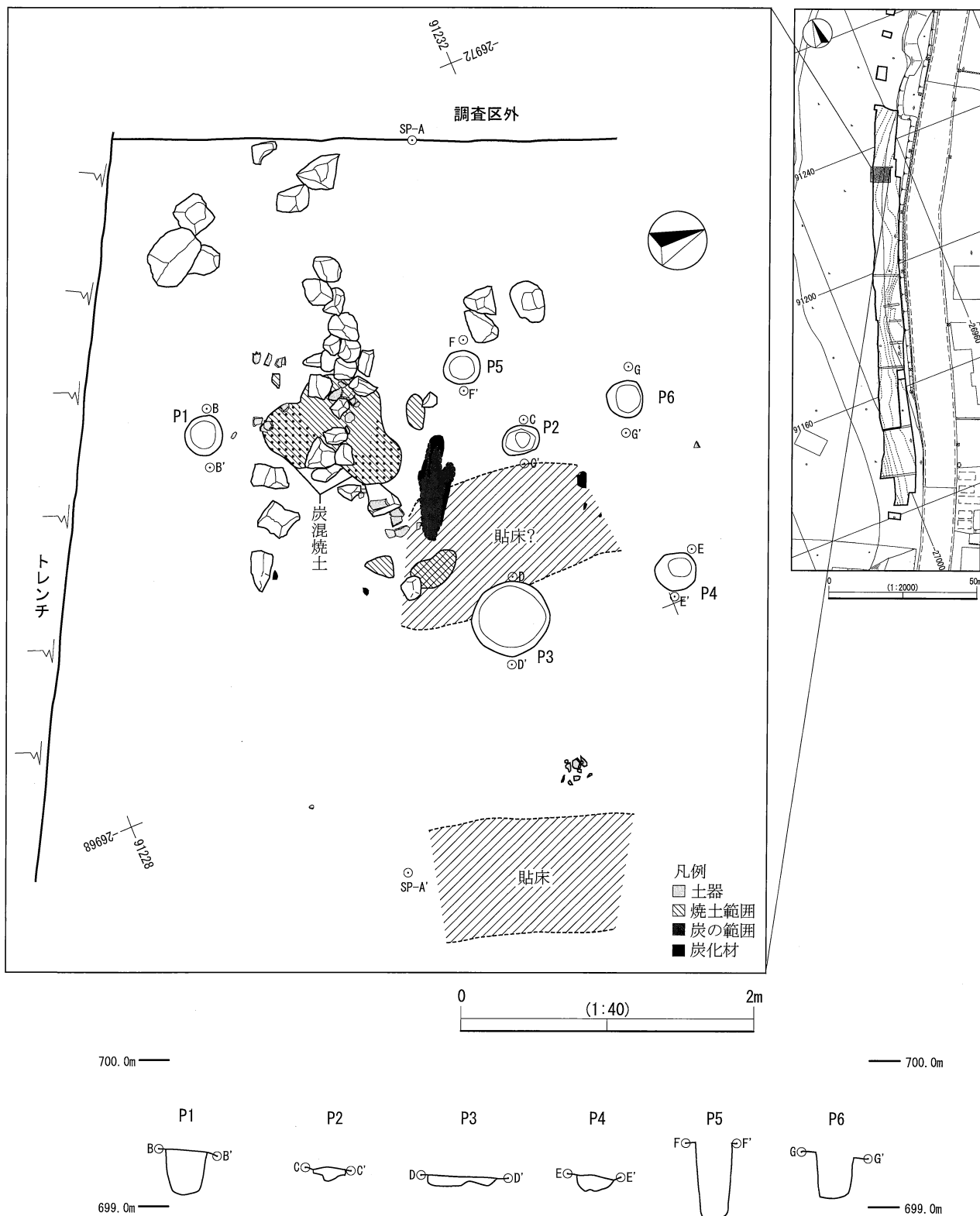
SB201 からは杯 3 点、甕 1 点が出土した。他に土器片も出土しているが、いずれも前記の杯、甕と同一個体の可能性が高い。

406 ～ 408 は杯である。口径約 13cm、底径 4.5 ～ 5.5cm、器高約 3.8cm である。406 と 407 にはそれぞれ異なる墨書が書かれている。いずれも内面は黒色に磨かれており、406 の外面にはロクロ整形が認められるが、他は風化してはっきりしない。

409 と 410 は同一個体の可能性が高い。口径 12.4cm、底部は丸く、器高は 27.6cm である。底部より口縁部に向かって放物線状に徐々に内湾し、口縁から約 7.5cm の位置でほぼ垂直に立つ。そこから口縁下 2.5cm までは湾曲を強めて内反してくびれる。くびれより上部は口縁に向かって直線的に外傾する。外面上半部にはロクロによる整形痕が、下半部には格子目状の叩き目が認められ、外面の叩き目に対応して、内面に直径 3 ～ 4cm の円形の当て具痕がみられる。

(2) その他の遺物 (第72 図・報告番号 411)

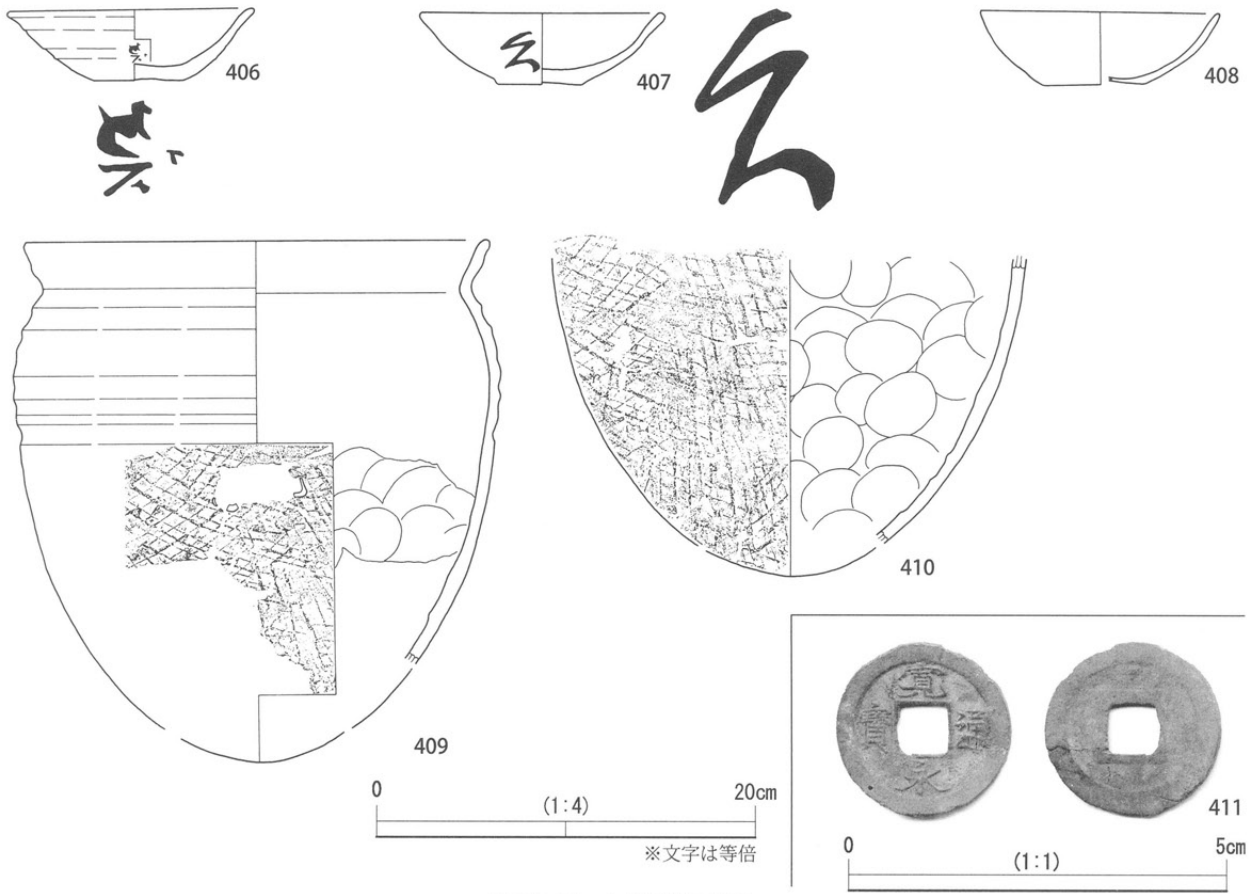
その他に近世の遺物として寛永通宝 1 点が発見されている。調査区周辺にあった旧北国街道に関連する遺物であろうか。



Pit土層注記

P1: 黒褐色土黄色粒子全体に混入 (φ1~2mm) 締まり緩い P2:P1と同じ P3: 黒色土 (II層) に黄褐色粒子混入
 P4:P1と同じ。下層に炭が層状に堆積 P5:P1と同じ P6:P1と同じ

第71図 貫ノ木遺跡 SB201



第72図 古代以降の遺物



黒姫山（仲町遺跡より望む：2003年12月24日撮影）

第3章 照月台遺跡

第1節 遺跡と調査の概要

1 遺跡の概要

照月台遺跡の今回の調査地点は、長野県上水内郡信濃町大字野尻字上の原 516 - 7 他に所在する。野尻湖の西側にある仲町丘陵の背に位置する。遺跡は長軸 500m、短軸 200m の面積を有している。

本遺跡の範囲は仲町丘陵に北から入り込む谷部周辺であったが、その後の表面採集や開発に伴う調査の結果範囲が拡張し、現在では北北東の仲町遺跡と、南南西の貫ノ木遺跡と連なっている。

今回の調査地点は、もともと照月台遺跡とされていた谷部から、その東側の高台に位置している。標高は 685m から 693m 前後である。

遺跡内の水は前記した谷部の沢を北流して、旧石器時代には野尻湖の一部であった低地で池尻川に合流し、関川を経て日本海へと注ぐ。

1973 年に行われた野尻湖発掘調査団による遺跡踏査で、別荘地内の道路切り通しから黒曜石のナイフ形石器等が採集されたことから、旧石器時代の遺跡として認識された。その後 1974 年、1980 年にも同調査団による踏査で、同地点から複数の石器が採集された。

最初に発掘調査が行われたのが、1985 年の野尻湖発掘調査団の第 4 回陸上発掘となる。遺物が採集されていた切り通し近くに 6m × 3m のトレンチが設定され、ナイフ形石器等が出土した。

1997 年には今回の調査で最も遺物が集中していた場所の国道を挟んだ対岸に、店舗建設に伴う緊急調査が行われ (L 地点)、多くの石器が出土している。

2 遺跡の調査地点

これまでの照月台遺跡の調査地点名および調査年、調査主体は以下のとおりである。またそれぞれの位置を第 4 図に示す。

陸上発掘地点 1985 年、野尻湖発掘調査団 (野尻湖人類考古グループ 1990)

L 地点 1997 年、信濃町教育委員会 (未報告)

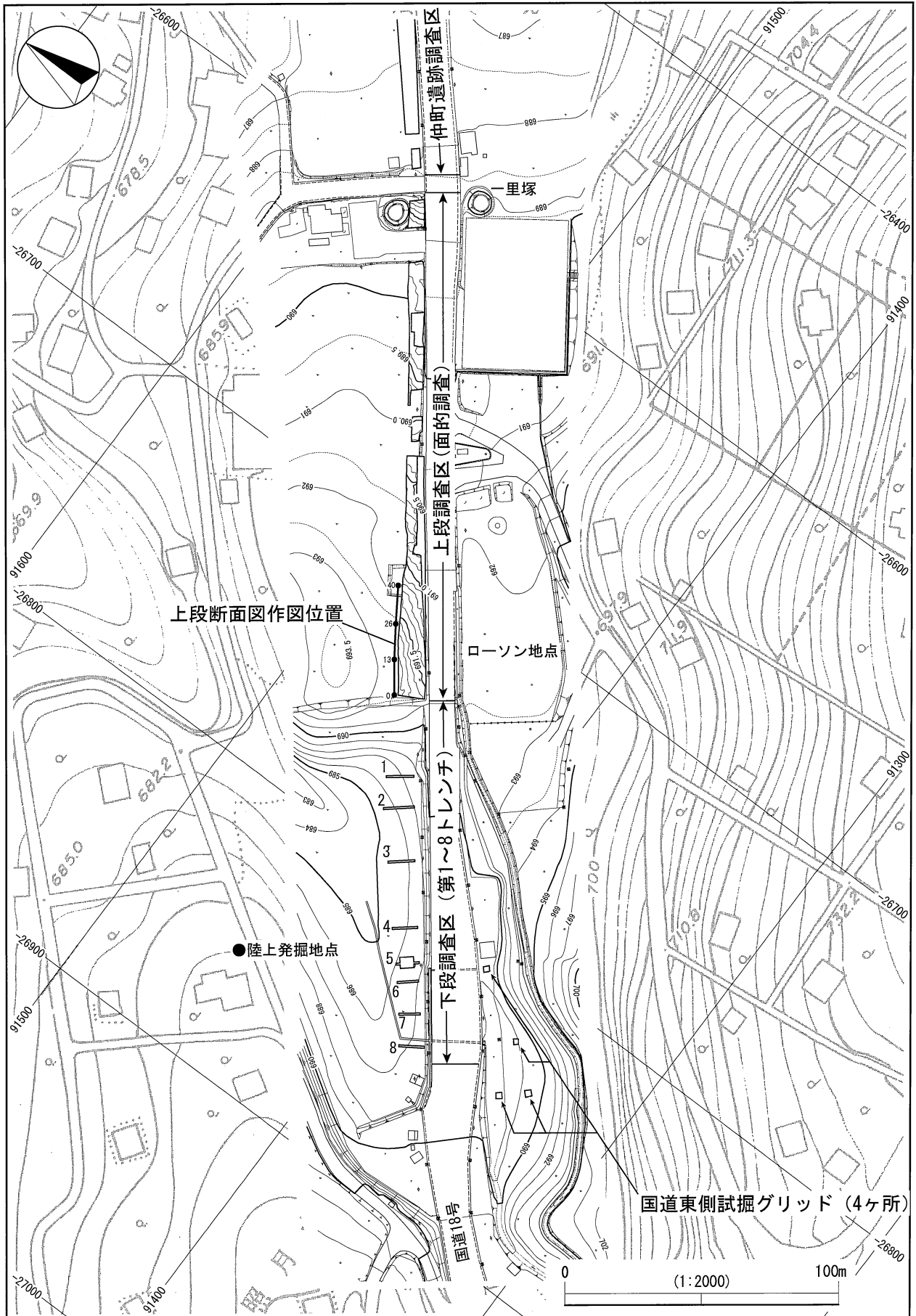
BP 地点 1999 年、長野県埋蔵文化財センター (本書)

3 遺跡の地形と基本層序

(1) 遺跡の地形と調査区 (第 73 図)

北北東-南南西にのびる仲町丘陵の中段に、かつて野尻湖の一部であった低地のある北側から谷が入り込んでいる。この谷の上一帯が照月台遺跡である。遺跡の東側に標高 753.5m の神山が存在する。遺跡内に、神山と仲町丘陵にはさまれた谷頭が位置している。

調査区の北東端に旧北国街道の一里塚が存在する。今回の調査では便宜的に「一里塚」を照月台遺跡と仲町遺跡の境としたが、本来はこれより約 200m 北東になる。ちなみに一里塚と本来の遺跡境との間のトレンチ調査を実施しているが、ほとんど遺物が出土しなかった。



第73図 照月台遺跡の地形と調査区V層上面の地形

一里塚から谷部への落ち際までの200m弱の範囲を上段調査区とした。上段調査区南西端から40mの範囲で非常に多くの旧石器時代の石器が出土している。この石器集中地点の国道を挟んだ場所に照月台遺跡L地点（ローソン地点）がある。両地点の距離は20mに満たない。

上段調査区の南西端から約130mの範囲を下段調査区とした。仲町丘陵の北から入り込む谷へ落ちる斜面から谷内部に位置している。8ヶ所のトレンチ調査が行われ、少量の縄文時代遺物が出土したが、面的調査を実施する必要はないと判断した。

下段調査区の国道を挟んだ南東に国道東側試掘グリッドを設定した。これらのグリッドからは旧北国街道に関連する可能性がある遺構の他に遺構・遺物は検出されなかった。

(2) 遺跡の層序

信濃町内におけるセンターの標準層序は貫ノ木遺跡H4地点の断面（第6図④・詳細は第2章第1節3を参照）である。

第74図に上段調査区の層序を示した。図化した部分は北東-南西に細長い調査区の北西調査区境の南端から40mの範囲にあたり、最も遺物密度が高かったBL1を貫く。アミがけのドットは、作図した壁から1m以内から出土した石器と礫の垂直分布を投影したものである。また、断面図には縄文時代の陥し穴が数基かかっている。

堆積は良好で、当センターが定めた野尻湖遺跡群標準層序との対比が可能であった。V層が若干薄く、Vb層とVc層の分離ができない部分が多かった。その部分についてはVc層はVb層に含まれている。一般的な旧石器時代の遺跡同様に遺物は上下幅を持って出土する。その中でもVa層前後に遺物が集中している。Va層はこれまでの調査から、AT降灰層準であることが確認されている（日本道路公団他2000a・b・c・d）。したがって、今回出土した石器群の主体は層位的にAT降灰前後の時期に位置付けられる。

第75図に下段調査区の層序を示した。礫群が検出された第2トレンチと、縄文時代前期の土器1個体が出土している第5トレンチのそれぞれ北東壁の断面である。下段調査区は谷部に入るため、標準層序のI層とII層に対比される黒色土の堆積が厚く、III層以下に対比される層は水成堆積層となる。出水の影響もあり、およそIII層に対比される7層までしか掘り下げができなかった。

黒色土の堆積が厚いことから火山灰がいくつか検出されている。3層としたキビダンゴII、5層に含まれるキビダンゴIが確認されている。また、6層中には部分的に焼土のような赤褐色の火山灰と思われる層も存在した。

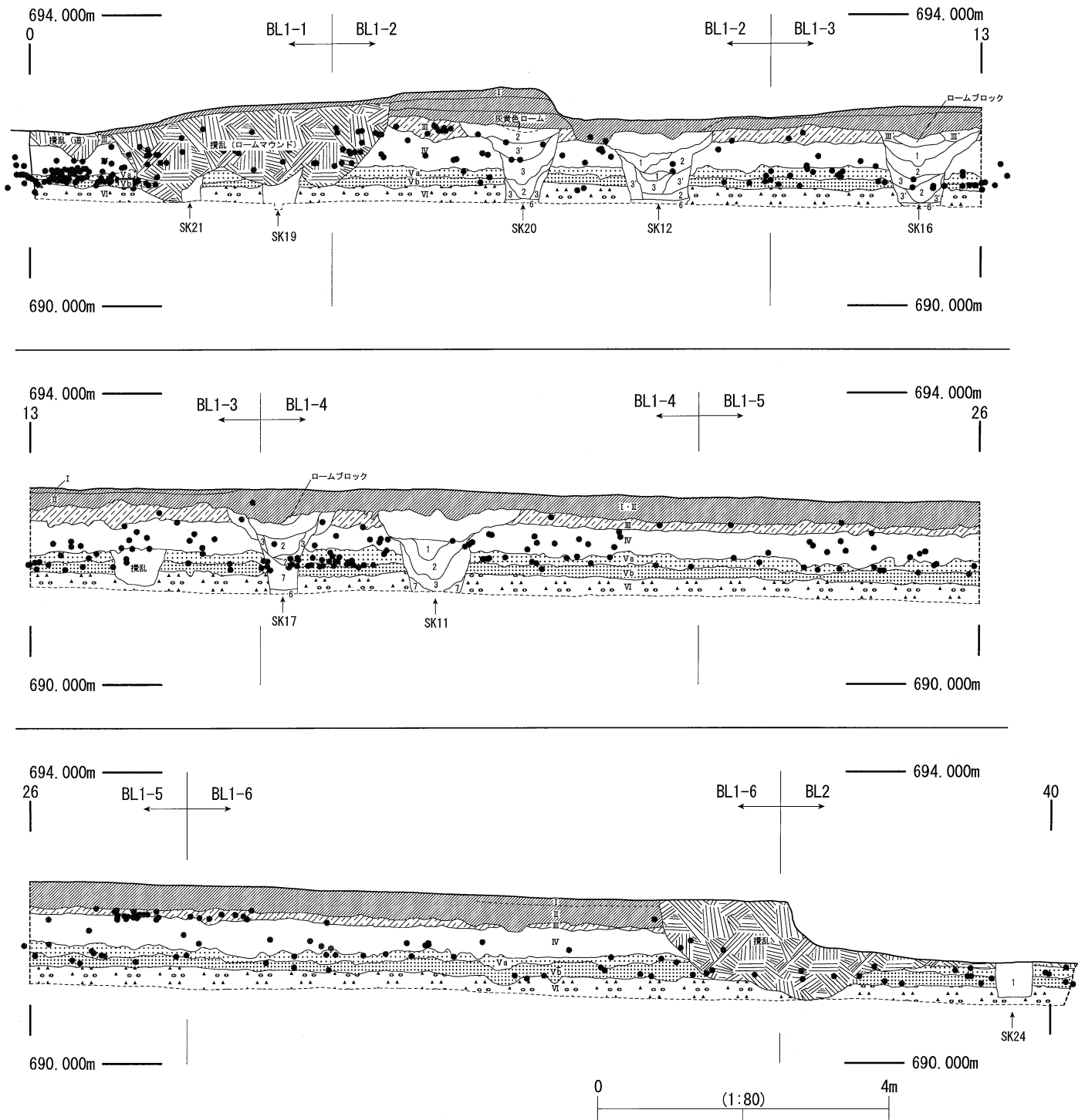
(3) 遺物の層位別平面分布

第76～81図に上段調査区における出土層位別の遺物分布図を示した。各層の特徴と共に遺物の出土状況を記す。

第76図はI～II層で出土した遺物の分布図である。層序の年代は縄文時代前期早期以降に対比される。表土がI層で、色調がわずかに明るく有機質分の含有が少ないII層に分層されているが、表土は植生等の影響が強く現れるため、両層の差は絶対的な時間を示すものではない。層厚は地表から30～40cm程度である。SH2はII層下面に礫がのる状態で検出されている。また、II層中から道跡と考えられるSCとした遺構が確認されている。出土した遺物の時期は縄文時代が中心となるが、一部に銭貨（寛永通宝・元豊通宝）や、浮き上がってしまった旧石器時代遺物もみられる。

第77図はIII層から出土した遺物の分布図である。年代は旧石器時代末から縄文時代草創期に対比され、層厚は10～20cm程度である。IV層との境は埋没過程での植生の影響からか波打っており、漸移的である。旧石器時代遺物が多く浮き上がってきているようで、縄文時代遺物より数が多い。

第78図はIV層から出土した遺物の分布図である。年代は旧石器時代AT降灰後に対比される。層厚は



※ ●は断面図作図位置より幅1m以内から出土した遺物（石器・礫）の出土位置を示す。

野尻湖遺跡群長野県埋蔵文化財センター標準層序

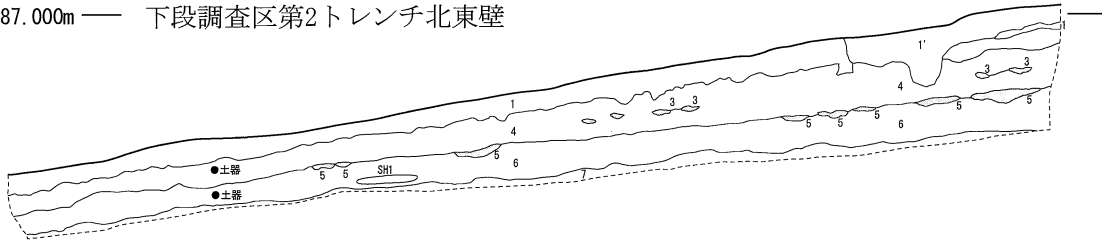
- I : 表土 黒色土
- II : 柏原黒色火山灰層 黒色土
- III : ローム層漸移層
- IV : 黄褐色ローム層 (ソフトローム)
- Va : 黒色帯漸移層
- Vb : 黒色帯 (ハードローム)
- VI : 黄褐色ローム層 (ハードローム)
- VII : 赤色スコリア層 (赤スコ)

SK内土層注記

- 1: 10YR1.7/1 黒色土 (II層) 部分的に黄褐色粒子、赤褐色粒子を混入
- 2: 5YR2/1 黒色土 1層より褐色 黄褐色粒子・赤褐色粒子を全体に混入
- 3: 10YR2/1 黒色土に10YR3/4の暗褐色ロームを全体に混入 締り悪い
- 3': 3層より暗褐色ロームの混入多くブロック状を呈す
- 4: 10YR1.7/1 黒色土 1層より締り悪く黄褐色粒子を多く混入
- 5: 10YR3/2 黒褐色土 黄褐色粒子を混入
- 6: 10YR3/3 暗褐色ローム 赤褐色粒子を少量混入 粘性あり 締り悪い
- 7: VI層類似 締り悪い

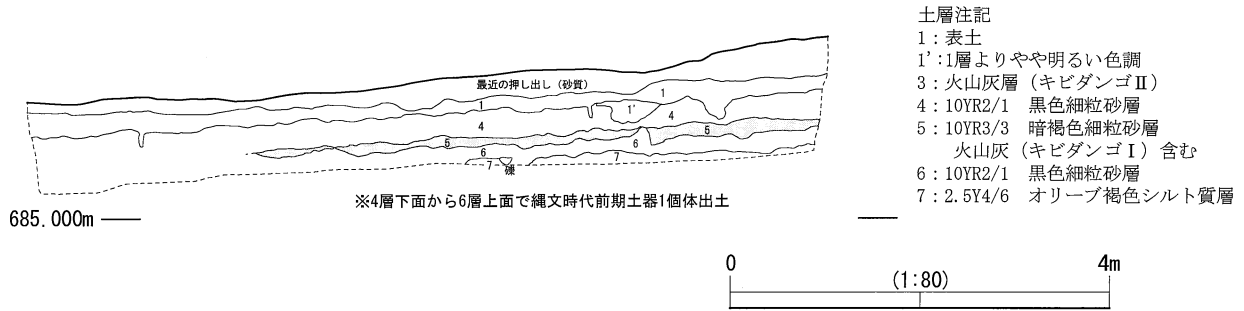
第74図 照月台遺跡上段調査区の層序

687.000m — 下段調査区第2トレンチ北東壁



684.000m —

688.000m — 下段調査区第5トレンチ北東壁



第75図 照月台遺跡下段調査区の層序

40cm 前後である。SH3 と SH4 が残された面がIV層中にあると考えられる。縄文時代以降の遺物はなくなり、旧石器時代遺物のみとなるが、これらは下層に生活面を持つナイフ形石器石器群に属するものが主体で、礫群に伴う石器群が確認できない。

第79図はV a層から出土した遺物の分布図である。年代は旧石器時代 AT 降灰前後にあたる。層厚は15cm 前後であり、IV層の40cm と比べると半分以下であるが、遺物数は多く密度は高いため、ナイフ形石器石器群の生活面が求められる可能性が高い。上層とくらべると平面的なまとまりもみられる。

第80図はV b層から出土した遺物の分布図である。年代は旧石器時代 AT 降灰以前に対比される。層厚は20cm 前後であり、下部にV c層が含まれていることを考慮するとやや薄いといえよう。V a層より数は減るもののまだまだ多く、上層にあるナイフ形石器石器群の生活面から大きく離れていないことが予想できる。V a層と同じ位置に平面的なまとまりがみられる。

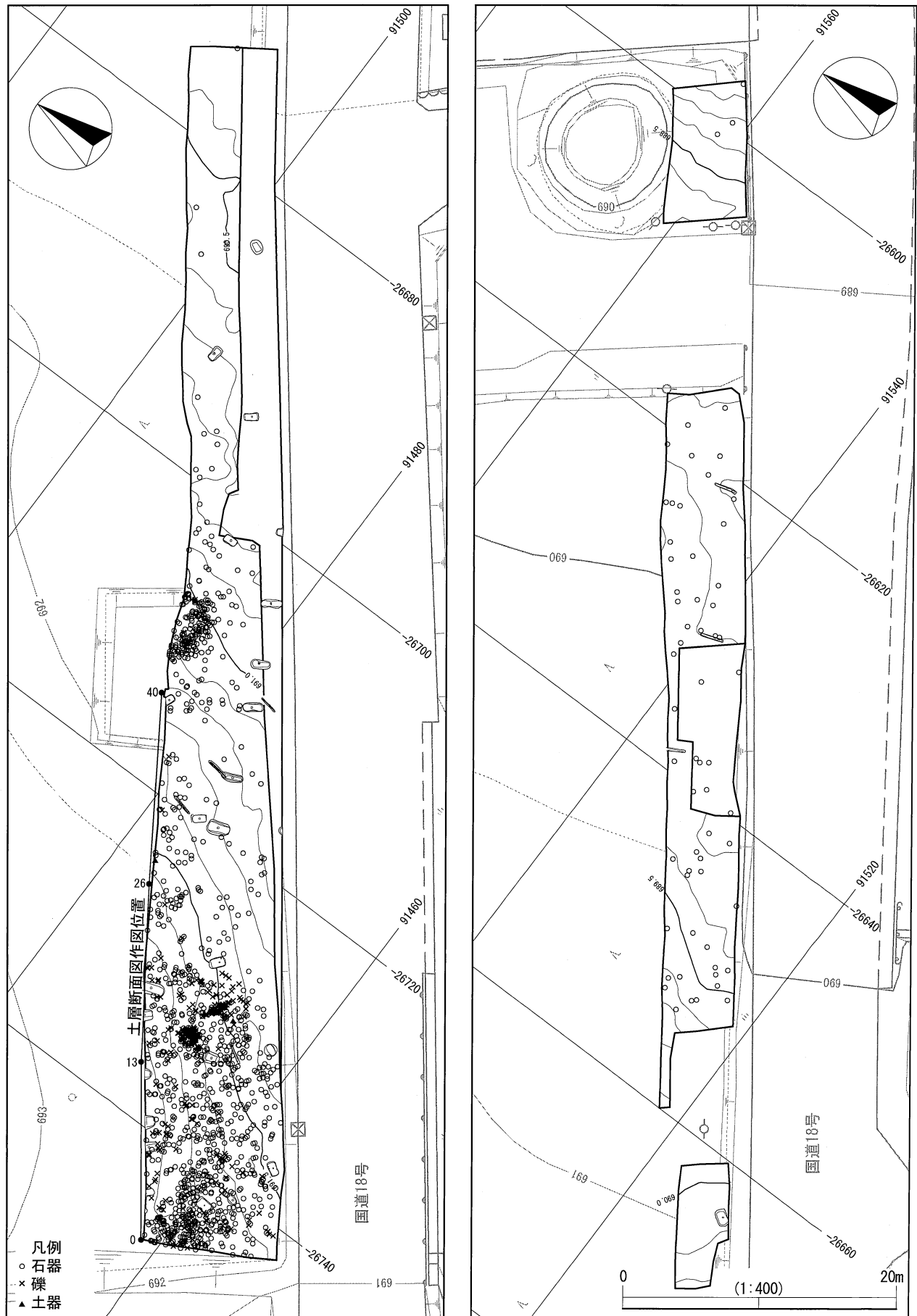
第81図はV c～VI層から出土した遺物の分布である。遺物数は減りナイフ形石器石器群の生活面より下位であることが読み取れる。



第76図 照月台遺跡出土層位別遺物分布図1 I・II層



第77図 照月台遺跡出土層位別遺物分布図2 III層



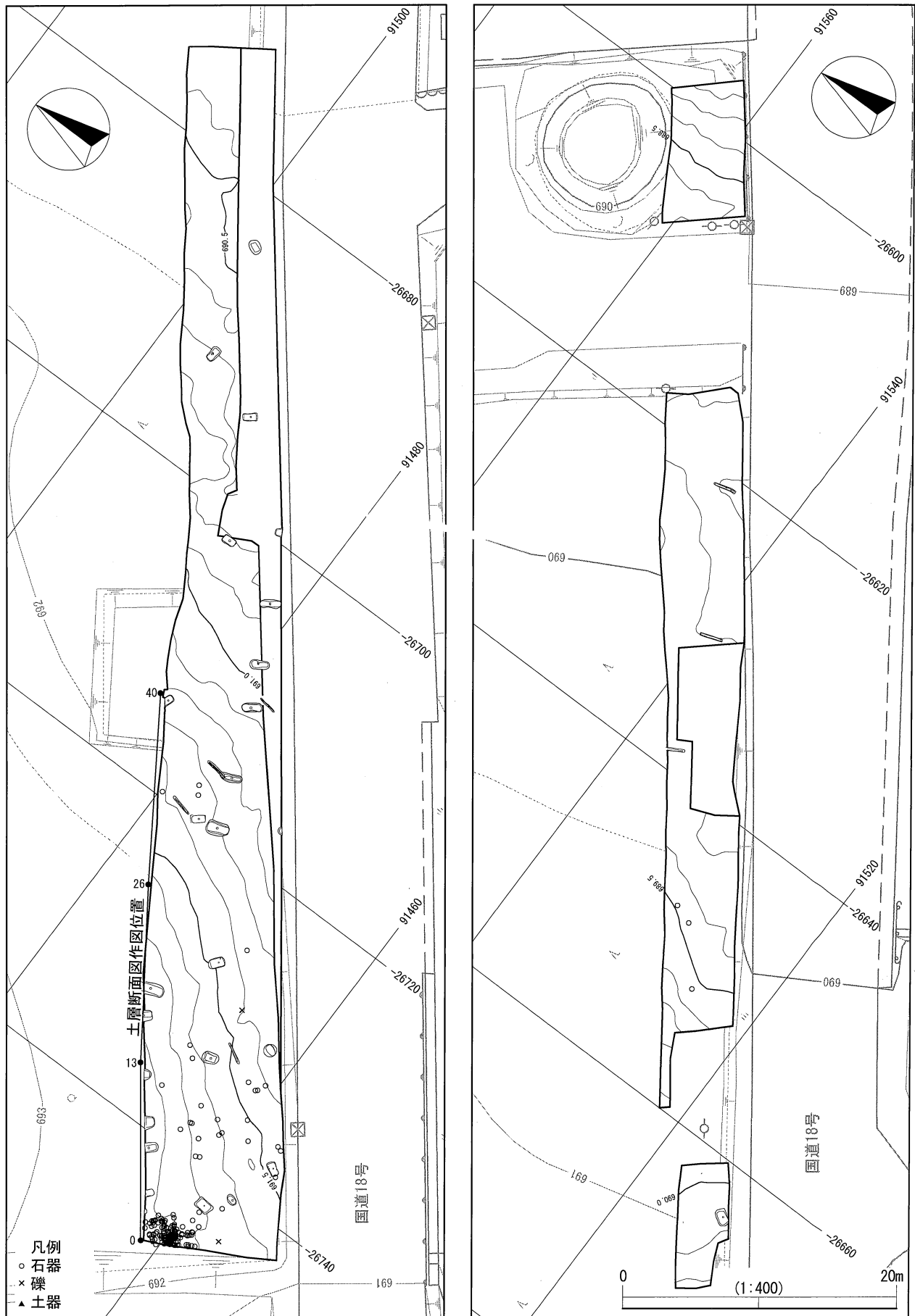
第78図 照月台遺跡出土層位別遺物分布図3 IV層



第79图 照月台遺跡出土層位別遺物分布图4 Va層



第80図 照月台遺跡出土層位別遺物分布図5 V b層



第81图 照月台遺跡出土層位別遺物分布图6 Vc層以下

第2節 旧石器時代

1 旧石器時代の概要

(1) 地形と遺物の分布

旧石器時代の遺物が出土している上段調査区は、北東-南西方向を通る現国道の北西側に並行して長さ約180m、幅約10mの範囲をもつ。調査区内は一連の地形に区分され、国道に向かってわずかに下るゆるやかな傾斜地となっている。

調査区内は野尻湖遺跡群に一般的にみられるローム層が安定して堆積していたため、調査区内から出土した石器と礫はすべて遺物として扱った。

(2) ブロックの認定

ブロックの認定方法については第2章でとりあげた貫ノ木遺跡と同じ基準で行った。その結果12のブロックに分けられた。

第82図に旧石器時代の遺物の分布を、第83図に認定されたブロックの分布図を示す。

今回の調査における最大の特徴はBL1にあるといえよう。BL1からは遺跡全体の8割に近い非常に多くの石器が出土し、その分布域は幅約10mの上段調査区の南西端から30m以上の領域をもつ。ブロックの境界が確認できるのは北東側のわずかな範囲のみで、それ以外については調査区外に大きく遺物分布域が広がっていたと考えられる。国道を挟んだL地点と連なる可能性もあろう。礫については層位的に時期が異なる可能性があるが、そのほかについては石材構成などから大部分が同一石器群に属すと考えられる。このような広く、密度の高いブロックのあり方は特異といえよう。

BL2～BL12はBL1とは対照的に直径数mの一般的な規模、遺物数をもつブロックとなる。

(3) 遺物の出土層位

遺構ごとの出土層位の分布を第9表に示した。遺構については次項に記す。出土層位ごとの平面分布は第76～81図に示す。

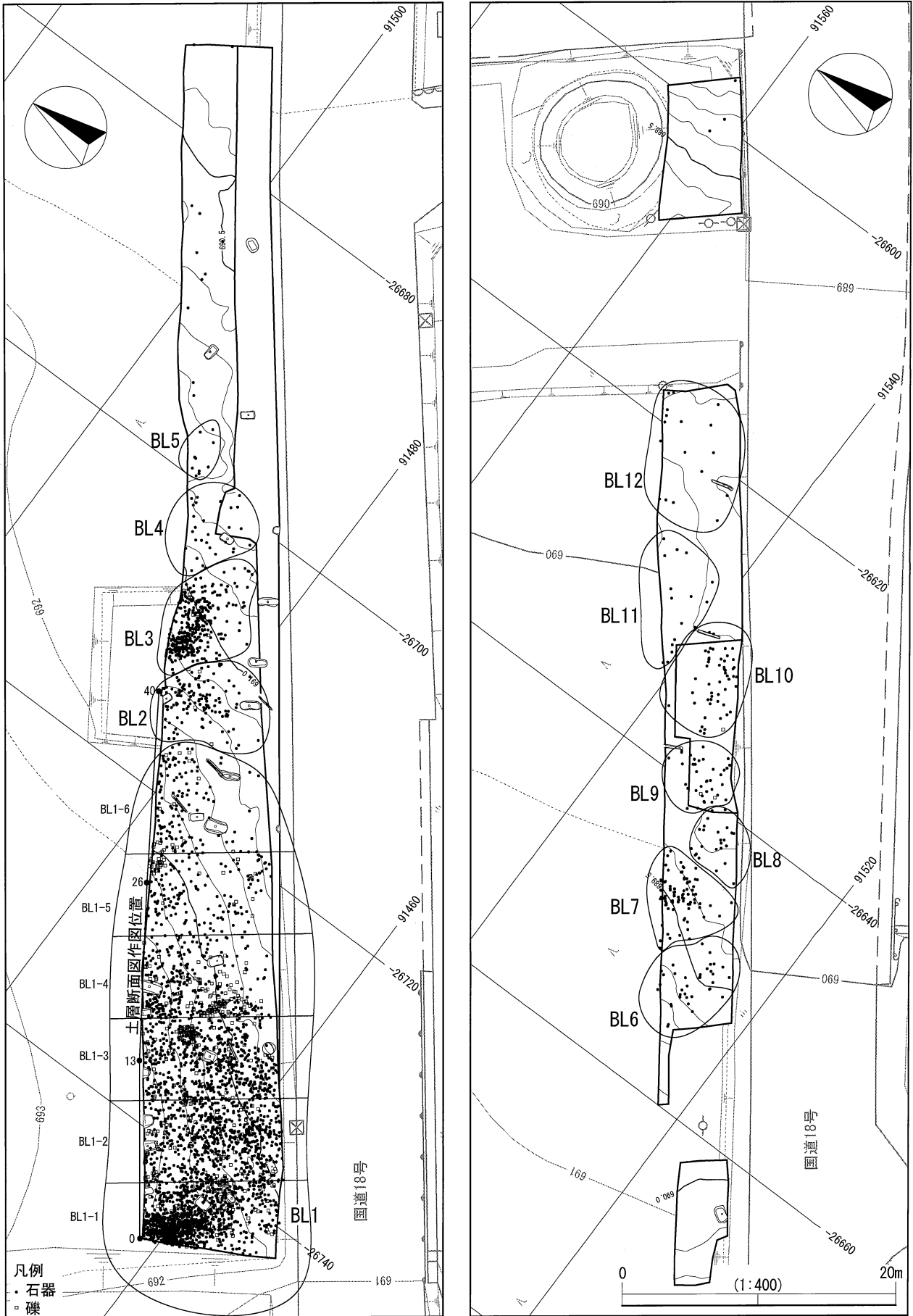
石器3835点、礫521点を旧石器時代の遺物とした。これらには、Ⅲ層より上層の石器も含まれ、同

	遺構	I	II	III	IV上	IV-括	V a	V b	V c	V-括	VI	攪乱	合計	比率
石器	BL1	11	54	235	5	892	971	601	161		3	98	3031	79.0%
	BL2			1		28	53	45					127	3.3%
	BL3					188	133	26					347	9.0%
	BL4					13	15	1					29	0.8%
	BL5			2		6	2						10	0.3%
	BL6					11	20	4	1				36	0.9%
	BL7					7	52	29	2				90	2.3%
	BL8					5	14	8					27	0.7%
	BL9					6	25	7					38	1.0%
	BL10					5	33	14					52	1.4%
	BL11	1				12	4						17	0.4%
	BL12	1				11	1				5		18	0.5%
	外					8	2	3					13	0.3%
合計		13	54	238	5	1192	1325	738	164	5	3	98	3835	
比率		0.3%	1.4%	6.2%	0.1%	31.1%	34.5%	19.3%	4.3%	0.1%	0.1%	2.6%		
礫	BL1	5	13	107	3	135	48	47	1		1	9	369	70.8%
	BL2						4	1					5	1.0%
	BL3					9	3						12	2.3%
	BL9						1						1	0.2%
	BL10							1					1	0.2%
	SH3					41							41	7.9%
	SH4					73							73	14.0%
	SH5						19						19	3.6%
合計		5	13	107	3	258	75	49	1	0	1	9	521	
比率		1.0%	2.5%	20.5%	0.6%	49.5%	14.4%	9.4%	0.2%	0.0%	0.2%	1.7%		

第9表 照月台遺跡遺構別出土層位分布



第82図 旧石器時代の遺物分布



第83図 旧石器時代の遺物分布とブロックの分布

一の空間に縄文土器等も分布している。そのため、剥片等の不定形器種については旧石器時代か縄文時代かの厳密な区別は難しく、混在している可能性もある。

IV層以下では、出土する土器はほとんどなく、縄文時代の遺物がIV層以下に混じる可能性はきわめて低い。IV層以下の石材組成とII～III層の石材組成に大きな差が認められないことから、上層から出土している石器の大部分は旧石器時代に属す可能性が高く、縄文時代の石器、礫の混入はわずかと考えられる。

IV層とV a層から出土した石器の数量は、それぞれ30%を超えているが、IV層の平均的層厚が約40cmなのに対して、V a層は約15cmと薄いことから、遺物密度はV a層がIV層の倍以上高いといえる。また、下層のV b層からも20%近い数量が出土している。

旧石器時代の調査では、深度を増すにつれ徐々に遺物密度が高くなり、密度が極大に達するとまもなく急減するのが一般的である。相模野台地での層位的編年研究においては、その極大値の下位10cmに生活面が求められている(矢島・鈴木1976)。野尻湖遺跡群では相模野台地より層厚は薄い、遺物密度が最も高い面からそのやや下位の間に生活面を想定するのが妥当と思われる。

これらのことを考慮すると今回の調査地点の石器群の生活面はV a層からV b層上面付近に求められる。

ATの極大値はV a層上半部にあるため、時間的にはAT降灰前からAT降灰直後のどこかに位置付けられる。

(4) 器種組成

遺構別の器種組成を第10表に示す。器種別の分布図については、次項でブロック単位に示す。

石器総数3,835点で、組成はナイフ形石器20点(別に破片4点)、台形石器18点、貝殻状刃器51点、彫器14点、削片8点、搔器26点(別に破片1点)、搔器状石器19点、厚刃搔器7点、削器45点、挟入削器13点、鋸歯縁状削器19点、揉錐器12点、楔形石器112点(別に破片1点)、石刃28点、2次加工のある剥片82点、微細剥離のある剥片78点、剥片2,352点、碎片727点、石核157点、原石1点、斧形石器7点(別に刃部破片2点、調整剥片9点、破片1点)、敲石10点、凹石1点、磨石1点、台石2点(別に破片1点)、礫器1点、槍先形尖頭器1点、細石刃3点(別に破片1点)となり、ナイフ形石器、台形石器、彫器、搔器、斧形石器の組成を特徴とする。

細石核や槍先形尖頭器などの明らかに時期が異なるものがわずかに含まれているが、大部分はナイフ形石器文化期の石器群である。

遺構	ナイフ形石器	ナイフ形石器破片	台形石器	貝殻状刃器	彫器	削片	搔器	搔器破片	搔器状石器	厚刃搔器	削器	削器破片	挟入削器	鋸歯縁状削器	揉錐器	楔形石器	楔形石器破片	石刃	2次加工のある剥片	微細剥離のある剥片	剥片	碎片	石核	原石	斧形石器	斧形石器刃部破片	斧形石器調整剥片	斧形石器破片	敲石	磨石	台石	台石破片	礫器	槍先形尖頭器	細石刃	細石刃破片	合計
BL1	17	3	16	39	10	4	18	1	14	4	38	1	9	14	10	93	1	20	61	56	1913	540	118	1	4	1	8	1	6	1	2	1	1	3	1	3031	
BL2		1		1	1		1				1					1		1	1	2	88	21	8														127
BL3	1		1	3	3	4	6		3	1	1		2	2		10		3	9	5	142	137	11		1			2									347
BL4	1										1					3		1	2	19	2																29
BL5				3			1							1		1					4																10
BL6				1						1									2	1	24	6	1														36
BL7			1							1					1	1			4	5	53	16	7					1									90
BL8										1					1	1				1	16	3	4														27
BL9																		1	1	3	28		2		1	1		1									38
BL10				4					1		1					2		1	3	1	36	1	1			1											52
BL11									1		1									1	11		2		1												17
BL12											1			1	1					1	11		2														18
外	1															1	1		1		7	1	1														13
合計	20	4	18	51	14	8	26	1	19	7	45	1	13	19	12	112	1	28	82	78	2352	727	157	1	7	2	9	1	10	1	2	1	1	1	3	1	3835
比率	0.5%	0.1%	0.5%	1.3%	0.4%	0.2%	0.7%	0.0%	0.5%	0.2%	1.2%	0.0%	0.3%	0.5%	0.3%	2.9%	0.0%	0.7%	2.1%	2.0%	61.3%	19.0%	4.1%	0.0%	0.2%	0.1%	0.2%	0.0%	0.3%	0.0%	0.1%	0.0%	0.0%	0.1%	0.0%		

第10表 照月台遺跡遺構別石器器種組成

第 2 節 旧石器時代

器種	黒曜石	チャー ト	無斑晶質 安山岩	凝灰岩	珪質凝 灰岩	玉髓	凝灰質 頁岩	蛇紋岩	珪質 頁岩	流紋岩	砂岩	安山岩	鉄石英	頁岩	石英	玄武岩	合計	比率
ナイフ形石器	15	2	1						2								20	0.5%
ナイフ形石器破片	4																4	0.1%
台形石器	16		1						1								18	0.5%
貝殻状刃器	44	6				1											51	1.3%
彫器	9		2	3													14	0.4%
削片	7		1														8	0.2%
搔器	16	3	5		2												26	0.7%
搔器状石器	15	2	2														19	0.5%
搔器破片	1																1	0.0%
厚刃搔器	5	1	1														7	0.2%
削器	17	9	9	2	3		4		1								45	1.2%
削器破片		1															1	0.0%
抉入削器	11			1		1											13	0.3%
鋸齒縁状削器	10	3	4		1				1								19	0.5%
揉雜器	8	4															12	0.3%
楔形石器	33	42	27	3	3		1		2					1			112	2.9%
楔形石器破片	1																1	0.0%
石刃	16	3	5	1	1	1			1								28	0.7%
2次加工のある削片	46	14	12	3	1	2	2		1				1				82	2.1%
微細彫刻のある削片	43	26	4	1		4											78	2.0%
削片	726	695	650	76	64	44	37	12	19	22		3	3	1			2352	61.3%
破片	415	126	144	16	2	4	2	9	3	5				1			727	19.0%
石核	42	76	19	3	3	7	5		1				1				157	4.1%
原石		1															1	0.0%
斧形石器				1					6								7	0.2%
斧形石器刃部破片									2								2	0.1%
斧形石器調整削片									9								9	0.2%
斧形石器破片									1								1	0.0%
敲石				1							8	1					10	0.3%
磨石												1					1	0.0%
台石												1		1			2	0.1%
台石破片														1			1	0.0%
礫器																1	1	0.0%
槍先形尖頭器			1														1	0.0%
細石刃	3																3	0.1%
細石刃破片	1																1	0.0%
合計	1504	1014	887	112	80	64	51	39	32	27	8	6	5	4	1	1	3835	
比率	39.2%	26.4%	23.1%	2.9%	2.1%	1.7%	1.3%	1.0%	0.8%	0.7%	0.2%	0.2%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%		

第 11 表 照月台遺跡石材別石器器種組成

	遺構	黒曜石	チャー ト	無斑晶質 安山岩	珪質 凝灰岩	玉髓	凝灰岩	凝灰質 頁岩	蛇紋岩	珪質 頁岩	流紋岩	砂岩	安山岩	鉄石英	頁岩	石英	玄武岩	合計	比率
BL1	1201	920	622	65	15	83	42	35	29			6	3	5	3	1	1	3031	79.0%
BL2	13	13	75	2	23	1												127	3.3%
BL3	183	32	86	9	8	18	8						2		1			347	9.0%
BL4	11	6	8	2		2												29	0.8%
BL5	7		3															10	0.3%
BL6	11	3	9		6	2				5								36	0.9%
BL7	34	1	25		9	1			2	17	1							90	2.3%
BL8	15	3	7		2													27	0.7%
BL9	10	4	11			5		2		4	1	1						38	1.0%
BL10	15	10	24					1	1	1								52	1.4%
BL11		4	11	1				1										17	0.4%
BL12	1	13	2		1		1											18	0.5%
外	3	5	4	1														13	0.3%
合計	1504	1014	887	80	64	112	51	39	32	27	8	6	5	4	1	1		3835	
比率	39.2%	26.4%	23.1%	2.1%	1.7%	2.9%	1.3%	1.0%	0.8%	0.7%	0.2%	0.2%	0.1%	0.1%	0.0%	0.0%			
BL1	2619.845	6409.82	9112.01	1919.94	85.69	1422.57	867.29	567.39	224.64			6294.7	2849.29	46.95	588.37	3.71	272.92	33285.14	79.2%
BL2	49.9	145.12	882.93	8.32	175.89	50.57												1312.73	3.1%
BL3	220.23	118.27	649.94	599.53	50.86	856.97	133.2					241.37			22.35			2892.72	6.9%
BL4	29.03	27.8	82.49	23.46		41.69												204.47	0.5%
BL5	24.43		15.84															40.27	0.1%
BL6	52.44	20.32	53.37		21.08	48.95				55.57								251.73	0.6%
BL7	110.29	0.11	261.2		59.1	2.9			6.55	44.89	115.48							600.52	1.4%
BL8	56.06	37.97	210.35		7.94													312.32	0.7%
BL9	29.04	48.07	155.38			398.63		21.5		13.93	881.45							1548	3.7%
BL10	39.3	64.97	686.71					5.01	21.45	7.58								825.02	2.0%
BL11		33.74	114.61	3.27				115.4										267.02	0.6%
BL12	3.33	70.35	71.65		6.5		11.49											163.32	0.4%
外	21.59	19.86	296.68	1.37														339.5	0.8%
合計	3255.485	6996.4	12593.16	2555.89	407.06	2822.28	1011.98	709.3	252.64	121.97	7291.63	3090.66	46.95	610.72	3.71	272.92	42042.76		
比率	7.7%	16.6%	30.0%	6.1%	1.0%	6.7%	2.4%	1.7%	0.6%	0.3%	17.3%	7.4%	0.1%	1.5%	0.0%	0.6%			

第 12 表 照月台遺跡遺構別石器石材組成